大正八年八月一日發行

第一卷 第五號

THE RECONSTRUCTION

改造

資本主義征服號

社會問題

米田庄太郎
法學博士 渡邊鐵藏
法學博士 戸田海市
山川均
高畠素之

思想と文藝

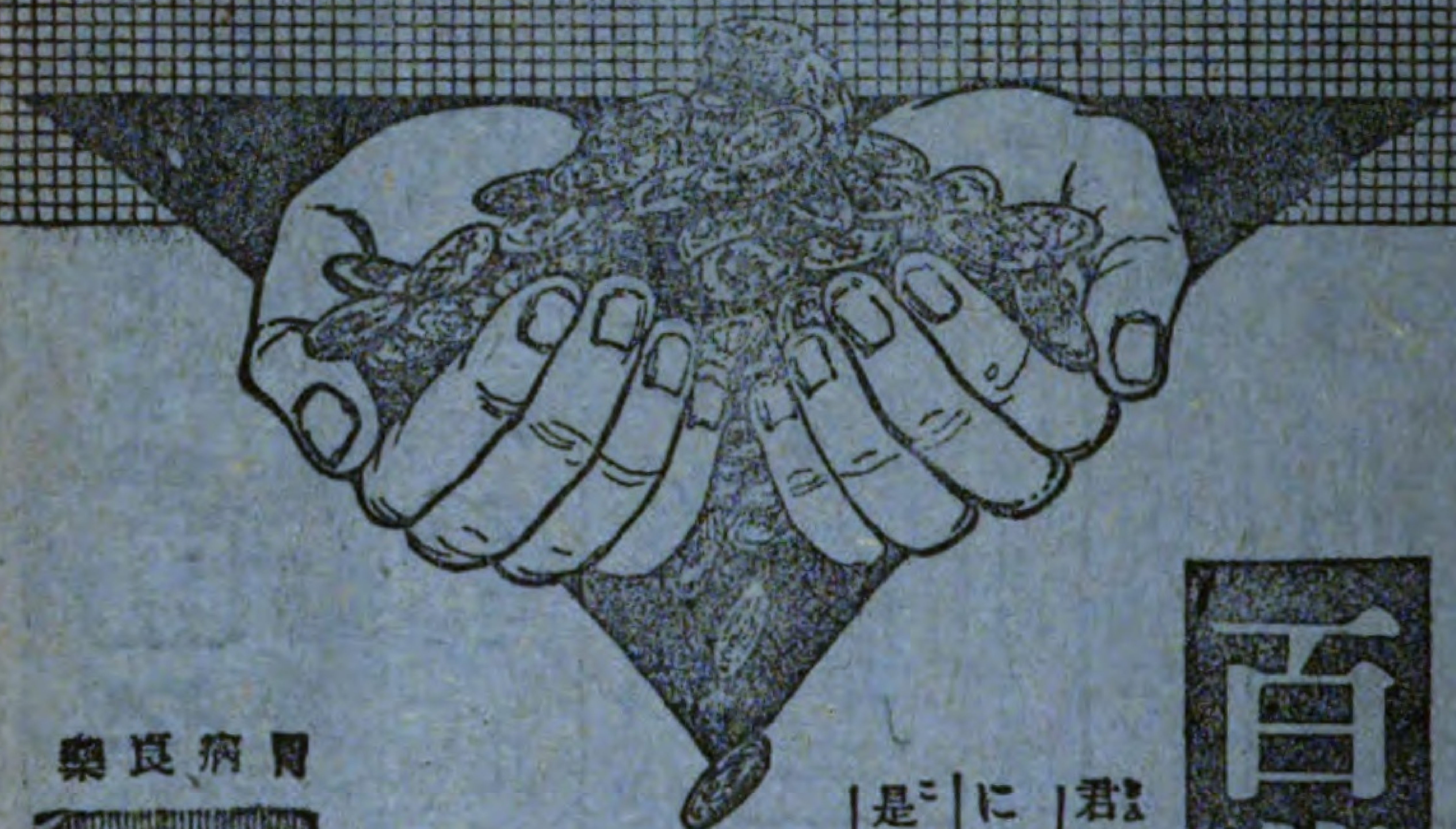
文學博士 坪内逍遙
内田魯庵
近松秋江
葛西善藏
佐藤春夫

八月號



改造八月號目次





法學士 片山義勝先生新著

海商法通義

忽再版

菊判洋裝全一冊 定價金三圓 送料十二錢

本書は海商法に關する一切を平易に頗る簡約に細大漏らさず說明せられたるものにして、類書中の白眉たり、著者は商法學者として世既に定評あり、初學者、學生の研究の好伴侶としては勿論法曹實務家の好參考として無二の良書たるは言を俟たず海運業者、學生、斯業會社、商店必讀を要する近來の良著たり。

能率問題の徹底的研究

人及び事業 能率の心理

文學士上野陽一先生著 布裝釘全一冊 定價三圓五十錢 送料十二錢

再版

勞働者問題研究の先驅

勞働者問題

早稻田大學教授 北澤新次郎先生著 上卷一冊 定價一圓六十錢 送料金八錢

五版

勞働者生活の根底を衝く

工場より觀たる日本の勞働生活

工學士 桝本卯平先生著 布裝釘全一冊 定價二圓五十錢 送料十二錢

新版

農學士 田所哲太郎先生著

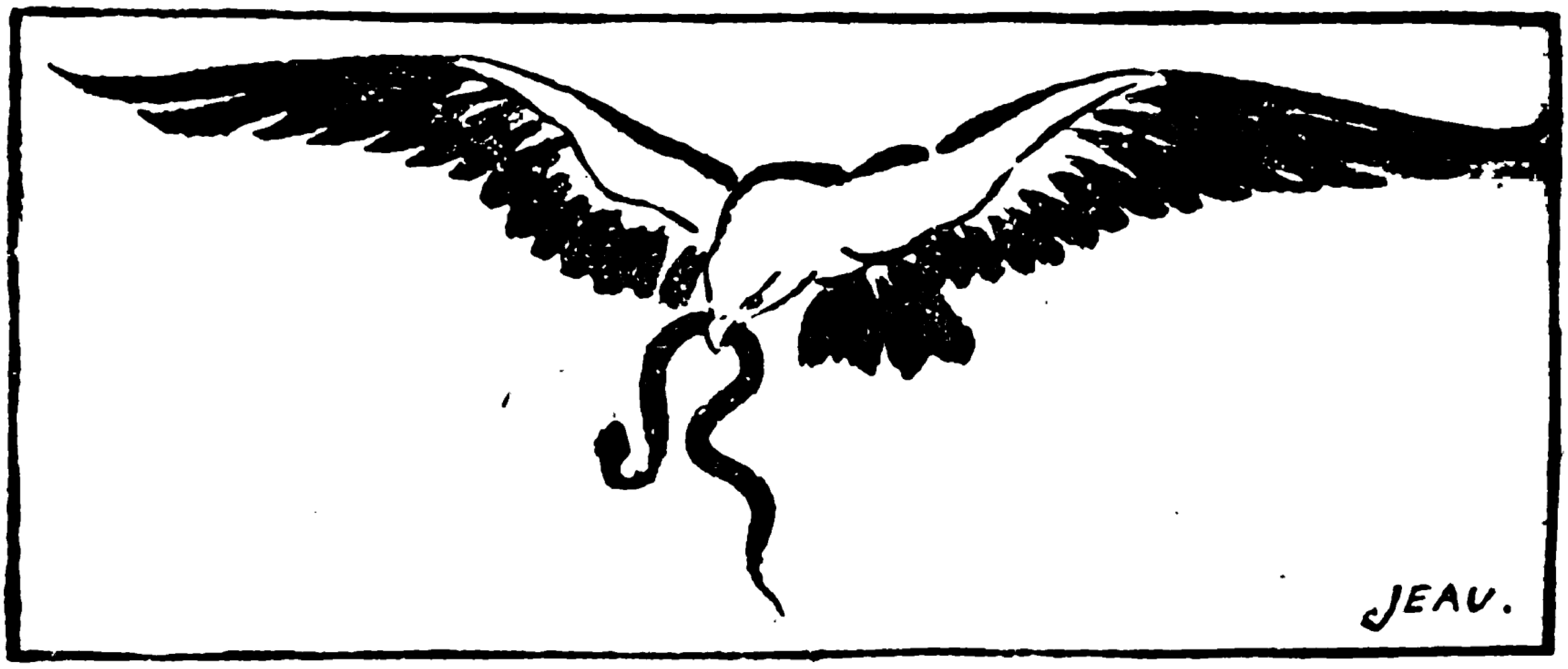
重要商品精義

第一卷「農林水產の卷」定價金三圓 送料十二錢

第二卷「鑑定法の卷」定價金二圓 送料金八錢

再版

東京神田表神保町 株式會社 同文館 振替口座東京第一三五番



——（改造八月號）——

生か死か

一斤の砂糖が六十錢に騰貴した。砂糖會社は五割の配當をした。一圓五十錢の浴衣が、五圓に騰貴した。紡績職工は自分で紡いだ浴衣が買へぬ。紡績會社は七割の配當を行つた。白米は一圓に二升は購へぬ。三十圓の洋服細民にも、妻もあれば、可愛い兒女もある、飯は廢する譯に行かず。六圓の屋賃は十圓に暴騰する。金がないからとて、雨曝らしになつては居れぬ。

衣、食、住すべての方面から、非常な壓迫が暴風の如く吹いて來た。暴風なら間歇的で一時的であるが、生活問題の脅迫は、なか〱左樣には行かぬ。國民の大部分が、かくの如く生存權を迫害されて來たのに、我不關焉の態度を以て、暴利を貪りて飽くなく、榮耀豪華に溺れたる、資本階級に對して、いかにして覺醒せしむべきか、帝國の發展、我が民族の膨脹は頭のみ發達して、腹と足が瘦せ衰へたでは、健全なる國家の基礎を確立することが出來ぬ。

我等は、人類の一員として、光輝ある帝國の一分子として、七千萬同胞は、相寄り、相扶けて。苦勞も切り拔け、そして和樂も均しく頒ちたい。それに五割とか、七割とか配當して、恬として顧みないのは、國家の一員として、忠誠の人であるか、人類の一員として果して人類の福祉を望んで居る人であるか。

國家の中堅を、形成する健全なる分子の、現下の悲慘なる狀態は、爲政者も見て居る筈である。それに何等の施設をも、なさないのは、全く無能の所爲か。

生活難、あゝ生活難、今は方に、その峠を超へて、生か死かの場合である。一歩、救濟策にして躓かば、國民の呻吟が、野にも、山にも、充ち滿つるの境地に到らん。

國民の生か死かの場合は、國家も存亡の關に立つて居るものである。その解決の鍵が、我國の資本家の手一つに、ある譯ではないが、八分の責任は資本家にある。恐るべき、資本主義の弊を、いかにして矯正すべきか、打破すべきか。これ實に世界を通じての、大問題である。我社は、此解決に向つて努力猛進して、人類としての平衡を保維せしめ、國民として、光輝ある道に進めたいのである。

思想と時論



現代階級鬪爭思想の發達

京大講師　米田庄太郎

（一）文化史上に於ける階級鬪爭の時代

夫れ現代勞働者運動の發達に於て、階級鬪爭思想が甚だ重大なる役目を演じて居ることは、今や一般に熟知されて居る事實である。併し此の思想は如何にして發生せしか、又今日までに如何に發達し來れるか、更に今後如何に發達し行くであらうかと云ふ問題に就て、まだ科學的組織的に論究した人はない樣である。少くも此等の諸問題に就て社會學的に組織的論究を試みたる人はない樣に思ふ。それで余はかねて此等の問題の研究に心掛けて居るが、併し之を詳しく論

述し、著書として發表する暇を得ないから、玆に其の一班を公にして讀者諸氏の示教を仰ぎたいと思ふ。

今余輩の社會學上から考察すれば、社會に階級の差別が生起せし後は、社會の進化及び文化の發展は根本的には階級組織によりて決定されて居るのである。何れの時代にありても社會生活は根本的には、其時代に於ける階級組織によりて決定せられ、又文化の本質も矢張り階級組織によりて根本的に決定されて居る。而して階級組織なるものは何れの時代に於ても、或意味にては階級鬪爭を含んで居るので、社會が階級的に組織されて居る以上は、何れの時代に於ても、或度の階級鬪爭は到底避け得られないのである、併し階級鬪爭が特に重大なる社會的勢力となりて現はるゝは、特定の時代に於てゞある。然らば其の特定の時代と云ふは如何なる時代であるかと云ふに、是れ即ち當代の社會組織に於て支配階級の地位を占むる一定の階級に對して、其の地位を爭ふ他の階級が發達し來れる時代である。詳しく云へば從來の社會組織に於て、一定の階級に支配されて居つた階級中の或者の實力が段々發達し來りて、其の階級が支配階級の地位に上らんとする其の時代である。而してかゝる時代は社會の進化、文化の發展が一回轉をなさんとする時代にして、即ち社會進化の轉移期、又文化發展の轉移期と稱せらるゝものである。要するに階級鬪爭が特に重大なる社會的勢力となりて活動する時代はつまり社會進化及び文化發展の轉移期であるのである。されば人類史上最とも重大なる社會進化及び文化發展の轉移期たる現代に於て、階級鬪爭思想が大に勢力を振ふて居るのは當然であつて、敢て怪むに足らないのである。併し廣く階級鬪爭と云ふも、時代によりて相鬪爭する階級は異なつて居る。而して其の階級の異なることによりて、又階級鬪爭の性質は自から異り、更に夫れより生まるゝ新しき社會及び文明も自から異なつて來るのである。併し玆には人類史の全體に亘りて階級鬪爭の時代を論究する暇はないから、只現代に就て考察するだけに止めるが。然らば現代の階級鬪爭に於て相鬪爭しつゝある階級は如何なるものであるか、隨ふて又其の階級鬪爭の特質は如何なる

ものであるか。

(二) 現代階級鬪爭思想の意味

今現代の階級鬪爭に於て相鬪爭する階級と云へば、即ち資産者階級と勞働者階級とである。而して今や支配階級の地位を占有する資産者階級に對して、勞働者階級が其の地位を爭はんとするのが、即ち現代階級鬪爭の特質である。されば現代階級鬪爭は前代の階級鬪爭が貴族階級に對する資産者階級の鬪爭にして、本來政治的性質のものであつたのと異なり、資産者階級に對する勞働者階級の鬪爭にして、本來經濟的性質のものである。是れ前代の革命運動、即ち資産者階級が貴族階級を壓倒して支配階級の地位を占有するに至れる社會的運動が、政治的革命運動と稱せらるゝに對して、今日進行しつゝある革命運動が、社會的革命運動と稱せらるゝ所以である。又佛國の法的社會主義者が千七百八十九年の革命は基本的なる政治的權利を確立せるものであるが、今日の社會運動は基本的なる經濟的權利を確立せんとするものであると云ふて居る所以である。要するに前代の階級鬪爭は資産者階級と貴族階級との政權鬪爭であるが、現代の階級鬪爭は勞働者階級と資産者階級との經濟的鬪爭であるのである。詳しく云へば資産者階級が現在の財産私有制度の下に於て經濟的特權及び之に基づける實質上の政治的特權を固持せんとするに對して、勞働者階級が現代の財産私有制度を改造し或は全廢して以て資産者階級の經濟的特權を破壞し、更に之れに基づける實質上の政治的特權をも破壞せんとする鬪爭が、即ち現代階級鬪爭の特質であるのである。されば現代階級鬪爭思想と云へば、先づ其の最も嚴格なる意味にては、つまり資産者階級の階級的利害と勞働者階級の階級的利害とは本來相異なれるもの、或は相反するものにして、兩者の階級的利害は到底一致するものでなく、資産者階級の利益は只勞働者階級の利益を犧牲に供することにより

てのみ增大されると同じく、勞働者階級の利益は只資産者階級の利益を奪ふことによりてのみ增進されるもの、或は資産者階級を全廢することによりてのみ始めて勞働者階級の完全なる經濟的及び政治的解放は成就されるものと確信して、勞働者階級は極力資産者階級と鬪爭しなければならぬと考へる其の思想を意味するものである。而してかゝる意味にて階級鬪爭思想は先づ確立したのであるが、併し其後勞働運動の實際の要求に迫られ或は之れに順應して、階級鬪爭思想は又之れと異なれる種々なる意味にも解されて來た。玆には先づ其の嚴格な或は過激なる意味に於て、階級鬪爭思想は如何にして發生し、又確立されたかを論究し、次に其の後如何に變動したかを論究することとする。

（三）現代勞働者階級の階級意識の發達

夫れ前節に於て述べしが如き意味の階級鬪爭思想は現代勞働者階級の自覺を待つて始めて確立し得るものにして、即ち現代勞働者階級に於て階級意識の發達せる後に確立するものにして、彼等が未だ自覺せず、又階級意識を發達させて居らない以上は、到底確立するものでない。但し現代階級鬪爭思想は勞働者階級の自覺或は階級意識の發達を待つて始めて確立するものであると同時に、勞働者階級の自覺或は階級意識も亦階級鬪爭思想の發達によりて始めて强烈となるものにして、兩者の强烈なる發達は兩者の相互的影響の下に於て進行するものであるが、併し論理的見地から考へると、階級意識の發生及び確立は階級鬪爭思想の發生に先き立つ可きものであるのである。されば玆に階級鬪爭思想の確立を考究するに當ては、先づ階級意識の發生を考察しなければならぬ。

抑々現代勞働者階級は現代資本主義的生産法の必要缺く可からざる一條件として發生し、又現代資本主義的生産法の發達に伴なふて增長し來れるものにして、現代資本主義的生産法は現代勞働者階級の增長に依らずして發達し得ないと

同じく、現代勞働者階級も亦現代資本主義的生産法が發達しなければ發生し増長し得ないものである。而して現代資産者階級の大なる發達は現代資本主義的生産法の發達によりて成就せるものであるから、要するに現代資産者階級も亦現代勞働者階級も共に現代資本主義より生れたる子供であるのである。されば現代資産者階級の發達は必然的に現代勞働者階級の増長を伴ない、而して現代資産者階級の存續する以上は、現代勞働者階級は常に存在せざるを得ず、又現代資産者階級が發達する以上は、現代勞働者階級も亦發達せざるを得ないのである。

併し現代勞働者階級は其の發生の始めより階級意識を有つて居つたのでないばかりでなく、今日に於ても、（少くも今回の世界的大戰爭前にありては）、階級意識の發達せる勞働者は其の數の年々増加し來れるに拘らず、尙ほ勞働者階級の全體を被ふに至らないのみならず、寧ろ比較的に其の小部分に止まつて居ると思はれる。是れ歐米諸國に於ける勞働者人口總數に對する勞働組合員數の割合を見て推察されるのである。要するに勞働者階級に於ける階級意識は事實上勞働者階級の既に成立する上に更に一定の主觀的及び客觀的條件が具はらなければ發生しないのであるが、然るに其の主觀的及び客觀的條件なるものが勞働者に具はることは甚だ困難であるのである。是れ勞働者階級に於ける階級意識の發達が大に後れ、今日に於ても尙ほ勞働者階級の一部分に於て其の發達を見るに止まる所以である。然らば其等の條件とは如何なるものであるか。

今勞働者に於て階級意識の發達するに必要なる主觀的條件として吾人の注意す可きものは幾多存在するが、玆には只其の最とも主要なるものを擧ぐるに止める。先づ第一に注意す可きは、勞働者が現代資本主義制度の眞相及び精神をよく理解することである。さきに述べし如く現代勞働者階級は現代資本主義制度より生れたるものである。されば彼等が先づ現代資本主義の眞相及び精神をよく理解するまでは、彼等の自覺、彼等の階級意識は到底發達することは出來ない

のである。然るに現代資本主義の眞相や精神をよく理解するに勞働者の知力が餘程發達して居らなければならないので、國民教育のまだ發達して居らなかつた時代の勞働者に於て、之を望むことは到底不可能であつた。現代勞働者運動の最とも早く發達せる英國にありても、第十九世紀の後半紀に入るまでは、廣く彼等の間に彼等の自覺や階級意識の發達を望むことは全く不可能なる知力的狀態が發見されるのである。是れ歐米何れの國に於ても第十九世紀の後半紀に入るまでは一般に勞働者の階級意識が發達しなかつた所以である。

併し茲に尙ほ注意すべき條件がある。假令勞働者階級の知力が相當に發達して來たからとて、只夫れだけで彼等は到底自から階級意識を發達させ得るものでなく、更に智識階級の指導を待たねばならないのである。然るに第十九世紀の半頃以前にありては既に勞働者階級の悲慘なる生活狀態に大に同情し、之を救濟せんが爲めに計畫する人々の幾多現はれて居つたに拘らず、當時其等の人々と勞働者階級との生活境遇があまりに異なつて居つたが爲めに、兩者の間に親密なる關係が成立し得なかつたのである。隨ふて勞働者階級は其等の人々の敎へに耳を傾け、其の指導を受けることは出來なかつた。更に其等の人々もまだ現代資本主義の眞相や又夫れより生れたる資產者階級及び勞働者階級の眞相及び眞實なる關係を十分によく理解して居らなかつた。隨ふて假令當時の勞働者が彼等の思想をよく理解したからとて、恐くは階級意識を發達させることは出來なかつたであらうと思はれる。されば勞働者階級に於て階級意識が發達する爲めには、先づ彼等の知力が相當に發達しなければならないと同時に、又彼等を指導せんとする智識階級の人々が彼等と親密なる關係を結び得る狀態にあるのみならず、更に彼等に於て階級意識の發達を促がすだけ、よく現代資本主義の眞相及び夫れより生れたる二大階級の眞相並に關係を理解して居らなければならないのである。是れ第十九世紀の半頃以前にありては、英國などに於ては既に勞働者階級の人口が大に增加して居つたに拘らず、彼等の間にまだ一般に階級意識の

發達して居らなかつた所以である。而して當時の勞働者に於て階級意識がまだ一般に發達して居らなかつたことは、當時の勞働運動なるものが一般に本能的盲目的に亂暴を行なふに過ぎずして、計畫的組織的でなかつたことを見て推察されるのである。かの器械の破壞や、工場の打壞しの如きは、當時の勞働者の無自覺無意識を最ともよく證明するものであると思ふ。

　余は玆に階級意識と階級鬪爭との關係に付て更に注意して置きたいことがある。さきに述べし如く、階級鬪爭思想は論理的にも亦發生的にも階級意識の發達したる後に非らずば發生し確立し得ないものであるが、併し客觀的事實としての階級鬪爭は階級意識に先だちて行はれて居るので、若し然らざる場合には階級意識は到底發生しないのである。何れの時代に於ける階級鬪爭に於ても單に客觀的なる事實としての階級鬪爭は常に階級意識に先だちて行はれて居るものであつて、而して其の事實が主觀的に内部化されて、即ち主觀化されて玆に始めて階級意識が發生するのである。現代階級鬪爭に於ても矢張り同一の傾向が發見される。さきに述べし如く勞働者階級の階級意識は一般に第十九世紀の後半紀に入りて後に發達して居るのであるが、併し單に客觀的なる事實としての階級鬪爭、即ち無意識的無自覺的なる階級鬪爭は既に第十九世紀の前半紀間に於てかなり盛んに行はれて居つたのである。要するに現代階級鬪爭に於ても單に客觀的なる事實としての無意識的無組織的なる階級鬪爭は先づかなりの程度に於て行はれ、而して夫れが連續的或は斷續的に進行する中に段々、主觀化されて階級意識が發生し、更に階級意識の發達によりて單に客觀的なる事實としての階級鬪爭は階級鬪爭思想として主觀的に精練され或は確立されたのである。尙ほ此の如くにして階級鬪爭思想が發達することによりて、階級意識は愈々强烈になり、而して階級鬪爭が意識的合理的組織的に發達するのである。

　却說現代勞働者階級に於て、階級意識の發生するに必要なる條件は上に述べしが如きものにして、第十九世紀の前半

紀間に於て一般に彼等に於て階級意識の發生せざりし根本的理由は、其等の條件の具はらざりしが爲めであるとすれば、同世紀の後半紀に入りてより、彼等に於て一般に階級意識の發達し來れるは、つまり其等の條件が具はつて來たからである。然らば如何にして其等の條件が具はつて來たかと云ふことは、次に吾人の考究す可き問題である。玆には詳しく論ずる暇はないから、只簡單に其の一般を述ぶるに止めて置く。

先づ現代勞働者階級の知力的發達に就て考へると、其の最とも重要なる原因は國民教育の發達であることが發見される。今日の勞働者の知力的發達の基礎を造れるものは國民教育の發達にして、夫よりして現代勞働者の精神的一特徴と認めらるゝ強き知識慾が發達したのである。而して之れによりて智識階級の說を理解し同化する力が彼等に具はつて來たのである。尙ほ智識階級に於ける一定の傾向の發達が彼等と勞働者との間に親密なる關係を成立せしむるに至つたのである。然らば其の一定の傾向と云ふは如何なるものであるかと云ふに、夫れは次に智識階級の方面に付て論述する處によりて察知されると思ふ。

さきに述べし如く現代勞働者階級に於ける階級意識の發達には勞働者自身に於て一定の主觀的條件が具はると同時に、智識階級が現代資本主義の眞相及び精神をよく理解し、又夫れより生れたる現代資產者階級及び勞働者階級の眞相並に眞實なる關係をよく理解して、之を勞働者階級に教へることが必要であつた。更に智識階級が右の理解によりて現代勞働者階級の眞價を覺つて、之れと親密なる關係を結ぶに至ることが必要であつた。然るに大體から云ふと第十九世紀の前半紀間に於ては、智識階級者中には大に勞働者の悲慘なる狀態を憐み、彼等を救濟する爲めに種々なる社會改良策や社會改造策を立てる人々が既に幾多現はれて居つたが、而も其等の人々はまだ十分に現代資本主義の眞相を理解せず、隨ふて又現代勞働者階級の眞の勢力をも理解して居らなかつた。其等の人々は主として第十八世紀の人道主義から

して浪漫的な社會改良や社會改造を說くに止まつて居つた。而して上よりの人道的施設によりて勞働者を救はんとするので、まだ現代勞働者階級自身の自助的能力或は革命的勢力をよく理解して居らなかつた。但し當時の勞働者階級の現實なる狀態に於ては、彼等にかゝる强大なる力の具はつて居ることを、智識階級が洞察し得なかつたのは敢て怪むに足らない。而して當時既に行はれて居つた單に客觀的事實としての階級鬪爭は、悲しむべき誤解の結果であるか、或は一時的なる不正常狀態に過ぎないと考へ、又資產者階級と勞働者階級との利害は本來一致調和すべきもの或は一致調和し得るものと信じて居つた。されば彼等の思想は假令當時の勞働者によりてよく理解されたとしても、夫れは勞働者の階級意識の發達を促がす性質のものではなかつたのである。

然るに第十九世紀の半頃前後からして、智識階級の間よりして現代資本主義の眞相並に現代資產者階級及び現代勞働者階級の眞相及び眞實なる關係を深刻に究明する學說が發達して來た。而して夫れによりて現代勞働者階級の階級意識の發達が大に促進され、又階級鬪爭思想が發達して來たのである。今其等の學說の中で其の勞働者間に及ぼせる影響の殊に大なりしは、カール、マールクスの說及びプルードンの說であつた。更に現代階級鬪爭思想の發達に大なる影響を及ぼしたるも此等の學說であるのである。茲には此等の學說並に夫れによりて智識階級の勞働者階級に對する態度の變動せしことが如何にして勞働者階級に於ける階級意識の發達を促かしたかを論述する暇はないから、遺憾ながら之れは省いて、直ちに此等の學說が現代階級鬪爭思想の發達を促がした方面を簡單に論述するに止めて置く。

（四）　現代階級鬪爭思想の組織的確立

夫れ單に客觀的事實としての現代階級鬪爭は比較的に早くより行はれて居つた。又資產者階級と勞働者階級との利害

の一致の甚だ困難であることも、ブールヂュア階級の遂行せる政治的革命の成功後間もなく意識され始めて來た。併し階級意識が比較的に廣く勞働者間に發達し、又智識階級が階級鬪爭を組織的に論究して、階級鬪爭思想を發達させて來たのは第十九世紀の中頃からであると思ふ。と云ふのは階級鬪爭思想の明確な組織的な論述は此の頃に公にされたマールクスやブルードンの著作に於て始めて發見されるからである。かのサン、シモン派の人々は旣に階級鬪爭を以て歷史的發達の永久的一方面として認めて居つたが、而も彼等はまだ之を哲學的にも亦歷史的經濟的にも組織的に論究して居らないのである。而して始めて歷史的經濟的に之を深く論究して、之を以て一大歷史的勢力と認め、現代階級鬪爭思想を組織的に確立したるはマールクスにして、又之を哲學的に論究して其の組織的確立を企だてたるはブルードンであると思ふ。されば現代階級鬪爭思想の發達を深く理解する爲めには、吾人はマールクスの說及びブルードンの說を詳しく研究せねばならないのである。併し玆にマールクスの階級鬪爭說やブルードンの階級鬪爭說を詳しく論じて居る暇はないから、只簡單に其の要旨を述ぶるに止めて置く。

今マールクス及びブルードンの階級鬪爭說を研究するに當て、先づ吾人の注意を惹く興味ある事實は、兩者共にヘーゲルの辨證法の影響の下に立說されて居ることである。卽ちマールクスは近世史の辨證法的研究によりて資產者階級と勞働者階級との對立幷に其の本質的鬪爭を說き、ブルードンは辨證法に基づいて立てられたる歷史哲學より階級鬪爭を說て居ることである。併し之れと同時に又兩者の上に及ぼせるヘーゲル哲學の影響は種々異つて居つて、其の差異を究明することは、其の類似を究明することと同樣に近世社會思想の研究上甚だ興味ある問題であるが、玆には此の問題に論じ及ぼす暇はない。それで只兩者の要旨を簡單に述ぶるに止める。

却說マールクスが階級鬪爭說を始めて組織的に論述したのは「共產主義者宣言書」に於てゞある。それで吾人はマー

ルクスの階級鬪爭說を研究せんとするには此の宣言書を中心として進むことが便宜であり、又論理的でもあると思ふ。此の宣言書は既に我國に於ても二三の翻譯があり、又其の一般の主意は我國に於ても廣く知られて居ると思ふが、併し其の思想の眞義や根源や發達に付ては、學者間に異論があつて、既に幾多の良好なる批判的研究が公にされて居る。茲には只階級鬪爭に關する部分に付て少しく論ずるに止めるが、本宣言書第一章はブールヂュアとプロレタリアと題されて居つて、「人類社會の今日までの歷史は階級鬪爭の歷史である」と云ふ有名なる文句を以て始まつて居る。而して吾人は茲に階級鬪爭を以て歷史の中心的事實或は勢力と見る理論の簡明なる論述を始めて發見するのである。其の說く處によれば階級鬪爭は人類史に於ける單に一時的な又は不正常的な狀態に過ぎざるものでなく、實に歷史の内含的論理的發達の恒常態である。而して其の基礎は生產法の發達に在るので、近世的生產法は必然的にブールヂュア階級の發達を促がすと同時に、又必然的に其の壞滅と、プロレタリア階級の發達を導き、茲に新しき革命が成就して新しき社會が成立してくるのである。要するにマールクスはヘーゲルの辨證法を原動力となし、(但し「共產主義者宣言書」の思想に及ぼせるヘーゲル哲學の影響の精確なる意味に付ては種々異論があるが、とにかくマールクスの階級鬪爭說は歷史に於けるヘーゲル辨證法の應用を基礎として居ることは疑はれない事實であると思ふ。)生產法を原本的事實として、歷史の進動を階級鬪爭によりて說明せんとするのである。而して現代社會に於て其の利益が根本的に相反し、隨ふて本質的に相鬪爭するものは資產者階級と勞働者階級とであると觀念し、又其の鬪爭は必然的に勞働者階級の革命的勝利を以て了るものと見るのである。然らばマールクスは其の勞働者階級の革命的運動の性質を如何に觀念したか。是れ輓近に於ける階級鬪爭思想の發達から考へて大に注意す可き點である。

併し茲に此の問題に付ても詳しく論ずることは出來ないから、只愚見の要旨を簡單に述ぶるに止めるが、要するにマ

ールクスは當時の革命的傳說に從がひ勞働者階級の革命をも矢張り政治的性質のものと觀念して居つたと思はれるのである。即ち勞働者階級が階級的に團結して資產者階級に反抗し、武力を以て彼等より政權を奪取することが、勞働者階級の革命的運動の本質であると考へて居つたと思はれる。但しマールクスは當代の社會主義者の多數と同樣に、千八百四十八年頃には勞働者階級の政治的革命は目前に迫つて居ると確信して居つたのである。

主として「共產主義者宣言書」に現はれて居るマールクスの階級鬪爭說の要旨は以上述べしが如きものであるが、然らば矢張り同時代に現はれたるプルードンの階級鬪爭說は如何なるものでありしか。詳しく論ずる暇はないから、矢張り極簡單に述べて置く。

さきに述べし如くプルードンは辨證法に基いて一定の歷史哲學を構成して居つたが、彼の階級鬪爭說はつまり其の歷史哲學より哲學的に論述されたものであるのである。されば玆に先づ彼の歷史哲學を論究せねばならないが、併しヤハリ其の暇はないから、直ちに彼の階級鬪爭說の要旨を極簡單に述ぶるに止める。

今プルードンの考ふる處によれば、現代の階級鬪爭は千七百八十九年の革命によりて生み出されたものである。此の革命に於て勞働によりて勝利を得たる佛國のブールヂュア階級は敎會によりて賤められたる人間の努力の眞價を發揮し、其の尊嚴を恢復せしむる哲學と、又此の努力を解放する法律とを確立した。此くて彼等は文化發展上、人類進步上甚だ重要なる使命を果したのである。併し彼等は經濟的權利を創造することによりて勞働を組織し、充全的正義を實現せねばならぬことを覺らなかつた。而して彼等の新たに得たる力によりて勞働を酷使し、只彼等の利益のみを圖らんとした。此くて從來歷史上に見ざりし企業家階級と勞働者階級との區別及び反對が起つて來た。而して第十九世紀の進行中ブールヂュア階級は段々文化發展上意味なきものとなつた。彼等は最早數に於て又勞働及び才能に於て勝れたる階

級、意欲し思考し、生產し推論し、命令し支配する强大なる階級ではなくして、商賣し、投機し、割引する小數者に墮落した。彼等は最早思想を有しないものとなつた。彼等は進歩の爲めに一の重大なる任務を盡くしたる後、今や全く沈滯して、却て進歩を妨げ、之を否定するものとなつた。されば人類は更に一層進歩せんが爲めには、新しき階級を要求するのであるが、今やブールヂユア階級に對抗して勃興し來れる勞働者階級が即ち此の新しき階級である。而して彼等が其の國家、國民及び宇宙的秩序との關係に於て自覺し、自己特有の思想を發達させるに從ふて彼等の進歩的任務が始まるのである。然らば勞働者階級は如何にして勢力を獲得し、以て其の進歩的任務を完全に盡くすことが出來るか。先づ第一に必要なるは勞働者階級特有の思想を十分に發達させることである。而して其の結果として勞働を合理的に組織することである。要するにプルードンは勞働者階級の自覺が段々發達し、又其の特有の思想が段々發達するに從がひ、ブールヂユア階級も段々勞働の眞價及び勢力を理解し來り、而して勞働が合理的平和的に組織されることによりて、玆に充全的正義が實現せられ、人類は進歩の最高階段に上り行くものと考へたと思はれるのである。

以上論じ來りし處によりて考ふれば、現代階級鬪爭思想が確立する上に最とも重大なる影響を及ぼしたと思はるゝマールクス及びプルードンの思想は、共に其の源泉の一部分をヘーゲル哲學に發し、又同じく資產者階級と勞働者階級との根本的反對を認めるが、而もマールクスの思想は大體上唯物主義的器械主義的にして而して勞働者の實際的運動を政治的武力的革命と觀念するに反して、プルードンの思想は著しく唯心主義的理想主義的にして而して勞働者の實際的運動を經濟的平和的革命と觀念するものである。然らば此等二種の階級鬪爭思想は其の後の勞働運動の發達の上に如何なる影響を及ぼし、且つ夫れ自身が該運動の實際的必要に迫まられて、或は之に順應して如何に變動したか。余は玆に其の發達の順序を追ふて論究する暇はないから、只世界的大戰爭勃發前に於ける傾向の一般と、其後今日までの傾向の一

殺とを簡單に論述するに止めて置く。

(五) 世界的大戰爭勃發前の傾向

却說前節に於て述べし如く、現代階級鬪爭思想はマールクス及びプルードンの思想によりて組織的に確立されたる後、歐米諸國に於ける社會的生活の實際的必要に迫まられ、或は之れに順應して種々に變動したが、大體上其の變動を過激的と穩和的との二方針に區別することが出來る。併し何れの方針に於ても武力的に政權を奪取することによりて階級鬪爭の終結を圖る傾向は著しく減弱して居る。つまりブランキー流の革命思想は大に減弱したのである。さればマールクスの革命思想を傳承する社會黨にありても勞働者の武力的革命を排斥し、議會的合法的に社會的革命の目的を達せんとする傾向が大に發達して居つたのである。是れ近代に於ける兵器の發達は勞働者の武力的革命を全く不可能ならしめたからである。マークルス自身も晚年には武力的革命の不可能を承認して居つたと思はれる。されば階級鬪爭思想を過激的に主張する勞働者團體にありても、其の革命的手段は之を武力以外に求めなければならなくなつた。此くて革命的サンヂカリズムやL、W、W、の如く所謂直接手段を以て革命的手段となさんとするものが起つて來たのである。

今世界的大戰爭勃發前の歐米の勞働運動に於ける階級鬪爭思想の發達傾向は上に述べし如く、大體上過激的方針と穩和的方針とに別たれるのであるが、其の過激的方針を最ともよく代表するものは、佛國の革命的サンヂカリズム、及び米國のL、W、W、である。而して之に對して其の穩和的方針を最ともよく代表するものは、獨逸の修正派や佛國の法的社會主義である。併し佛國の革命的サンヂカリズムに就ては余はさきに京都法學會雜誌に於て公にせる「革命的サンヂカリズムと現代生活」中に稍々詳しく論じ、且つ其の後我國に於ても幾多の學者は之を論述して居り、尙ほ余は本年

十月出版の豫定の「輓近社會思想の研究」中卷に於て社會學的に詳しく論述する考へであるから、玆に特に之を論ずることは避けたい。又米國のL、W、W、運動に付ても余は目下「經濟論叢」に連載中の「米國L、W、W、運動の研究」に於て詳論しつゝあるから、矢張り玆には其の論述を省く。而して獨逸の修正派の理論的基礎や佛國の法的社會主義の思想に付ては、「輓近社會思想の研究」上卷中に詳しく論述して居るから、是れ亦玆には其の論述を省くこととする。而して階級鬪爭思想の輓近の發達の一般を示す爲めに、其等の諸主義に付て極一般的な論述を試みるに止めて置く。

さきに述べし如くマールクスの階級鬪爭說にありては、資產者階級と勞働者階級とは本質的に相反する階級的利益を有するものにして、兩者の利益の調和は到底不可能なるものとして觀念せられ、而して現代社會の自然的發達の結果として必然的に資產者階級は滅亡し、又勞働者階級は必然的に勝利を得て、玆に社會主義的社會が出現するものと認められて居る。併し其勞働者階級の最後の勝利、ブールヂュア社會の最後の大破滅は勞働者階級の武力的革命運動によりて成就するものと觀念されて居るので、其の點に於てはマールクスは尙ブールヂュア階級の革命的傳說に拘へられて居るのである。之に反してプルードンは武力的手段を排して、經濟的手段を主張して居る。而して其の點に於て彼はマールクスよりも一歩進歩して居ると認めることは出來る。と云のは武力的革命は既に佛國のブールヂュア階級の實行せるものであり、又ブールヂュア階級がまだ貴族階級の壓迫より解放されて居らない國にありては、彼等はヤハリ武力的手段によりて彼等の解放を圖る革命を企たてるもので、要するに武力的革命は勞働者階級特有の革命ではなくして、寧ろブールヂュア階級特有の革命であると云ふことが出來るからである。而して又勞働者階級特有の革命的手段と云へば夫れは經濟的手段である可きものであるからである。さればマールクスの階級鬪爭說を承認するに於ては、武力的手段も亦議會的活動も全然排斥して、經濟的活動、即ち所謂直接行動によりて勞働者階級の完全なる解放を企だつる革命的サン

チカリズムやL、W、W、は勞働者階級の革命の本義を始めて十分に自覺したものと云ふことも出來るのである。

併し少くも世界的大戰爭勃發前の狀態に於ては、直接行動によりて急速に勞働者階級の完全なる解放を圖ると云ふことの、甚だ困難なるは、或は到底不可能なるは明白であつて、革命的サンヂカリズムやL、W、W、の思想は特定の事情の下にある勞働者間に於ての外は汎く承認されることは出來なかつた。而して直接行動の効力は少なくも甚だ疑はしきものであり、又兵器の發達によりて武力的革命は不可能であることが明らかに認められたとすれば、玆に勞働者階級の解放を圖る手段と云へば議會的活動、政治的活動の外に有力なる何物もないことになる。是れ歐米何れの國に於ても多數の社會黨が議會主義を採用するに至つた所以である。但し發達の順序より云へば武力的革命の不可能なることが認められて後に議會主義が發達し、而して之れに反動して革命的サンヂカリズムが起つたのであるが、其の一度起りたる後は、直接行動の効果の疑はしきが爲めに、多數の社會主義的勞働者は愈々議會主義を固守するに至つたのである。然るに勞働者階級の代議士が段々增加し、彼等の議會內に於ける勢力が增進するにつれて、ブールヂュア階級の代議士は彼等の意見を尊重せざるを得ざることとなり、隨ふて兩者の關係が段々親密になりて勞働者階級の代議士の生活は自からブールヂュア的になり、彼等の階級意識が弱はり、階級鬪爭思想は軟化して來た。此くて勞働黨の幹部の所謂ブールヂュア化の傾向が發達して來た。夫よりして修正派や法的社會主義に於て見るが如き階級鬪爭思想の軟化が一般に行はれて來たのである。而して階級鬪爭思想を甚だ穩かな意味に解する傾向は著しく現はれて出た。其の解釋に從へば階級鬪爭とはつまり勞働者階級の組織を意味するものにして、ユートピストの夢想する如く大破滅的革命的運動を促進するものでなく、勞働者階級の知力的、道德的經濟的組織及び向上を意味す可きものである、又勞働者階級の專制的支配を要求するものでなく、彼等の發達の度合に應じて彼等が最高の市民的職務、政治的及び立法的行動に參加することを意味

するものである。

要する世界的大戰爭勃發前の狀態に於ては革命的サンヂカリズムやI、W、W、の如く階級闘爭思想を過激なる方針に發達させ、資產者階級と勞働者階級とは本質的に利害相反するものにして、資產者階級の存在する以上は勞働者階級の完全なる解放は到底望まれ難く、而して又資產者階級を破壞して無階級的社會を實現せしむるは即ち勞働者階級の人道的文化的使命であると解するものも勃興して居つたが、併し勞働者階級間に於ける一般の傾向は上に述べし如くに階級闘爭思想を穩かな意味に解することであつた。然らば世界的大戰爭は右の形勢の發展に如何なる影響を及ぼしたるか。

(六)　世界的大戰爭の影響

今世界的大戰爭の初期にありては聯合國にありても亦同盟國にありても、從來階級闘爭を標榜せる社會黨も母國の存立を保持する爲めに擧國一致の必要を感じ、從來の要求や主張を一時中止した。而して階級闘爭思想は一時殆んど消失したのである。殊に獨逸の社會民主黨の中には從來階級闘爭を假令穩かな意味にせよ主張したのは謬見であつて、資產者階級の利益と勞働者階級の利益とは本來調和すべきもの、又調和し得るものであることは今明らかに意識されて來た、されば戰後は獨逸の社會民主黨は全く生まれ更はるであらうとまで宣言する人々さへあつたのである。又白耳義や佛國の如き敵の侵入を受けた國にありては階級闘爭を口にするものは一時全く跡を絕ち、國民は皆心を一にして母國の防衛に當つたのである。併し戰爭が段々永引くにつれて、戰爭の意味を批判的に考察する傾向の現はるゝと共に、社會黨の中より此の戰爭は全く資本家の貪慾より起れるものにして、本來平和を愛する各國の勞働者階級にとりては何等尚

何なる意義を有するものでないと云ふ意見が起つて來た。而して階級闘爭思想が復興する傾向が現はれて來た。此の際露國に於て突然革命が勃發し、始めは勞働者階級と資産者階級とが相協力して露國の改造に當るが如き形勢が見えたが、遂に十一月の革命によりて過激なる階級闘爭思想を抱けるレーニン一派が政權を掌握し、今日の過激派政府は樹立された。夫れより獨逸の革命や墺匈國の壞亂等が續起し、而して露國の過激派の思想が其等の諸國に侵入して過激なる階級闘爭思想は猛烈なる勢を以て復興して來た。尙ほ其の影響は聯合國や中立國にも及び、今や過激なる階級闘爭思想は前代未聞の勢力を振ひつゝある。併し聯合國や中立國は云ふまでもなく、獨逸の臨時政府の如きも、過激なる階級闘爭思想の蔓延を防ぐ爲めに、大に努力しつゝあるのである。而して此の形勢が今後如何に變動し行くかは、之を確實に豫想することは甚だ困難であるが、余は講和條約が實行せられ各國の經濟狀態が平時に復するに從がふて、過激なる階級闘爭思想は段々弱はり、假令階級闘爭思想を主張するも、之を穩かな意味に解する傾向が再び一般に强まるであらうと思ふ。過激なる階級闘爭思想は決して國民生活の安固を保證し、其の健全なる發達を導くものでないことは、之を實行せる露國の現狀は明かに證明して居るかと思ふ。併し玆に吾人の大に注意すべき點がある。夫れは階級闘爭思想の過激化と勞働者階級の實生活との關係である。

歐米諸國の今日までの勞働運動の發達は、吾國に於ける勞働運動の將來の發達に付て種々示敎する處があるが、玆には只階級闘爭思想の過激化と勞働運動との關係に付て吾人の學ぶ處を少しく述ぶるに止めて置く。詳しく述ぶる暇はないから、極一般的に又稍々獨斷的に論述するが、余は何れの國に於ても現代資本主義の發達が或度に達する上は、勞働者階級の運動の生起は到底避く可からざるものにして、而して其の運動の發達するにつれて勞働者の階級意識及び階級闘爭思想は又矢張り殆んど必然的に發達してくるものと考へて居る。只問題は如何にして彼等の階級闘爭思想の過激化

を防ぐ可きかと云ふ事である。而して今日までの歷史の教ゆる處によれば、勞働者階級の生活が健實に改善されず、悲慘なる狀態を續ける時は、彼等の間に發達する階級鬪爭思想は殆んど必然的に過激化するが、之れに反して政府の社會政策的施設や企業家の勞働者福利增進設備がよく發達し、且つ勞働者階級自身が政府や企業家の壓迫を蒙ること比較的に少なくして自由に活動することができ、隨ふて彼等の生活が大に改善され、健實なる發達を遂ぐる時は、階級鬪爭思想は自から穩和化するのである。されば吾國に於ても若し政府が今日までの如く全く社會政策の講究を怠り、勞働者の運動を抑壓することばかりを考へ、又企業家が一般に勞働者の安寧幸福に頓着せず、只自己の利益を圖ることにのみ專心するに於ては、殆んど必然的に起り來る可き階級鬪爭思想は又殆んど必然的に過激化するであらう。之れに反して政府が若しよく社會政策の實行を圖り、且つ勞働者の健實なる運動を助長し、而して企業家が一般に勞働者の福利の增進に盡力するに於ては、階級鬪爭思想の發達は到底避け得られないにしても、夫れは必ず穩かなるものとして發達するであらう。されば今後我國に發達す可き勞働運動及び階級鬪爭思想が過激化するか、又は穩かになるかは一に政府の施政の方針及び企業家の心掛け如何によるのである。余は我國の政府も企業家も共に歐米諸國の勞働運動の歷史の與へる貴重なる教訓を無視せざらんことを大に切望するのである。（大正八年七月十三日）

社會問題としての米價

法學博士　小林丑三郎

米價に就ては種々の問題が有るけれども、社會問題の方面から之を見て行くに、先づ其原因を攻究するの必要があると思ふ併し又此原因問題に就ても種々の議論が有つて、今之を一々列擧し且つ批評して行くといふことは、繁に堪えぬから省略するが、要するに余の考へる處に依ると、需給數量と通貨の關係との二點に到達するのである、而かも其程度から見ると、數量の關係よりも通貨關係の方が大なる原因を爲してゐると信ずるのである

最近東京商業會議所で調査せられたるものに依ると、物價騰貴の割合は大正四年七月に比して今日は其拾三割四分高となつて居る、即ち二倍三割四分に當つて居るといふのである、而してこの中四割若しくは五割見當のことは時局異狀の變化を呈せる場合なるに考へ、數量關係に起因して居るとも觀察し得られるけれども、二倍三割四分といふが如き騰貴寧ろ暴騰は斷じて數量關係のみを以てしては到底解釋することは出來ぬのである、勿論或商品に於ては非常に多額の數量が海外に輸出せられ、爲めに國内に於ける供給が激減して、價額が二倍三倍にも騰るといふことはあり得る、併し一般の物價皆然りとは解せられぬ、殊に殆んど輸出關係の無い假令ば米の如きものをこの例に當てはめる事は出來ぬ、そして去りとて收穫の點から見ても二分の一に減じてゐる筈は無いのみならず、人口の增減移動の點から見ても實際の需要高が二倍以上にもなるとは言はれない、夫れで若し需要といふ語の內に通貨が膨脹せる結果、各人の懷合が豐富になつたからといふことを入れて見れば說明が出來るが、其れは通貨關係といふことに爲るのであつて、通貨の價値が低落する爲めに物價が騰貴したと云ふべく、需要數量の增加とは見ることが出來ぬ、そして下落は此れを諸物に照らして明かに認めらゝるから、之を以て觀る時は、物價騰貴の原因が通貨關係に

在ることに付一點疑ふの餘地はないと信ずる。

果して然らば通貨は現在如何なる狀況にありや──を觀るに大正四年七月に於ては四億四千六百萬圓であつたものが、最近の五月末に於ては約十三億五千萬圓餘の巨額になつて居る、即ち此期間に於て實に二倍四割の膨脹を來たしてゐるのである、且つ其の値打が下つて居ることも疑はない、玆に於て、これが主なる原因で、諸物價が一般に平均二倍三割四分といふやうな價格を示したのであると見るべきが至當である。

通貨膨張──通貨値打の下落が主因で諸物價──米價も──が騰貴した結果、如何なる階級のものが、生活難を最も切實に感じてゐるかといふことを觀察するに、概して生産に從事して居るものは大なる困難は無いと思はれる、それは變動の原因が通貨價値の減退にありとすれば、生産者としては買ふて消費するものも高價な代りに、製造して賣る處のものと亦高價となる譯だから、自己が物を賣る時と、自己が物を買ふ時の間さへ短かければ短かい程、其變動を感じないと謂ふてよい、否な順序として買ふ生産費が前で、賣る代價が後になるから、概して利益であると云へる、此の生産者といふ中には其生産會社の株主の如きも抱含し得るのである、是等が消費する處のものも、緊より高くなつてゐるけれども、同時に生産物の騰貴の爲めに、株主に對する利益配當も亦多くなるといふ關係もあるからであつて、大株主なぞは其の貨幣價格の差の大利がある、それから純粹の家主地主の如きも、物價の騰貴及事業の勃興と關連して、地代や家賃の騰貴を來してゐるから、全部では無かろうとは思ふが、其幾分かは物價騰貴から來る所の困難を防ぎ得る、否寧ろ場合に依つては、却て多大の利益を獲得して居るものもあろう只問題は勞働者、官吏、會社員、教員等である、是等の内で勞働者の賃銀は、大正四年七月に比して、今日では八割一分高であるといふことである、それから官吏は一般知悉の如く、既に平均五割の增給を實行せられることに成つて居る、又會社員等にあつても之に準じて略ぼ同樣である、併し乍ら、教員にして官吏ならざるものに至りては、却々五割增しといふことには成つて居らぬ様である、又た地方に於ける公吏等の中にも同樣なものが尠くないと思はれる、故に物價騰貴の影響を最も甚しく感受してゐるものは智識階級の人々であろう、尤も勞働者と雖も物價騰貴率に比例すれば、其半ば位丈け漸く勞銀の增給を見たのみで、官吏、會社員の如きは勞働者よりも甚しく、其約三分の一當りの補足に止まるのである、況んやこの他の地方教

員公吏及之に準ずる多數の智識階級者は、極めて困難を感じて居ることと思ふ、恩給若しくは公債の利子によりて衣食するものは、之亦打擊が甚しかろうが、これ等は其他に夫々何等かの資産を有するか、職業を持つて居るといふ關係もあるから、その方と併せて觀察しなければ眞相の處は分明しない、唯々恩給のみ、若しくは少許の公債利子のみで衣食しつゝあるものゝ苦境にあるべきは當然である。

余の看る點は大體に於て叙上の如き觀察であるが、この中級の智識階級の生活難は、其影響する處決して閑却すべきものではない、之が爲め社會の根柢に向つて頗る悲しむべき動搖を及ぼしはしまいかと思ふのである、單純なる勞働者は、體面等を顧る必要も亦趣味もない、のみならず外國等の事情と悉しく知らないから、種々の問題が新聞等に現はれても左樣に感ぜず、又智識が廣くない爲めに互に連絡通報の途もなく、陰謀といふやうな危險のことに成行く場合も僅少である、勿論脊後に煽動するものが有つたならば、此階級のものは非常の雷同性を帶びて居るから、極めて危險性のものになることがある、併しこれさへ無ければ、只世のまにまに働いてゐるのである、中流の智識階級になると、新聞もよく見るし智識も相當あるから、外國の事柄も理解が出來る、故に彼の富豪や所謂成金の如き階級のものと自己とを比較することになると、其思想上に及ぼす影響も決して單純でない、而かも其意志を普及し、且つ聯絡通報の手段も迅速に運び得られるのである、勿論彼等は思慮はあるし、體面といふことも考へる、故に忍耐し得るだけは忍耐して、擧措などは滅多に敢行しないけれども、生活難が逐次脅威を益すに從つて、第一に家庭が破れて仕舞ふ、妻子離散と迄は行かずとも、男の兒は年期に出す、女の兒は容姿でも良ければ、其途の用法に當てるといふ樣なる、社會の暗黑面といふものは、元來此等中級有識者の家庭の破壞から起つて來るもので、骨節の强頑な力勞者などの家庭には、斯かる可弱い代物は出來難たい、中流階級には斯程の寶物があつて、是れが最後の寶物である、社會風紀の壞亂は是れより來るのである、——彼等の家庭が斯點まで破壞さるゝに至るといふと、今度は却て非常に危險なる考を起すべき性質を現はして來ることになる、社會問題としては、餘程考究しなければならぬ事項と思ふのである。

其處で本論に戻るが物價騰貴の大原因は通貨の數量增加、卽ち價値減退にありとせば、物品の眞價といふものは左のみ騰貴してゐるものではない、例令ば米價は今日四拾圓と稱されて居

ても、其米を賣つて得た處の四拾圓の通貨を以て、他の物品を買ふとすれば、矢張もとの貳拾圓か貳拾五圓の物品より買ふことが出來ぬ、此點から押して見る時は、米價の如きも、此意味に於て決して騰貴といふことは出來ぬかも知れぬ、獨り米價に限らず、凡てのものが略ぼ同樣の關係にあるのである、要するに通貨の價値が非常に減退したのである、中流階級が衣食に困難を感じてあるのは、其價値の減退した通貨をすら多く得られぬ點にある、而して、之を救濟するの手段は、通貨を復舊さすか、減退したまゝの價値の通貨を、潤澤に是等生活難の階級者に、増給するの方法を講ずるより他には無いと思ふ、併かも是等の階級に一々通貨を多額に得らるゝ樣、分布の方法を講ずるといふことは容易の業ではない、否其手段を見出し能はぬのである、斯く論じ詰めると、結局通貨の價値を引上げて物價を引下げるより、他に此の問題を解決すべき應急の手段は無いことになる。

之れに就いて余等は、一面に於ては金利を引上げ、一面に於ては貯蓄を奬勵し、又出來得る限り海外投資の如きを實行するを可とするの意見を持してゐるのである、貯蓄の奬勵は通貨縮少に對して絕大の効果がある、貯蓄を奬勵する時は、消費通貨を少くして資本通貨を増すといふことになる、資本通貨と消費通貨とは、經濟上競爭區域を存して居るものであつて、換言すれば資本通貨が多くなれば成るほど消費通貨が少くなり、反對に消費通貨が多くなれば成るほど資本通貨は少くなるものである、で、貯蓄奬勵は一面に於ては消費の通貨を僅少にし、他面に於ては資本通貨を増加する働きをなすものであるから、自然各種の消費物に向つて支拂はるゝ消費通貨の僅少は、消費物の價値を下落せしむる關係を生ずるのである、最近大藏當局の如きも、勤儉貯蓄の思想を涵養して、零細の資金を收集するのが今日通貨縮少の最も適當なる方法であると言はれてゐる、是れ即ち消費通貨を少くし、資本通貨を増加するといふ意味であらうと思ふので、余等は此說に對しては双手を擧げて賛成の意を表すのであるが、勤儉貯蓄せよと謂つても、却々貯蓄の余地はあるまい、此の物價騰貴では如何にして貯蓄をするか、一寸六ケ敷かろうと思はれる、故に吾人は、此際斷じて金利を引上げねばならぬと思ふのである、金利を引上げれば、先づ取引市場を初め、地方の買占賣惜の氣勢を挫き、消費通貨の縮少消費物價の引下を促かし、今時に一面に於て貯蓄の奬勵になる、而して金利引上けは泡沫會社の勃興を抑へ、恐慌を未然に防ぎ、有價證券の暴騰を制し、而かも其上に健全有望なる事業と、泡沫的無謀の事業とを、取捨淘汰するの働きを爲すのである、今日の策として經濟上、社會上金利の引上げは最も適切穩健なる方法であると信ずる。

利權の放棄と四國共同借款

法學博士　神戸正雄

（一）大決斷を行ふの時也

日本の對外問題といへば、恐らく對支問題が最大切な問題である。隨つて之につきては目下朝野の人士が盛に意見を發表して居る。併し之につき餘りに攻究や論爭にのみ時を過して居てはならない。機會は刻々に過ぎ去つて往くから。出來るだけ速かに思ひ切つた方針を定めて、其に從つて實行しなくてはならない。今日此際に其方針の立て方を誤ると、日本の國命に重大關係ある問題でも引起すと思ふ。私は其方針は姑息な方針では駄目で、少し大きな處に目を着けて、永遠の大利を收むることを期しなくてはならぬと思ふ。

（二）歴史に囚はる可らず

由來我が國に行はるる對支議論は大抵囚はれたる議論ばかりである。稍進んだ考を持つて居らるゝ人の議論も尙且つ之を免れない。元來實際問題はサウ理想通りには往かぬ。理論を徹底することは出來ないものであるともいへるが、併し餘りに目前の小利に拘泥し、過去の成行にのみ捉はれて姑息な方針を立てゝ居ると、時勢に背き人和を得ずして遂に邪路に陷りはせぬかと憂ひなければならぬ。日本の在來の政策が統一を缺き且つ動搖を免れなかつたことは遺憾であるが、此も畢竟は日本に於て目前の小利を擧ぐるに汲々としたり、過去の歴史に囚はれたりした結果で、蓋し已むを得ぬ。最早良い加減に覺醒して一つ思ひ切つた方針を確立したいものである。

（三）四國借款と日本の地位

支那の借款問題といふても根本の對支方針から割出して考ふべきもので、之のみ一つ切り放して見るべきものでない。そして私は此につきても彼につきても思ひ切つた態度で之を處置せよといふことを唱ふる。そこで先づ根本方針を一瞥するのに、由來多くの人々は既得の優越權とか利權とかを維持し、更に益々之を擴張しやうといふことを考ふる。少しく開けた人は此既得の優越權や利權は維持するが、向後は此が爭奪を自らも行はず

他國をしても行はしめないことで往かうといふのである。然るに私は今一歩を進めて、日本が卒先、既得の優越權を抛棄し、既得の利權をも投出して、他國をして之に倣はしめ、四大國共同の組織を作つて之にて支那に於て外國の財的援助を要する事業を引受けしめ、將來の分は勿論のこと、過去の分も此組織に收むることとすることを勸むる。此大方針からして夫の支那に對する四國共同借款にはむしろ日本が進んで其成立を助くべきものと思ふ。

（四）既得權を抛棄すべし

如何にも私の如き態度であると、折角血を流して獲得し、苦心慘憺の結果收得したる優越權や利權をも投出すのであるから、太しき不利の如くである。日本人として其處まで思ひ切ることは出來ないやうである。特に此の如くになれば、日本の國民の進取の氣勢を挫かることともなり、又他方には支那人の侮蔑を招き益々以て對支活動を妨げらるるが如くに見ゆる。故に斯の如くに思ひ切ることは日本人に取つては容易の事でない。切めては既得の權利利益なりとも我物として殘したいといふ考にならざるを得ぬ。併し私は敢て此際、思ひ切つて既得のものまでも投出せといふのである。

（五）親切の押賣は廢すべし

何故に私がさういふかといふと、我國が此儘にして既得の小利權を固守して居るときは、假令其丈けは失はないことが出來るにしても、此上の利權を收めることは今後益々六つかしい。支那人自らが之を妨げるし、英米の盛なる邪魔も入らう。而かも英米自らは巧みに支那に喰入つて益々自ら利權を收めることになる、其丈けで濟めば良いが、次ぎには日本の既得のものまでもどし〳〵回收しやうといふことになり、其には英米の後援を利用して之を行ふことであらう。玆に於てか或は日本は支那と同種同文であるから、支那人を良く理解させたならば、彼等が英米の爲めに利用さるるを嫌ひむしろ日本と共同して英米を排斥することともならう。今日は日本を排斥する爲めに英米を利用するが、英米の勢力が餘りに大となれば、次ぎは日本を利用して英米を排斥することにもならうとも考へらるる。私は嘗て斯くも考へて見たが、段々支那人の心の底を聽き正すに及んで其望なしと考ふるに至つた。彼等は抑々英米の奴隷には甘んずるとも、日本の下風に立つを好まざるものである。日本と對等でさへ快しとせざるものである。日本が發展すればするほど日本を嫌ふものであり、彼等が進歩すればするほど日本を侮るも

のである。で日支の親善は到底望みがない。日本も近頃の如く膝を屈して日支親善をいふことは此から先き止めるが良い。我は彼を單純なる隣邦として扱へば其れで十分である。我は彼とは歐米精神に對すると同じ心持で交際すべきである。孰れにせよ日本が將來、利權政策で行けば必ず支那人からも外國人からも邪魔せらるるを覺悟しなければならぬ。既得の利權とても之を維持して居れば屢々脅かさるるを免れない。如かず此際此等を投出して新生面を開かんにはである。

（六）永遠の隣誼を考察せよ

特に今日の儘であると、屢々排日騷動を引起し、貿易を妨げられ在留日人の生命財産をも危ふせらるる。斯の如きは支那には今後到底、絶えないであらう。斯くては日本が政治上支那にて勢力を伸ばすことが困難であるのみならず。經濟上の發展を遂ぐることも益々困難になる。で今日、英米が進んで對支借款團を作り既得の利權までも之に持寄り、將來のは凡べて此にて引受けることゝし、日本にも此への加入を促し來つて居るといふならば、日本も此際むしろ思ひ切つて之に加入し、少々許りの既得權を出し澁り、滿蒙や山東は例外だとか、一定小額の分は例外だとかいふて、濫りに拔道を考えたり、けち／＼したことをいふのは止めにし、男らしく彼等と同樣に出すものは出すことにした方が結局、永遠の利益を收むる所以と考えらるる。

（七）四國借款は成立せしめよ

或は曰く、米國などは從來支那に有つ利權も少いから其れで良いが、日本の如く可なり多く有つものに取つては其は甚だ不利であると。併し既に英國の如く相當に多くを有つものが其に同意する位であるならば、日本とてぐづ／＼するのは宜しくない。或は英國の如きは此大戰後、所謂支那に投資する力が乏しいから、斯く思切つたことをするであらうが、日本の如く支那の外、目星しき海外投資場を有たず、而も後に尙ほ海外投資力をも有つものに取りては、支那にて自由投資とした方が益々力を伸ぶるを得て好都合ともいふが、併し其伸ばし得る財力を日本が單獨にて彼に向けることになると、矢張り色々の障碍が入ることとなるのであり、隨つて其が思ふやうに入れられないのみならず、既に入れてあるものまでも破壞せられ、其他各種の不利をも受くることになるのであるから、矢張り此は彼等と一緒に投資することとするのが得策である。

（八）共同借款と日本の地位

斯くて共同借款で行くことになるとしても勿論、日本が從來有つ利權を全然失ふのではない。其を此借款團に提供するだけで、此に持出したものに相當なる配當は當然得らるべきであり又之が管理につきても日本は英國に次いで既得のものの多いだけに、當然相當に大なる地歩を占めらるると思ふ。其點は勿論十分に主張して宜い。此に於てしつかりと地歩を得て置けば、共同借款になつても、單獨借款であつても日本として借款によつて受くる利益は大して變りはない。むしろ共同で往く爲めに單獨で往く場合の如く故障妨害のなきだけ、益々日本の利益が進めらるゝ譯で、之によつて直接にも又間接にも日本の支那に於ける經濟上の利益が進めらるゝ。

（九）支那は信義の國に非ず

或は、共同借款であると、結局支那が自然此共同借款團の爲めに死命を制せらるゝこととなる。彼の如く財政が不完全で收入常に不足を告げ、借款に依るに非れば國を維持し難き國では此財團が遂に彼を自由に處分することゝなる。其故、彼國の有識者は之を嫌ふといふのであるが、假令彼が嫌ふても何うしても此くなるのは彼の已むを得ない運命である。つまり彼等自らが此處へ其運命を持つて來たのである。此を彼等が嫌ふ所に乘じて一番日本が之を助けてやらうかとの考も起るが、其はせぬ方が良いと思ふ。何うせ支那人は外國人を利用出來るだけ利用するといふ打算一方の人民であり。信義などてんで眼中になき國民であるから、此處を助けてやつたとて決して其を德とするなどいふことはない。日本が之を助けるについては英米等に對して大なる苦情に打勝ち、多大の犧牲を拂はなければならぬ而かも支那人からは結局之を德とはせられずして、却つてむしろ疑を懷かれ反抗せらるることゝなる。むしろ左樣な愚なことはせぬが良い。

（一〇）借款に苦情は附きもの

或は此共同借款が進行する結果、支那人が此共同に對して反感を起し、之を敵視して妨害を爲すかも知れない。併し其時は英米等と力を協せて此暴行を懕伏すべきである。斯くて彼等を威壓することは其は譯もなく出來ると思ふ。日本單獨で支那を引受くればこそ、弱き支那に對しても尙ほ日本が思ふに任かせないが、列國と共同ならばさう心配するに及ばないと思ふ。何うも支那人は勝手な國民だから、勿論共同借款の場合にも苦情は斷えないであらう。が併し兎に角此に對抗するについても列國共同なれば始末は良い。矢張り此點から見ても日本の進むべき

は此共同事業に參加することである。

(一一)軍國主義は日本の不利

對歐米政策から見ても、日本は英米等の領土の經濟上負ふべきもの多く、彼等と協調を保つのを利とするが、日本が從來の如く、支那に於て利權の維持擴張に腐心し。優越權を振り廻はし、更に彼等の提議する借疑共同にも加はらないで居ると、遂に日本は軍國主義の遺骸であるとか何とか口實を附して、平和關係を破らるることとなる恐がある。斯の如きことは日本の經濟上由々しき不利である。此支那以外の天下に於て日本が經濟上發展するにつけても、對支政策は協調主義をとり、隨つて此共同借款に加入し、既得の利權を持出す位の態度で行くのが得策である。

(一二)永遠に亘る萬全の策

或は日支經濟同盟とか、日本が東洋諸國の盟主となつて行かうとか、東亞モンロー主義を行はうとかいふ考もあるが、其は凡べて空想である。日本が斯かる事を有功に行ひ得る爲めには世界の國際關係に今一つ新しき變化が起るか、日本の國力が非常に强大となるかしなければならない。尙ほ又東洋諸國就中、支那が日本に隨つて來なければ出來ない。處で第一第二の條件も當分駄目、其れに第三の支那が日本について來ることは此も百年河淸を待つが如くであるとすると、愈々以て右の計畫は空論でなければならぬ。で日本は世界の全體の形勢と、自國の力とを理解して、眞面目に其方針を定めなければならぬ。斯くて其結論としては支那に對する借款共同には進んで加はるべし、其に餘り制限など持出すべからず、既得の利權を大に投げ出すべしといはなくてはならぬ。終りに重ねて曰ふ、日本は此際目前の小利を見るべからず、たゞ永遠に亘る萬全の策を考へよと。

信念を基本とせる勞働運動の要求

農商務省參事官　河合榮治郎

（一）

昨年の夏米國へ渡つて彼の學者、社會改良家、勞働組合の領袖等と親しく會談して自分の得た所は頗多かつた、殊に將來の社會の如何なる方向に進むべきものであるかと云ふ事に付て聊か感ずる所あつて自分が永い間の確信を强めた所は一方ではなかつた。段々是等の人々と親しくなるにつれて色々內的話をする樣になつて自分の非常に驚いたるは米國人の日本に對する智識の淺薄である事否寧ろ日本に對して驚くべき誤解を抱いて居る事である。彼等は云ふ、日本と云ふ國はミカドと云ふものがあつて其の權力は絕對無比でザーやカイゼルにも優り之を圍むに貴族と軍人とがあつて政權を擅にして一般の人民は全く政治圏外に離れてその利益は毫も顧みられず壓制塗炭に苦しんで居るものである、又資本家は勞働者を酷使して奴隷の如くに之を取扱ひ男子は女子を婢僕の如くに輕んじ多くの男子は妾を圍むものであつて淫賣は公然と許され更に藝妓と云ふものが酒間に斡旋し兼て男子の玩弄する所のものとなるのである、更に朝鮮人や支那人に對しては殆人間として之を看做さず動物の樣な取扱ひをして居る要するに日本人は人間に對する高尙な尊敬を持たない、非文明な國であると云ふのである。之は非常に懇意になつた人達に付て親しく自分から日本に付ての印象を包まず云つて呉れと云つた時に再三躊躇した後で漸く切り出した所のものである。そして此の種の觀察は決して一部少數の人達の考へではなくて比較的に廣い範圍の人の見解である、自分は之に關しては日本と外國との差異を話して、形式にのみ囚はれて日本の事を判斷すると非常に誤つ事が多い、要するに形式は精神の表現であつてその形式は各國夫々趣を異にするものである、若し米國人の有する形式で日本の精神を觀察したならば非常な誤

解で例へば日本は君主國であるけれどもその君主と云ふものはザーやカイゼルと非常に違ふし又日本の貴族や軍人は決して自分の階級の爲に政權を行使するなどと云ふ事は殆無いしその他資本家、勞働者、男性と女性、日本人と支那人朝鮮人との關係の如き皆夫々外國に於けると異れる形式で溫い情愛が溢れてゐるのであつて、日本を判斷するに付ては更に精細なる觀察が必要あると述べたので成程よく分つた、しかし自分達の樣な考を抱いて居るものは決して尠くないから何か雜誌か新聞で少し日本の事を紹介してはどうかと云ふのであつた。

(二)

米國が極東を理解しない事は驚くばかりで之等人々が皆相當の獨自一個の判斷を持つてそしてその判斷が一票の投票となつて實際政治を動かすのであるから實に危險と云はねばならない、殊に講和條約の問題があつてから日本の山東に對する要求は前述の印象を背景として一層之を攻擊すると云ふ風であつた、從來も米國で日本攻擊と云ふ事はないではなかつたけれどもそれは主として太平洋沿岸に行はれたものであつてその動機も決して高尚なものではなかつた、しかし今度の排日論は東部の太西洋沿岸に亘つて行はれるものであつて之を宣傳するものが決して下らぬ人ではなくて相當の學識を有し信念を有する人であつて正義人道の立場に於て行つて居ると云ふ確信の下にやつて居るのであると云ふ事は大に注意せねばならぬ事であると思ふ。

他の事は暫く措き資本家と勞働者との關係の事に付て何故かかる印象を持つたかと聞くとそれは三つの理由がある第一に日本は黃燐燐寸使用の禁止條約に贊成しなかつた事、第二に日本は今も尙婦人と少年とをして徹夜業をさせる國であると云ふ事、第三に日本には今以て一つの警察規定があつて嚴格に勞働組合の成立を妨害すると云ふ事、此の三つを以て自分は日本と云ふ國は如何にも勞働者の幸福を眼中に置かない野蠻國であると云ふ印象を持つたのであると云ふのである。此の答は相當に勞働問題を調べて日本の事を研究した人でなければ出來ない答である、之を以て見るも之等の觀察をしてゐる人達が決して一片の無學文盲のものでない事が分るのである。

(三)

扨是等の人達は最後の結論として之を要するに日本と云ふ國

は大多數の人民は幸福な生活を送り得ないで蹂躙されて居る國である米國は他日、日本の大多數の人民の爲に日本と戰爭をするかも知れない、而して平民を貴族から、勞働者を資產家から、女性を男性から、又朝鮮人を日本內地人から解放しなければならない時が來るかも知れないもしその時が來たならばどんなに日本の大多數の人は喜ぶであらうといふのである、此處らへ來ると少し滑稽な空想になるのであるけれども眞面目に之を考へてる人がある、そしてその人達は立派な社會改良家として社會的事業の爲めに奮闘してる人なのである。

又自分は嘗て日本の富源の貧弱なるを語つて國外膨張の止むをえざる所以を說いて、最後にロイドジョージが有名なる豫算案を議院で通過させた時に今貴族は廣大な森林を有して禽や獸の跳梁に任してある、しかるに一方には耕すに土地なき貧民が如何に多い事であらう、土地は禽獸の爲に與へられたものではない、土地は神によつて人の爲めに與へられたものであるといつた事がある、今北米や濠洲には禽獸の跳梁に任せてある土地が無數にあるに拘はらず何故に日本の人民を入れないのか、ロイドジョージの口吻を以てすれば土地は神によつて人の爲に與へられたものであつて禽獸の爲に與へられたものではない、國際聯盟を說く前に世界の土地を一度神に御返して人口に正比例して分配をやり直さうぢやないかといつた事があつた、所がその人云ふには、如何にも御說は御尤であつて自分も現今の世界の現狀維持（スタツスクワーオー）は公平とは思はない、しかしその要求をする前に日本は日本の內地に於て先づ爲すべき仕事がありはしないであらうか、膨張した土地が本當に日本の六十萬の人民の幸福になるならば世界は決して日本の膨張に不平はいはない、しかし今日の日本は膨張に依つて幸福になるのは男子のみで女子は與らない、資本家のみで勞働者は與らない、貴族のみで平民は與らない、然らば六千萬の多數の爲めでなく少數の貴族や資本家の爲に世界は日本の膨張を認める理由はないのである、抑日本の政府の發言の脊後にはどの程度迄人民の要求が籠つて居るのでせうかと問はれた事があつた。

以上自分は長きに亘て米人の日本觀を紹介した、之等の言は多くは誤解で皮相なる觀察に過ぎないものもあるけれどもその言葉は確に我日本の急所をグサとばかりに穿てる所の有るのは否み難いのである、我日本には未嘗て解放の運動のあつた事はなく勞働者は資本家から女性は男性から今も尙受くべき至當の待遇を受けてゐないのである。

（四）

足一度日本を離れて英米の兩國へ渡つたものは必ずや國內に磅礴せる一種人道的の空氣を感ずるであらう、其の所謂正義人道の聲の裡には假令多少の僞善と誇張とがあればとて兎も角日本に見る事の出來ない美しいセンチメントの橫溢してるのを認めざるを得ないであらう、自分はその雰圍氣の中に在つて前述せるが如き日本に對する觀察を聞きながら思つたのである、抑日本がかくの如き誹謗の冒を受けるのは原因果して何處にあるのであらうか、更に日本人の有する根本的の欠點は果して何であらうかと。

自分はそれを求めて唯、一を得たのである、即日本人は未だ人生の神聖なる所以を解して居ないのである、人格の權威といふものを痛感してゐないのである、日本人の生活には人と人との關係の外にはない、人の世の生活を離れて人と神との生活は一般の日本人にはないのである、既に神と人との關係がないから自分は神の子であると云ふ立場に於て不當な壓制や無意味な蹂躙に敢然として起つと云ふ信念が湧いて來ない、自分の利益の爲と云はず自分を名譽の爲と云はず唯自分を生める神の名に於て斷然として正義と純理を爭ふと云ふ心持が出て來ない、凡て偉大な運動は內から來る力強い此の信念なくして爲し遂げられるものではない、日本人は自己の人格を神聖にして犯すべからざるものとする信念が確立して居ない、之れ即ち日本に於ける各種の改革の運動が常に不徹底に了る所以である、既に自己の人格に對する尊敬の志がないならば他人の人格に對する尊敬の念の起る筈がない、他人に對する純粹の尊敬は唯自分の人格の尊重からしてのみ湧き出づるからである。資本家の勞働者に對し、男性の女性に對し、我國人の朝鮮人支那人に對する一に此の根本的缺陷から發生するのではあるまいか。

（五）

人も知る如く勞働者の境遇を改善せんとする運動はフランス革命の延長である、一切の人類が自由平等であると云ふ主張を名實完全なものにしやうと云ふに外ならないのである、フランス革命はアメリカの獨立宣言から刺戟を受けたものたることと今更云ふ迄も無い、而してアメリカの獨立の思想は遠くメーフラワー號で英國から逃れて來た。ピユリタンの信仰に淵源するものたるや明である、メーフラワーの乘組員は米國に着く前既に

船中に於て莊嚴な規約をして神の名に於て不當な壓制に反對するものである事を宣言してゐる、歐米に於ける自由民權の主張は更に一段の高處に立てる神に對する人間の立場から來て居るものである、かくして始めて權利の主張は徹底的なるを得るのでありそしてかくの如き權利の主張は更に高い義務心を調和して巧に社會生活の平調が保たれるのである。

我國に於て保守的な人達が權利〳〵と權利義務づくめで社會を律しては社會生活は冷酷なものになつて了ふ、勞働問題に付ても法律を制定して權利義務で往くよりも在來の溫情で進む方が我國風に副ふといふのは其の趣旨は全然自分の贊助しえない所であるけれ共我國民の如く人と人との生活のみに沒頭して眼を高處に注ぐるを知らない所に於ては權利〳〵でやつて往くと權利の主張のみあつて義務責任が之に伴はないのであるから論者の說はある意味に於て尤な所もある、勞働問題の如きも勞働者の側から云へば自分の權利を主張すると共にその改善せられたる境遇を活用すべき最高の義務が伴はなければならないのである、更に進んで云へば抑勞働者の權利の主張は此の最高の義務から發せられたものでなければならないのである、そして資本家も亦他人の人格に對する尊敬の心を以て勞働者の生活を視るべきである之實に勞働問題の根本に横はる大問題である。

(六)

我國にもかなり澤山の社會改良の運動が行はれた、しかしながら日本人の生活には以上述ぶるが如き崇高な義務から湧き出た運動が尠い、之我國の社會運動の多くが不徹底に了つた所以ではあるまいか、勞働問題は丁度現代日本に於て最注意を引かるゝ社會運動である、唯怖る此の運動も決して高い深い要求から出た運動ではないのではあるまいか、憲法發布の當時既に此の根本問題に觸れないで簡單にやり過した日本人は再勞働問題で淺薄に皮相に之を片附けて了ふのではあるまいか、Knocks at the same door といふ言葉がある、幾度か一つ戶口へ戾つて來ていつも戶を開かずして歸つて了ふといふ意味である、日本人は深刻な多くの問題に觸れて來ながらいつも戶を開くことなくして戾つて了ひ再一つ戶口に歸つて來る。

自分は勞働問題の爲めに働かんとしてゐる青年である、自分は社會改良の敬虔な學徒の一人である、今日の勞働問題の盛況は決して自分の喜ばない所ではない、之もよし彼もよし、しかし更に大切な問題は實に荒野に叫ぶ豫言者が出でゝ日本人に人

生の根本義を說いて與れることである、然らずんば幾十の社會運動結局何の得る所なくして雲消霧散するに過ぎないのである。今の日本の求むるものは智者に非ず學者に非ず此の世の論者に非ずして實に信仰の人である福音の傳道者である。

（七）

ギビンスは其の著社會改良家列傳の序文に於て述べて曰はく「自分が此の一卷に於て述べんとする所のものは唯一つにすぎない、それは凡ての偉大なる社會の改革は先づ彼れ自身の內心の革命から起つたといふ事である」と。自分は實にギビンスの此の言に無條件に贊成である、社會の改革を爲すものは先づ彼の改革がなければならない、彼自身の內心の改宗なくして人を動かし世を動かさんとするも木に緣りて魚を求むるが如くである、自分の如きは尙自己の內心の改革さへも爲し終へずして彷徨する憐れなる靑年である、唯自分は確信ある信念の人が現はれて南は臺灣より北は樺太迄嵐の如くに神の福音を說かんことを祈り止まないのである、勞働問題の解決は之なくして永久に不可能であらう。

〇和田垣と寺內

近時の怪異は、上杉愼吉君の普通選擧論者となつたより、寺內正毅君が、普通選擧論者となつたことである。勿論時事の非なるに感じて、悟道徹底したのではあるまいが、これは上杉君の注入による、開發變節であるらしい。しかし、こんな、變節なら大歡迎すべきことである。

それから、日本の社會主義提唱の元祖は、幸德秋水、堺枯川、田島錦治の三氏に屈指さるゝが、その實は和田垣謙三君だそうだ。和田垣君が獨逸から歸朝して、アルクス論を朧げに傳へたのが、嚆矢となつて、二代目が、金井、桑田、田島、河上となつた。尤も福田德三君のは、純然たる別派を組織せるもので、帝大派とは、何等の交渉をも有せない。金井延博士の如きは、和田垣氏の社會主義の說教を聽いたとは、サテモ珍聞中の奇聞である。

巴里から歸朝した、長島隆二、黑岩周六、永井柳太郎、馬場愼吾、中野正剛、杉森南山等は、日本社會の改造を絶叫すべく、近時大團結を組織するそうだ、近衛文麿君あたりも、之に參加するそうだが、〇△生は、その健闘成功を衷心から祈つておく。（〇△生）

咬豆茶話

△文官總督說で、老山縣と寺内の間が疏隔したと云ふものがある。長谷川は寺内に傾き、平田、安廣、淸浦等は文官側だそうだ。今回の改革で文治派と武斷派の對抗となり山縣は文治派に降參した譯だが、田中義一の文治派であることは勿論だが、伊三郎、宇佐美の一派も同派だそうだ。

△そこで、現内閣では山縣に對して非常に好感を有し、山縣を德とするやうになつたが、米問題で、加藤あたりを唆かして内閣反對をやらせたので、原も流石に出縣は乃公よりは、一層ハラが黑いと思つておるかどうか。

△エライ權幕で、歸國した例の石井菊次郎は、米國にあるときの元氣は、はやどこへやら。近頃は石井を國際勞働會議に特派するといふ噂がある。マサカ、何程、日本が人物拂底と云つても、外交官を派遣するやうなこともあるまいが、總理が御都合主義の本尊だけに石井沈默も、怪しいものダデ。

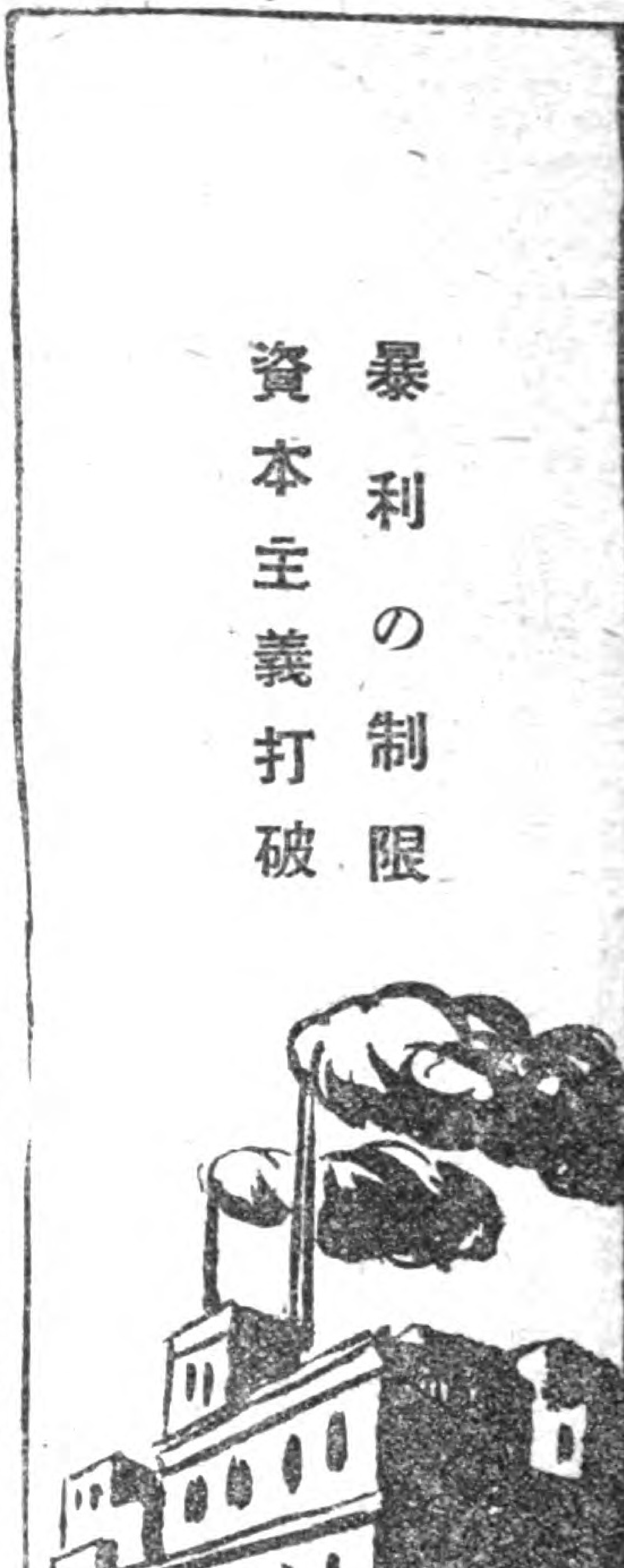
△死んだ潮恒太郎は、功名利達の觀念の薄い男だつた、勅任には夙くになれるものを、自ら好つて奏任三等で甘んずる程の、變りものだつたが、逝去する二三時間前、近親者を枕頭に招んで、僕も病が全癒したら、判事などは辭職して出獄人保護事業に從事すると、熱心に言つて居たそうだが、鳥の將に死せんとするや、その聲は哀しい、彼の一言は、鬼の眼に涙と云ふ所である。

△恒太郎君の逝去後、二旬にして、彼の父君も、愛子の跡を追つて沒くなつた。恒太郎君の弟は内務衛生局長の潮惠之輔君である、その悲嘆や想ふべきである。

△財政經濟調査委員の顏觸れといつたら、全く骨董的な、時代後の連中ばかりだ。アンナ役人の古手で何が出來るものか、廿五人の委員中、三人を除外すれば、頭腦の改造をしても、追付かぬ馬鹿どもだとは某法學博士の憤慨談だが、ハテその三人とは誰々の事かな。

△前田利爲夫人漾子は、非常のハイカラだそうだが、先年、英國へ行つて、皇后に謁見したところが、英語はテンデ話せぬので、何か外國語が出來ますかと、問はれて、佛蘭西語は出來ると答へた。皇后は直ぐ佛蘭西語で話しかけた處が、それも甚だ不出來であつたので、皇后はツト立つて仕舞はれた。傍にあつた日本人は爲めに、冷汗三斗であつたとのこと。

△本多熊太郎も巴里から歸朝したが、一向溜飲の下るやうな不平もサラケ出さず、平々凡々で還つておる。所が内田康哉は、内心彼に恐れを抱いて、容易に心中を吐露せず、内田がそう出たから、本多も氣まずく思つて不平は嵩じて來たが、さてどの邊まで行つたら、お開きと云ふことになりますかネ。



利潤の周圍をめぐる資本勞働の爭

山川均

一

新聞の傳ふるところに依れば、六月二十八日を以て發會式を行つた俸給生活者同盟（S・M・U）は、『營利事業より生ずる利益は、資本に對して銀行金利に該當する利子を附し、剩餘の利益は資本と勤勞との間に折半すべし』といふ決議をしたと云ふことである。

此要求に對して世間一般の輿論が如何なる批判を下して居るかは明らかでない。新聞の社説でも此問題を取上げたものは多く無かつた──或は全く無かつた──ように思ふ。けれども薄給者の生活難は何人も知悉するところであつて、一方には六割八割といふ法外の利益配當の行はれて居る眼前の事實と相對し

て、此利益を造り出だした勤勞者が、生活の威嚇を受けて居ることは、何人の目にも當然のことゝは映じない。そこで大體に於いて、輿論の同情は此要求の方にあるように思はれる。

單に其ればかりではない。俸給生活者同盟の決議は、丁度營利會社の決算期に臨んで、多くの人々をして、今更らに各會社の法外の利益配當の事實を振り返つて見させたものであつた。そして多數の勤勞者、若くは勞働者の生活の悲慘を餘所にして、斯くの如き利益の壟斷せられて居ることは正當であらうか、若し正當でないならば、此利益は如何に處分せらるべきであらうかといふ疑ひが、未だ曾て事物の現狀に對して、一點の疑ひをも挿さんだことのなかつた、人々の頭にすらも浮んで來た。利益分配の問題が、幾何の注意を惹ひたことだけでも、S・M・U・の決議は決して無益でなかつた、否な少くとも、此決議が世間の注意を喚起し得た限りに於いては、世間の同情は此要求の側に與みして居るものと見て大過はない。

吾々も亦た、此要求に對して同情を表する者である。然しながら、輿論が若し此要求を是認したとするならば、其是認の根據は何ずれにあるのであらうか。營利會社の債券を所有することゝ株券を所有することゝの間には、共事業の經營に直接關與すると云ふ上では實際上何等の相違もない。ところが單に株券を所有するといふことが、債券の所有より出ずる利益(金利)以上に尙ほ數倍又は十數倍の利益配當を齎らすとしたならば、實際其事業の經營の爲に働いて居る勤勞者が、此利益の配前に與づかることが出來ないで、生活の悲慘を嘗めて居ることは、寧ろ奇異なることであつて、利益の分配に與づかることは、自明の事のようであるけれどもモ一つ踏み込んで考へて見ると此問題は一見した程に、兎かく簡單な問題でないことが明らかになる。

物價騰貴の爲めに生活を威嚇せられて居るものは、俸給生活者のみではない。工場勞働者の生活は反つて中流階級の生活よりも安固であるかの如くに云ふ者があるが、僞りである。戰時中の好景氣の爲めに、格外の好賃銀を得て居たものは、特殊の技術を有する特殊の熟練工に限られたことであつて、多數の勞働者が現在の物價水準よりすれば、最低生活費以下の賃銀を受けて居ることは、物價指數と賃銀增加の割合とを比較して、何人と雖も爭ふことの出來ない事實である。そして此事實は勢ひ賃銀增額の要求や、同盟罷工となつて現はれる。今日工場勞働者の殆んど全ては、賃銀增額の必要と要求とを持つて居

ると云つて差支ない。

然しながら工場勞働者の、是等の賃銀增額の要求は、畢竟するに、自己の勞働に對して、其價値だけの支拂を要求して居るものである。工場勞働者は、自己の勞働が其價値以下に支拂はれて居ることを發見して、是れを價値通りに引上げることを要求して居るものである。工場勞働者は或は三割の增額を要求し、或は五割の增額を請求して居るが、而かも其要求の目的は、畢竟自己の勞働に對する、其價値通りの賃銀支拂の要求といふ範圍を出でないものである。然るに S・M・U・ の要求は、其勤勞が價値通りに支拂はれることを要求することを以て滿足しないで、更に進んで資本家の虎の子たる『利潤』に食ひ入らんとして居るものである。S・M・U・ の要求が、一見して當然自明の要求の如くであつて、而かも其根柢には、普通の賃銀增額の要求と異つた、重大な意義を持つて居る。所以はこゝにある。

此の意味に於いて、S・M・U・ の決議は、廣き意味に於ける日本の勞働界に於いて、利潤の周圍を廻つて行はれる資本勞働の爭いの、第一聲を揚げたものと謂はなければならぬ。

二

S・M・U・ の決議は多くの人々の心に、此の法外なる利益配當は、果して正當の事であるかと云ふ疑ひを、今更の如く起させた。銀行の利子が六分である時に、單に之を營利會社の金庫に預けて置き、單に銀行の通帳の代りに株券を持つて居た爲めに數倍若くは十數倍の利益配當を受けることは正當であらうか、不當であらうか。吾々は遺憾ながら此問に對しては。正當であると答へなければならぬ。然り、資本制度を是認し營利企業制度を是認する以上は、吾々は此問に對しては、正當であると云ふ答の外に、如何なる答へをも案出することは出來ない。之に反して、謂ゆる『法外の利益』を不當と見做す爲には、先づ資本制度そのものを、營利企業制度そのものを、根柢から不當と見做さなければならぬと云ふことを力言する者である。

資本家が七割八割の利益配當を受けることは、不當であると云ふ人がある。けれども七割八割の利益配當を不當としたならば、如何なる理由に依つて、一割二割の利益を正當とすることが出來るであらうか。若し一割二割の利益配當をも不當であるとして、資本家は單に資本に對する利子(金利)のみを受く可しとしたならば、企業に對する利潤は全く消滅しなければならぬ。營利企業は利潤の收得を目的とするものであるから、利潤の消

滅は企業の消滅である。然るに學者の說によれば、營利企業は『生產の根本動力』であり。其廢止は絕對に『不可能』である。吾々は『生產の根本動力』であり、其廢止の絕對に『不可能』である營利企業の神聖を證明する爲めに、資本制度の永久的存續を信じ、資本制度擁護の爲めに、素晴らしき黎明的活動をせられて居る資本主義のチャムピオンたる、福田德三博士の學說を引用することができる。

『今日の生活に於ては、企業を離れて生產を考へることは殆ど不可能であります……企業の生產に於ける意義は土地、資本勞働とは著しく違ひます。單に一の要素とか要件とか云ふ可きものではありません。抑も生產の起る根本の動力は企業にありまして、他の要素は企業あつて始めて意味を生ずるものであります。(國民經濟講話)

卽ち現在の資本制度に立脚する經濟學の上から見れば、生產の『資本の効力』は企業であつて、生活の必然ではない。吾々は活きるが爲めに生產するのではなくて、企業者が企業を行ふが爲めに、其偶然の出來事として吾々は活きて居るのである。企業は福田博士の學說の示すが如く、『營利を直接且つ最初の目的とするもの』である。吾々は他人の營利行爲の、偶然の結果として活きて居るものである。

『企業は人格の自由(例へば多數の勞働者を必要に應じて何時にても雇入れ、何時にても解雇することの出來る。勞働者の人格の自由)と私有財產制度とを前提とする今日の國民經濟あつて始めて成立し得るものであります……生產要具たる資本の廢止を主張する社會主義者は、又た企業全廢を唱へるのであります。資本主義の廢止と云ふのは卽ち企業廢止の事であるます……』(同上)

福田博士にすれば、吾々の經濟生活に於ける、此の最高の任務に對して支拂はれる報酬が卽ち『利潤』である。そして企業者の所得は、此の『利潤』の危險を冒すこと、卽ち福田博士の謂ゆる『利潤冒險』に對する果實である。

福田博士によれば、企業の廢止は不可能である。そして企業の廢止の不可能であることは、資本制度の廢止の不可能であることを意味して居る。然るに企業の性質は『利潤冒險』であるから、或時は七割八割の利益を收めることもあれば、又た或時は七割八割の利益の損失を招くこともある。七割八割の利益を法外であり不當であるとすれば、七割八割の損失も亦た法外であり、不當であると謂はなければならぬ。法外の利潤に對して

勞働者は配前要求の權利があるとしたならば、法外の損失に對しては、企業者は勞働者に對して、分擔要求の權利があると、謂はなければならぬ。そこで福田博士の學說の上に立つては、言葉を換へて云へば資本制度と營利企業制度との是認の上に立つては、或る程度以上の利潤收得を指して不當であると云ふが如きは、不當極まる暴言であつて、『生產の起る根本の動力』たる資本制度と營利企業制度との神聖を冒瀆するものと謂はなければならぬ。

三

經濟學者は資本家の利潤を是認するの理由として、或は冒險に對する報酬であると云ひ、或は地代に均しいものであると云ひ、或は又、產業管理の『賃銀』に外ならずといつて居る。けれども資本制度と營利企業制度との上から見て、利潤の收得の『正當』であることを、最も明白に說明したものは恐らくマルクスである。

マルクスによれば、交換を目的として出產せられた富、即ち商品の價値は、其うちに實體化せられた。勞働の分量によつて決定せられるものである。言葉を換へて云へば、之が生產に要する勞働の分量によつて決定せられるものである。甲の商品一個が、乙の商品二個と市場に於いて交換せられるとせば、其當時に於ける社會狀態の下に、其當時に於ける平均的の生產條件と生產技術とを應用し、其當時に於ける平均的の熟練と强度とを有する勞働を使用して、甲の商品一個を生產する爲には、乙の商品二個の生產に要するだけの勞働を必要とするからである。商品の價値とは、其商品のうちに實體化せられたる、社會的に必要なる生產的勞働の分量であつて、商品と商品との交換せられる割合は各自のうちに實體化せられて居る勞働量の割合に外ならぬものである。そして此割合を共通の價値尺度――貨幣――によつて現はしたものが即ち價格である。價格は即ち、商品の價値を、貨幣の對等量を以つて現はしたものである。

斯ように市場に於ける商品の交換は、價値の大小の割合によつて行はれて居るものである。言ひ換へて見れば、交換は原則として、同一分量の價値と價値との間に行はれて居るものである。市場の特殊な狀況――例へば需要と供給との不平均――は、或る種の商品を、或る時期の間、この實際の價値以上に賣らしめる――即ち交換せしめる――ことがあり、之と反對にまた、其實際の價値以下で賣らしめることがある。即ち此場合には不

平等の交換が行はれる——言ひ換へれば同一の分量でない價値の交換が行はれる。けれども之は寧ろ例外であつて、商品の交換は其價値通りに行はれるのが原則である。市價は市場の特殊な狀況によつて、或は價値以上に昇ぼり、或は價値以下に降ることがあるが、而かも不斷に其實際の價値に一致するの傾向を持つて居る。

そこで資本家制度の下にあつては、利潤は他人の商品を價値以下にて買ひ、若くば自己の商品を價値以上に賣るとによつて生ずるものではない。成る程或る特殊な場合には、不平等の交換によつて利益を收めて居ることがある。けれども不平等の交換は、一方の利益を意味すると同時に、他の一方の損失を意味して居る。斯ような交換による利益は、三四十年前に行はれて居た內地商人と北海道の土人との間の鮭の欺僞的取引や、野蠻人相手の白人の欺僞的貿易を說明するとは出來るが、資本制度の下に於ける特徵的の利潤を說明することは出來ない。不平等の交換は或る個人から個人への價値の移轉を說明することは出來るが、社會全體としての價値の蓄積、若しくは資本の蓄積せられてゆく事實を說明することができぬ。資本制度の下に於ける利潤の特徵は、生產せられた商品を各々其價値通りに交換——賣買——して、尙ほ剩餘の價値即ち利潤を生ずる所にある。

然らば人間の勤勞、若くは勞働の交換せられる割合——價値は如何にして決定せられるであらうか。マルクスは資本制度の下に於いて、人間の勞働が交換價値を有する限りは、他の商品と同じく一個の商品である。從つて他の商品と同一の原則によつて其價値交換の割合——が決定せられて居ると主張する。

四

巴里講和會議の國際勞働委員會は、勞働改善原則の劈頭第一ケ條に、『勞働は單に貨物又は商品と認めらるべきものに非ずとの基本原則』を宣明した。此の『基本原則』は恐らく今秋の國際勞働會議——一層適切に言へば、國際資本會議——に於いても重ねて聲明せられることゝ思ふが、現に市場に於いて賣買の目的物となつて居る人間の勞働の、商品たる性質が、國際資本家の一片の聲明によつて、其性質を一變するであらうか。人間の勞働——體的及び心的の——が明白に商品たる性質を帶びたことは、資本制度の顯著なる特徵の一つである。國際資本家は、人間の勞働が商品視せられて居る事實に對して、人類の恥辱を感じて居るようである。國際資本家は何故に此恥ずべき事實を

除からとはしないで、唯だ『勞働は商品に非ず』と云ふ、櫻紙よりも薄き裝ひを以て、醜惡と恥辱とを蔽はうとするのであらうか。更に國際資本家は、人間の勞働の商品化したことに恥辱を感じつゝ、人間の生存の一切の資料が――パンが肉が、織物が――悉く商品化したことに、何故に恥辱を感じないのであらうか。曾て是等のものは、人間の體力と心力とが商品でなかつた如く、また商品ではなかつた。是等の一切の生存資料が明白に商品の性質を帶びたことは、人間の勞働が明白に商品の性質を帶び來つたのと同じく、資本制度の顯著なる特徴の一つであつたことを忘れてはならぬ。

少くとも、國際資本會議の『勞働は商品に非ず』といふ基本原則』の宣明は、實際其勞働を商品と見做して居る勞働者自身の自覺を抹殺することは出來ない。先頃の大阪毎日新聞に次の如き記事がある。

『過日某紡績會社では職工の組頭級を集めて平素の勤勞を賞した。曰く本社の成績頗る良好にして且つ他社に見るが如き資本家對勞働者の軋轢もない、是れ全く諸君の勉勵と自制との結果である』と。之を聞いた一職工は、我等職工は機械同樣に働いたゞけのことである――併し我等は機械待遇は愚か機械の如く元價償却もして貰へぬ、變なものですなと一矢酬ひたので座が白らけたそうだ……』

勞働者は機械同樣に働いて、機械以下に支拂はれて居ることを知つて居る。此自覺は生産組織の現實が、彼等の腦裡に打ち込んだ自覺である。ゾルステーン・ヴェブレンは斯う云つて居る。

『……進化生活に於ける、機械が與へたる智力的精神的の訓練は其及ぶところ深遠である。其影響の及ばざる所は、僅かに社會の一小部分に過ぎない。機械の影響は全人を通じて到る所に分派し、全ての階級を、其日常生活の何等かの點で抑制して居るが、而かも此影響は最も直接な、最も密接な、少しも緩和せられざる衝擊を以つて熟練機械工の上に落ちて居る。何故ならば、彼等は働いて居る時にも休んで居る間にも、斷えず此影響の支配下を脫しないものである。』

近世勞働者の眼を開いて、自己の裸なることを知らしめた智惠の木の實は、社會主義の煽動ではなくて、資本制度の生産組織そのものである。國際資本主義がその『基本的原則』によつて實現の醜惡を理想しようとして居る時に、勞働者は現實を其有りのまゝに見て居る。國際資本會議が勞働は商品に非らずと宣言した時に、勞働者は、勞働が商品に非らずとは、商品以下

の何物なりやと反問し、せめては商品同等の待遇を要求して居るではないか。

五

勞働が商品であるとしたならば、勞働の價値を決定するものは何であらうか。マルリスは、勞働の價値を決定するものは、他の全ての商品と同じく之が生産に要する勞働の分量であると云ふ。

勞働者が勞働を續ける爲めには、そして其勞働が一定の社會狀態の下に一定の能率を保つ爲めには、一定額の生活資料を必要とする。また此勞働者を適當の時機に於いて新らしき勞働者によつて代表する爲めには、子孫を養育する一定の生活資料を必要とする。この勞働の不斷の再生産に要する、生活資料の總計のうちに含まれて居る過去の勞働の分量は、現在の勞働の價値を決定するものである。言葉を換へて云へば、一定の社會狀態の下に於ける、一定の能率を維持し、且つ一定の供給を持續するに足る生活資料の價値は、即ち其れによつて生じた勞働の價値である。勞働の價値は、社會的に必要なる生活資料の價値によつて決定せられるものである。

マルクスによれば、資本制度の下に於ける商品の流通界では、原則として同等の價値が交換せられて居るのである。即ち平等の交換が行はれて居るものである。同等なる價値の交換は、決して價値の容積を變化するものではない。即ち交換は價値を創造しないものであつて。偶々不平等の交換の行はれた場合には、當事者の一方に取つてこそ交換が價値の增加を來したか。他の一方に取つては交換は價値の減少を來して居るから、全體としては價値は增加せられたものではない。不平等の交換は價値の分配狀態を變化するが、價値の總額を變化するものではない。交換が價値を創造しないとすれば、利潤發生の泉源は通流界に求む可からざることは明らかである。

然らば利潤——價値の增加——は生産過程のうちから生ずるであらうか。假りに生産過程のうちに價値の增加が行はれるとしたならば、如何なる生産要素が生産過程のうちに價値を增加するであらうか。

マルクスに從へば、原料機械等の如き資本は不變資本であつて、生産過程中に於いて何等の價値を增減することなく、最初の大いさの價値のまゝにて生産物のうちに再現するものである。一圓の綿は、之から生産せられた糸のうちに、一圓の價値

となつて再現し、一圓分の機械その他の損減は、同じく糸のうちに一圓の價値を再現する。その價値は不變である。

然らば資本家の資本のうちで、生産の程過中に其價値を增加し、從つて利潤の泉源となるのは何れの部分であらうか。マルクスは之を賃銀資本、即ち勞働の代價として支拂はれる資本に發見した。

こゝ迄簡單の爲に、單に勞働と云つて來た。けれども精密に云へば勞働ではなくて、勞働する力、卽ち勞働力である。資本家は、勞働力を買入れる。そして勞働とは、此勞働力を生産の爲に消費——若くは應用——することによつて生じた效用である。

資本家は勞働力を其價値通り——例へば一日二圓——で買入れる。そして二圓は標準的勞働の二時間に相對すると假定する。資本家は此の勞働力を生産の爲に消費する。けれども其れは二時間の間消費するのではなくて、例へば一日に八時間——國際資本會議の功德により——だけ消費するものとする。此場合には、一日八時間の勞働のうちで、最初の二時間は消費せられた勞働力の價値を回收するものであつて、マルクスは之を必須勞働と云つて居る。そして終りの六時間は生産物のうちに餘分の價値——十二圓——となつて顯はれるものであつて、マルクスは之を剩餘勞働と云ひ此剩餘勞働によつて生産せられたものは剩餘生産若くは剩餘價値である。原料と機械とは之を消費すれば唯だ同一價値として生產物のうちに再現する。然るに勞働力は之を消費すれば、其價値を回收して尙ほ剩餘の價値を生產物のうちに體現する。卽ち勞働力は生産の過程中に其價値を增大するものであつて、從つて利潤の泉源となるものである。

前きの例によれば、勞働者の賃銀——二圓——は標準勞働の二時間に相當するものである。そして勞働者は二時間の勞働によつて賃銀を償却する。從つて殘りの六時間は剩餘の勞働であり、支拂ひを受けざる勞働である。そして企業の利潤は精密に此不拂勞働の分量を代表するものである。然らば利潤は不正であるか。マルクスの學說は否と答へる。資本制度と營利企業制度の原則の上からは、利潤は決して不正の方法によつて造られたものではない。

資本家は勞働者に二圓を支拂つて居る。賃銀は勞働の效用を代表するものでもなく、又た勞働の效用に對して支拂はれるものでもない。賃銀は勞働力の價値に對して支拂はれる等價物である。然るに一日の勞働力の生産に要する生活資料の價値が二圓であるとしたならば。資本家は勞働力に對して、正に其價値

だけを支拂つたものである。資本制度の下に於ける正當なる交換の原則は、同等なる價値の交換である。平等の交換である。そして資本家が勞働力に對して、十四圓を支拂はないで二圓を支拂つたのは、正に平等の交換てふ原則を實現したものである。斯ように企業の利潤は、詐欺と不正とによつて生ずるものではなくて、原料と機械とを其價値通りに買入れ、勞働力を其價値通りに買入れ、そして其出產物を其價値通りに賣つて――一言に盡せば、資本制度の下に於ける正當なる交換の原則によつて――收得することの出來る剩餘の價値である。

そこでマルクスの利潤說から見ても、資本制度の神聖を信じ、營利企業を以て『生產の根本効力』と信じ、その『廢止の不可能』を信ずる間は、企業者による利潤の收得は正當であると結論しなければならぬ。善行の大なるものは、大なる善である。一割の利潤を正當であるとすれば、八割の利潤は一層大なる正義である――然り資本主義的經濟學と資本主義的倫理の上から見た正義でなければならぬ。資本制度と營利企業制度とを是認しつゝ、法外の利潤を批難するが如きは、それこそ法外なる經濟學說であつて、吾々は其うちに、文部省と大向ふの喝采との間に板挾みとなつた苦悶の呻きを聞く。

六

然しながら、物價は常に商品の價値と一致するものではない。商品は屢々其價値以上に若しくは價値以下にて賣られて居る。そして此事實は、やがて企業が『利潤冒險』たることを示すものである。そして資本家が其商品を價値以下にて賣ることから生じた利潤の喪失を正當の事だとすれば、商品を其價値以上に賣ることによつて得た『法外』の利潤も亦た正當としなければならぬ。

この正當なる『法外』の利潤は二つの泉源から生じて居る。其一つは商品を其價値以上に賣ることであり、他の一つは、勞働力を其價値以下で買ふことである。戰爭による供給の不足が、多くの商品に價値以上の市價を有せしめたことは事實であつて、此事實は消費者側の、價値通りに買はんとする要求となつて現はれて居る。

然るに他方に於ては、一般物價水準の昂騰は生活費を增加し、從つて勞働力の生產費――即ち勞働力の價値を著るしく增加したにも拘らず、勞働力の市價、即ち賃銀は必ずしも之に比例するの增加をして居らぬ。勞働力の市價の騰貴が一般生活資料

の騰貴に及ばざる程度だけは、勞働力は其實際の價値以下にて買はれて居るものである。東京商業會議所の調査によると戰前の物價百に對して大正七年末の指數は食料品二〇七・三、被服二三三、家賃二四一であつて十割七分乃至十四割の騰貴を示して居るが、賃銀の增加は遙かに之に及ばない。そして此差額だけは勞働力が其實際の價値以下にて買はれて居るものであつて、此事實は勞働者の賃銀增額の要求となつて現はれて居る。本年上半期に於ける同盟罷工の數は、昨年一ケ年中のそれを超過して居ると云ふことであるが、是等の同盟罷工は要するに何れも勞働力に對して、其價値通りの支拂ひを受けんとするの要求に外ならぬ。

然らば勞働力に對して其價値通りの支拂ひ即ち賃銀を確保することは。勞働問題の企てゞあらうか。勞働運動の目的は、勞働力の價値に相當するの賃銀を要求することであるとしたならば、勞働問題の解決は案外容易であると謂はなければならぬ。戰前の物價水準に於て戰前の貨幣賃銀が、假りに當時に於ける勞働力の價値を代表して居つたとすれば、戰爭の結果物價は平均約十三割の騰貴をしたとすれば、勞働力の價値も亦た十三割の騰貴をしたものであるから、戰前の賃銀に十三割を增加すれば、新らしき物價水準に於ける勞働力の新價値に適附く譯である。今日は例外の場合を除くの外、何づれの事業と雖も勞働者の賃銀を戰前の十三割增加の額に達せしめることは決して難事とは云はれない。或る特殊の熟練勞働では、既に是れだけの賃銀增額をして居るものも無いではない。勞働問題の解決は意外に容易である。浪花節の天才を勞はす迄でもなく、勞働者を說せつける爲めには、賃銀を戰前の十三割增に達せしめればよいのである。

ところが實際の勞働問題の解決が爾かく容易でないのは、近世の勞働問題が、單に勞働力を其價値通りで賣らんとするの要求に止らないからである。然らば現今の勞働運動の目標は何者であらうか。日本の勞働者階級自らも半ば之を意識し、半ば之を意識して居らぬ如く、日本の資本家階級も亦た半ば之を意識し、半ば之を意識して居らぬ。彼等は之を明白には意識して居らぬ。然り明白に意識して居らぬから、唯だ何となく大なる恐怖の雲が彼等の眼前に擴がつて居る。最近に於ける勞働階級の覺醒に對する資本家階級の警鐘は、此の得體の知れぬ恐怖に對して亂打せられて居るものである。

然るに歐米の謂ゆる先進國に於ける勞働運動は、明らかに此

目標を認めて進んで居る。少くとも各國の勞働運動は此目標を一日一日と鮮明に認めかゝつて居る。各國の勞働運動の多くの精力が、勞働力を其價値通りに糴り上げようとするの努力と、勞働力を其價値以下に買ひ崩ぞうとする資本家側の運動に對する、防禦との爲めに費やされて居ることは事實である。けれども各國の勞働運動を以て、此の種の小ぜり合を以つて始終するものと考へるのは大なる誤である。否な最近に於ける各國の勞働問題は、勞働力に對する價値通りの支拂ひといふ要求のみを以ては到底理解し能はざるものである。各國に於ける勞働問題の中心は、必要勞働の界限を突破して、剩餘勞働の領域に移つて居る。勞働運動は一面に於ては剩餘勞働の短縮を計つて、利潤に喰ひ入つて居ると同時に、勞働者自らこの掌中に剩餘生產物を收得しようとして居るものである。そして其目標が利潤そのものゝ廢止にあることは一點の疑ひがない。斯くて現代の資本勞働の爭ひは、利潤の周圍に戰はれて居ると謂はなければならぬ。

現代勞働運動の斯ような特徴的精神は、漠然ながらも日本の勞働階級の要求と、日本の資本階級の恐怖とのうちに現はれて居る。そして此の漠然たる要求に最初の定形を賦與したものは、S・M・U・の決議である。S・M・U・の決議は此意味に於いて、日本の勞働運動の歷史に一新記錄を止どめたものと謂はなければならぬ。

七

マルクスは『資本論』の第一卷を結ぶクラシカルの一章のうちに、『一つの資本家は多くの資本家を殺す……そして此變遷の過程より生ずる利益を壟斷するところの大資家の數は斷えず減少する一方に、民衆の悲慘と壓迫と隸屬と墮落と搾取とは增大する……』と云つて居る。資本制度の發展と共に、勞働階級の生活が絕對的に低下するといふ意味に解したならば、マルクスの一節は疑點の餘地がある。少くとも其適用には注意を要すること無論である。ベルンシタインは正統マルクス說に對する改良主義の立場から、ヂ・ルチ・ソレルはマルクスから墮落したマルクス說——マルクス說から離れた獨逸の國民主義的社會主義に對する革命主義の立場から、共に此點を衝いて居る。

ベルンシタインの指摘して居る如く、各國勞働者の生活が、資本制度の發展と共に改善せられたことは事實である。ソレルによれば、マルクス說の豫想した如き階級の對立、その必然と

て生ずる最後の大破綻が、殆んど際限なく延期せられて行くのは、勞働階級の生活改善の結果、多數の中間階級を形成した爲である。

斯ように勞働階級の生活は益々低下し行く代りに、漸次に改善せられて居ることは事實である。けれども、此の絶對的の生活の改善は、社會全般の生產力と富との增加、社會一般の生活程度の向上の趨勢と相對的に考へて、果して進步であるか進步であつたかは別問題である。エール大學のアーヴィング・フィッシャー氏は、アメリカンレヴィユ・オブ・レヴィユ誌上に、『二十世紀の初年以來、利潤は增加し來つて居るが、貨幣で勘定しないで商品で勘定した賃銀（卽ち賃銀の購買力で計算すれば）は現に下がつて居る。一九一七年の賃銀の食物購買力は、十年前の賃銀に比して三分の二强に過ぎない』と云つて居る。此一事によつても、此問題に對して遽かに斷定の下し難いことが分かる。

然しながら絶對的には、勞働者の生活の改善せられ居ることは事實である。たゞ現在の經濟組織の下にあつて、勞働力は原則として其價値通りに支拂はれるものとすれば、此の改善の程度には固より限界がある。卽ち勞働力は其價値通りに支拂はれるものとすれば、賃銀の增加は勞働力の價値の增加に比例するものである。勞働力の價値の增加は、一般生活資料の物價水準の騰貴に比例するものである。言葉を換へて云へば、賃銀增加の割合は生活資料の物價騰貴の割合によつて制限せられて居るものである。

けれども實際に於いては、賃銀增加の割合は、物價水準の騰貴の割合以上に上ぼることが出來る。何故ならば社會全體の生活程度は絶えず向上するからである。そこで昨日までは勞働階級の生活必要品の項目に加はらなかつたものも、明日は勞働者の生活必要品となり、從つて其れだけ勞働力の價値を增加し、從つて賃銀を增加する。そして此の泉源から來る賃銀增加の割合が、社會一般の生活程度の向上と步調を均くして居る場合には、勞働者は依然として、其勞働力に對して價値通りの支拂を受けて居るものに過ぎない。そこで勞働者の生活程度の向上が、社會一般の富と生產力との增加、從つて社會一般の生活程度の向上よりも、著しく急速でない以上は、勞働者の生活は如何に改善せられようとも他の階級との相對的の地位は依然として同一である。勞働階級は依然として社會の最低位を脫することは出來ない。勞働階級は常に社會の最低位を離れることが出來ないと云ふ意味に解したなら、ラッサールの賃銀鐵則も必ずし

も誤謬でないと謂ふことができる。現在の經濟組織の下に於いて、勞働力は其價値通りに支拂はれるといふ交換の法則の支配下にあつては、勞働階級は永久に賃銀の鐵則によつて――ラッサールの謂ゆる飢餓點ではなくて――社會の最低位に結びつけられて居ると謂はなければならぬ。勞働運動の中心が賃銀――即ち必要勞働の領域――を去つて、剩餘勞動の領域に――即ち利潤の領域に移り、若くは移らんとして居るのは之れが爲めである。

八

然るに利潤を收得して居る階級の生活は、物價水準の昂騰に幾倍し、若くは幾十倍するの割合を以て進んで居る。先頃の新聞には、昨年來日本に輸入せられた寶石の價格は一千萬圓であつて、新橋の藝者には、四千五百圓の指環を片手に三本指して居るものがある。といふ記事があつた。そして是等の寶石の需要者は實業界と花柳界だと云ふことである。今日の社會に行はれて居る奢侈の資源が悉く利潤であるといふ事實は、此の單純なる一新聞記事によつても明瞭に證明せられて居る。斯ようにマルクスの所謂剩餘勞働によつて生産せられた剩餘生産――即ち利潤は、其收得者たる社會の一部階級の生活を法外に昂騰せしめ、從つて其生産者たる勞働階級の生活を相對的に著るしく下降せしめて居る。更に利潤階級の奢侈生活は、生活必要品の生産に向けらるべき社會の生産力を奢侈品の生産に奪ふことによつて、生活資料の價格を引上げて居る、間接の影響を看過することは出來ぬ。斯くて勞働者は、自ら生産した利潤の爲めに自己の生活を二重に壓迫して居るものである。勞働階級が、利潤收得の權利――資本制度と營利企業制度の下には當然至當の神聖なる權利――に對して、爭ひの目を瞠つて居るのは必ずしも怪むに足りないことである。

鐘ケ淵紡績が七割の配當を決定したことは、謂ゆる『法外なる利益』の一例として屢々言及せられて居る。けれども此の『法外』の實例は連日の新聞廣告に現はれる諸會社の決算廣告悉く然りであつて、寧ろ『法外』ではなくて尋常普通である。試みに今日の新聞を取つて見ると、東洋紡績は六割の配當をして居る。是等の決算報告に現はれて居る利益金なるものが、有らゆる隱匿の手段を盡した殘餘の額であり、終に隱匿し切れないだけの額であることは周知の事實である。而かも此數字が東洋紡績の場合には、半ケ年九百七十萬圓であつて、若し內三百五十萬圓の別途積立金を控除しないとすれば、實に九割の配當をすることができる。また富士製紙の半ケ年間の利益は四百二十萬圓であつて、其四分一即ち一百萬圓を資本の償却に充て、尙ほ三割五分の配當をして居る。若し資本の償却と積立金とを控除しなかつたなら、優に七割以上の配當をすることができる。

この『法外』の利潤を、更らに勞働者の賃銀との關係に置い

て見る時に、眞に其の法外の意義は明らかとなつて來る。

日本紡績聯合會の調査を見ると、綿糸一梱に要する生產費は―原料工費賃銀を合して――三百七十三圓五十五錢であつて、綿糸一梱の市價を五百七八十圓とすれば、一梱の利益は約二百圓であつて、資本に對する六割の利潤を收得して居ることゝなる。然らば勞働者は賃銀として、其生產物中の何れだけを得て居るかと云へば、綿糸一梱に要する勞働の賃銀は僅かに十二圓四十錢であつて、資本家の收得する利潤の百分の六・四にしか當らない。今假りに利潤を悉く勞働者が收得すると假定したならば、現在の賃銀の約十八倍となる。又た勞働者の賃銀を現在の五倍に增額するとしても、資本に對して尙ほ四割の利潤を殘すことができる。

して見れば勞働者の、二倍若しくは三倍ではなくて僅かに二割若しくば三割の賃銀を增額することは極めて容易なことと云はなければならぬ。然るに實際に於いては、貳割若くは三割の賃銀增額は、屢々同盟罷工や締出(ロックアウト)しの原因となつて居る。此一事は資本家階級が如何に其利潤に對して吝嗇であるかを語つて充分なものである。そして一面には勞働階級は、利潤に喰い込む以外には、社會の最低位にある現在の地位から脫すべき望みがないとしたならば、そして他面には、資本家階級は其生得的の貪慾を以つて、利潤の一厘一毫をも死守するものとしたならば、將來の資本勞働の爭ひが、利潤の周圍を繞ぐつて發展すべきことは一點の疑ひがない。

九

資本家による利潤の收得は正當であるか。吾々には固より正當であると答へなければならぬ。資本制度と營利企業制度の原則の上から見れば、利潤の收得は正當である。恐らく之れ程正當なものはない。資本制度と營利企業制度と名づける現在の經濟組織を基礎とする倫理觀念と道德律との上から見て、利潤の收得が一點の非難をも受く可きものでないとは云ふ迄でもない。

利潤の收得は正當である！ 然しながら、實際の社會生活の間には、必ずしも正當の事のみが行はれて居らぬことも記憶しなければならぬ。現に勞働階級は、勞働階級の立場より見ての幾多の不當を忍びつゝあることも事實である。

況んや勞働階級が利潤――剩餘生產――の回收を主張する場合には、彼等は恩惠として之を哀願して居るものではなくて、正當の權利として之を要求して居るものであることを記憶しなければならぬ。爭ふ可からざる利潤の神聖に對する驚くべき瀆冒！ 然しながら其れは事實である。そして此驚く可き事柄が事實であるとすれば吾々は現在の社會生活のうちには、旣に明白に全く異りたる一つの新らしき倫理觀念と道德律との形成され、若しくは形成せられつゝあることを認めなければならぬ。（七・一四）

配當に對する超過利得稅

法學博士　戶田海市

總ての事業に於て多くの利益を擧げんと欲せば非凡の努力を要するのが當然で有て、中には人類を裨益すべき特殊の發明改良等の行はるゝあり、斯くて儲ける事なら勿論如何なる程度の利得を擧げやうと決して差支へはないのであるが、今日、多數の會社が其の株式に空前の大配當をなしつゝあるは決して努力の結果ではなく偶然の利得で有つて、まるで賭博か富籤と相似たものである

此の偶然の利得に依つて富を作すは一面から云ふと、私有財産の權威を害するものである。凡そ私有財産は各自が努力の結果に依つて生ずべきもので有て相續並に偶然の利得に依るべきものでない。であるから私有財産の道德的價値を向上せしむる爲めにも偶然の利得の如きは是を公共的事業に用ふるが當然の事である。

先づ其の會社の利得が努力の結果であるか偶然の賜物であるかを區別する事が必要であるが其れは容易な事でない、であるから劃一主義を以て、或る歩合以上の利益は國家に取りあぐる、即ち國庫の收益にするか、又は或る一定の配當を制限するかと云ふのが問題であるが、予は其の何れも多くの弊害を伴ふものと思ふ。第一、利益を國庫の收入にする事になると事業家は自然に努力しなくなる、努力して利益を擧げても自分達の懷中に入らなければ馬鹿々々しいのである。第二に利益を隱匿する種々の手段を講ずるやうになる。而して第三に若し配當に制限を加へたなら過剩の利得は自然會社の積立金を增加せしめ株の値段が騰貴するので株主は是れが賣買に依つて矢張り偶然の利得を得る事になり決して目的が達せられぬものと思ふ。

次に考へなければならぬ問題は一會社が多くの利益を得た場合、政府が是を公共の爲めに沒收するか、或は其の事業に携はりたる勞働者に全部を配當するか、何れが正當なりやと云ふ事である。元來現在の社會組織に於ては勞働者は一定の職業を所有し、其の職業即ち事業の消長は直接勞働者自身に關係を及ぼ

す事となつて居るから損得共に事業と關係勞働者は其の運命を共にすべき筈である。然し乍ら或事業が經濟界の變調に依つて偶然の利得を得た場合、是れに關係ある一部分の勞働者が巨多の配當を得ると云ふ事は、是れ其の勞働者をして偶然の利得者たらしむる所以であつて政策宜しきを得たるものとは思へないが、又一方から云ふと前述の如き事情であるから、其の一部分の勞働者は、特に他の者よりも或程度までは特別の利益に浴するのが當然であると信ずる。

以上の總ての問題を解決する爲めに予は配當に對する超過利得税を賦課し、配當率の增加に從て累進的にパーセンテイヂを多くする。而して利益の大部分を國庫に差し出さしめて、政府は是れを以て一般勞働者の幸福の爲めに使用する事とする。然らば資本家にありても國庫に收むるよりは寧ろ自己の勞働者使用人を潤す方が決局自己の爲めだとなして、自然に使用勞働者にも配當する事となるであらふ。其の超過利得税の步合は、戰時利得税を標準にすれば大差はなからうと思ふ。

配當二割制限法の制定

早稻田大學教授 安部磯雄

慈善と廉賃

近者、各種會社に於て非常に多額の配當をなすことが世人の注意を喚起するやうになつた。例へば日本郵船が五六割の配當を爲し、鐘紡が七割の大配當を決定し、或は種々の砂糖會社が莫大の配當を爲しつゝあるのは其の一例であつて、之を怎うするかと言ふことは、社會問題や物價問題の勃興しつゝある今日に於ては、勢ひ社會の重大問題とならざるを得ないのである。

先づ之を經濟上より觀察すれば、此等の會社が此の如き利益を擧ぐと言ふことは、固より之を以て不當利益であるとは言へぬ。斷る迄もないこと乍ら、實業と慈善とを混同するやうなことは愚も亦極まれりと言ふべきであつて、會社が非常の好況に在

るからと言つて廉賣をやれなどと說くのは、慈善と實業とを混同せるものである。

然らば此等の會社は何うして五六割の配當をなし得る程の利益を擧げたのであるか。先づ砂糖會社に就て一瞥を拂ふことにする。臺灣の砂糖會社が非常の利益を占めたと言ふのは事實であつて、其の理由は砂糖の價額が暴騰をして、白砂糖一斤五十錢見當と言つたやうな素破らしい高値を呼んで來たからである。然らば此の暴騰は日本の砂糖會社が特に貪慾であつて不自然、人爲的なる價格の吊上げを行つたからであるかと言へば必ずしもさうだとは言はれない。砂糖の價格暴騰は砂糖の世界的市場の影響なのである。本年の世界に於ける砂糖の需要供給の關係は如何と見れば、大戰亂の影響等の關係から世界的に不足を告げてゐるのである。例へば獨逸の如き戰前に於ける其の砂糖產額は優に自國の需要を滿たし得たのであつたが、戰亂の結果として現下の砂糖產額は自らを支ふるに足らず外國より供給を仰がざるを得ざるの有樣である。佛蘭西も同樣に瓜哇糖の供給を受けねばならぬのであるが、今年の瓜哇糖の收獲は供給不足の有樣なのである。一方玖馬糖は如何と觀れば同島產の砂糖は全部米國の一手に抑へられてゐるやうな有樣であつて容易に他方面への供給迄も滿足させ得ないのである。

問題は其の利得の處分

此のやうな事情の爲めに、日本の砂糖も世界的品不足の煽りを受けて自然に騰貴したやうな有樣であれば、砂糖の高いと言ふ理由を以て、單に會社が不當に煽りを付けてゐるのだとは言はれないのである。

例を變へて日本人の常食となつてゐる米に就て觀察して見るに、同じ日本米としても東北と九州とではその生產に要する精力には大變な違ひがある。九州は溫度の關係等から東北地方に較ぶれば天惠を受くること非常に厚く、勞少くして功多しと言つたやうな結果を生ずる。併乍ら、此くして生產された米を愈々市場に出すことになれば勞の多かつた東北米が價格の標準となるのであつて、九州米は苦勞が少なかつたからと言つて、値段を遠慮する譯には行かぬ。從て日本の砂糖會社が割が良いからとて會社は不正を働いたとは言はれないのである。

船會社も同樣である。日本郵船、東洋汽船等大小船主は非常の利得を占めた。が、之も亦考へて見れば會社が不正を働いて金を儲けたとは言はれぬ。彼等は世界的需給關係の急變に幸いされて莫大の利益を擧げたのである。

さて、此等の諸會社は斯うして儲けた金を怎う使つてゐるかと見れば、其の利益の大部分は株主に配當し殘りは社員に賞與金或は手當金などの名義を以て分配してゐる。此等の諸會社が莫大の金を儲けたと言ふこと、彼等が成金となつたと言ふことは不正でないとしても、其の利得をかやうにして處分することは果して正しいのであらうか。問題は玆に在るのである。

戰時中の産物として各國共に戰時利得税なるものを設けた。戰時利得税をジヤスチフアイする處の理由は、此等の利得は會社自らの手腕に依るものではなく、戰爭の爲めに玆に至つたものであるからして當然會社のみに於て之を壟斷すべきでないと言ふ點に在つた。

二割以上は國家の所得とせよ

會社が儲けることは悪くはないが、或程度以上の利得は社會に提供させるやうにせねばならぬ。何等かの形を以て或程度以上の利得は國家に收めるやうにせねばならぬのである。その形式としては戰時利得税を應用するのも一個の方法ではあるが、予の意見としては之に對して特別なる一法律を設けることにしたい。そして二割を超ゆる配當をなす會社の利得は大部分を國家に收めるやうにせんければならぬ。

併乍ら玆に困難なる問題が湧いて來る。現在の如き有樣に於て斯る法律が成立するか怎うかと言ふことには非常の疑問がある衆議院は果して此の如き法案を提出し、之を通過せしむるであらうか。又た政府當局も此の如き法案を提出するの勇氣があらうか。甚だ心細い次第と言はねばならぬ。

なぜかと言ふに、現在の政府も議會も共に資本家の代表者であるからである。

資本家の自覺

平時に於ても猶ほ戰時利得税の如き利得の徴發を行ふとしたならば資本家の大反抗に會すべきことは必然の勢ひであらうが、衆議院や政府が之を斥けて其の所信を斷行し得るや、否や大なる疑問であると言はねばならぬ。

從てかやうの革新が行はるゝに就ては議會、政府の覺醒も必要であるが、一方資本家の自覺なるものも大に必要である。彼等は其の考へ方を變へて來ねばならぬ。

歐米の資本家は既に非常なる自覺を示し、公共心を發揮する場合が甚だ多いやうである。彼等の優れたる者は國家の大事に當りては多大の犧牲を拂ふことを辭せないのである。玆に面白き一例は英國今年度(今年四月一日乃至昨年三月末日)の豫算

案である。此の豫算案は既に議會を通過したのであるが、其の總額二百四十億圓と言ふ驚くべき巨額であつて、その尨大なることは殆ど戰時中と變らぬ。而して此の如き時局の必要に應ぜんが爲めに非常なる大增稅が斷行された。その第一は麥酒稅である。是は世界の禁酒的大勢に動かされたるものであつて、英國は米國の如く未だ禁酒國とはなつてゐないけれども、大勢に動かされて玆に出てたものと考へられる。次には遺產相續稅の大增徵である。卽ち遺產拾五萬圓以上は從來に比して非常に增率であるが、遺產總額一千萬圓に達すれば、實にその二割を租稅として徵收され、二千萬圓以上の時は其の四割を徵收される。此の如き大改革に對して英國の資本家が頗る自覺せる態度を以て臨んだことは。彼等の時代に對する覺醒の尋常ならざるを語るものである。

一方、米國に於ては所得稅が非常に引上げられた、卽ち一年百萬弗以上の收入ある者は各種の附加稅を加へて約七十五萬弗を租稅として徵收さるゝが故に、其の人の手には僅かに貳拾五萬弗が殘る許りである。之は個人の場合であるが、一方會社に對しては唯だ少しく其の率が減ぜらるゝ許りであつて猶ほ同樣に適用されるのである。此の如く歐米の資本家の自覺は寧ろ驚くべきものがある。之に反し日本の資本家が舊態依然として自ら醒めざるは嘆ずべきことゝ言はねばならぬ。

之を要するに日本の資本家も國家の要求に對しては眞に自覺ある態度を以て之を迎へ、貧富を論ぜず一致協力して國家の爲めに盡すことが非常の必要事であると考へられる。從て玆に予の主張せる如く或程度以上の利得を國家に提供すると言ふことは彼等自ら進んで實行すべきものであつて、此くする時は一方貧乏人の感情を緩和することゝなり、社會的協力を深くすると言ふ點から見ても非常に喜ぶべきことであると思ふ。

倫敦よりの情報に依ると獨逸藏相エルツベルゲルは今後の財政方針として大資產の一部を徵發し極度の相續稅を設定し不當利得に對して重稅を課するとにすると云ふとを宣言したと云ふ大資本家の過當利得に對して重稅を負擔せしめると云ふ世界の大勢は斯くして次第に各國の考慮する所となりつゝあるのである。（七月十五日）

どれだけ儲けると善いか

賀川豊彦

今日の道德ではわからぬ

『人は何程の土地を得べきか？』とトルストイは自問して、屍を埋め得るだけと答へて居るが、今日の道德で、人はどれだけ儲けると善いかと問ふてもその標準はつくまい。

今日の道德は、今日の產業組織前に出來た道德であるから、今日の樣な傾向が社會に現れるとは全く豫期だにもしなかつたものである。卽ち之をマルクスは唯物史觀と稱するもので解釋しやうとして居るが、私は經濟と云ふものは人間の心理生活を離れて有り得ないものだから、之を飽迄、經濟史觀で解決したいと思ふのである、

所が、產業革命前までは、經濟の力が政治や宗教より遙かに弱かつたもので有るが、產業革命以後、經濟が、凡ての文化運動より長足の進化を遂げた爲めに、宗教も政治も教育も美術も凡て心理的經濟力の前に降參せねばならぬこと丶なつた。所が、器械工場の上に立つ經濟組織は人間が嘗て見なかつた新しいものであるが、道德と宗教は人間が二千年も三千年も前から持つて來た古いものであるから、人間は今の處は、この新しい自己の作つた穽をどんなにして脫れやうかと藻掻いて居るのである。

卽ち今日我等の持つて居る道德は個人主義道德で有つて、工場と云ふ樣な有機的な新社會に對するものと全く違つだものである。

然し、道德的運動が進化しないものだから世界の人はまだ、その新社會を新しい形で略奪して居る資本主義文化に對しては全く無頓着であるのだ。それで今の處では、社會主義がこの罪を指摘してくれる外は、教會もお寺も國家も皆默つて安眠をして居る。

それから、この道德的進化が伴は無いことの外に、今日の人類社會に不幸なことは、人間の經濟組織が、金儲けと云ふ横道に這入つてしまつて居ることである。之は社會奉仕とか、人類全體の運命と云ふことの外に、自我をのみ中心とするのはまだ美いにしても、その自我をも分裂させて、崇物主義に流れ「お金、お金」と、貨幣中心の經濟組織を作り上げた爲めに、金儲けが、人間運動の手數と目的の二つを兼ねる樣になり、凡ての經濟運動は、金儲けと稱する、(fortune)僥倖心より多く支配する心理的衝動に生きることになつたのである。フオチユンと云ふ神は元來、紀元前二世紀、希臘のクラシツク道德殊に、プラトーなどの正系道德が破れた時に、偶然の讚美と廢頽的氣分を誇つた前期ノスチツクの思想に有つたもので、過渡期にはいつもこの形で人間の歸趨を繋いで行かうとするものである。

即ち、金儲け主義の道德と云ふものは一種の快樂主義の道德である。そして古い形の道德が頽れ、新しい形の社會道德がまだ起ら無いものだから今日の社會では金儲けと云ふ道德で、間に合せをやつて居るわけである。然し金儲けを中心とした道德生活が全く腐敗してしまつて居るから、その經濟組織の上に立つ今日の社會に於て、たゞ一個二個の工場金儲けが多いからと云ふて、責めるのも頗る矛盾したことである。訂正するならば根本的に訂正せねばならぬのである。

配當と賃銀の比較

今日の工場經營で、我等の眼につくのは、株主に對する配當金であるけれども、實際の問題になるのは、隱れたる積立金と稱するものである。米國で有名な賃銀制度の研究家であるスコツト・ニアリング氏の如きも、この積立金を注意せよと注告して居る。ユーナイテツド、鋼鐵株式會社の如きは、配當金も相當にあるが、積立金の如きは全く驚く可きものである。之は川崎造船所の樣な所でも同樣で有つて、今日の勞働者がたゞ配當金だけでその會社を批判するのは眞違つて居る。そして積立金が多くなつて、會社は增資すると稱して積立金をそのまゝ資本金に組み入れて、勞働者を欺いて居るものはその幾百であるか知れ無い。然し今日の勞働者にはその經營に就ては何等云ふ權利を持つて居ら無いので、會社がそんなに誤魔化しても何とも云ふことは出來ないのである。

積立金は職工が儲けたものでる。それで、職工の力で、會社が五倍も十倍も大きくなれば職工の收入も五倍十倍にならねば

ならぬ筈だが、そうは行かぬ、利益は全部株主が橫領してしもう。國家の組織と會社の組織とは全く違ふ。國家として五倍十倍大きくなれば人民は皆悅ぶが、今日の會社ではそうは行かぬ。悅ぶのは株主と取締役だけである。

つまり今日の會社は、利益の三重取をして居るわけである、第一は利子として取り、第二は配當金として取り、第三では積立金として取るのである。然し勞働者は食ふや食はずの生活賃銀さへ辛じて與へられるのである。で、もし勞働者の生命と勞力を資本と見積つてくれるならば、その一年分の勞力に對して、利子と、配當金と、積立金に對する權利とを保證する筈である。然し金は尊ばれても、勞力と人格は尊く無い今日だから、何と云ふても仕方が無い、勞働者は儲ける工夫は今日は持つて居ら無いのである。

之を阪神間に於ける大會社の所得に就て見るも、私の云ふ所は全く當つて居るので有る。大正三年度大阪稅務管督局の管內(近畿及北陸の一部二府七縣)で一年五十萬圓以上の純所得を持つて居たものが僅かに、十五で有つたものが、大正六年度には大阪府と兵庫縣だけで四十九となり、四年前には總額僅かに千七百五十七萬圓で有つたものが、四年後には一躍二億三千一萬圓の巨額に達する樣になつた。大阪商船會社だけでも、二百萬圓臺から、四千二百萬圓に達し、久原の如きすら、一百萬圓から二千七百萬圓の多きに上つて居るのは特に注意を要する。然らばこの大會社の儲けは、市民に平均に行渡つたかと云ふに決してそうでは無い。四十九の會社が二億三千萬圓儲けても、大阪市と神戶市では、所得稅を納附する人間は大正六年度には僅かに九千增加した計りで、大阪府の二十六萬の職工と、兵庫縣の十八萬の職工は矢張り相も變らず物價騰貴と貧乏で泣いて居るのである。

卽ちこゝで私は阪神の職工の賃銀調べをする必要があるのである。

大阪府が大正七年末に取調べた統計によると。大阪府二十三萬五千人の職工の中一圓以下五十錢以上の勞働者と云ふのは實に、その六割を占めて居るので有つて、之を配列して見ると次の通りである。

日收	五十錢以下	四一、四六三
同	七十錢以下	六八、一七九
同	一圓以下	六二、八一一
同	一圓五十錢以下	四〇、一〇六

同	二圓以下	一五、一五五
同	三圓以下	六、九一一

兵庫縣に於て調査した二萬七百四十人の職工の賃銀分布統計も比例に於ては殆ど同様である。

日收	五十錢以下	五、七七二
同	一圓以下	一〇、八〇九
同	一圓五十錢	三、一二一
同	二圓以下	六六四
同	二圓五十錢以下	三二四
同	二圓五十錢以上	五〇

即ちこの標準で行けば、大阪府と兵庫縣の工場勞働者の四十四萬人の一日の收入は平均一圓として、一年間三百日勞働するとして、(三百日勞働は米國の勞働者の標準『勞働年』となつて居る)その儲け高僅かに一億二千二百萬圓である。僅か四十九軒の會社が、帳面ずらだけでさへ、純益二億三千萬圓儲け得るに、その地方の四十四萬人が一年勞働して、僅かに一億二千萬圓即約その半分とは情け無い話で無いか？

之は北九州の炭鑛に於ても見られることで有つて、五十餘人の資本家は百六十有餘の炭鑛から一年一億五十萬圓を儲けて居るにもかゝわらず北九州の約十八萬の炭坑夫は一年僅かに七千五百萬圓しか儲けて居ら無い。

で、今日の景氣が善いと云ふのは全く成金のことを云ふのであつて、勞働者全體に向つては漸く生活賃銀を受取り得る時代になつたと云ふことの外何にも意味の無いことである。その證據は先にもあげた、所得税の納附者が阪神で僅かに九千人しか増加して居らぬことを見てもわかる。富は日本ではこんなにして集中しつゝある。そうして勞働者はいつになつたら眉を開くのであらうか？

どれだけの配當をすればよいか

では、それだけの配當をすれば善いかと人は尋ねるであらう。私は、今日の資本主義の時代に於ては銀行の利子だけ配當すれば善いと思ふ。利子の發生の起原に就て色々の議論もあるであらう。然し、銀行へ金を預けておけば全く遊んで居ても利子をつけてくれると云ふのは、勞働者のお蔭であることは、だれが何と云つても動かぬことであるから、銀行の利子が戴けることとすら既にお慈悲であるのだから、百圓に對して一年に四圓でも五圓でも儲けさせて貰へば悦んでお禮を申さねばならぬ

のである。それにもかゝわらず株主が、百圓に就て八十圓も九十圓も、時によると或種の戰時成金の様に、元金の四倍も五倍も貪ると云ふことは全く賭博根性から出た墮落した人間等の行業である。

勿論、會社には無配當のものも澤山ある。又潰れるものもある。一九一二年米國の鐵道株の六四・七三%のみが配當金を出して居る。そして破産率も年によつて違ふが少ないものでは無い。之が資本家のつけ込み所であるが、この破産に關する責任に就ては現在の制度ではどうも致方が無いが、銀行が利子を約束する以上、或種の企業は銀行利だけは儲かるものであると保證するのと同じであるから、今日の社會組織に於て、銀行利だけやう儲け無いのは餘程低能で無ければ、投機的なものであるのだ。それで、今日の成金會社が、其の無配當の時代のことを口實にして、巨額の配當をして居ることは實際どうかして居るのである。

私は鐘紡の專務武藤山治氏に會つて、鐘紡は儲け過ぎて居りはしないかと尋ねた。すると、『創立當時は無配當で有つたから、初めから平均すると約二割位にしかついて居るまい。二割はそう他の會社に比例して多くの儲けでは無い。世上所謂紡績界のカーテルと云ふことを云はれるが、之は多く防衛的のもので有つて、外國にある様な積極的のカーテルではない』と答へられた。

初めから平均すると年二割位が鐘紡の配當であるとすれば、戰時成金に比して決して大いものではない。然し、世界の大會社に比例を取れば最も多く配當金を出して居る部類に屬して居る。米國の一千三百十三の銀行の配當金は次の通りである。（スコット、ニアリング著『收入（インカム）』參照）

配當率	會社數
五%以下	五六
五―九%	六二五
一〇―一四%	四二五
一五―一九%	九五
二〇%以上	一一四

即ち、最も確な銀行業では二割以上配當するものは僅か全米國に於て一割にも足らぬものであるのだ。殊に之が、實業的のものになるとその配當金は決して多くは無い。或種の鋼鐵業の外は全部一割以下である。

然し日本では女工と職工が無智である爲に、會社が八割の配

當をして、自分等は會社のお慈悲で廐賓に預ら無くてはならない樣になつて居る、いつもそれで默つて居るのである。然し實際會社としては實に不德な話で、幾十萬の勞働者は生活難で困つて居るにかゝわらず、職工に金を渡すことは能率が下るからとか、浪費するからとか云ふて、資本家卽株主に多く配當してしもうのである。そこで私は云ふのである。武藤山治氏の樣な日本の理想的實業家にしてまだわからぬのだから、今日の道德では、日本の實業家に、銀行利だけで滿足せよと云ふことを敎へることは、誠に困難であると。

資本の社會化

銀行利が滿足するのなら、會社などを起すより商買したが美いと工場經營者はすぐ云ふ。それは社會奉仕の精神が無いから、そんなことを云ふので、日本の民衆が向上する爲めに、徵兵にさへ出るものさへあり、工業動員法さへ出て居る今日、政府からの命令で無ければ聞かぬと云ふのは余程ボンヤリものと云ふべきもので有つて、眞に今日の日本の資本家が國を思ふならば自ら進んで、社會奉仕の爲めに又下層勞働者の爲めに、工場を經營させて貰ふことを社會より與へられたる一大使命として感謝すべきである。利己的で無ければ奉仕せぬと云ふその資本主義の思想と忠君愛國と恩情主義とを調和させうと云ふ社會政策的苦心には大分矛盾があるでは無からうか？

商人がどれだけ儲けると善いかと云ふことに就ては私は答へ無い。商人も銀行の利子だけで滿足すべきである。それより以上を儲けるのは掠奪である。

利益配分制度より資本公有へ

然し銀行の利子と云ふことを私がここで金儲けの標準にしたのは、決して絕對的のものでは無くて、たゞ現在行はれて居る資本主義の文化を基礎として云ふただけで有つて、之は銀行を國家が所有した場合でも、利子―卽ち資本使用料を支配ふとして考へたもので有つて、私としては、今日の資本家に利子を儲けさすのは本意では無く、社會それ自身が利子を受取る可きものであるとは考へて居るから、無利子の時代が來ればそれに越したことは無いが、資本は社會勢力の或表象で、それには一定の限界があるから、その限界性に向つて、自然使用料が要求せられることゝなり、無利子の時代を考へることが出來ないから、矢張り金儲けの標準を銀行利子に置きたいのである。

で、たとへば、政府管理の鐵道や鑛山にしても、儲けは全部國家のものになることは明瞭であるにしても、その儲けを生產した勞働者を全く最低生活に閉ぢ込むる權利が無いと同樣に、私立會社に於ては一層勞働者の權利を無視して配當金を貪る權利は無いのである。

即ち政府が、政府直營の工場及鑛山から大に儲けたとする。そしてその金を無益な事に使つて、勞働者の爲めの學校と、救濟に使用しないとすれば、その政府は勞働者を無視して居るものであると云へやう。その方法では勞働者階級は決してよくならぬ。國がよくなるのは、個人がよくなるのを基礎にせねばならぬから、政府の工場と云へども、矢張り銀行利子以上多く儲ける必要は無いと私は思ふ。勿論そうすると、小會社と大會社の職工の收入に差異が生じるが、何にしても、勞働者が、生活賃銀だけで滿足しなくてはならぬといふ理屈は政府直營の工場だからとて無いのである。

つまり私の考では、資本と云ふものは、結局は社會と勞働者が生產したもので、社會そのものが管理して居るものであるから、今日私有になつて居るのは眞違つて私有になつて居るのである。或特殊な人々が是れより生ずる利益を獨占することは凡ての場合不可であると云ふのである。

歐米に於て利益配分制度が多く行はれて居る。レクルール Edme Jean Leclaire から始つて、今日英國には約百三十三の利益配分工場(一九一一年)が有つて、資本家は、その利益を自ら制限し、勞働者には利益を多く與へ、また支配人もその經營力を一種の投資と見なして、一定の利益分配を受けて居るが、之を社會政策の根本基礎から批判するならば、實に矛盾の多いもので有つて、要するに、資本主義の文化を永遠性のものと見る所にこの制度の失敗が有るのであるけれども、之がもし更に進んで、工場自治即ち、勞働者が自ら工場の主人公となり、今日の企業家が大統領となり、資本は公有となつて、その工場の組合が借用して居るものであるとなる時代への豫習だとすれば全く捨てたものでは無い。今日の勞働組合はこの方向を全く排斥して、工場自治を拔いて、資本國有をすぐに主張して居るのは餘りに急ぎ過ぎた考へであらうと思ふのである。

つまり、利益配分の工場經營では今迄餘りに勞働者が欺かれて來たから、勞働者は資本家の惡戲を信じ無いのであるが、資本家が、自己の金儲けの爲めに利益配分法を實施する樣なことをし無ければ、之は工場民主への一歩として大に歡迎すべきで

ある。然し三益主義など云ふ非哲學的のものでは無くて、資本家は最大限度に於て銀行利子以下を定め、更に準備が整へば、資本國家返上までに漕ぎつける覺悟で居らねばならぬ。

資本勞働適宜の分配は企業利益を增進す

法學博士　渡邊鐵藏

一

今度の戰爭中世界中の工業界商業界海運界等は非常なる大變動を蒙つて或ものは一時悲境に沈んだものもあるが、交戰國の一部並に中立國に於ける此等の企業界には多大の利益が落ちて中には頗る高率の配當を續けて居るものもある。然し日本以外の各交戰國は勿論中立國の内でも多くの國は此等戰時經濟狀態の變化に依つて企業界の受くる利益が頗る大なるに反して勞働者の收入の增加は其割合に少く其他一般國民殊に俸給生活者等は別段收入の增加する譯でもないから企業界に比較して大に慘めな狀態にあるので此等に對して種々の方策を講じて居る、殊に企業界の活躍及び運賃の騰貴、或種の生産減少、需要の增加、通貨の膨張等は一般的に各國の物價を騰貴せしめた、故に一般消費者階級は少からぬ苦痛を感ずるに至つたのである。そこで一方には巨額の利益を得るものが生じ一方には物價騰貴に苦しむものが生ずるといふ有樣であるので之が調和策を講ぜねばならぬといふことは各國の一樣に認めて居る處であつて各々其方法を取つて居る、假令ば最高價格を定むるとか、輸出を禁止するとか、輸入税の減免をするとか、運賃率、傭船料の制限をするといふやうな方法に依つて成る可く國内物價の騰貴を防止すると同時に一方租税制度の改正並に戰時利得税等の設定に依つて餘り巨額の利益を得たものは其大部分を國家に徵收するの方法を取つたのである、此等の方法に依つて一方企業者の利益を現實に制限する結果を生ぜしめ消費者の慘害を防止すると同時に他面に於て資本家及企業家階級に對する勞働者並に一般

消費者の階級の反感を緩和する結果を生ぜしめて居るのである。各國政府は斯の如き方法を取つたのみならず多くの交戰國並に中立國に於ては資本家自身並に一般の社會が自己の利益の犧牲、奢侈の廢止等を勵行して自ら制限し他人の利益を侵害せず又他人をして反感を生ぜしめず、誠心から融和に努力したのである、有ゆる方面に於て斯樣の努力があつたに拘らず尙勞働者階級其他の方面に於ては不平の聲を絕たなかつたのである、けれども今回の如き大變局に際して各國共非常の苦痛忍耐を忍ばねばならなかつたに拘らず國內の秩序が保て一致して外部に當ることの出來たのは偏に政府の努力と國民の覺悟並に犧牲的精神の發露とに因るのである、我國に於ても部分的には斯樣な方法も講ぜられたこともあるが交戰國の一員として然かも最も密接に戰時經濟の善惡兩方面の影響を受けて居る國としては政府の施設の餘りに物足らなかつたとは勿論國民就中資本家企業家階級の多くのものの內には自省心に乏しく他の階級の損害、不平、反感等を顧ずして餘りに擅なことをして居つたやうな感がある、我國の政府は戰時中に於て一般的に物價の調節に就ては殆んど何事をも爲して居らぬ、殊に生活の必要品の價額騰貴を防止するの手段を殆んど講ぜなかつたと言つてもよい位である、只輿論の壓迫に依つて漸々乍ら二三の食料品其他の必要品に就き輸出禁止又は關稅の遞減を行つた位に過ぎない、獨逸、英吉利、亞米利加等の諸國に於て行つた所と比較すると雲泥の差がある、戰時利得稅の徵收等に就ても漸々輿論の壓迫に依つて低率を課稅したのに過ぎない、其他總ての應急施設が他の諸國と比較すれは五年乃至三年も後れてから手を附けて居るので餘り呑氣過ぎて居ると考へる、如斯政府の多くの怠慢は寧ろ故意に基いてゐる。此政府の大なる怠慢と一部資本家階級の放漫なる行爲とは國民の痛苦と不平を生ぜしめ多數國民の生活は物質上に於て窮迫に陷つたのみならず精神上に於ても種々の壓迫不安を感じて政府に對する不信と一部資本家に對する反感とは益々昂進する狀態である。戰後物價騰貴の趨勢は生活必需品の方面に於ては低落しないのみならず寧ろ益々騰貴する傾向にある、そして私は一般物價殊に生活必需品の價格は今後益々騰貴するものと考へてゐるから之れに對して政府は何等かの手段を講ぜなければならぬことは當然である、勿論價格騰貴の自然の傾向に反對して之れを抑壓することは不可能のことであつて、あらゆるものに此平時の際に當つて最高價格を定むるといふことも勿論行ふべきことではないのであるが數箇の生活の必需品

に就ては其生產と商業に破壞的の影響を與へない程度に於て適當なる時期に一定期間適當の最高價格を定むるといふ必要があると考へて居る。

二

目下最も問題となつてゐる米に就ては私は今年はまだ〱騰貴するものと考へてゐるが其價格を永久的に一般的に低落せしむるは勿論不可能であり、且農業者の適當なる利益も考へねばならぬから勿論なすべきことでないと思ふが端境期に當つて急激に騰貴する事を防ぐだけの方法を是非共講ぜねばならぬ、縱へば新穀の出廻るやうになつて價格の安い時分に政府に於て諸所に買集めて置いて七月初め頃から之を賣出すといふ方法を採るとか其他適當なる方法を採れば價格の變動は防げると考へてゐる。

此のやうに米價に就ては私は其價格の激變を防ぐ事は必要であると思ふが一般に戰前の價格に戾そうといふ事は勿論不可能であり不合理の事であると考へる。但し投機業者若しくは大地主等が買占め貯藏等に依つて不當に價格の騰貴を圖り或は營業者に一つの團體が出來て米の價格を引上げて以て自己の利益を不當に增大せしむる樣な組織が成立して居るといふ事であればそれは勿論別問題として考へねばならぬ、生活必需品の價格が投機に依つて騰貴し又資本家の資本力に依つて左右さるゝといふことは最も悲慘な事であり最も不合理の事であるから之れは極力防壓しなければならぬ。獨逸其他の國に於ても食料品を投機の目的物とすることそれに依つて差額利益を得るといふ事は最も忌むべき不道德の事として居つて小麥其他の物につき定期取引を禁止してゐるものもある。如斯投機利益、私人の專賣利益といふ事を排斥する事は勿論政府の爲すべき事であると思ふが自然の各種の事情に依つて騰貴して行く價格を單に機械的に最高價格を定めて低落せしめやうといふ事は特に其產業を壓迫するといふ事になつて其產業の衰微を來さしむるものであるから、我々は常に消費者の利益を考へると同時に又生產者の立場からも勿論考へねばならぬのであるから必要なる時期に於てのみ適當なる考慮を以つてなすべきである。現實の日本の米の問題に就て考へて見ると米價暴騰に就ては相當の理由があるから之を舊の米の價格若くは今より石十圓も低廉な價格に戾そうといふ事は之は勿論不可能の事であるしなすべき事でもないと考へてゐる、然しながら如何に主として當然の經濟上の原因から起

つても端境期に於る米價の激騰といふ事は國民生活の不安定を感ぜしむるものであるから此急激の變動は是非共防止する方法を早く講ぜなければならぬ、之に伴つて投機利益並に農家の貯藏資本家の買占め等資本力による賣買技術的利益の如きものを充分に取締るべき要がある。是等の事をするには先第一に米の實際額を精密に調査するといふ事が必要である物の實體を見ずして政策を講じやうとする事は抑もの誤りであるから貯藏額調査といふ事は必要の時機に何時でもやれる方法を講じて置かねばならぬ、獨逸の如き戰時中幾回となく繰返して穀物其他必需品在高調査を行つてゐる一回や二回の調査では調査方法も不完全であるし又深く研究も出來ない事であるから正確なる判斷を下し得べき結果を得るとは困難である從つて尠くも三回位の調査は必要である。元より現在の日本は戰時狀態でもないのであるから種々の必要品について一般的に斯様な有高調査を行ふといふ事は不必要でもあり亦不可能の事でもあるが米に就ては現在當に戰時狀態のやうな危急の狀態を呈してゐるのであるから其實情を確むる位の事は現在に於ても早くやつて置かねばならぬ、米穀管理とか專賣とかいふ事は勿論後に徐々研究すべき問題であるとしても現在に於て最高價格を定むるとか、徵發するとか外米の管理をするとかいふには先づ內國の米並に密接なる代用品の貯藏額を知らずして種々の政策を採らうとする事は種々の誤つた結果に導くものである。從つて將來の政策の參考資料として國勢調査のやうな充分なる準備と決心とを以て適當なる時期に二三回在米調査をやつて見る事は必要であると考へる。一度精密なる調査が出來れば、勿論之れを每年やる必要はないのであるけれども將來何かの施設をする必要があつた時に何時でも基礎材料として參考になり又將來の調査を容易且つ有效ならしむることゝ考へる。之れをやつて見れば現在昨年の在額は一昨年より少なかつた或は外米輸入額は少なかつたといつてゐるけれ共、現在の農家に於ては資本力は强いのであるから或ひは思ひがけぬ所に意外の貯藏米があるといふ事もないとも限らぬ、如斯買占的の利益を農家が貪らんとする狀態が若し見えるなら其時こそ最高價格を定むるとか或は進んで徵發するとか適當なる手段も採れると考へる、要するに米の問題に就き正當なる誤らざる手段を採らんとする爲めには政府は充分に事實を知つて居つてそして農民を苦しめず又農民並に商人をして不當の利益を得せしめず適當に消費者の利益を保護する方法を考へる必要があると思ふ、米價の不當なる騰貴が防げれば之れで

一つ現在國民生活の苦痛民心の不安を安定ならしむる事が出來ると思ふ。しかしながら綿糸生糸等價格の暴騰して居る物があるが是等については政府が米に對すると同じ樣な政策を採ることも出來ないし殊に生糸の如きはそんな必要もないと思ふ然し兎に角一般の物價騰貴して國民の生活就中一定の收入ある者を苦しめる事は甚だしいことであつて殊に其生活費が收入の全部を占め或は其一大部分を占めるやうな階級の人にとつては其苦痛は非常に大きいのであるこれに對して適當なる手段を講ぜねばならぬことは何人の説明をも要しない。政府が輿論の聲が充分に起つた後に之に從つて政策を行ふのであるといへばよく聞へるが、荏苒なすなく形勢を急迫に陷らしめ、國民の不平の將に爆發せんとするに恐れて急に僅かばかりの緩和策を講じようとするのでは頗る心もとない。何時も〳〵も政府が國内の狀態に國民の要求とを見るの明を有せずして後れ〳〵して居つたなら政府に對する國民の信賴の地に墜つるに止まらず國内を不安にする虞がある。

一般俸給者の增俸は今春以來諸所に起りかゝつてゐるやうであるが之れも當に國民の爆發せんとするやうな強い聲に脅かされて政府は漸々行ふといふ有樣である。眞面目に經濟狀態の變化の國民生活に與ふる影響を調査し觀察し政府自ら進んで施設するといふ方針でなくして何時も手遲れになつてゐるのは喜ぶべき現象でない。目下の如く國内各方面に於ける不平の聲を生ぜしむるに至つた罪は矢張り政府にあるのである。現在の我國に於ける社會不安は國民思想の變化に由るのではなくして其根元は國民生活狀態の變化に由るのであることを知らずして政府は本末を顚倒して從來いらざる方面に意を用ひ却つて肝心なる採るべき方針を閑却して居つたといふ事は吾々から見ると大いなる誤であると考へるのである。此點に就ては政府は少くとも三年間居睡つてゐた事と考へる此三年間の政府の怠慢は斯樣な階級の人をして其間不當の苦痛を感ぜしめたのであつて此居睡り期間があまりに長きに過ぎたがためにそれ等の階級の人が單に物質的に苦しんだといふに止らず世界に於ける政治上、思想上の變動の影響を受け精神的にも一般に動搖するやうになつたのである。我國に於ける國民思想の動搖は多少外國の影響を受けた點もあるが私は最大原因は政府政策の緩慢と一部資本家の橫恣とにあると考へる。政府の步き方があまりに遲いと遂には國民に見捨てられる事がありはしないかと考へる。國民を敎へる必要はない政府自ら顧れればよいのである。

三

却說物價調節殊に米價激變の調節が出來且つ一定收入者の收入增加が出來れば一先づ國民經濟生活の重要問題が解決されたやうであるが其他に幾多考ふべきことがある、其一つは前にも言つたやうに企業家の過大なる利益に對する他の階級の反感を緩和することである。例へば戰時中日本の海運界が非常の活躍を呈し世界に類のない樣な高い配當率を續けた時に、政府から一億圓の保護金を貰つた會社が主として其金で造つた船を自分の船であるかのやうに考へてそしてそれから得た利益は總て株主のものと是認して勝手氣儘に六割とか七割とかの高い配當をして居るそして少しも國民若しくは國家に利益金の一部を返却しやうといふやうな考へを誰がなんといつても起さない。是等特に非難すべき理由あるものを除いても其他一般の企業界殊に綿糸紡績の事業等も多くの配當率を續けてゐる。此等の企業利益のあまりに多いといふことは分配の不公平を助長せしむるのみならず過度の身心を使役する勞働者並に一般國民の反感をも生ぜしむるものであつて殊に戰時に於て身命を抛つて戰場に働いて居るものゝある場合又一般物價の騰貴に因つて苦しむもののある場合には益々種々の反感を起さしむるのは理の當然である、日本では現實の戰爭慘害はなかつたけれども經濟上に於ては隨分一部國民は苦痛を感じて居るのであるから斯の如き巨大なる企業利純は必ず國民の一部に於て反感を起すものである、從つて之に對して政府は直接若は間接に何等か手段を執らねばならぬ筈である。但し現在配當制限が唱へられてをるようであるが、此方法を採るとすれば勿論總ての株式企業に就て行はねばならぬ。然し若し株式會社に就て配當制限を行ふといふとになれば勿論積立金其他留保利益金を以てする增資は絕對に禁止せねばならぬが何割の配當が正當であるといふことが最困難な問題である。假に一割五分位を適當なる限度であるとして之を法律を以て强制したとすれば之は特に株式組織の企業のみが制限を受るのであるから予は或は株式會社といふものは今後成立が困難になつて小規模の株式會社は皆元の個人組織にかへるとか資本家の企業投資心を阻害するとか、或は不要に企業組織の變動を生ぜしめるとか種々の復雜なる問題を生じ或は非常なる大資本を要する株式會社の成立が困難なる場合も生ずるかも知れぬ。從つて配當制限を法律を以て或る限度に定めるといふとに就ては理想論としては大變よいのであつて反對する理由が少

しもないが其實行上に就て種々の問題を充分に考へてかゝらねばならぬ。配當率の制限をすることになれば留保せられたる利益金の集積額を如何して處分するかといふ問題を考へねばならぬ。或は適度の減價銷却、損失塡補配當平均準備金以外には超過利益金を長く積立てずして毎年株主に配當を與へた殘餘を適當なる割合を以て其會社の使用人及勞働者に分與するといふことも考へられる。然し此等の方法を取るとしても矢張り企業家的資本家卽ち株主が常に企業上の損益を負擔して居るものであるからもし配當の制限をすることゝなれば損失のあつた場合には使用人勞働者等は其損失の負擔につきていかなる關係に立つものであるかを考へねばならぬ。企業家資本家と勞力の提供者との資格混淆の結果を生ずることも考へられるのであつて生産者は總て勞働者たるべしとの原則を正當なりと是認しそれが分配の點よりのみならず生産の點より見ても正當であり且現在の勞働者の利益增進となり又一般の利益となるとが明でない限りは容易に實行出來ぬことである。故に如斯損益共通の組織に就ても經濟組織の根底を改造せしむとの理想の實現に進まさる限り從來の勞力者の不利なる地位を改むる事を考ふると同時に又企業家の正當なる程度の利益を保持する事を忘れず徒に現在の産業組織の合理的方面の破壞に終ることはないやうに考へてかからねばならぬ。要するに配當制限といふ事は其程度實行方法其結果等に就て種々考慮すべき點が多いのであるから單に此理想に基いて直ちに一般的永續的立法を請求する事は倘愼重に考へねばならぬ。

四

然し一方に於て立法が出來なくとも企業者自身が此主張の根據の正當なる事を考へて自ら進んで適當なる考慮を廻らして相當の方法を採る事は必要であると思ふ。たとへば海運業者紡績業者とか或は炭礦業者とかは一時非常なる利益を得て居つた。或會社の如きは常に六割七割とかいふ配當を續けてゐる又將來の五割位の配當を永い間續け得るといふ見込のあるものもある其中には半期に千萬圓以上の利益を擧げて居るものも多々あるのであるから百萬や二百萬圓を資本利益としないで他の方面に分配する事位は何等の苦痛を感じないものである。例へば紡績會社が其六七割の配當率を一割位減じて其巨大なる利益金の一部を割き之れを以て職工に住宅を建設するとか或は病院を造るとか誤業場を設けるといふ事にすれば職工はどれ程喜ぶかも知れ

ない。又如斯永久的の設備に依つて會社は理想的の社會政策的設備を爲し得るのみならず彼等の營業經營上に於ても勞働者爭奪戰をなすに當つて無用の費用を出さなくとも其會社の職工待遇方法を見て自然に職工が其會社に流れ込んで來ることになつて募集費用を減少するのみならず職工を吸收する事は容易であり且つ永年勤續せしむることも出來得るのであつて經營上からいつても寧ろ利益である。然して現在の狀態で見れば之等の會社には百萬圓や三百萬圓の金は端金であつてそれを出す位の事は半期若くは一年の配當率の僅少なる低減で出來得る。而かも百萬圓もあれば隨分の設備が出來るのである。僅かばかりの金をこれほど有効に使ふことを知らないといふのは大きな誤りである。現實の一時的の利益のみに目が晦んで勞働者及一般社會との間に反感を生ずるのみならず階級鬪爭、國內の不調和を惹起することになるのは憂ふべきことであると思ふ、私は此際巨額の利益を得て居る企業會社の株主は其企業に携つて居る重要なる生産者即ち勞働者の利益の點から考へても又階級鬪爭防止の點から見ても、又社會改良、一般國民生活の向上、道德心の點から見ても自己の配當率の高率なることのみに眼を晦まさずして適當なる企業利益の利用法を講じたらよからうと考へる。

配當制限の立法は直ちに實現することは困難であるから吾々は企業家自身が適度の自省心と道德心の發揮を希望するのであるが斯の如き狀態は總ての人に望んでも當人が行はねば何にもならぬ、そこで他人の自覺を待つて居るのみでは時機を逸すると言ふことになり勞働者階級其他一般國民の反感が其の期間に激成するといふやうなことがあつてもいけないから國家が一の適當なる政策を講ずるといふことは必要である。即ち負擔の公平を圖る方法を講ずること即ち企業利益に對して適當なる課稅をするといふことである、此の問題は一般稅制改革殊に所得稅の改正と密接なる關係を持つて居るのであつて其根本迄は今論ずることは出來ないけれども所得稅中個人所得と法人所得の課稅關係に就き改正を加ふること配當課稅其他資本利子課稅を行ふこと種々の改正要點がある。戰時利得稅も之を他の名義で一定期間存續するとか或は稅率の改正に依り今少しく徵稅をしてもよいと考へる。

要するに現在の如く國民の生活が實際に於て困難の狀態にあり、又其影響に依りて思想上の動搖を來さんとしてゐる時機に當りては政府の適當なる政策の實行と資本家の反省が必要であ

るが殊に或種の物價の不當なる騰貴の防止一定收入者の收入增加、過大なる利益の制限等を行ふことは目下の急務である、其方法としては政府は適當なる立法を行ひ行政手段を採り資本家は適當なる手段を講ずる事の必要なる事は勿論勞働者階級の運動、俸給生活者其他無資階級の要求並に運動等に對して壓迫製肘を加ふることなく充分之等自然の必要に基きたる聲を聞き彼等の自助の方法の發達政府政策の進行を一日も停止しないように努める事は頗る肝要であると考へる。國民の向上に政府が伴ひ得ない事又國民全般の要求を聞き容れないといふことは最も恐るべきことであるから現在の如き未曾有の大戰の影響を受け經濟上に於ても政治上に於ても世界的に動搖を來してゐる時機に際しては私は政府が斷乎たる進取的の態度を採つてあらゆる問題に就きむしろ國民に先じて進歩的の施設を講ぜん事を希望して止まんのである。

謹告

內田魯庵氏の「ボルシエウエキズムとウイルソニズム」の一篇は其筋の注意に依り全部切取るの止むなきに至り八頁脱洩せり讀者諸君の御諒承を乞ふ

蘆花 德富健次郎著

みゝずのたはごと

第八十五版

過る六年間土の洗禮を受けて武藏野の孤村に鍬をとれる著者が折に觸れ興に乘じて筆を走らせし即興のスケッチ、短篇小說、瞑想、書翰、紀行等を集む。

清新なる田園の小景……
詩化せられたる敎訓……
涙を含む笑に滿てる物語……
有象より無象に通ふ神祕の暗示……
平淡の中戰慄すべき恐ろしき說話……

巻中に充滿す

都會住者は讀んで麥の穗末を渡り來る暮春の薰風の如き自然の氣息に接せよ。田舍に住む人は之れに依つて新に吾周圍を見るの眼を開け。九葉の寫眞版は本文を助けて說話の舞臺を讀者の眼息に躍如たらしむ。

縮刷判紙數約七百頁 定價金壹圓卅錢（郵稅八錢）

蘆花 德富健次郎著

小說 黒い眼と茶色の眼

第廿三版

是れ『不如歸』の著者、『思ひ出の記』の著者、『みゝずのたはごと』の著者が、其三十年前同志社學生時代に於ける戀物語なり、破れたる初戀の慘憺たる告白なり、聽說、著者此告白を江湖に公にするに當り遲疑逡巡、稿を燒くこと實に再度に及べりと、此書其如何に眞摯にして實嚴なる發表なるかを知るべきなり、此書によつて著者は其年來秘め置ける著者最奥の心事を語り、世間は未だ曾て窺ひ知ざる著者の一生面に接見せん

四六判紙數約五百頁定價壹圓五拾錢（郵稅十二錢）

發賣元 東京市銀座通新橋際 新橋堂小賣部 電話銀座五九壹 振替東京四三六四二番

衛生新報主筆 醫士 伊藤尚賢先生著（再版）

醫學的秘傳百法

縮刷形クロース製本 定價金壹圓 郵稅八錢

有ふれたる有効有害なる禁厭的のものにあらず醫學上奏效確實なる秘法百種を輯集せるものなり

小兒病參考書

瀬川醫農博士述 增補訂正 實驗上の育兒 上巻價七十五錢 下巻價七十五錢 郵稅各十二錢

瀬川醫學博士述 病兒及虛弱兒の養育法 價八十錢 郵稅八錢

佐藤醫學士述 生殖より育兒迄 價金壹圓 郵稅八錢

豊福醫學博士述 小兒傳染病の話 上巻價二十錢 下巻價二十錢 郵稅各二錢

唐澤醫學博士述 小兒病の話 價二十錢 郵稅二錢

衛生新報社編纂 兒童健康增進法の話 價二十錢 郵稅二錢

豊福醫學博士述 通俗 小兒病治療養生法 價三十五錢 郵稅四錢

東京市芝區二葉町十番地 新橋堂出版部 電話新橋三九壹九番 振替東京二〇〇番

資本制度の上に立てる姑息的社會政策

高畠素之

○

最近に於て、紡績、砂糖、船其他の大會社が五割若しくは七割の大配當を爲しつゝあるといふるに對して(1)暴利を制限するの必要無き乎、(2)之を國家の收入として一定の超過配當に對して課稅其他の方法を講ずるの必要無き乎、といふ事が甚だ問題とされてゐる如くである。之に對して財政學者の說は符號を合する如く、超過稅を賦課する事、國家の社會政策的施設を租稅制度の上に充用する事に一致してゐる樣であるが、要するに是等の意見は一時の急――否其すらも完全には圖り難い――を救はんとする姑息案に過ぎずして毫も問題の根本に觸るゝものでは無い。

○

そもそも不當利得とは何を言ふ乎。配當の何處までが不當であつて何處までが不當で無い乎。といふ質問に對して何人が完全に答へ得るであらう乎。既に配當といふ事が法律に認容せられたる權利なりとすれば百割の配當を以て不當なりとする理由は同時に十割の配當を以て不當なりとする理由で無ければならぬ。現在の組織と制度とが完全に認容されてゐる時代に於て配當の是非を論ずるは末である。砂糖の高くなりたるに對して、國產奬勵の精神と、關稅問題とに就て周到の注意を圖らすものは容易に其原因を知る事が出來る。

一切は制度の問題である。一切は組織の問題である。資本制度といふ制度が儼として存在してゐる間は資本家の利得に就て是非を言ふ事は意味の無い事である。資本家組織の現存する今日稅制制度の上に社會政策的施設を充用せんとする事は意味の無い事である。

○

其配當の意味にして既に然りとすれば、從業員に對する待遇法は畢竟するに溫情主義の外を出で無い。若し夫れ、大配當の社會上に及ぼす影響に就て論ずれば、配當が大きければ大きい丈け其社會上に顯はれる反動は大きいと見なければならない。

各會社の暴利的配當の實證〔關東の部〕

一塊の糖味一升の白米を求むるに尙ほ寶玉を得るが如き、努力を要するセチ辛い時代となつた。生活難は、日一日と劇甚に赴き、借家難を訴ふの聲、米價暴騰に憤るの聲、富豪を怨謗するの聲は嘖々囂々として寧ろ物凄きの狀勢を見つゝある。彼等の徒は憤恚の炎の燃ゆる處、或は同盟罷工の擧に出で、マルクス張りの社會主義に謳歌するもの滔々として其數を知らず、昇平の堤は方に決せんとして、義人は國の爲めに泣き、人類の前途を憂へて仲々夢を結び難し、憂ふるもの非乎、憤るもの非乎。

顧れば、過去四年間に於て我が產業界工業界は異常なる勃興を來し貿易は增進し、國富は增大し、戰前に於ては殆んど夢想も能はざりし旺盛の域に昇騰するに至つた。然し乍ら今や歐米列强は平和克復と共に漸次戰時の拘束を解き來つて新たなる企業組織の下に、從來の販路を回復し進んで新販路の開拓を謀らんとして居る。此際我國民就中工業家資本家たるものは、宜しく時局の重大なる點に思ひを走せて、進んで工業界の大整理を斷行し、資本を合同し、企業を連結し、勞働者と協力して意を能率の增進發展に用ひて、戰時中に貯へたる餘力を充分に傾注して極力歐米諸國の工業界に對應するの策を講ず可きである。然らざれば我工業界の前途は誠に寒心す可きものがあるであらう。

然るに我國一般の資本家には、前述の如き鞏固なる意志と周到なる用意の下に、怖る可き戰後の對外貿易戰に對應する覺悟が存するであらう歟。之を最近數年間に於て我が資本家の踏み來たれる足跡に徵して到底安堵し能はざることを衷心より悲しむものである。

我が資本家は過去五年間に於ける時局の推移と共に益々良好なる狀況に進展し來つたが、他方に一般國民及び勞働者の收入は生活費の昂騰に伴はざると新思想の殺到し來れる爲め、資本家對勞働者の利害關係より生ずる衝突は日を逐ふて險惡なる形勢を示しつゝあるのである。之を例ふれば恰も暑氣の寒暖計の如く昂騰に次ぐに昂騰を持續せる米價は今や、白米一升六十五錢を唱ふるに至つた。其結果は怎うであらう富豪資本家に取つ

ては白米の六十五錢は何等痛痒を感ぜさらんも、之等資本家に頤使さるゝ勞働者にありては、生活問題の根底を危くする所の一大慘事たらざるを得ぬのである。一方棉糸は五百圓を突破して一反の浴衣地さへ勞働者としては容易に身に纒ふ事も能はぬのである。加ふるに家屋は缺乏して家賃は彌が上にも暴騰し、其他砂糖も、木炭も、味噌も、魚類も、酒も、ビールも、菓子も、野菜も、紙もインキもありとあらゆる日常必需品にして、一つとして殺人相場を現はさゞるものは無いのである。

斯くして勞働者は云ふに及ばず、中產階級以下の一般國民に對し衣、食、住の脅威は一時に殺到して、食ふに米なく、着るに衣なく、住むに家なきの時に際して富豪輩の遊山熱、骨董熱は依然して冷めることを知らず、最近鹿島家の賣立に周文の畫が一葉十六萬圓の巨額を以て賣買せられたる如きは、現在に於ける貧富の懸隔が如何に甚しきかを最も切實に立證して餘りあるものと云はねばならぬ。社會の裡面に潛む危險思想の釀成を未前に防ぐことは、時局の恩惠に依つて計らさる富を成し得たる所謂成金若しくば資本家富豪の當然の義務であり且つ責任であらねばならぬ。

彼等資本家の責任を絶叫するに先立つて戰亂勃發以來より平和克復の今日に臻るも猶且つ彼等が貪りつゝある所謂會社の利益配當なるものを摘錄して以て資本家の暴利を剔抉すると同時に、社會政策上公平なる立場より論斷を下して汎く江湖に訴へんとするものである。

一　最近に於ける重要會社の配當

△八年度上半期（括弧內は前期）

□十三割（一社）△（明治火災保險會社）

□十　割（三社）△日本含蜜製造會社△（江商株式會社）△（大日本紡績會社）

□八　割（八社）△明治生命保險會社（前期同額配當）△福島紡績會社△岸和田紡績會社△江商株式會社△和歌山紡績會社△（日本綿花會社）△（函館船渠會社）

□七割五分（一社）△日本生命保險會社

□七　割（二社）△鐘淵紡績會社（前期同額配當）

□六割六分（一社）△（帝國生命保險會社）

□六・割・（九社）　△東洋紡績會社（前期同額配當）△日本製麻會社（前期同額配當）△大日本紡績會社△倉敷紡績會社△和歌山紡績會社△日本綿花會社△大阪商船會社（前期同額配當）△
△（日本郵船會社）△（東京製鋼會社）

□五・割・五・分・（一社）　△（明治火災保險會社）

□五・割・三・分・（一社）　△（輸出食料品會社）

□五　割・（十六社）　△富士瓦斯紡績會社（前期同額配當）△合同紡績會社△日本郵船會社△大日本製糖會社△東洋汽船會社（前期同額配當）△入山採炭會社（前期同額配當）△東京板紙會社△大阪舍蜜會社△豐田織機會社△日本鋼管會社（前期同額配當）。南洋貿易會社（前期同額配當）。橫濱製鋼會社△（日本舍蜜製造會社）

□四・割・五・分・（二社）　△內外綿花會社△櫻洋灰會社

□四・割・二・分・（二社）　△日本漁業會社△（關東酸曹會社）

□四・割・（十四社）　△石川島造船會社（前期同額配當）△浦賀船渠會社（前期同額配當）△函館船渠會社△磐城炭礦會社△ラサ燐礦會社△四日市製紙會製社△樺太工業會社△東京毛織會社△東京商船會社（前期同額配當）△川崎造船會社（前期同額配當）

□三・割・五・分・（十三社）　△日清紡績會社（前期同額配當）△日本毛織會社△帝國製麻會社△大阪鐵工會社△大阪三品取引所△日本化學工業會社（前期同額配當）△芝浦製作所（前期同額配當）△富士製紙會社△橫濱魚油會社（前期同額配當）

□三・割・二・分・（一社）　△東京海上保險會社

□三　割・（廿三社）　△大阪海上保險會社△日本海上保險會社△大阪毛織會社△東京モスリン會社（前期同額配當）△橫濱船渠會社△東京製鋼會社△東京米穀取引所△橫濱製鋼會社△明治製錬會社△東洋貿易會社（前期同額配當）△星製藥會社（前期同額配當）△三越吳服店（前期同額配當）△日本坩堝會社（前期同額配當）△關東酸曹會社△窒素肥料會社△神戶棧橋會社△大日本麥酒會社（前期同額配當）△輸出食料會社△大阪化學肥料會社

右に掲げたる八年度上半期配當六十六社、七年度下半期三十八社以外に於ける一割乃至三割間の配當を爲せる會社は非常な

數に達して居るが、之等は假りに埒外に措くこととし、右表の各社に就てこれを觀るに、其配當按梅を單に利益率より換算する時は、何れも一應は妥當なる配當率の如く目せられんも社會政策上よりこれを觀る時は斷じて然らず、即ち三割以上の配當は悉く穩當を缺けるものたるを斷言するに憚らざる理由が存するのである。

右の内數社に就いて例を示さんか

□大日本製糖八年度上半期配當

當期純益金	五、五七七、五〇九円
前期繰越金	一、〇一四、〇二五
合計金	六、五九一、五三四
內譯	
法定積立金	二七〇、〇〇〇
別途積立金	六〇〇、〇〇〇
固定財産減價償却金	二五〇、〇〇〇
社員職工恩給扶助積立金	一〇〇、〇〇〇
役員及社員賞與金	四〇〇、〇〇〇
株主配當金(年一割)	七〇六、二五〇
特別配當金(年一割三分)	九一八、一二五
記念配當金(年二割七分)	一、九〇六、八七五
役員及社員特別慰勞金	四〇〇、〇〇〇
後期繰越金	一、〇四〇、二八四

大日本製糖會社の如きは右表の示すが如く、當期純益金五百五十七萬七千五百九圓に對し、純益の六割以上に相當せる三百五十三萬一千二百五十圓てふ莫大なる配當を爲し、剩へ八十萬圓を少數なる役員及社員の賞與並に慰勞金に配分せり、而も會社製産能力の主動たる勞働者即ち職工に對しては、賞與も與へず慰勞金をも配分せざるは、前記せる社會政策の根本に反せる最も甚しきものといふを得可く、加ふるに株主並に小數の重役社員に配分せる賞與慰勞金の配分四百三十三萬一千二百五十圓に對し會社大多數の勞働者(賞與慰勞金の配分に預れる社員をも含む)の恩給扶助積立金は勿驚僅に其四十三分の一弱なる十萬圓を算せる而已である。

□東京毛織八年度上半期配當

當期利益金	三、七九一、七四五円
內	
諸償却及格下金	八〇〇、〇〇〇
戰時利得稅及所得稅引當	六五〇、〇〇〇
差引純益金	二、三四一、七四五
前期繰越金	一、一一〇、八八〇
計金	三、四五二、六二五
內	

法定積立金	二〇、〇〇〇
恩給基金	七〇、〇〇〇
役員賞與金	一二〇、〇〇〇
株主配當金(年四割)	二、〇二五、〇〇〇
後期繰越金	一、一一七、六二五

東京毛織の如きも亦當期純益金三百七十九萬一千七百四十五圓に對し、二百二萬五千圓といふ純益の約六割に相當する巨大なる配當を爲しこれ亦役員賞與金として少數なる重役は十二萬圓を貪り居れど大多數の社員職工に對する恩給基金は僅々七萬圓を算せる而已である。

□鐘淵紡績八年度上半期配當

當期純益金	一〇、一三九、〇〇〇円
前期繰越金	四、三八〇、〇〇〇
合計金	一四、五二〇、〇〇〇
内	
株主配當金(年二割)	一、五七八、〇〇〇
臨時配當金(年五割)	三、九四六、〇〇〇
諸種積立金	二、五〇〇、〇〇〇
使用人病傷老衰退職恩給資金	二〇〇、〇〇〇
職工幸福增進資金	二〇〇、〇〇〇
從業員子弟教育貸與費資金	二〇〇、〇〇〇
使用人職工臨時給與金	三五〇、〇〇〇
役員賞與金	三〇〇、〇〇〇
後期繰越金	五、二四四、〇〇〇

鐘淵紡績は當期純益金一千十三萬九千圓に對し五百五十二萬四千圓即ち純益の約五割株金の年七割を配當し更に少數役員は三十萬圓を賞與金として貪れり、然りと雖も、使用人並に職工に對し三十五萬圓の臨時給與金を與へ十萬圓を職工幸福增進資金と爲したるは前掲數社に對し多少時勢に適應せるものといふを得可きも是等は資本家即ち株主に對する年七割の暴利配當率に對しては單に九牛の一毛だにも償ひせざるものといふ可く、到底勞働者の滿足否社會の滿足を贏ち得べきものではない。

□富士瓦斯紡績八年度上半期配當

當期純益金	五、九〇〇、四〇〇円
前期繰越金	三、二四六、四〇〇
合計金	九、一四六、八〇〇
此處分	
諸積立金	一、五九〇、〇二〇
職工賞與金及衛生救濟基金	二九五、〇二〇
職員賞與金及恩給基金	二九五、〇二〇
重役賞與金	二九五、〇二〇
配當金(年五割)	三、二五〇、〇〇〇
次期繰越金	三、四二一、七三一

□大日本紡績八年度上半期配當

當期純益金	一〇、六九六、六一六円
前期繰越金	四、九〇五、七四八
合計金	一五、六〇二、三六五
諸積立金	三、〇〇〇、〇〇〇
職工保護資金	二〇〇、〇〇〇
配當金（年六割）	六、七七四、〇〇〇
後期繰越金	五、五二八、三六五

例記せる五社は四割乃至七割配當の五社に過ぎざるが、七割以上の配當を爲せる十三社は勿論以下の各社も悉く株主即ち資本家並に重役の配當に厚く、職工即ち勞働者に對する配分は前に例記せる如く何れも九牛の一毛に過ぎぬのである。

斯の如くにして所謂髙い所に土を盛る式の現在我國の資本家の利益本位に成る配當率を此儘にして放任せんには如何なる結果を見るであらうか。一般國民の何萬分の一にも當らざる資本家は富に富を重ね其の結果は財のあるに任せて贅を盡し豪奢に陷り國を危ふするに反し、極度の物價膨張に脅かされつゝある大多數の國民は常に資本家の横暴を憤り怨嗟の聲は凝つて一種の危險思想を釀成しつゝあるのである。

世には資本家一割利得論或は資本勞働三分或は平分利得論等の喧傳せられ居る今日、歐米の資本家は其配當は多くも一割を超えざる程度に之を止めて、以て過剩せる多額の利益金は擧げてこれを各自斯業の發展に資するの外、勞働政策上又は社會政策上有益なる使途にこれを充用し、國家的永遠の策を講ずると同時に各自其從業せる事業の基礎を彌が上にも鞏固にし、對外工業戰に備へ居れるはとりも直さず自己の保護、斯業の利益に他ならぬのである、即ち歐米の資本家は事業本意、國家本意に立脚して其間に利益を計れり、其結果は彼等の事業は常に勇者たるの地位を安全に保持して邁進し得るのである。然るに我資本家は之とは正反對に一も二も自己本意である即ち自己の利益以外には何ものも存せぬのである。彼等は或は言はん「營利會社が利益を配當するは當然である、資本を投ずるのは利益を得るのが最後の目的なのである。三割よりは五割、五割よりは七割、七割よりは十割、十割よりは廿割と多額の配當を希望するのは資本家として當然の希望である。強度の配當何の憚るところがあらう」とこれらの言は一應尤もの如きも斯の如き論者は目前の利に聰きも永遠の利を惟はさるの甚しき者である。と同時に世の趨勢をも亦解し得ざる利己主義一途の我利々々たる誹りを免のれぬものといはねばならぬ。

彼等資本家が暴利を貪れる結果は如何、即ち一には勞働問題を躍起し二には諸物價の暴騰より延ゐて起る社會生活の不安を誘引し最後には國家的工業を危地に彷徨せしめんとするに至つたのである故に暴利暴配當は單なる資本對勞働問題に而已止まるものに非ずして國家的大問題であると斷言する事が出來るのである。

先づ第一の問題に對して云はんか、資本家の横暴を憤る勞働者も勞働者の無智を悲む資本家も、要するに自己本位よりも國家本位事業本位に立脚して自らを批判せねばならぬ。（資本家が生活を保障して呉れる爲勞働者は勞力を提供する）といふ權利義務以外に相互に切離す可からざる利害關係の共同點の存する事を忘却してはならぬ。而して相互に理解ある融合を缺く可らざる一の階梯として相親み相援け行くに非されば、將に世界に展開せんとしつゝある工業的新生面に處する事は不可能である

第二の諸物價の暴騰と社會生活の不安を控除する事及び最後の國家的工業を世界の商戰に立たしめて安全ならしむるの急務は如何に解決すれば宜いのであらうか。これを一言にして盡せば曰く資本家は小なる利己主義を捨てゝ大なる國家本位に融合すれば足るのである。小なる利己主義個人主義の配當本意がやがて自己をも斯業をも敗滅せしめんとしつゝあるに鑑みたなれば、又思ひを國家社會に馳せたなれば資本家たるもの今日に於て目覺めざるを得んではないか、見よ。保險業者の八割乃至十三割の暴利配當、紡織業の四割乃至八割の強配當、海運、砂糖製紙其等の三四割乃至七割の配當等は恐く經營者自身の効績に依つて得たる利益なりと云ひ得るであらうか、斷じて然らずこれ皆時局即ち戰亂といふ周圍の事情の然らしめたる結果、若しくば時局を應用して物價を釣り上げたる奸商の憎むべき手段に依るもの而已である。換言すれば社會が儲けさせたのである。して見れば資本家其衝にある所の事業家は其利益を投げ出して社會的に貢献すべきである。即ち配當の如きは銀行業者同樣一割の範圍を出でざる程度に止め多きも二割を超えむる程度に限定して以て其の限定額以上の益金に對しては相當の方法を設けて社會的に資すべきである。其方法は自から種々の方策があらう、勞働者保護も可なり、事業の振張も可なり、貧民救濟も可なり、超過税を進んで自ら國庫に納むる大に可也。其使途は會社の種類に依つて種々に別れるものとしても、要するに社會なり國家に盡す一事に於ては何等變る所はない。之等は法律に依つて定むべきものではなくして事業家自ら自己の立場を保護する

上に於てかく爲すべきが當然の事なのである。然りと雖も我國の如き利己主義一途の資本家を以つて充滿せる事業界の現時にあつては法律の力によつて制裁するに非ざれば到底公平なる結果は夢想も及ばざるものである。玆に於て超過利益税の必要も生じ、超過利益分配法の必要も依つて起る所以である。超過利益税並に超過利益金分配法の設定を告げんか秘密積立の弊は止むなしとするも現在の如き暴なる利益配當は途に屏息するであらう、さすれば此點のみに於ても多少に拘らず物價は調節せられん事を固く信ずる。

之を要するに配當額は二割を超過せざる事に法律を以つて限定すること而して二割以上の利益金は一は超過利益税に徴して政府は直接に社會政策にこれが使途の衝に當る可き事、過剩益金の一つは超過利益金分配法を設けて其の一部は勞働者に、一部は斯業の能力增進の資に、一部は社會調節費に充當し猶且つ餘裕の存する場合にはこれを株主卽ち資本家に配分する事を得せしむ、右は現在の急に所して當然政府及び當事者たる資本家の執る可き最善の方策なりと信ずるものである。本社は今後資本家の暴利を貪りて慾求其度なき實證を更に明確に維抉して江湖の割引なき判斷に訴へ、以て社會組織の改造を促し、國民生活の安定を期し窮民生活の一燈明たらんとす。

新刊紹介

自己を生かす爲に　武者小路實篤著

自分は始め文藝によつてのみ自己を生かさうとした今でも文藝で自己を生かさうと思つてゐる自分の文藝にたいする態度要求希望はこの書のうちに現はれて居ると云ふ著者の言葉は一頁毎に成程々々と思はせるそして惡趣味と虛僞に對する熱烈なる著者の戰ひの宣告は一句毎に血を躍らせる樣な氣分が溢れて居る本書は『新らしき村の生活』の姉妹篇で漱石の『それからに就て』以下雜感に隨筆に評論に縱橫の筆端を走らせて居る線條の書欄に缺くべからざる價値あるものとして推擧せざるを得ない（定價八十五錢東京牛込矢來町新潮社）

女教師　石丸梧平著

船場のぼんちに依つて一時に其創作的手腕を謳歌せられた著者の創作集第二卷である長篇『二人の女教師の生活』及び『女教師仲間』の二種を纏めたものである大阪文藝の眞實所と思つた著者が此集に於ては忽ち江戸ッ子となつて自由自在の筆致を弄して居る同性の戀縺所と云つた女性の心理を細かい所迄切り込んで行つた著者の非凡の才能はありくと看取される文壇が疲れた此頃の空氣に一脈の凉味を感ずる氣がする（定價六十錢東京本郷五丁目四方堂）

大阪財界消息

■近代思想の急變は勞働問題と社會政策の研究に世間並に劣らぬ注意を這んな事には特別無理解な上方贅六までが可成り惹起したやうだ併し上方贅六は實際問題の調査をソチ除けにした卽ち勞働界の實情と甚どくかけ離れた殆ど無交渉のやうな迂遠な實用的でない議論を臆面もなく公けにしつゝある學者論客の態度を一笑に附しあれば讀書子の遊戯だと云ふ位にしか受取つて居ないそれ程學者の意見が實際家に輕んぜられて顧みられないと云ふ皮肉な消息を私は無遠慮に此に發表して置きたい■先日も或處で堀江河上二博士の勞働所見にさん〲の批評をした實際家が居たが二博士が上方の實際家に鉛玉に揭げらるゝばかりでなく當代一の人氣役者たる福田博士とても上方者の口にかゝつては木ッ葉微塵であるそれ故に勞働問題と社會政策に最も深い關係を有する上方者に理解を與へ彼等の首根ッ子を抑え付けグウの音も出さぬやうに服從せしむるにはどうしても學者の論議が實際問題の實體に觸れなくてはならぬ■學者論客に勞働者がどれ丈け自覺して居ますかと質問をしてごらん之れに對して具體的に纏まつた答辯を卽座になし得る人はいくらもあるまい學者が勞働者と接觸する機會の無いのは尤だが何故に自ら進んで之が接觸を試みられんのかと不思議に思ふ上方の勞働者中には學者論客に接近して指導を仰ぎたいと願つてるものもある位だのに實際の處上方の資本家達が馬鹿にしてる程に勞働階級は無智無識ではないのである神戸で云へば川崎造船所京都では奥村電機、松風工業、大阪では大阪鐵工所、川北企業、汽車會社などの工人中には可成勞働問題に關する理解を有してるのが少くない彼等は福田吉野河上河津河田米田堺賀川など云ふ先生方の署名を敬慕してるばかりでなく諸先生方の意見に批評を加へ得る迄に昨今では著しい向上を示して來た神戸や大阪の電車內で靑服の職工や其他勞働階級に屬すべき人達が「改造」や「解放」や「中央公論」を讀み耽つてるのを朝夕に見るにつけ此間も片岡、小山、山岡、湖など云ふ上方の巨頭株の集つた席で勞働問題は馬鹿に出來ない愈よ眞劍問題となつて來たネと話し合つてたのは流石に此人達の目にもそれ程に勞働者階級の自覺が反映したかと心窃に喜んだ位である大阪には鮟鱇仲仕と云ふ勞働者中でもわけて下級と見做されてる屋外勞働者が何千人と居る此仲間は近く自發的に修養向上を目的とする團體を組織するに決したそれ程上方勞働者は英邁にならぬ■私の知つてる一勞働者は禁酒禁烟をしたそして學業操行倶に秀でた彼の小供は大學に入れると云つてる卒業後は官吏か銀行會社員にするかと聞くと否や大切な一人の小供を中產階級へは吳れぬ大學卒業後職工仲間へ入れるそして從來勞働階級を代表すべき立派なる人物としたいと答へた私は之を聞て此男の勞働階級に對する自信の强いのに痛く感服した■日本もいづれ勞働組合も成立し普通選擧も行はれ國民中大多數を占むる勞働階級の代表者として堂々たる人物を必要とする時代が來るであらう其用意を今から忘れぬやうに整えて置かねばならぬと這う云ふ事を上方の勞働階級中の識者は公言してる■上方では勞働階級と智識階級とは相當に妥協され氣脈を通じて富者階級の橫暴をいつかは征服し吳れんとの意氣込はなか〱盛である而かも一方富者階級たる資本家達中には依然溫情主義一點張で職工は奴隷同樣情け次第でコキ使ひ得べきものと心得窮した奴は救濟して吳れる（上方勞働者中には救濟の二字を侮辱文字として甚だ嫌ふが多し）などと放言し貪婪飽くなき手合の存外多いのには驚かされる（泥牛生）



社會改造と演劇

坪内逍遙

一

曠古の大改造期といふのは今日の事である。世界を擧つて、おそらく根本から改造されなければなるまい。改造は社會のあらゆる方面に及ぶであらう。政治、經濟、工業、生産、制度、文物、風俗、習慣、其どれもが少くとも前例の無い程度に改造されるでもあらう。われ〳〵各自の生活其物からが根本的に改造されなければなるまい。思想も、感情も、趣味も、好尚も、信念も、一切の理想が改造せられねば止むまい。少くとも大改造を要するといふことを深刻に自覺しなければならぬのである。

特に、身分上、職務上、德望上、他を誘掖啓導する責任を持つてゐる人々は、多忙ならざるを得ない。自己の改造の必要を自覺し且つそれを實行すると同時に、衆他の者に同じ自覺を吹込み、同じ自覺の實行を督促せねばならんからである。要路當局が、思想の統一だの、民力の涵養だのを唱へるのも、要するに、此必要上からであらう。學者や識者が昨今頻りに、或は文章で以て、或は講演等で以て、デモクラシーを論じたり、勞働問題を議したりするのも同じ必要からであらう。

ところで、斯ういふ場合に、眞先に討査考覈を要するのは、其爲に使ふべき道具である。社會の改造、生活の改造に

利用すべき大切な諸機關の取調べが先づ必要ある。就中、敎化機關の討査考覈が大切である。すなはち、國民を敎へ導く爲の各種の建設物――公私、大中小の學校、學會、それら正式の敎育機關は無論のこと、民間の各宗派の說敎機關、新聞、雜誌、其他の出版物、劇場、寄席、其他の興行物――が果して此時代の要求に該當した働きを行してゐるかどうかを、先づ第一に調査し、或はます〳〵督勵し、或は改善し、或は根本的に刷新せなければなるまい。現內相が三敎の合同會を催したり、國民文藝會を設けさせたりしたのは、其方法や成績は別問題として、此意味から見て、機宜を得たるものといへる。とにかく、此際演劇を利導して敎化に用立てようといふのは當然の企圖である。

劇や音樂は、直ちに且つ同時に多數の人心に愬へるものである所から、群衆心理作用も手傳つて、頗る侮りがたい感化力を持つてゐる。たしかに敎化機關として有力なものである。だから、今更いふまでもないが、東洋でも、西洋でも、古聖賢は殆ど皆音樂の效果を重視し、孔子の如きは、禮樂と竝べ稱して、音樂を治國の大本とした。プレトー、アリストートルらもまたそれを國民團結の要具とした。或は「移風易俗」とも「蕩滌邪穢」ともいつた。が、其實、劇の効力の方がそれ以上だといつてよい。先づ音樂よりも通俗的である。それから其敎化作用が、他に例のない程に複雜でもあり微妙でもある。といふのは、劇は、とにかく其國、其時代の種々の藝術を利用し、綜合して、理智にも、感情にも、想像にも、感覺にも、目にも耳にも心にも、つまり、人間の肉體精神の全部に、同時に愬へる不思議な力を持つてゐるからである。で、逐次的に人生を敍寫する小說よりも、平面的に世相を見せる活動寫眞よりも、其同時的、立法的なのによつて、人生の微妙な理趣を直觀させる效力が一層强著である。もとより劇には種々の等級別があるが、其傑れたものとなると、娛ませもし、悅ばせもし、慰めもし、勵ましもし、敎へもし、導きもし、反省もさせ、悔悟もさせ、發憤もさせ、限りない向上心を起させもする。更に詳しくいふと、人は傑れた劇を觀ると、先づ、其夢とも幻影とも現とも付かない、けれども夢幻よりはずつと明確端的に、鮮明に、又現實よりはずつと緊縮もされ切實にもされ、多くはずつと美化された人生相――蒸溜（ヂスチル）され、凝結（コンデンス）された人生相――の、ひし〳〵と眼前に展開し躍動するのを見る。で、其瑰奇と

靈妙とに撲たれて、驚き、喜び、姑くは恍惚となつて、少くとも其刻下には、苦惱をも憂悶をも忘れて、別世界に遊んでゐるやうな感が起る。隨つて只それだけでも、惱み疲れた心が休まり、僻んだ心や不平な氣分が慰む。何となく元氣が鼓舞される。譬へば、一日の勞役の後に、心地よく入浴して、何等かのリフレシメントを攝取したといふ感じがする。勿論、これは劇の性質にも因るが、それだけでも、一種の慰安であり、好感化であつて、風敎の裨補となるといへるのだが、尙それと共に、其劇の內容次第で、いろ〳〵の默會を得る。例へば、靈妙な人間生の情味、神秘幽玄な人生の因果律、分析したり解剖したりするとの出來ない複雜な人情とか心理作用とかを敢て說明しようとはしないで、直覺させる力がある。彼の「親の思ひは子の百倍」とか、「世間知らずの高枕」とか、「可愛兒には旅」とか、「堀けば募る」とかは、言はゞ、人生の理趣中の頗る淺近なものなのだが、それらでさへ、實際體驗しないうちは、眞の會得はゆかない。或は中產階級の生活難とか、勞働階級の家庭悲劇とかいふことに就いても、其理解だけは、隨分上流社會にでも有るだらうが、體驗が缺けてゐるから、中々實際的の强著な同情は起らない。直さま飛込んで行つて救はう、自分の身を削いでまでも助けようなぞといふ手强い同情は起らない。己れ捻つて人の痛さで、同情も忠恕も慈愛も、つまりは、自己の體驗が本である。其範圍の廣い狹いは主として其持つて生れた氣質が定めるのではあるが、想像と理智とで助けられる所も多い。小說や劇は、何かにつけて生の體驗の不足を補ひ、想像と理智の作用を促す。試に、切實な親心や不慮の犯罪に關して何等の經驗もなかつたものに、「女舞衣」の酒屋か、「冥土の飛脚」の封切か新口村かを觀せたとする。其者が相當の年齡である以上、多分少くとも今まで學校の教科書なぞでは學び得なかつた或微妙な心理を默會するであらう。これは假の例である。我淨るり劇の如きは、決して最上乘の劇だとはいはれぬ。が、それでも尙それくらゐの特殊效能は備へてゐる。まして、それよりも以上の、微妙な、甚深な人生の理趣を寓し得た或傑作の劇に感動した場合には、彼の威嚇的に、若しくは理窟づくめに訓誡されたり、煩く管々しく諭告されたり、無味乾燥な倫理說を說明されたりした時とは ちがつて、自然に、殆ど 半無意識に 反省もし、感奮もし、悔悟もし、同情もし、或は大いに憤を

發して自己の根本的改造に志すやうなこともあるだらう。それは、其演劇が、抽象的に又具體的に、端的な敎訓箇條を臚列して見せるがためかといふに、決してさうではない。何も說敎めいたことを言はなかつたからである、只もう瑰奇な、美妙な、靈活な藝術的魔力が、先づ觀る者の感覺を、情緖を、想像を陶醉せしめて、自然と其美しさに憧憬させ其美しさに同化せしめなければ止まない概があるからである。卽ち、傑れた劇は、人心を悅ばせ、樂ませ、慰め勵まし、自然に其元氣を鼓舞し、新しい生命力の勃興を感ぜしめ、何等かの高い理想に向つて向上しようといふ企望を起さしめる。喜悅(ジヨイ)が希望(ホープ)を生み、元氣(エナジー)が自恃心(セルフリライヤンス)を生み、新しく得た人生に關する一層高尙な智慧(インテリゼンス)が、よしそれが多少漠然としてゐるにもせよ、何等かの先見、何等の願望(デシデラタム)、何等かの向上心(アスピレーシヨン)、何等かの理想を生むのである。敎化機關としての劇の利用法は、かういふ程度を正準と立てゝおけば、無事である。

二

ところが、とかく劇を利用して風敎の裨補としようとする者に限つて、ともすると、劇をすぐさま淺近な敎訓の道具にしようとする。露骨な說敎をさせようとする。彼等の多くは、小中學の敎科書を活人畫式にするだけで、それで用が足りるやうに思つてゐる。或は、慰安機關としても、只一時の、彼の宴會なぞの餘興同樣の働きをさせて、當座の笑ひ草を供給しさへすれば、それで十分だと思つてゐる者が少くない。とりわけ、我國では、劇の眞に優秀な、高尙なのが殆どまだ無いといつてもよい位ゐだから、尙更劇の眞效果が了解されてゐない。劇に限らず、すべて文學藝術は、國民精神の貴重な營養物、滋養品と見做さなければならないものであるのに、とかく、それを嗜好品扱ひ、奢侈品扱ひにする傾きがある。ほんのリフレシメント——菓子、煙草、茶、コヒー、酒類なぞだとばかり思ふ。が、斯う思つてるだけなら、まだ害が少ない。といふのは、實際、或種類の文學や藝術は嗜好品程度、慰藉品程度の働きしかしないことが多いからである。けれども、却つてそれだけであるために、ともかくも慰藉(リフレシメント)の任務だけを盡し、それで暗に、幾らか、

風致の裨補となることもある。だから、寧ろそれだけならば、有りのまゝで、却つてよいのだが、功利本位の經世家となると、それを端的な教化機關たらしめようと望む所から、菓子であり、コーヒーであるものに、或は牛乳であり、鷄卵であるものに、頻りに藥劑を調合する。菓子を恐くスコット乳菓のやうなものに、牛乳を恐くヨーグルトにしようとする。さうなると、だれもそれをリフレシメントには用ひない。のみならず、藥としては、たかゞ賣藥程度の效能しかない。こんな無駄なことはない。例へば、「菅原」の寺子屋を御覽。源藏が「すまじきものはお宮仕へ」と愚痴を言つてこそ身を殺して仁を成す古武士の悲痛な心理が躍動して、不易の人情味の琴線に觸れる。で、同情も起る、教訓としてもそこに却つて妙味がある。が、雁次郎式に「お宮仕へはこゝちやはやい」と道學的に書換へては、もう一のスコット乳菓である。或は「非業の死でも父さんはお年の上、勘平さんは三十に」といつたり、死骸を抱いて半狂亂の愚痴を並べたりしてこそお輕や政岡がやつと人間味を保持し得るのに、それを一々道學的に改刪した時分には、まして此手心で作全體を案出した時分には、藥臭くてたへられない。玉手御前の本心、いがみの權太の戾り、いづれも勸懲主義の誂へに迎合した作意で、其實は惡の讃美の假裝であり、エロチシズムの假面であるから困る。さうして特に教化用にとて作られる作となると此假面此假裝が作意の全部に通徹する。それでも、むかしはまだそれが多少の役に立つた。假面だ、假裝だと氣附かれずに濟んだ時代もあつた。今は國民精神が、根本から改まりつゝある。それだのに、今も尙、昔ながらの良妻賢母や忠臣孝子を、古い解釋のまゝ、古い形式のまゝ、劇に具體化して演ぜさせて見ようとする愛國者もある。それにどの位ゐの效能があるだらう？　此間の、朝鮮京城の騷擾に、巡査や憲兵が暴徒や野次馬の鎭壓に努力してゐると、とかく老人や女子供までが群集して來てしやうがない。幾ら追ツ拂つても又たかる。其中に一人の小學女童が居た。巡査が、あぶないから退れ、といつて手荒く追ひのけようとしたら、女童は眦を逆立てゝ「お前がたは俺たちに楠正成は忠臣だ〳〵と言つて教へたが、何が正成が朝鮮の爲に忠臣だ!?」といつて、小さな脚を擧げて其巡査を蹴つたさうな。適用の剴切でない教訓は、むしろ反感を募らせる。ばかりではない。其反感を尤だと思はせるやうにもなるから、考へ

ねばならぬ。

劇は、慰安の道具としても、深淺二様の働をなし、教導の機關としても高卑二義の作用をするといふことは、劇を經世用に利用しようとする人々の、特に十分に理解しなければならぬことである。さうして劇を鑑賞する民衆自身もまた常に十分に此差別を理解してゐて自分をも利し、又他人をも利することに力めねばならぬ次第である。ところが前にもいつた如く、我國には從來立派な劇がなかつたせいか、とかく、智識なり、權力なり、財力なりの上流階級には、著しく此理解が缺けてゐる。で、特に「社會改造と演劇」といふ一題目を掲げて、やゝ詳密に民衆に於ける劇の敎化作用を論じて見ようと思ひ立つたのである。文藝家や文藝專修家の爲に說くのでないことを豫め斷つておく。

三

先づ、民衆といふ語であるが、これが聊か曖昧である。昨今の用法によると、其意義が約四通り程ある。最廣義は現在の當該國民全體を指す。最狹義は、或は未だ實在してゐない若しくは實在してゐるとしても、今はまだ比較的極めて少數だとも見做すべき或理想的自覺を有してゐる民衆、言ひ換へると、*as they ought to be* 的の民衆を指す。或は――これは無論、特に藝術に關聯した場合にだけいふとだが、――文藝の專門家及び文藝の專修家、愛好者等の團體にのみ限る例もある。けれども、普通は、以上二類の中間の多數者階級、即ち勞働者階級、さうでなくも平民階級を指す。殊に敎化機關の目的物としては、それが通例である。此場合には、民衆とは、比較的蒙昧、比較的無智、比較的修養の足らないといふのと同意義になる。外國の民衆藝術の主唱者中にも、此意義に從つてゐるのが少くない。我國民文藝會のなぞが、やつぱり、それであるらしい。

が、階級別を撤回するのがデモクラシーの本義であるのに、民衆を特殊階級の意味に用ふるのは矛盾でもあり、不條理でもある。のみならず、少くとも劇其他の藝術を敎化機關に用ふる場合には、特に感心しない。それは、劇其物を鑑

落させる因緣となる虞れがあるからである。其わけは、次々に言ふ所で、自然と解るだらうから、今はいはない。

私は、教化機關としての劇の效用及び其利弊を更に一層明かにするために、それが、古代から現代までに、どんな鹽梅に經營され、どんな鹽梅に利用され來つてゐたかを、先づ歐米の歷史に就いて觀察しようと思ふ。それは雜と三大別になる。第一が希臘式と稱すべきもの。第二は英米式と呼ぶべきもの。第三が歐大陸式である。

希臘式といふのは、西曆紀元前三四百年頃を其極盛期と見たアセンスの劇を指すので、これは慰安機關としても、教對機關としても、先づ殆ど——勿論、比較的にいふのだが——理想的であつたといつてよい。即ち經世本位である。飽迄も國家本位に、利世安民の必要を道具として、國家の一事業として、劇を興行したのである。本來が其國の宗教に胚胎した所謂法樂であつたから、國家的、宗教的年中行事として缺くべからざる一大式典であつた。で、演ぜられる劇は舞踊の伴つた大規模の音樂劇であつて、種々の點で、我能樂に似てゐたことは周知の事實だが、能よりはずつと力強いもので、其內容は、主として其國史上(神話傳說上)の著大な人物、(神祇及び人間)、の事件に關する話であつて、さうして其主旨は國家の宣傳、國民道德の鼓吹であると共に、時局問題に對する暗示でもあり、指導でもあり、批判でもあり解決でもあり、やゝ墮落しては黨派機關の役廻りまでもして、反對派の諷刺でもあり、嘲罵でもあつた。もとより十分の娛樂ともなり、慰精獎勵にも役に立つたと同時に、民衆の趣味性を涵養して其の氣格を向上するの用も裨けた。アリストートルの所謂「淨化作用（カタルヂス）」とは、主としてそれをいつたのである。即ち、第一義高級の教化機關たるの能事を盡した上に、第二義低級の教訓機關としても有力だつた。其作者も、音樂者も、俳優も、すべて立派に參政權を有する市民であり、紳士であつた。主として有志者が國家の爲にする寄附興行であつたので、苟も市民である以上、自由に、且つ壹萬七千人位ゐは、常に一しよに入場することを得て、さうして劇場は野天式（オープンエヤ）、戸外式（アウトドア）であつたから、廣々とした靑天闊日の下に、近く、一方に、我伊勢の大廟ともいふべき神祇殿の屋蓋を仰ぎ、他方の眼下には、間近くサラミスの碧波渺々を詠めつゝ、萬餘の同胞が相團欒して、愉快な一日を別天地に過して、心廣く體胖かなるを覺えたのであつた。此戸外

式、野天式であつたといふ點が、先づ最も風化の目的に叶つてゐた。劇場が廣濶である自然の必要上、劇が音樂、舞踊本位となり、藝風一切が頗る大まかで、調子高であつたので、一層高大崇嚴の感を催せしめた。ともかくも彼のペリクリス時代までは、さうした有樣が持續されてゐた。

劇を經世上の一機關として善用した例では、これが先づ理想的で、市邑國家的制度の然らしめたのだとは言ひ條、他に類例のないことでもあり、同じ國家制を適用しない以上、恐らく再びしがたい特例でもあらうけれども、而も頗る心惹るゝ美蹟であつたので、近代の例の民衆劇の主唱者らは、一齊に隨喜渴仰して、何とかして其轍に傚はうと努力してゐる。戸外式、野天式の劇場の、歐米、就中米國で頻りに唱へられもし、着手せられもしてゐるのは、之が爲である。

第二の英米式といふのは、これは純然たる民間事業で、希臘式を經世本位とするなら、これは營利本位である。隨つて、教化よりも娛樂が本位である。時代と共に推移する公衆の好尙を逐うて、丁度淺草六區や千日前や新京極の興行物のやうに、其好尙に迎合し媚附しつゝ、其時々の出し物を定めて行くのである。此式は、無論、どこの國にでもあることではあるが、他に之に對抗するどういふ異つた興行式の國劇があるといふでもなくて、何百年間と押通して、只此式でばかり繁昌を續けて來たのは、歐洲の一等國では、英國が代表的であり、次に元が同民族であつた關係上、米國がそつくりそれを因襲して今日に及んだのであるから、姑らく此式を英米式といふのである。

なぜ特に英國に斯ういふ式が行はれたのかといふに、其根本因はアングロ・サクソン人種の實利主義、現實主義、マターー・オフ・ファクト主義にもとづくのである。藝術趣味には比較的疎い英國人も、流石に文學だけは、遲くもチョーサー時代からは、愛しもし、重んじもしてゐたのだが、劇となると、殊に劇詩としての劇でなく、興行される舞臺の劇——演劇——となると、沙翁のやうな大作家を出した國でありながら、まるきり營利本位の興行者に任せつきりにして殆ど全く顧みなかつた。今でもやつぱり顧みない。これは、一つは、例のピューリタン專制時代の遺毒でもある。で、主として英語を話す國では、劇が文化の一機關、一勢力と公認されて、社會もしくは國家の保護を受けた例なぞは曾て

無い。最近年に至つて、歐大陸の影響に動かされて、大ぶ劇を重んずる傾向が加はりか〻つては來たが、ロンドンにさへも、まだ正當に謂ふ國立劇場（ナシヨナルシヤター）は出來てゐない。

米國もまた、此の傳說を其まゝに繼承して、今日に及んでゐる。其劇が藝術としての內容、品位を缺き、風化機關としての效力の甚だ微弱なのは、自然の數である。

第三の歐大陸式といふのは、經世本位でもなく、營利本位でもない。假に藝術本位と呼んでおかう。ルイ十四世全盛の十八世紀の佛國の宮廷劇、及び其傳說を追つた其後の佛國の被保護劇、近くば大戰前の獨逸の重立つた宮廷劇や市立劇場の演劇なぞが其例である。國王なり、侯伯なり、爲政者なり、其他の要路者が、特に物質上の庇護を與へて、藝術としての劇の品位を保たしめ、兼ねて其向上進步を奬勵するのである。これは、遠くは伊太利の、例の文藝復興期（ルネサンス）の遺風であつて、主として拉典（ラテン）民族、特に佛蘭西人の趣味性に因緣したものである。最近では、獨逸がむしろ此式の代表者のやうになつてゐたが、其實、獨逸の此式も、其他の國の類似の式も、過去百何十年間の佛國の文藝的感化が然らしめたのである。

勿論、歐大陸の劇場にも、民間には、營利本位の經營に成るのも幾らもある。けれども劇場の基調音（キーノート）が、此等の被保護劇によつて奏（かな）でられるから、歐大陸劇は、大體に於て、比較的に、藝術本位であつたといつてよい。宮廷の、又市の演劇といつたつて、彼の希臘のそれのやうに、宗教的を兼ねた國家的の嚴肅な式典といふ程ではなかつたが、足利氏、德川氏時代の我能樂程度には式樂視された場合も屢々あつたので、おのづから高雅でも優美でもあつた。民衆の趣味、好尚、風儀及び思想上に於ける感化影響に重きを置き、いよ／＼國俗を高尚にも都雅にもならしめようと力め、劇の內質及び形式の切磋琢磨を奬勵した結果、作や藝風に對する官僚的監督者の干涉は自然と煩はしくなつて來ざるを得なかつた。さういふ弊はあつたが、藝術としての品位は、其お庇で、久しく保持せられてゐた。で、其作には、千古の傑篇と稱せらるべきものも大ぶあつた。五大美術の綜合だの、詩と哲學と優技との大調和だのといふことは、歐大陸式にし

て初めて言ひ得られることなのであらう。藝術としての劇の發達は、此式を弊の生れないやうに進めていつたら、比較的最も完全に行はれたであらう。人生の微妙な理趣を具體化するといふ點から言つたら、或は、希臘式のそれよりも、一層精緻であり、深刻であり、更に切實でもあつたらう。少くとも此式が社會の趣味、好尙、風儀等の上に淺少でない感爭力があつたには相違ない。其點は幾らか我能樂の例で類推される。

ところが、此式の弊をいふと、次第に高雅癖が募つて來て、それが形式となり、拘束となつた結果、おい／＼神經質となり、臆病となつて、無難、無害、無弊を第一と立て、主として多年試驗濟みの古典物（クラシック）又はそれに類似の品（ひん）のよい健全な作ばかりを演ずるやうになつたことである。かうなると、自然と、時代精神に遠ざかる。藝術としても、其内容が枯渇して來るから、所謂藝術本位が、必然の勢ひとして、形式に墮して、技巧の末にばかり流れるやうになる。戰前に於ける獨逸の自由劇場運動が各國の同種運動に比して、最も猛烈であつたのは、一はそれら標準國劇の積弊に堪へかねたからであつたのである。

四

ところで、我國の劇の過去はどうであつたらう？　今擧げた三樣式の中の、どれが我國では行はれてゐたであらう？　我劇の過去が純然たる英米式であつたことは明白な事實である。さうしてそれは止むを得ない進化の自然であつた。我劇は、三百年といふ長い間、全く自由に蔓延的生長を許されてゐた野生藝術である。國家は、其發達の途次に於て、屢々苛酷な干渉をも鞭肘をも加へたけれども、それは專ら治安上、風紀上の沙汰であつて、藝術上は、全くの放任であつた。風紀の取締りと驅鬪して、藝風の上なぞに餘計な邪魔な世話燒きはしたことがあつても、決してそれを善導したことはなかつた。だから、我儘ッ兒が、野育ちに生ひ立つやうに、我劇は、三百年間、始終一貫して、只もう娛樂本位一點張、時尙迎合主義を專門に、だらしのない幇間根性で、青年期をも壯年期をも老衰期等をも經過した。「おれは最

機關だぞ」などといふ自覺や抱負は、人傳に聞いたことさへもなければ、夢に見たことさへもなかつた。たゞ「事を見近に取つて義を勸懲に發す」を近松から孫引きにして、

「いやさ、此芝居といふものは、すべて世間の流行り事を取組んで狂言にする。又お染久松、八百屋お七、古手屋八郎兵衛とやら、鰺に去年の春の五人斬り、皆根が色事より其身を果し、世を暗し、親兄弟に難儀をかける。いかに若い者とて、芝居をつい、慰み、只狂言とばり見るは無心、無駄といふもの。勸善懲惡それぐにさ。さればこそ萬代不易、太平の道具、四書五經より其合點の行く近道の學文。其身に引比べて、兎角愼むが肝要々々。

などと、「無學の早學問所」を以て自任するのが關の山であつた。勸善懲惡も、普通の戲作者並で、馬琴の主張にさへ遠く及ばなかつた。で、脚本は俗受第一の淺劣なもの、藝とても技巧本位であつた上に、作意も、藝風も、本來が遊戲氣分で出來てゐた劇なので、頗る不眞面目で、そこに多少夢幻的な、飄逸な、洒脱な、無邪氣な、とにかく他國の劇に見出だしがたい不思議な特質がないでもなかつたが、要するに、髭のある子供のお伽芝居ともいふべきものであつた。すなはち、いつも遊戲精神が、(時勢につれて、半無意識に眞面目さを加へつゝも)、三百年間を一貫してゐたといへる。さすがに、我劇の黄金時代であつた享保以後、天明、寬政には、今言つた飄逸な、無邪氣な、夢幻劇としての妙趣が豊かであつたが、もう其爛熟期の文化文政となつては、況んや其墮落期の天保、弘化、安政、文久となつては、次第に寫實味を加へて、眞面目になりかけて來たゞけに、尙と其作意の陋俗や淺劣がたまらないものになつた。耳目の娛樂を主として、厭陳需奇の俗情を挑發するのに全力を注ぐの結果は、我當時の劇の當事者は、——興行者も、作者も、役者も、あらゆる野卑、あらゆる猥褻、あらゆる殘忍、あらゆる醜怪、あらゆる淺ましさ、あらゆる物すごさ、怖ろしさいやらしさ。氣味わるさ、つまり、どんなたまらないものをでも、極めて麗々と、極めてあくどく、精緻に、深刻に、且つ頗る寫實的に、之を舞臺に具體化することを避けなかつた。文化の末から安政頃までの江戶、大阪の演劇は——地方のは言ふに及ばない——若し何等かの感化力があつたなら、それは煽情的であり、示唆的であつて、市井の風俗を壞

亂腐敗するものであつたといつてよい。

明治の初め、維新の風雲が漸く收まつて、各方面の秩序が回復されるやうになつてから、劇界の機運もやツと革まつて來た。いつとなく、活歴劇と後に名の附いた一種のやゝ上品な、大ぶ眞面目な劇の卵が孵化りはじめた。同時に、少しづゝ〳〵舞臺上の風紀が取締られて來た。それは、新社會の劇に對する攻撃の餘波がおひ〳〵調子高になつて來たからである。其餘波は主として洋行歸りの顯官連や紳士や劇を愛好する和漢洋の學者連の間から起つた。はじめて演劇改良會といふものが出來たのは此際である。(明治十九年八月)。

下名等深く世態人情に感ずる所ありて、今般演劇改良會を設立す。本會の目的とする所左の如し。

(第一)從來の演劇の陋習を改良し、好演劇を實際に出ださしむる事。

(第二)演劇脚本の著作をして榮譽ある業たらしむる事。

(第三)構造完全にして演劇其他音樂會、歌唱會等の用に供すべき一演技場を構造する事。

此三目的は素より聯續して相離れざるものたるが故に、一を欠けば則ち不可なり。故に本會は三目的とも合せて同時に之を擧げんとするものなり。今や我邦の演劇は、猥褻野鄙、紳士淑女の眼に觸るべからざるもの多し、蓋し舊習に拘泥し、猥褻野鄙にあらざれば觀者の耳目を樂しましむるに至らずと妄想し、世と共に變遷することを知らざるに因れり。宜しく之をして高尚なるも人情に違からず閑雅なるも世態に背かず、優美と快活とを兼ね備へ、樂んで淫せず、和して流れず、上等社會の觀に供して恥づる所なきの域に達せしむべし。是れ本會の目的とする所なり。

發企人中には井上馨、森有禮、澁澤榮一、三島通庸、なぞの名が見え、穗積陳重、外山正一、矢田部良吉、福地源一郎、矢野文雄、中上川彥次郎、末松謙澄、藤田茂吉、和田垣謙三、なぞの名も見え、贊成員中には、伊藤博文、大隈重信、前田、西園寺、鍋島、三井等の名も見えてゐた。

此會はやがて仆れたが、廿一年には田邊太一氏を會長とした演藝矯風會が、

凡ソ人ノ業トナスモノ世ニ鮮カラズト雖モ、就中本邦演藝ノ如キハ一種固有ノ長所アツテ、最モ人心ヲ樂シマシメ、且ツ暗ニ氣格ヲ高尚ニスルモノナリ。然ルニ今ヤ野鄙猥褻ニ流レテ、淑女紳士ノ賞翫スルニ堪ヘザルノミナラズ、又以テ風俗ヲ亂ルコトナシト云フベカラズ、想フニ其原因一ニシ足ラザルベシト雖モ、昔時ヨリ技藝者ガ廣ク世ノ識者ト交通セザルガ如キハ其最モ大ナル原因ナルベシ。仍テ玆ニ一會ヲ設ケ、從來隔絶スル所ノ識者ト技藝者トヲ相密着セシメ、以テ大ニ矯風スル所アラントス。云々。

と主張して起り、それが廿二年になつて、組織を改正し、日本演劇協會と名宣り、會長には伯土方久元、副會長には子香川敬三を戴いて、ほゞ同じやうな主張で演藝の事に携(たづさ)はつた。

此三協會は、いづれも中途で解體してしまつたが、それでも、（藝術としての劇の本領をどう向上せしめたともいへなかつたものゝそれでも、此運動以後、實際酷(ひど)かつた舞臺上の風紀が、目立つて振肅された。同時に、劇の題材も、作意も、用語も、舞臺裝飾も、扮裝も、藝風も、色調一切も、比較的に、見よくもなり、品よくもなつた。殊に、國史に關するものは、成るべく大體なりとも正史に依據して、風俗の如きも、成るべく有職故實的に、且つ成るべく忠勇、義烈貞淑、賢良等の実徳鼓吹に用立つやうにと仕組まれた。所謂濡れ場其他の猥雜は最も忌避せられた。或種の穿細な犯罪行爲なぞは段々禁止されるやうになつた。殘忍行爲や慘烈な自殺なぞのはうは、つい此間までも、（或は時としては今も）、大概は看過されてゐた。つまり、これら改良運動の藝術上に於ける功過は、先づ相半するといふところであつたが、舞臺上の體裁の向上には、隨分與つて力があつたといつてよい。

けれども、これら知識の上流の協力も、明治天皇の叡覽も、グラント將軍歡迎の上演も、活歷の本尊ともいふべき名優團十郎の勢力も、我劇を營利本位の興行習慣から只の一歩も脫出せしめることは出來なかつた。我劇は大正八年の現在までも、依然として大俗の娛樂機關たる本來性のまゝで存續してゐる。で、民衆の慰安機關としても、只ほんの慰藉(リフレシ)品(メント)式の、當座だけのもので、茶や菓子やサイダーやビール程度のもので、それとしても日本酒やウイスキーが起さす程の附け元氣をさへ鼓舞し得る力がない。少くとも現代の必要に適するやうな新生命力は、今の我劇によつて鼓吹されさ

うにはない。教導機關としても、淺近凡劣な、古風な、時代おくれの、——現代とは何の交渉もない勸善懲惡主義以外の意味では、——何の働きもしてゐないやうなのが、我刻下の演劇の全部である。

では、せめて藝術上から見て、何等かの取り所があるかといふに、もと〳〵脚本其物が時代錯語なのだから、たとひ俳優が十分其作意と同化することが出來て、且つ衆俳優が十分一致協調して、忠實にし活し得たとしても、尙且つ今人には感興の薄かるべきだのに、彼等各自の心理と作其物の本來との間に和諧がなく、無論同化の妙趣なぞはなく、おまけに彼等めい〳〵の間に協調も一致もないから、綜合藝術としての圓滿な效果が擧がらない。それに俳優らの生活が、近來は殊に裕かだから、實際死身になつて藝に力を盡さうとするやうなものはない。で、彼等の努力は、たかゞ小手先の技巧に過ぎない。

以上は、主として舊劇（歌舞伎劇）に就いていつたのだが、所謂新派も、それに似て、更に幾らか劣つたものである。新劇團と特稱される此六七年このかたの成立のものとても、今では全く同じ桁の中の尻尾の方へ彈き込むより外に仕方のないものになつてゐる。此最後者の中には、初めは、少くとも藝術本位の劇を興したいと抱負してゐた者もあつたし、最初は思想劇だの、問題劇だのと標榜して、專ら飜譯劇を神輿にして、時に新思想の鼓吹を兼ねたらしい小劇場運動に從事してゐたものもあつたが、それらも大抵境遇に驅られて、今は營利本位の大劇場主義か、娛樂本位の迎合藝術かに墮してしまつた。

これが我演劇の現狀であるとすると、世界の此大改造期に際して、我國では、先づ第一に、此一機關から改造してかゝらなければならないといふことは、多く辯ずるまでもないであらう。

五

國民文藝會が起つたのは、此關係から見ると、機宜を得てゐるといへる。けれども、私は、過去の演劇改良會や演藝

婦風會や演劇協會の貢獻の、少くとも經世的の意味や藝術上の本意からは、頗る薄弱であつたのを記憶してゐるから、それらと大ぶ類似してゐて、而もそれらよりも咄嗟で、何となく用意が足らぬらしく疑はれた同會からは、餘り多くを期待しようとは思はなかつた。けれども、とにかく時代がずツと進んでもをり、前に言つたやうな必至の要求が押迫つてもをるし、それに、關係した文士連は、世界の大勢にも熟通してゐる刻下文壇の嫡々でもあるし、相談役とは言ひ條、どうしても其首腦者と見做すべきは現國務大臣である。彼の明治の三改良會さへも、舞臺上の風儀や體裁ぐらゐの改善には用立つた、勸善懲惡主義を維新間際の勤王精神に副はせるぐらゐの働きはした。國民文藝會の風教裨補は、少くとも刻下の對外關係、もしくは內治問題等に關して何等かの暗示もしくは自覺に便にしようぐらゐの處には及ぶのであらう。會規百何十ケ條と公言して、次に揭ぐるが如き設立宣言をして起つた以上、——文藝及び其社會的作用の一般的進步の爲、即ち相談役の內相得意の民力涵養を暗示する社會敎育の作興を標榜して起つた以上——藝術に依る民力涵養とは多少新生命力の鼓舞といつたやうなことでもあらうと思つたから——少くとも佛のウジエーヌ・モレルやロメン・ロランぐらゐの抱負と研究と準備とはあるだらうから、慰安機關、敎導機關としての劇の作用に何等かの新しみぐらゐは附加へられるだらうと思つてゐた。

先づ左の宣言を見たまへ

國民文藝會設立趣意書

國民生活の諸問題が漸次に思想問題の色彩を帶び來り、社會的機構の一切が健實にして而も彈力ある民衆の思想力に保持せらるべきは、輓近世界の諸事變が吾人に明示するところのものなり。而して政治、敎育、其他に於ける國家の諸機關が、一國の思想生活に及ぼす影響は素より甚大なりと雖も、その及ぶところの廣く、その動かすところの深きに於て、遂に文學藝術に若かず、是れ吾人が玆に相結びて本會を設立し、文藝、及びその社會的作用の一般的進步の爲に相謀らんとする所以なり。

就中、演劇は各種の文學、藝術中、各社會階級を通じて世人の親炙すること最も廣く、その社會的影響の深甚なる到底他の企及するところにあらず、而も顧みて我が劇界の現狀は如何。動もすれば刻々進展して止まざる國民の思想生活に乖離せんとするもの、是れ吾が劇界の現實にあらずや。茲に於てか吾人は先づ指を演劇方面の刷新に染め、漸次他の文學藝術に及ぼさんとす。

單に演劇刷新の一端を志すも、吾人のなすべきこと甚だ多岐にして、その凡てを盡さずと雖も、才能ある作劇家、俳優、舞臺監督の奬勵養成の如き、傑れたる新舊脚本を推薦して之を適當に上演せしむるが如き、更にまた兒童、或は勞働者の爲の適當なる演藝を上場せしめて社會教育の作興に資せしむるが如きは、その最も緊切なるものゝ一端なり。是等は社會全般より見て喫緊の問題たるのみならず、劇界當事者も亦其將來の爲、決して等閑に附し得ざる所たるべし。

吾人の企圖するところ素より廣汎なり、而も吾人の求むるところは施設にあらずして精神なり。事業にあらずして力なり。而も力は少數個人の區々たる努力によりて贏ち得べからず。是れ吾人が廣く天下の同志に訴へて、その協力を仰がんとする所以なり。

太正八年四月

發起人

伊丹然　岡鬼太郎　大島直道
小山內薰　吉井勇　田中純
長田秀雄　長崎英造　久保田萬太郎
久米正雄　小村欣一　里見弴
結城禮一郎　三宅正太郎

相談役

床次竹次郎

けれども、第一回公演として「夜明け前」といふ劇が新富座で興行されるに及んで、私は念の爲に更に「日本魂」といふ雜誌から轉載されたとある床次內務大臣の談といふのを讀んで見た。さうして其他同會の理事達の說をも讀んで

見た。「夜明け前」の筋書をも讀んで見た。尙それを觀て來た人々の話をも聞いて見た。さうして私の豫期は、やつぱり買ひかぶりであつたかと感じた。

「日本魂」に載つたといふ一文中で、床次氏は——談話筆記とも思はれず、さうして文句が大ぶ生硬で、何となく若手の文士らしい臭味を帶んではゐるが、同氏の名の署してある一文中で、下のやうに公言してをられる。國民文藝會は

> 廣い意味に於ける演劇並びに其社會的作用の一般的進化を圖るため

に組織したものと言ひ、又

> 現代の藝術は革新を要するまでに低下したとは衆說の一致する所……此運動によつて民衆藝術進展の上にも、將た社會風敎の上にも效果を收めたい。………國民の感情を敎育し、民風の頹廢を振肅し、藝術の神聖を尊重し、之を改善指導すると共に民心の醇化を期するは、藝術其者に取つても、本來の面目であり、又藝術家としても崇高なる天職である。

といひ、又、

> 藝術其者を以て單に風敎上より打算するとしたならば、餘りに藝術の眞を解せないものであらう。しかも藝術が徒らに低級觀衆に迎合して至純を缺いたならば、其神聖を冒瀆するものであらう。

なぞともいつてゐる。これだけを聞くと、風敎裨補が第一の目的らしくはあるが、藝術としての劇に對しても十分の理解と同感とを持つてゐる人らしく想像される。むしろ、藝術としても優秀なものを推薦し、それによつて、風敎を裨補して行かうといふのかとも思はれる。

ところが、又別に、斯ういふ言葉がある。

> 近時所謂民衆藝術が退化の傾向あるのみならず、動もすれば頹廢の氣分に滿ち、人心に惡影響を及ぼしつゝあることは人からも屢々聞いたし、

自分もまた爾承知してゐる。………

自分には

部分的には説明することは出來ないが、近時頽廢せる民衆藝術が少からず社會に惡影響を流しつゝありとすれば、之を改善し指導する運動に對しては及ぶ限りの力が盡したい。

これで見ると、同氏の本意は前の趣意書と全く同一で、風教裨補が主眼で、明治十九年の演劇改良會の主張と大ぶ似たものであるらしくも思はれるが、それにしては、事實上に錯誤がある。何となれば此「頽廢」とか、「人心に惡影響」とかいふ文句が、殆ど空言に近いからである。

前にもいつた通り、我劇の現狀は、享保、寛政、文化、文政度を標準としていへば、今は無論頽廢には相違ないが、それは主として藝術的にいふことで、教化機關としてゞはない。明治初年頃、いや、其十何年頃までは、慥かに人心に惡影響を及ぼしかねない氣味があつたので、それが即ち彼の三改良會を呼び起した主原因だともいつてよいのだが、それはもう過ぎ去つた話である。明治末年からは、どういふ意味からいつても、殆どもう無能なのである、消極的なのである。老朽なのである。善意義にも惡意義にも、何の感孚力も影響力もないのである。それを評して衰耄とか、沈滯不振とか、無害無益とかいふのは當つてゐるし、頽廢といふのも、藝術上としてなら是認が出來る。けれども「惡影響を人心に及ぼしつゝある」とは何の事だか？ 部分的も全體的もない、藝術としても、教化機關としても、娯樂機關としてさへも、殆ど全く消極的だといふべきものが今日の我劇である。最も有力なのが餅菓子かビール程度の慰藉品（リフレッシメント）作用をしてゐる。其以下は見たとこの綺麗なばかりの上等干菓子かサイダー、ラムネといふところである。一時心を陶醉させるアルコール格のものさへもない。虎屋の干菓子が如何に品よく綺麗だからつて、それを臟胃を害するまでに貪食するものは、子供にも、今は無い。又ビールに醉つて亂暴を働く者も少ない。今日の風俗に對しては、むしろ生々（なま〳〵）しい未熟の果實に比すべきものゝはうが警戒を要する。未熟だから危險なばかりでなく、腐敗する恐れもあるからである。斯う

考へると、國民文藝會は、舊派や新派の改善に手を着けるよりも先に、專ら小劇場式の新しい劇の振興を標榜し、直ちに時代の要求に肉迫したはうが、ずつと其主張に剴切であつたらう。幸ひに其方面の經驗家は幾らも同會の理事中にあるのだから、新劇の未熟や腐敗を防ぐのは容易な仕事であつたらうから。とにかく、舊演劇や新派劇は特に風致機關としてはもう殆ど何等の惡感化をも與へ得ない程度に乾涸つたり、萎縮したり、銷沈したりしてゐる。彼等には六區の歌劇だけの魅惑力も痲醉力もない。

で、私は、國民文藝會は、なかば間違つた前提から出立してゐると思ふ。けれども論理は論理、實際は實際である。同會が「國民の感情を教育し、民風の頽廢を振肅し、藝術の神聖を尊重し、之を改善指導すると共に民心の醇化を期す」るために提供した新作劇が、たとひ宣言通りとはいへないまでも、主張の幾分かに相當した效果を收めさへしたら。何のいふこともないわけである。

六

新富座の「夜明け前」はどんな劇であつたか？　新聞では好評でなかつた。不入でもあつたさうな。けれどもそんなことはどうでもよい。新聞の劇評は通人過ぎることもある。皮肉過ぎることもある。何等かの情實が評者を拘束することもあるらしい。意志の疎通を缺いた結果、偶然の感情齟齬が批評を酷にする例もあるらしい。或は、作意が時尙に先んじ過ぎてゐるので、一般受けがわるいのかも知れない。で、私は、更に「夜明け前」の筋書を讀み返して見た。それから觀て來た人々に其印象を聽いても見た。さうして大約の處は分つたが、それでも尙、迚も自分で觀た程には分らないから、姑く藝術上の評價は控へておく。が作の要旨はそれに關する作者や主な理事達の話が公表されてゐるから、それを綜合して見ると、ほゞ明かになる。或理事は「新派の芝居を活すため」に作られた作だといつて「一人の貴族も貴婦人も藝妓も出ない」點や「夜會も宴遊會も西洋室も海岸もない」點や「從來の新派の芝居とは全くイキのちがつた」點

が其特色だといつてる。或理事は「幾分當今の思想問題に觸れてゐる積り」といひ、他の理事は「社會感化といふ點からいつても其主旨を貫徹したもの」といつてゐる。又或理事は「どれほどの惡人、どれほどの惡行爲の底にも、必ず何か善いものがあり、力強いものがある。其物こそ人性の光りで、……其光りを自覺するもののみが救はれるといふ意味が此作に於て」現されてゐるといつてゐる。これらによつて見ると、「夜明け前」は、床次氏の宣言通りの「民衆藝術進展の上にも、社會風教の上にも效果を收めたい」、といふ主意に副つた作と理事達自らも認めてゐるらしい。が、同會の第一義は劇の社會作用であるとすると、民衆敎化を閑却するすけにはいかんから、私は先づ此「夜明け前」が果して何事を敎へようとしたかを考査したいと思つた。どういふ點で「當今の問題に觸れて」ゐるか、どういふ風に「社會敎化の主旨が貫徹してゐる」か、どういふ懺悔に改悟遷善の心理作用が具體化されたか、先づそれが知りたいと思つた。

「夜明け前」の印象は、明かに有力なものではなかつたらしい。眞實味も、自然味も乏しかつたといふ。主題は無智放埒な下層社會の無賴の徒の間に、幾分か人性の美點を遺存し若しくは或光明を認めかけてゐる男女の主人物がよれつもつれつしてゐて、遂に——それには救世軍の感化も手傳つて——闇を脫けて明るい方へと辿つて行くといふことであるらしい。即ち破落戸と盜癖のある女との悔惡遷善を主な經(たていと)にして、經緯(たてよこ)にいろ／＼な縞を織りまぜた一種のメロドラマであつて、脚色の技巧からいふと、大して在來の新派劇のそれと異つてゐるとも思はれない。勿論、人物や場面の扱ひ方には多少の新味があつたやうだが、寓せられた敎訓はむしろ曖昧で、改悛の動機の如きも、宗敎のためだか、戀愛のためだか分かりかねたと或人は評してゐた。それから、本來が米國の或る作の翻案であるとかで、鑛山生活や裏店生活の皮相が念入りに寫實されてあつた割合には、どう我現下の思潮に切實なものもなかつたらしい。隨つて、普通の舊式の勸善懲惡の立場から見ても、それがどう斬新に取扱はれてゐたといふこともなく、而も彼の默阿彌の異曲同工の作の、安政時代の江戸民衆を動かし得た程の切實もなかつたらしい。本來、盜賊や無賴漢の改心なぞといふことが、果して敎訓として、刻下當面の主要な主題(テーマ)であるだらうか？彼等は濱の眞砂の盡きる期のないものでもあらう。先づ除くべき社會の

德であるでもあらう。「盗む勿れ」、「殺す勿れ」、「姦する勿れ」、なぞは千古不易、常住不變の訓誡箇條でもあらう。けれども、其の悔悟遷善に、どうとかいふ日本の刻下に特存の動機、大正の今に特有の關係か何かが寫し添へられる必要がない以上、何もさう慌てゝ此主題で新作せずとも、幾らも古い作で間に合ひさうではないか？ 例へば「レミゼラブル」を翻案したはうが、いろ〳〵の關係上、もう少し深い教訓を與へさうではなかつたか？ 默阿彌の「白浪劇」の或物を幾らか添削しても見事役立ちさうではなかつたか？ 「十年以後を俟て」といふほどの抱負自重に對しても、此間に合せは矛盾でないか？古い訓誡を主題とするくらゐなら、なぜ「詐る勿れ」を取らなかつたのであらう？この方が現代には適切である。殊に、我國に取つてはである。詐る者、欺く者、言行不一致の僞善の徒は、遺憾ながら我社會の上中下に瀰漫してゐるといはねばならんからである。

「夜明け前」は、教化のために書かれたものとしては、主題も取扱ひ方も、たとひ時代おくれでないまでも場ちがひであるから、彼の會の宣言には副ひかねたものだと思はれる。

では、勞働者階級の慰安機關としては役に立つたか？刻下海外で民衆劇を起さうとするのは、其主張も方法も必ずしも同一ではないが、要は此世界改造の大時機に際して、活潑々地に活動し得るための新生命力を涵養せんため、即ち元氣を皷舞せんための計畫である。だから、自由、自然、簡單、雄大、崇嚴、快活、剛毅、勇壯、强健、活潑なぞといふ感銘を見物人に與へるのを先とし、陰暗、沈鬱、不快、猥雜、淫靡、窮屈、孱弱、慘酷、誇張、虛僞、煩細な理窟、女々しさ、みじめさ、病的、感傷的、悲觀、厭世、絶望なぞいふ神經衰弱を誘起するやうなサゼツションを忌避するのを要旨としてゐるといつてよい。殊に、佛、米の主張は、大抵さうである。戸外劇場、野天劇場が唱へられるのは、前にも言つた通り、畢竟、新興國民の志氣を皷舞し激勵せんが爲である。元氣の皷吹、生命力の激勵、是非とも、それが今後の新民衆劇の第一の使命でなければならん。戰前の露獨の神經衰弱性の或作や明かに衰耄國であつた墺國（オーストリヤ）の舊作品の如きは、今は寧ろ參考品室内に陳列せらるべきである。小劇場用としてならば兎も角も、少くとも爲政家、經世家が劇

下の任務として藝術運動に携はる場合の理由は、此使命、此目的を閑却して當然であらうか？

「夜明け前」はさういふ使命、目的に適つてゐたか？

或はさういふ用には立たなかつたとしても、普通の慰安機關としては成功したか？大阪の「さかえ日」の劇と比べて、觀客一般に於ける印象はどうであつたか？ 彼等が雁次郎、梅玉、福助の「土屋主税」や、雀右衛門、延若らの「女舞衣」や曾我廼屋十郎の「お祖母さん」なぞから得たゞけの滿足や愉快や歴藉を、果して「夜明け前」から得たであらうか？「さかえ日」に於ける道頓堀の四座は、定員四千六百人の中から、千人分だけは無料で、或種の勞働者を、三千六百人分は、各十錢づゝとして、やゝ餘裕ある職工階級を入場せしめたといふ。松竹會社白井興行主の發企なのであつた。慰安機關として、──常規通りの入場料を取つたのは別問題として──「夜明け前の」效果は果してどうであつたらう？

これは觀た人達に尙よく聞いて見ねば分らないことであるから、姑く預りにしておく。

併し何事もさう初めから思ふやうには行かぬが常である。同會の理事中には、五年、十年の後を見てくれといつてゐる人もある。では、私は第二次、第三次、第五次、第十次を待つことにしよう。只今苦言を竝べたのは、つまり、其將來に重きを置くからのことである。

七

序だから言ふが、國民文藝會は尙別に、講談、落語、浪花節、其他の寄席式興行物をも民衆敎化──社會敎育──の道具に使はうと企圖してゐるらしい。就中、浪花節は、相談役が初めて聽いて隨喜讃歎して、直ちに民衆慰安御用係を浪花節語り某に下命したとかいふことを新聞の記事で見た。此考へは、必ずしも同相談役ばかりでなく、存外廣く我劇下の上中流社會の諸方面に同感者贊成者を有してゐる。新聞紙が其讀き物の一種として、今尙──何十回目か知れない、

──講談筆記の掲載を廢めない理由の一つはこゝにあるともいへる。たとひ贊成者でないまでも、生々しい、さうして頗る切實な今の小說のそれよりも、此方がまだしも干乾びて、大味で、輕燒のやうで、子供の胃に障るまいといふだけの理由で、比較的歡迎される。差引した所、前段に舊劇(歌舞伎)に對して、私が言つた通りに、害もなければ、益もないのである。玩具の竹刀のやうなものである。昔は玩具でも、竹刀を持たしておけば、撃劍の眞似事をしたりして、自ら武を好む導きともなつたが、今なら、まだしもやゝ精巧な擬軍艦か擬飛航機か、擬電氣機械かのはうが、(功利本位からいふと)有益であると同じに、講談や、落語や、浪花節も、若し其內容を全く根本的に改造して、ずッと時局に剴切なものとしたなら、多少の敎化用に役立つでもあらう。すなはち、忠臣、義士、節婦、貞女、孝子、俠者の犧牲的精神は、其健げさ、勇ましさ、雄々しさは、時代精神は變つても、今尙多少人心を感動させるには相違ないから、さうした人情を利導するのは不當ではない。けれども其主人公の人格や主義や理想は、到底現代に其まゝ適用が出來ないものだとすると、折角得た感動も、つまりは程なく立迷つて消えてしまふか、或は飛んだ間違つた適用に終りかねない。例へばお身代りの子殺しや、親の爲の身賣りや、氣早の自殺や、忠義の暗殺や、虛榮まじりの任俠なぞは、勿論將來の道德ではない。だから、例によつて例の通りな「義士銘々傳」や「大岡仁政錄」や「水戶黃門記」や「伊達騷動」や「幡隨院長兵衞」やそれらに類似の干乾びた話が、今尙そのまゝで此大改造の用に立つと思ふのは、氣の脫けてしまつた或藥液が、猖獗を極めてゐる世界風の注射用になると思ふと一般の謬妄である。ことしの六月號の「中央公論」に渡邊法學博士が、中々の名文で、三千何百軒を一嘗めにしたあの橫濱の大火に於ける現代式耐火建造物の大動功を讚美賞揚すると同時に、幾十臺のポンプ隊の防火效績の微弱無效なのを歎息してをられる。私の見る所では、浪花節や講談は、どう改造して見ても、現代式のポンプ以上の作用を、燎原の勢ひで波及して來る世界思潮の或種の猛燄に對しては持ち得まいと思ふ。況んや舊式ポンプの陳講談や龍吐水にも比すべき落語、人情話のへろ〳〵水にかてをやである。われらは、先づ何よりに先に、われ〳〵自らの思想の根柢を鐵筋コンクリートにすべきである。われ〳〵各自が鐵筋コンクリートの──おの〳〵其

持前相應の、大、小、長、短、太い、細い、さま／＼の——國の柱となり、柄となり桁となり、梁とも棟ともなつて、日本國を耐火建造物とするより外に仕様はない。舊式ポンプのへろ／＼水なぞは、此世界的大火災に何の役に立つものかし

八

上來屡々反覆して論じた通り、私は飽迄も第一義論者である。劇は希臘式の經世式以外の方法では使用されたく思はない。立派な文士が藝術的立場から書いた作でさへも、時局に剴切ならしめようとする意氣精神が熾んであると、兎角第二義の教訓に類する一種の臭ひが鼻を撲つ。少くとも甚だ主觀的になる。私は昔からそれを好かない。私は此意味に於て、イプセンをすら餘り好かなかつた。もつとも彼のショーやブリユーの如きは、前から第二義を標榜して書いてゐたのではあるが、さうして其意味に於て、私は、あんまり好きではなかつたが、ショーは、別にヒユモリストとしての特色があり、筆が冴えてもをり、又二人とも、其作の根柢には藝術的資質が相應に豊かなのだから、第二義に墮し盡すやうなことはなかつたのだが、彼等以下のとなると、其寓された思想に新舊の別こそあれ、淺田飴に對するスコツト乳菓たるの嫌ひを免れないのが隨分ある。さういふ作は、所謂新思想級に屬する人達には隨分現代の傑作として推讃もされ歡迎もされるが、舊思想級の人達には兎角非常に危險視される。丁度、良妻賢母主義や忠臣孝子主義を皷吹する舊式のまゝの教訓劇が老人連に隨喜され、青年連に唾棄されるのと逆關係の同一程度だと思へばよい。練藥の龍眼肉も口に甘く、スコツト乳菓も口に甘いが、双方ともに藥臭い點は同じである。さうしてそこに、藝術品としての、又風化機關としての利弊が存する。が、此事に就いては、既に嘗て「教化と演劇」といふ一著の中でも、相應に詳しく論じておいたから、今は省くが、刻下のやうな大時機に際しては、劇の第二義の利用法も、それを藝術として墮落せしめる虞れさへないならば、敢て必ずしもて忌避するには及ばない。露の過激派や獨佛其他の社會主義者らの要求するやうな、露骨に革命思想を激成したり、又時代精神を煽動したりするのは、經世上、藝術上、双方の立場から見て、共に私の是認しな

い所のものだが、擧國大改造の準備として種々の點から國民の自覺を鼓吹する作の如きは、作者に其自覺が有りさへすれば、敢て爲にする氣が無くつても、自然に出來さうなものである。いや、出來なければならないのである。何となれば、一體、其時代に出來た作で、表面は其時代の社會を直寫してをると見えながら、何となく外國風俗の作り替へでもあるかのやうな、時局とは殆ど風馬牛な作意のものは、それは言はゞ、外戚腹の作である。作者が眞に詩人らしい人情の厚い人格である以上、苟も其時代に題材を取る以上、特に求めずとも、其時局が映寫せられ、其殆ど必然の結果として、其刻下の重大な諸問題との衝突や抵觸が暗示せらるべきである。さうしてそれが、其作者の人格――見識――力量――次第で、自然と諷刺ともなり、訓誨ともなり、豫言ともなり、號令ともなるべきである。さういふ作は、たとひ多少の第二義教訓が籠つてゐようと、スコット乳菓には成り切りはしない。至誠が人を動かす。イプセンは勿論、彼れの顰みに倣つた近代の作家の多くが、一時頗る讀者、觀者を動したのは、時局を當込んだ爲ではなく、其作意に衷心の誠が籠つてゐたからである。其作意が只の模倣でなく、受賣でなく、借り物でなかつたからである。翻譯でなく、翻案でなく、當座の適用物でなく、一寸した思ひ附でなかつたからである。因襲道徳の時代おくれの鼓吹は、十中八九までの場合は、無效に終つて、何等の益のないと共に、どういふ大した害もなくて濟むが、革新思想の鼓吹は、前に言つた生々しい果實で、それが未熟であつたり、腐敗したりしてゐると、少くとも子供の胃腸を害する。勿論其眞誠だけはせねばならぬ。又、得て斯ういふ時節には、際物師や、模倣者が輩出する。衷心の誠の切實に籠つてゐない新思想の鼓吹は、とかく害はあつても益がないから、避けねばならぬ。

九

明治、大正の社會事相を題材に取つて書いた現代劇は、(新派の臺帳は、殆ど悉くそれであるから)、既に隨分澤山あるわけだが、意外にも時局に剴切なものは數へる程もない。これは一つは、內務省、警視廳の檢閲が、其標準に於て不條

理を極め、其檢閲眼に於て沒分曉を極め、且つ其制裁が頗る苛辣煩細であつたからでもあるが、どちらかといへば作者みづからの對時局態度の冷淡が其主因だといへる。卽ち、とかく自己本位の個人主義的態度でばかり時局に對してゐるからである。だから、時々多少問題劇風の、諷刺味に富んだやうな現代劇を書くこともあるが、それが存外剴切でない。頼まれて傳聞を種にして書いた仕入れ物のやうであつたり、外國の作の燒直しのやうであつたり、で無くも外國人の作意の適用たるに過ぎないやうな感じがする。さうしてそれがやうではなく、事實であるともある。或は又、外國の作を通して得た人生知識の方が、時局の實際に觸れて得たそれよりも遙かに多く、隨つて彼れと我れとの風俗人情の差が十分會得されてゐないといふやうなこともあつて、日本にも西洋にも、何處にも有りさうにないやうな妙な人物や交渉が、皮相だけは、如何にも現在らしく假裝されて舞臺に現はれることがある。文藝專門家連は、頻りに現在の我爲政家や經世家や實業家なぞの、擧つて文藝に皆目盲人で、フイリスチンたるの甚しいのを罵倒してゐるけれども、彼等自身とても、少くとも劇に關する限りでは、あんまり大きな口は叩けさうにない。たとひ世界の大勢までが、どう徹底的に解つてゐようとも、内外無差別の風俗描寫で間に合せておくやうな不眞實では心細い。又それで安んじてをられるやうな不誠實では心元ない。或は、刻下當面の我社會事相は、我時局問題は、到底これを詩化し劇化するに堪へないほどに俗な、卑近な、凡劣なものばかりなのであらうか？　第二のタンカレー問題の適用や、愛蘭劇の改作や、シユニツラーの翻案や、ショー、イプセン、ハウプトマンらの摸倣等に比して、曾て採用されなかつたが當然な程に劣俗なものであらうか？　一時的、流行的である現象を永存的、不易的にするか、しないかは詩人、藝術家の腕前にあることである。刻下當面の生活問題、勞働問題、教育問題、對外問題なぞの間にすら、どんな詩的題材が潜在してゐまいものでもない。況んや、現下の全世界を擧る大改造期の思想問題に伴ふ諸種の現象に於てをやである。就中、特に教化機關として劇を利用しようといふ人達に取つては、頗る喫緊とも評すべき題材が、幾らも、そこにもこゝにも、散亂してゐるのである。若し刻下の思想問題に關心するなら、若し此過渡期に相當する國民道德を鼓吹しようとするなら、若し此大改造期

に必要な國民的自覺を促さうとするなら、先づ力めて其題材を新たにし、其着眼を新たにし、其解釋をも批判をも取扱ひ方をも新たにすべきではあるまいか？　同じく良妻賢母を唱へるにしても、同じく忠君愛國を唱へるにしても、時勢の必然の結果として、其解釋は異ならなければならない道理ではないか？　明治十九年の演劇改良會の具體化した忠孝、義烈、貞淑なぞが今も尙同じやうに效能があらうと思ふのは、仕舞ひ置きの實丹や精錡水の氣の脫けたのを持つて來てトラホームやインフルエンザやの激しいのに用立てようとするよりも當にならぬ迂腐な無駄事だといはねばならぬ。同じく尊皇の念を涵養しようとするにしても、もう今日は櫻井の訣別や小島高德の白樹題詩や重盛の諫言や高山彥九郞や蒲生君平を舊式解釋のまゝで使つたのでは、おそらく既に其心の有る者だけの間に反應があつて、肝腎の感化したいと望む當面の目的物には沒交涉に終るでもあらう。君は父母、民は子孫、皇室は宗本家、われ〳〵は悉く分家だ、同族だ、血つゞきの店子だなぞといふ一觀念だけでさへも、そんな劇を見て暗示される筈がなく、況んや、新附國民なぞであつて見れば、そんなことで以て皇室に對する深い敬愛の情が起りさうにないからである。君民同祖、萬姓一家、忠孝一致は、まことに有りがたい、忝ない、なつかしい、賴もしい特色には相違ない、が、只此標語を呪文式に繰返すに過ぎないやうな慣例劇で以て、臺灣、樺太、朝鮮、滿洲、南洋と日に月に果しなく擴がつて行くべき運命を持つてゐる新日本の民衆が感化し得られるであらうか？

國民の母としての皇室の有りがたさを、實際、今の民衆に感悟させようといふのなら、材を過去に取るにしても、聖恩の廣く庶民に及んだ其最もなづかしい、優渥な、顯著な例なぞを劇化して示すべきである。聖德太子の或一日、仁德天皇の或一日なぞも頗るよいが、近く明治天皇の或御數日なぞは、皇室を名譽の源泉、慈悲の源泉として表現する爲に、最も適當したものであらう。或は、我足利期の暗黑時代に於けるもしくは德川中期の王室式微の慘狀描寫なぞが、却つて不思議な、一種の反響を呼出すでもあらう。尊皇も、忠君も、もう決して高踏的な、注入式では寧ろ反撥を生ずるのみであるが如く、愛國思想とても、もうショーヰニスムやジンゴイズムや傳式道義の陳技大葉論一點張では滿

養され得ない。全く立場を改めて、主題をも、解釋をも新たにして、どうすればその行ひが愛國的行爲になり、どうすればそれが非愛國的になるかを示さねばならぬ。世には十二分に意識してゐて非愛國行爲を敢てしてゐる者も現代には多いであらうが、中には餘り形式的に忠信孝悌的の道德ばかりを注入された爲に、應用、擴張用の融通が利かず、半分は不自覺的に非愛國を行つてゐる者が無いともいへない。國內道德ばかりを敎へ込まれてゐた者は、國際道德に對しては、存外非常に鈍感なこともあらう。外國人を欺くのは、決して不德でないなぞと思つてゐるかも知れない。旅の恥は搔棄といふ俚諺を世界的に適用して、それが國の信用を損害しつゝあることに氣の附かぬ手合があるかも知れない。生來の利己一邊者流は問題外だが、少くとも今擧げたやうな者は、若し何等かの强著な、端的な、而も藝術的な製作品によつて、彼等の行動の影響が非愛國的な惡結果を生みつゝあることを直覺せしめられたならば、直ちに改悛はしないまでも、反省の機緣だけは得るでもあらう。朝鮮、支那の騷擾、あれらとても、相當の思慮と斟酌とを以て、寧ろ有りのまゝに劇化して公衆に見せたはうが、大きな訓誨になつたかも知れない。劇化に適した目前の事象は幾らもある。「盜む勿れ」、「殺す勿れ」、「姦する勿れ」、「詐る勿れ」、それもこれも、若し其題材が現代に剴切なら、私は決して陳いとはいはない。破落戶や賤婦の盜癖は南北、默阿彌に任かせておいたがよい。何故同じ萬引にしても、其敎授の妻や其伯爵の令孃の不思議な、虛榮全盛期のクレプトメニヤの心理作用を寫さうとはしないのであらう？ なぜ市會に、縣會に、官府に夥しい——社會、國家を犧牲にして剛慾に私利を營む——大小の公盜を改心させる劇を書かなかつたのか？ 「殺す勿れ」、「姦する勿れ」も、特に現代的の適用及び描寫があり得べきではないか？ 殊に、「詐る勿れ」に至つては、前にも烏渡言つたが、智育のおそろしく進んだ故か、上下三千年、おそらく現代ほど此惡德の上に特色の豐かな時代はなかつたらう。取りわけ、「武士は二言はない」を標語としてゐた我國は、明治以來全く國を擧つてアンナス・ミラビリスをのべたらに閱歷して、竟に豹變し了つたと言つてよい位ゐの驚異を經驗した。隨つて此方面には明治、大正特有といふ題材が幾らでも〱ある。西班牙風を免れた同胞の數と此現代式の詐僞病、僞善病に罹らぬ者の數と、果してどちらが多

いだらう？　口先ばかりの親切、影辯慶、面從腹非、讒誣中傷、約束違反、言行不一致、何んのかんのと口實を捏造し、言ひわけ澤山の責任回避、親は子を欺き、子はもとより親に詐る、夫も嘘をつけば、妻も嘘をつく、家庭でも嘘の一上一下、社交上、營業上、政治上、外交上では互ひに公認の利器としての、千種萬類の詐欺の横行、千狀萬態の僞善の跳梁！　虚僞を蛇蝎よりも忌み嫌ふのが本來性の、又さうなくては濟まぬ筈の文學者の領域へさへ、大ぶ近頃は此惡魔(ライヤー)めが還入りかけてゐるらしく、其故(そのせゐ)か、一にtruth-tellingを其生命とし、且つそれを實生活化するのを其使命としてゐた頃の意氣は、著しく衰へたといふものがある。詩人、藝術家は豫言者であらねばならぬ。さうして虚僞や僞善は豫言者と兩立すべきものでない。だから。嘘が文學者に傳染しかけたといふことは是非嘘であらしめたい。

「許る勿れ」の外にも、劇の題材とすべき刻下の事業や問題はまだ幾らでもある。けれども、今、それを並べて見たとて仕方がない。なぜなれば、今の内務省や警視廳は、さういふ適切な題材を自由に取扱ふことを許さないからである。前にも言つた通り、これが我國劇をして其衰老に、其沈滯不振に、其無益無害の大俗の娛樂機關たるに甘んぜさるを得ざらしめた一大原因であるのである。

十

内務當局、警視廳當局の此點に關する沒分曉は、明治以來の周知の事實で、今更說明を要しない。慘刻、猥褻、野卑、淫靡、苟も風俗を紊る虞れあるものを取締るは當然である。けれども其取締りの標準は、曖昧で、不得要領で、時としては動いて止まない。半分以上、當局の手心であるらしい。就中兩性關係に對する當局の敏感は、殆ど色情狂者的に働くらしい。今はどうか知らないが、一時は、脚本のトガキ中の「枕」、「キッス」、「屏風」等の文字は、それがどういふ關係で點出されてゐようとも抹殺されたものであつた。男女が、「抱擁する」と音讀させておけば看過されたが、「抱き附く」と讀ませておくと、そのトガキは(此四字も抹殺されやしないかな！)必ず撤退を命ぜられた。次に最も八釜しいのは、假にも皇室に關する事を舞臺に現すことである。如何な皇室の美事でも、御高德を光揚するために書いた作でも、尊貴の方々の只の片影でも舞臺上で假扮することを許されない。いや、何々親王といふ尊稱を用ひることさへも許されない。で歌右衛門は「入鹿誅戮」で、つひぞ日本歷史では聞いたこともない名前のお公家さんに扮して鎌足役者と共に大

功を奏した。私の「孤城落月」では、太閤が其大得意の殿下柄をさへ擬装されてしまつた。殿下なぞと舞臺上で言つてはならぬとの命ださうな。私は、其禁止の報を熱海にをつて聞いた。いや／＼、それどころでない。帝國軍人や警察官の身上に關することを、立入つて寫すのは無論の事、時としては一寸舞臺へ出すことも許されない。それはかりでない。獨帝の蒙塵以前にはセントヘレナの奈翁の末路を演じようとしても大統領名義でなくては許可がなかつた。大統領のナポレオン―詩にも、悲劇になりかねる。幸ひにして獨逸が明かに負けてしまつたので、今度の歌舞伎では、伊井蓉峰がおほツぴらに前の皇帝ナポレオンと名宣つて其同じ作を演じて・得々としてゐる。つい此間の帝劇の「呪ひ」の改削を御覽。殺されなければ主意が通らなくなる女君主の命が警視廳の嚴令で助けられた。其女君主は、「アラビヤ夜話」に出て來るやうな夢の王國の統治者であるのだが、それを殺すのが其臣下なので、弑逆鼓吹の虞れがあるからとでも想像せられたのであらう、とにかく殺すことは禁ぜられてしまつた。斯ういふやうな例はまだ／＼幾らでもある。けれども、これだけで、他はもう類推が出來ようから、省くが、たとひどんな好い題材があらうとも、斯ういふ羈絆や桎梏が作者を緊縛し、役者を拘禁した時分には、どうすることも出來ない。永久に干菓子、餅菓子、サイダー、ビールの樹精品程度で甘んじるか、淺田飴や龍眼肉程度の教化機關で安住するか、外國の教化用を當分借用して濟しておくかの三方策より外にはない。

斯う考へて見ると、國民文藝會に、眞先に骨折つて貰ひたいことは、此脚本檢閲方針の根本的改正である。其標準の改造である。其檢閲官の改選である。內務當局と文部當局と警視當局との此問題に關する――十分の理解を有しての――協同的管理である。さうしてそれは別段手のかゝる事でもない。檢閲官を、十分文藝を文藝として鑑賞し得る眼識を具へてゐると同時に、常識も有り、世故にも通じ、多少經世上の抱負もあらうといふ人達の間から選任すればよい。小說と脚本との區別は敍事體と問答體とだけであるやうに思ひ、簡略なトガキの舞臺上の活用を想像しかねるところから、餘儀なく、機械的、形式的に・「キッス」や「枕」や「殿下」や「親王」に符箋をするやうな手合は、何か他の適任の位置へ榮轉させさへすればそれでよい。さうして、それは、少くとも內務省だけに關しては、聰明敏腕の現大臣の大して煩んぜられることでもなからう。私は切に現大臣の、國民文藝會の相談役としての努力を望む。

（大正八年七月十五日稿）



踏破西伯利 一萬二千哩

山本實彦

借金の催促だらけで氣を惡くしてをる、六月盡日の夜、編輯主任が見えて、夏だから西伯利記行をかけとのこと、商賣氣を出してかいたのがこの一文。

小遣錢一萬圓

去年の八月の卅日であつた。不圖したことから一萬圓懷に這入つたので、サアこの端夕金で何を仕様と、小半時首を傾けた。本來よりすれば、平泉見物がしたいのであつた。それは秀衡といふ奥州のすねものや、平泉なぞいふ蝦夷の都の跡が見たいためであつた。しかし、死人の墓前に自分で血汗たらして、儲けた金を散財するより、生きた英雄の活躍する西伯利がどれ程、面白いことがあるかも知れない。辻占が當れば金剛石のゴロゴロしてをる山も見つからぬとも限らぬ。そこで眼をつぶつて西伯利の英雄を描いて見た。ホルヴツト將軍は中々の權略家で、ヅー〱しいお爺だろふ。セミヨノフは大才ではなかろふが、ヒヨツとしたら、僕の草履取り位にはなれそうな氣の利いた男だろふ。カルムイコフは逸見ドン位の猪武者だらふ、ムーヒンは曲者だが大谷刑部の智慧はあるまい。ソーダ、一つ出掛けやうと一萬餘圓の小遣錢と、一百二十餘冊の古本や、新本を、トランクに投げ込んで、翌朝東京發浦鹽行と決定した。

ペンザ號

敦賀では、僕は參謀本部の男だと間違はれて、新聞記者諸君

の襲撃を喰つた。それも、桂林館とかで呑んで居るときだから面白い。ソロ／＼李兵衛の旅にありそうな野が現れてくる。露國義勇船ペンザ號に搭じて浦鹽へと舟が向く。汽船のなかは。ナニか感想めいたことも浮んだか、モー忘れて仕舞つた。これだから、原稿稼ぎの飴細工をすれば、身代限りと云ふことに極まつておるのだ。僕には矢つ張り執達吏しか友達になれぬのも道理だ。

たゞ、その船中生活で忘られぬのは、ナイフや皿の馬鹿に太くて重たく、ボーイが正直で間抜けであつたこと、露西亜人の大食であつたこと。英國司令官ノックス將軍が、七千五百萬圓といふ大金を懐中にねぢ込んで、ノンキな態度で甲板の上をウロ／＼しておつたこと。

雨の浦鹽埠頭

別に出迎人もなく、車軸を流す豪雨の眞蕾、浦鹽に着いた。面倒臭いから、傘もさゝずに、埠頭の人となつた。雲助見たいな露スケもあれは、エスキモーの叔父さんよろしくのチャポンスキーも居る。森旅館の番頭君に、アキ間があるかと聞いたらイヤもう滿員だとは失望。ソレなら、何處かに世話しろと云ふて見たら、此頃の浦鹽は到底駄目だとのこと。その雨の中を、支那苦力に荷物を背荷せながら、ドブ鼠の風態よろしく、浦鹽市街をねり歩く奇觀は、當世にしてはアマリに奇拔過ぎる。日本の苦力は金縁眼鏡をかけて、懐中には一萬金以上の金がある宿は斷られても、懐具合は福々で温かい。身體は雨でそびらに通つても、おさつは懐中にかこはれて、雨にも濡れず、羞疑をしとる。ヒョッとしたら、人間はおさつより虐待をうけつゝある。

大谷大將閣下

政務部長の松平君は友人である。この人の紹介で、總司令官大谷大將に面會した。すこし耳が遠いが、感じのいゝお爺さんだ。不得要領でつまらぬ會見とおもつたが、なか／＼どうして味のある仁だ。その日の話に、クライヴスキーの一戰には敵軍も縮みあがりましたろふテ、もう今日はハパロフスクの十五里手前まで我軍が進んでいますから、今夜あたりは、快報が得られるでせう。余も生れてお初の戰爭氣分になつた。大谷さんと友達になつたつもりで、だいぶ戰爭談に花が咲いた。陣中の閑談にもさすがに、力瘤がはいる。

シヤシユリック

ソロトイログは、浦鹽一番の料理店である。到着した晩、松平政務部長から、高加索の名物料理、シヤシユリツクを食はせるとのことで、その料店に遣つて行つた。政務官木村鋭市君陪賓として列席しとる。ナンデも、羊の肉を火箸大の、金棒につきさしたものである。向島の團子串さへ重い、我等如き優男には、こんな殺風景なものは、文明人の食卓には上るべきものでないと思はせた。お負けに嬋姸花の如き露國美人の前で。口をモシヤ／＼さしたり、手でいぢつたりするのは、羞しいやうな氣がする。しかしお里は爭はれぬもの、ムシヤクリ出したからは、金棒までも、胃袋に呑んでしまはんず勢なので、松平さんも眼をパチクリやらせておる、ナル程考へて見れば恥しい時代は一昔前のことであつた。食卓の前では、露國一流の音樂が妙に調べられておる。全くモスコーに遊んだ時のやうに浮いた氣分になつた。軍國時代の浦鹽で、こんな風流にありつこうなどゝは夢にもおもはなかつた。しかし一面には暗黑時代の蠻味を遺憾なく發揮しておる。錢湯があるでなし、水が一升で幾錢と云ふ張値を突發し、南京虫はおのれの天下と大威張りである。木村さんは南京虫の免役になり、松平さんは、お風呂に這入らざること既に二週間に及ぶと。木村さんの顔を、私はつく／＼ながめた。そして赤阪の粋筋のことをも思ひ比べた。松平さんの雙頬を片目で睨んでは、會津の殿樣と連想し、いとしい麻布の奥方の身の上をも思ひ出した。

朝鮮の志士尹逸炳君

日本兵が浦鹽に上陸せぬ前は、排日鮮人の巣窟は浦鹽であつた。彼等は、時到れば、露人と結托して、帝國の絆から、脱せんと企てゝ居た。そして、韓字の機關紙をさへ發行していたが在浦の鮮人は、强制的に毎月四留を徴せられて、讀者となつてゐた。ニコリスク、ニコラエスク、哈府、ハルビンでも、同じ計畫をなして脈絡相通じ、春の晩、芝居見物にかこつけては、陰謀をたくらみ、秋の夕、紅葉狩といつはりては一徒の結束をかため、ひたすら、機運の熟するを待つた。尹君なども、その一人であつたか、どうかは知らぬこと。されど、志士として相當の活躍は見せていたとの噂は立つてゐた。

余は尹君に、露語を學ぶために、弟子入りをすることとなつた。操觚者として立つた人だけに、なか／＼文章はうまい。政

治的の着眼も鈍くない。同じ、漢學者でも、花咲秋風とかの句作に沒頭するの詩人ではない。

尹君の曰く、生れし朝鮮に歸れば、排日の頭領の如く思はれ日本憲兵の尾行も癪にさわる。浦鹽にあれば、鮮人よりは日本化せりとて。態度を疑はる。この世に苦衷の大なるものは、主なき犬の如き私であると。

筆を投じて戰線へ

臍の緒切つて始めての戰線行である。加藤司令官から明日は綏芬炭坑を海陸共同の作戰で占領するつもりであるから行つては何うだと來た。願つたり、叶つたり雀躍して九月七日朝を待ち焦れた。瑠璃のやうに晴れた西伯利の朝ぼらけは、氣溫六十六七度で征戰の首途には持つて來いの天氣である。目的地は綏芬灣の一角にある炭坑で、以前露西亞人と三菱側の有であつたのを、過激派のために占領され、その回復戰のための征行である。陸軍からは井上少尉一小隊を率ゐ、海軍からは松風艦長が首腦である。浦潮のアドミラル波止場を午前六時に碇を拔いてしづ〳〵ウスリー灣へ出動した。陸上の砲臺には日章旗と星章旗とが朝風に涼しく靡き、四千噸もある西伯利特有の碎氷船は我が松風艦と同じ波止場に横はつて居ゐる。浦潮から綏芬まで十七八海里の航海は至極平穩であつた。逸りに逸れる大分男子は艦上功名談に餘念がない。早稻田に在學中の伍長もあれば兒童の五六人もある特務も居る。小隊長の井上君が私の前につかつかと步いてくる。『あなたは山本さんですな、久濶です、いつか學校で貴下の演說を聞きました、私も鹿兒島川內中學の出身です』頓だ所でいゝ知己が出來た、私の遊んだことのある川內中學の後進者であつた。母校を同じくした私の爲には弟分であつた。ロシヤ島を右舷にした松風は二時間半にして漸くアムール灣に這入つた。甲板に立てる自分は水天髣髴の裡韓山でも見えはしないかと凝視して見たがそれは無理な注文であつた。不可能の願望であつた。綏芬灣の波靜かに、巨魚さへ跳躍して居る、我が將士は海中に獲物を探索して嬉戲談笑して居る間に、陸上に一條の煤煙の昇るを認めた、望遠鏡を取り出して見ればこれぞ正しく炭坑である。それからそれとこのことが傳はつた。陸海の主腦者からは凛乎とした一令が下つた。銃劍の音がかちかちと聞える。その將士の顏面は緊張して來た。短艇は下ろされた、私も後れじと短艇に移乘した。鉛筆をすてゝ陸上へと赴いた。

バイロンの筆

指揮官の有せる日章の小旗が颯と綏芬灣の波に映じたとき、私は筆を投じて劍に更へたく思うた。午前十時陸戰隊は目的地に達した、海軍の指揮者某中尉によりて高臺の一角が難なく占領された。

過激派は抵抗しないと見える、望遠鏡に入れるものは無邪氣に嬉戯せる一群の牛、赤い着物を著せる露西亞の田舍人、それに高地より本艦に信號する信號手の旗のみである。

第二番船も汀についた。私を載せる爲め三番船も棧橋に横付けになつた。

始めて銃劍の日本兵を見たスラヴの若いものどもはさも珍らしげにその周圍を取卷く。平和であつた牧場の牛馬までが、怪訝な眼を浴びせて居る。太平の夢破られた炭坑の過激派は、愕然として度を失した。海岸から炭坑の村落迄約六七町もあらう日兵は歩武肅々として目的地に向た。風流少尉井上君の薙刀は當日の異彩で、敵も味方も共思ひ付の奇抜に感嘆して居る。

多數の犧牲者を出すべく豫期された綏芬炭坑は何等の抵抗なくして我が軍の手に入つた。しかし一人の抵抗者は突如として顯れた。日本兵の背後を突かんとする一人の怪漢があつた。直ちに銃殺される所を寛大の措置にて縄目の恥だけですました。一隊を三手に分つて家宅捜索が開始さるゝ。しかしそれは遲かつた、彼等の頭領は風を喰つて逃亡し、武器は悉く隱匿されてしまつた。日軍いかに切齒すると雖も及ぶべくもなかつた。辛うじて草叢の間から二挺の小銃と彈丸とダイナマイトとを發見した。炭坑の隅から隅に至るまで徹底した捜索をとげたが何者の得る所もなかつた。艦隊も上陸した。驅逐隊司令官も遂に浦潮から來つて聲援して居る。『大山鳴動鼠一匹』の感が私の頭に印せられた。村落の樹陰で軍用パンで食事をすまして居ると、海陸指揮者はそれはお氣の毒と握飯と牛肉の三片四片を頒つてくれた。

午後五時占領を確實にし、廿數戸の過激派の者は明八日正午を以て此地を撤退すべく斷乎たる軍令が發せられた。彼等の顏面には生色がない、そして若い婦人なぞはさめざめと泣いて居る。しかし命令に叛くものはない。中には嬰兒を擧げて七日しか經たぬ産婦もある。寢臺に横はつたその姿を打見れば流石に可哀想にも想うた。しかし自業自得であれば今更詮術もあるまい。私は思ふた、私にバイロンの熱烈なる筆あらしめば謳ふの

は此處だがと。

陸戰隊も、陸兵も午後六時端艇まで引上げた。須臾くすると急使が來る、その後の形勢不穩で今夜は逆襲するであらうと、陸兵は玆に意を決して再度の上陸となつた、私は軍艦松風に赴いた。秋の夕陽は既に綏芬灣頭に沒して、四邊の暮色も今日だけは何だか悽愴の感じを與へた。その夜は灣頭で假泊し翌日午後三時確實なる占領を遂げ、凱歌を金門灣頭に擧げたのであつた。しかしその夜も警備の一艦は殘されて炭坑所在の沖合に寂しい燈光を投げてゐた。

浦鹽の若草山

奈良のそれに似てをる。山のかたちも、若草のフハ〳〵したところも。そして野葡萄はところ〳〵に赤く黑ずんで熟しかけてゐる。紅衣賊と間違へるやうな、鬚男がうまさうにムシャ〳〵やつてゐる。

たゞ鐵條網や、砲壘が見えるだけが、平和の氣分をいさゝか殺ぐものだ。

月明の夜、駿馬を驅つて、赤楊の下を散策するのもよいが、余は浦鹽の市塵に飽いた夕は、いつも自動車を驅つて、若草山の紅葉を賞するを樂みとした。

それから、浦鹽の日本人の倶樂部みたような料理屋がある。常盤といふのだが、雨の降る日とか、雪のふる夜は、弦歌の音でにぎやかなものだ。余等も盛んに呑み廻はつた一人だが、今ではこの料店も一ぱしの成金になつて、貧乏軍人や、ピイ〳〵記者なぞは相手にせぬほど、鼻の穴が上向きになつたそうだ。

由比將軍、稻垣將軍の健康をも、此項で祝しておくの必要がある。

降伏せる露提督

九月二十二日、我が加藤提督は、米内、津留、岩下參謀を帶同して、哈府より十哩下流の黑龍艦隊司令長官々舍に自動車を驅つた。我が占領せる、艦隊、兵器廠を正式に受領せんが爲めである。余も同行した。

敗殘の艦隊は露國々旗が下ろされて日兵に護衛されてをる。日章旗が檣頭に飜つてをる。喪家の狗にも似たる露提督は從順に加藤提督一行を出迎へた。余も同行である。軈て黑龍江を脚下に見くだす長官邸の一室で莊嚴なる宣誓式は擧げられた。彼の鬚は墨の如く、彼の頭髮は雪の如くである。七百五十留の月俸

を露西亞政府から頂戴してゐた彼は、唯々として今度は日本政府から千留の俸給を頂戴することになつた。喜びの色は現れた

もしこれが、日本の提督であつたならばと思つた。

哈府の參謀長室

第十二師團司令部は哈府の幼年學校の一部に屯しておる。そのうちに、師團長も、參謀長も、參謀も、副官も同宿しておる譯だ。

師團長室の隣りが、參謀長室、それから參謀室、副官室となつておる。參謀長室にはその片隅に三臺のベッドが極めて無造作に置かれてある。其左端が松山參謀長、中央が吉村參謀、右端が小磯兵站參謀長である。

丁度そのとき、松山氏が大井將軍に從ふて、武府地方へ征戰中であつたので、余はそのベッドを借用に及んで三晩を明かした。

夕方になると二合罎が一本もらへる。特別の恩典で。それに福神漬位を肴として、舌鼓を打つて居るのだ。

時たまには、オムレツの一皿位が、飛び出すときもある。毛布は三枚も貸してくれるが、駄々つ廣い、幽霊屋敷見たやうな眞中の、風のヒュー〱通る所では寒威が骨に徹するばかりである。全く寒く。骨がいたい。

眞夜中に傳令だ――電話だ、過激派が何々彈藥庫を襲撃しました――ゼイヤの山中にて日兵がどうかしました――すべてが殺氣を含み、戰爭氣分をそゝらせる。

ベッドに横はつた、猛將連は、內地から送つて來た、繪はがき美人ぐらゐで、イヨーお惚けー―酒一本おごれー―など罪ない寢物がたりに夜を深かす。

秋の眞夜中は吉原でさへ、寂みしい。按摩の笛に身の罪業を數へるほど、人間は自然に歸るのだ。

まして、鬼氣迫る、陣中の深夜は怖ろしいほど物凄く、寒威も身に堪えられぬほど苦しい。

カルムイコフ將軍

ゴク氣持のいい將軍である。ピリツとして小ジンマリの英雄で、決斷に富んでおる。余が面會を求むると、彼は欣々然として迎へてくれた。我が乃木將軍を見るが如く、そして乃木氏より小柄で、快濶で、全面が緊張しきつておる。

一大尉で。年齢は二十九、その部下には露國舊時代の老いた

る大將もあれば、中將もある。その入口には彼の人格を全部ムキ出しにした、注意書きなるものがある。

1 仕事は簡單に明瞭にやつてのけ。
2 用を辨じ了れば直ぐ去れ。
3 仕事を邪魔する勿れ。

余は彼の如き將軍を好む。尤も愛する。余と彼とは、屢々會見したが、その一二の禪問答を記せば。

（余）將軍の部下は、將軍の爲に死するか。
（カ）然り。
（余）ウラルを越ゆるの策戰ありや、ありとせば冬期進出を優れりとするか。
（カ）策戰あり。春期を以て進出するを可とす。
（余）寡を以て衆に當り、輜重の豐かならざる三軍は冬期の進出を以て可とせずや（彼は好箇の將軍なれど、兵法には詳しからず、殊に清濁併呑の量に於て然り）
（余）哈府衛戍の永久的考慮と民軍共和の實を擧ぐるの策奈何。
（カ）余は政治家にあらず、余が軍人たることを飽くまで御承知ありたし。
（余）衛戍總督として、一府の安危を双肩に荷ふ上よりは、軍、民の調和を期するは、將軍の任務なり、糧食はいかにして補給さるゝか、軍人は糧食の生産者にはあらず、戰時狀態にある間は軍政官は、政治家としての任務もあるにあらずや。

マー〳〵彼は聯隊長位の材である。快傑ではあるが、三軍の統領(アタマン)たるには適せぬ。余が試驗に彼はマンマと落第

ザー・ドロジネー君

君は哈府(ハバロフスク)プリアムリエの主筆である。四頁大の赤新聞で、新聞の紙色から、石龍子に判斷させたら過激派(ボルセビキ)を代表しておると相するだらうが、內實は立憲民主派を代表する、穩健な新聞である。

十月五日の夕方、眞鍋君を拉して、其社に君を訪ふた。六尺五寸もあるといふ巨大漢で、其眼の太きこと、風度の悠々大江を呑むの慨ある、我大西郷に酷似しておる。そして新聞記者に通有な、詰襟カーキ色の洋服を一着に及んで、西伯利の政治財政を熱心に說いておる。中學では西伯利首相ヴォルゴルスキー等と同窓であつたが、それから武人として陸軍大尉まで昇進し

たと語つていた。なか〳〵の演藝通で、自分では西伯利一の劇通を以て任じてゐる。

それから、たび〳〵演劇にも行けば、レストランにも同行した、お互に資本を出し合つて、大新聞を組織しやうとまで話し合つた。彼我の役者を交換して興行してみやうぢやないかとまで談合するに至つた。

いつか、余が君に對して、貴下は謀略と云ひ、風度と云ひ、戰術と云ひ大將軍の器だ、何故風雲を御せないかと問ふて見た輕く笑つて、彼の曰く、ソンナ事をやつたら出來るが、それよりか、一個の窮措大でやつておる方がましだと。

なか〳〵はなせる。

君の反對新聞に、社會主義的色彩を帶べる、プリ・アムルスカヤ・ジスニなる一新聞がある。社長はミルレルといつて何でも、猶太人で執政官や市會委員が筆を執つておるという。

ミルレル君は目から鼻にぬけるやうな男。余が哈府に行つたときも。直に訪問してくれて、一段半ばかりの記事をかいた。

二人とも、日本には好感を有してゐたが、何故に日本の外交は秘密ばかりを守つて、誤解の的になるのかと稱してゐた。そして、西伯利の永久的事業に日本資本家が何故に投資せないで礦山や、古銭の買占めなどに汲々たるかと呆れてゐた。

スカチユーチンの死

彼の兄なる人は、カルムイコフ將軍の統領（アタマン）推戴式のとき、正義を楯として、將軍に投票せなかつた頭目として、哈府の牢獄に投ぜられて居る。

彼は日本に前後七年を暮らした、好青年であつた。紳士中の紳士であつた。文學に通じ、政法に通じ、擧情閑雅、英人に似て、モツト無邪氣なスラブ氣質があつた。

彼は全露西亞中、第一の日本語通、日本通として、哈府軍管區の高等通譯を奉じてゐた。

通譯と云ふより、むしろ、參謀官として待遇されて居た。余は露領にて、政治でも、事業でも、苟くも、驚天動地の事業を遂げるならば、彼の手腕、徳望によらなければ、不可能なるを直覺した。

余の意中は、眞鍋君をして、ス氏に通ぜしめた。しかし、ス氏は露國にて重要な椅子にあり、かた〴〵約婚を果すために、哈府を離れがたい事情がある。

余は二度も、四度も、膝を低ふして、余と共に、日露のため

に、盡すべきを力説した。

それでも君は躊躇した。

さらば、余は、自分の任務も、拋棄しよう、とまで說いたので、君も遂に動かされて、余と行動を共にするやうになつた。

それからと云ふものは、露西亞の將軍を訪問するでも、新聞社を訪問するでも、オペラに遊ぶときでも、レストランに行くときでも、同行しないことはなかつた。

露西亞は夜の國である。宵張りの寢坊の國である。

君も寢坊の露人であつた。しかし、約束さへすれば、未明の霜をおかして、義を果す。眞に得難き人で、そして頭腦も透明であつた。余が交遊した人で、この位、イヤ味のない、義理の固い、愛嬌のある、そして役に立つ好青年はなかつた。

十月三日の朝、無線電信で日本內閣更迭の報が傳はる、寺內伯辭任し、原敬氏がその後釜になつたと。

野田老も遞相に任じ、中橋サンが文相に就任したと。

サテ〳〵、世は海路の日和とて、氣永に待つべきものだと思つた。

その頃から、彼は腹膜炎とかで、氣分が勝れなかつた。自分は、一旦東京に引返して、內田外相から西伯利政策を聽くの必要が生じたので、彼と別れて哈府を去つた。

十月の末つ方、再び余は哈府の人となつた。彼を喜ばすべく東京から、菓子類や、指輪の類に至るまで心をこめたる土產を携へて行つた。

ところが、彼は哈府の病院に呻吟して、旦夕を計られざることが風の便に余が耳にも達した。

年ごろ四十ばかりなる、朴訥な、かざりけのない、露西亞の看護婦に連れられて、彼の室に通つたのが、哈府についた夕刻である。

彼はモウ言語を發することの出來ないまでの重病者で、その顏色には、人間としての色つやもなく、蒼白に變れるかんばせに、思はず昨の血の氣の美はしい、嬌々した、生々した彼を思ひ浮べて、暗淚を催した。

何か言はんと欲して、體を起そうとしたが、それも旣にかなはなかつた。——そして淚が一滴、また二滴——

余が携へたる、指輪は彼が手におさめられた。

彼は、余が彼の室を去つてから、二時間して命を殞した。

余は彼が最後の見舞人であつた。

余はその日の午後、哈府から、武府へ赴かねばならぬ任務が

あつたので、臨終のことが氣にかゝりつゝも、出發したのであつた。

カルムイコフ將軍の爲めに、牢獄に投ぜられし、剛直なる彼の兄さんは息災であるか。その許嫁なりし婦人はいかにくらしておるだらう。眞鍋君からも、五六月も便りのないまゝに。

黑龍江

河の名前を聞いて、氣が荒くなるものと、優雅になるものとがある。ダニユーヴ、ナイル、黑龍江、アマゾン、阿武隈川、信濃川が前者を代表し、保津川、多摩川、セイヌ河はやさしく柔かにひゞく。殊に信濃川は日本海の暗い波濤と、山田憲の背影で、身の毛の慄つ恐ろしい河になつた。

哈府の江岸、ムラヴイヨフの銅像から、西伯利の天地を展望すれば、暗い、恐ろしい、陰氣な、物凄い、惡魔の如き、暴けそうだと云ふ感じのみが浮ぶ。北極の空は、地獄の荒僻の如く思ひ切つても凄く、人性をして、僻ましめ、神樣を怨ましめる。

隅田川のやうな小さな川には、可愛ゆくもあれば、愛着もつくが、黑龍江には全く可愛氣がつかず、憎惡のみがいやました。

日曜の半休みを利用して、小倉聯隊の兵隊さんが、洗濯のために黑龍江に行つた。言語の不通が因をなして、日本兵は金髮婦人から、短銃でムザ／＼やられてしまつた。あそこの江岸であつた。それから黑龍江がます／＼いやになつた。

ニコラエスク市から武府まで舟行一千八百露里の間、汽船もあれば、軍艦もある。河の色はドス黑く、河の幅は十二三町位のところもあれば。半里位の所もある。魚が大味でうまくない。露西亞人は大味で面白いが、黑龍江の魚はそうでない。

西伯利の西瓜

ドンナ寒い朝でも、露西亞人は西瓜を喰べる。西瓜と、胡瓜と、香茶は露西亞の最好物である。

暖房で、汗がタラ／＼する、室外には氷雪丈餘に及んでおる咽喉が涸くので、西瓜はいくらでもたべられる。

日本の西瓜は盛夏の特產物だが、西伯利では、霜雪の嚴寒に赤チヨキの西伯利乙女の手から。盛んに市中に鬻かれる。

西瓜うる露女の水ばな凍へつゝ
冬きにけらし野路の木がらし

何と名吟ではないか。

一椀の水が欲しい

或る使命を帶びて、余はハバロフスク府よりブラゴエチェンスク府へ向つた。眞鍋通譯官が同道してくれることになつた。眞鍋君はモスコーで修業しただけに、露語にも、露文にも巧みな一青年である。土佐坊で、氣の荒い男だが、政治的趣味もあるし、經濟的用語にも通じてゐるし、余の使命には、難有い同行者である。

それから、越川大尉もホチカレオまで同伴であつた。一等室四人分を二人で占領しておるのだから、窮屈な思ひはないが、砂糖や、菓子類が沿道の驛路に皆無なるには驚いた。

鷄の毛をもいで丸ながらやいたものが、停車場に數多くブラ下つておる。烏蘇里線ではよくあつた。

しかも、黒龍線路では、水さへ、砂糖さへ、欠乏しておるのである。從つて角砂糖の珍重さるゝことは夥しいものである。僕等が武府へ赴くの時は、沿道數百哩の間、何れの停車場にも見當らなかつた。

もう現今では、そんなに物資が欠乏して居ないかも知れないが、去年のいま頃は、一椀の水にありつくことが、どんなにありがたかつたか、しれやしない。

一合の水を錢で買ふのに、數百の乘客が喧嘩腰である。これも戰爭が生んだ、悲慘事の一だが、灘の生一本だの、伊丹だのと贅澤がいはれる、日本のありがたさはそこでも判つた。

興安嶺

聞いたばかりで、なつかしい山である。白き御雪をたよりに鐵道破壊に従事した、沖、横川の志士をも聯想せしめる。嗚呼興安嶺の白い雪を目標として、冷い松花の流れを闇にまぎれて蹂躪した。當年の勇士の俤。

十月二日の朝。モウ黒龍江に沿ふた、露境の山には斑ながら白雪を宿しておる。眞夏から立秋、この間の期間はホントに短かい。槲の葉に秋の風が立つたと思つてゐると、もう一月も過てば、覆盆子（ブルスニーク）樹にヒイ〱とからつ風が唸つてる。全く西伯利は夏が一ケ月秋が四十日、冬が八ケ月なのだ。吉例で名吟あり。

吹雪狂ふ西比利亞の原小夜ふけて興安の雪月とてりそふ
麓には秋の花笑む西比利亞も嶺には白く雪ぞつもれる。

僕は瞑想に入つた、鐵道破壞の勇士、大島君の身の上を思ひ込んだ。通譯官の眞鍋君は、自分の天才を傾けて、露國美人と對談酣である。この寒いのにおあついこと。

床しい鈴木二等卒

急行車で哈府から、武府に赴くときのことである。――何にせよ十一月八日の寒い日で、空は晴れたれど、雪は滿目白皚々タンクの水は氷り、停車場にお湯は賣らず、朝起きては、地上の氷雪を手熱で溶解して、顔を洗つたり、手の垢を落したりする。鼻孔は氷る、小便は氷結して銀柱の如く美し。もう一つの〇便は山吹色の黄金柱を突つ立てたやうである。鼈甲でない眼鏡は氷つてドーモ仕様がない。それでも晝間は、陽熱がフンワリ窓に當るので、停車場に下りる氣にもなれる。車內では露西亞の美人も、哥薩克も退屈まぎれに日本人とからかい合ふ。

しかし、日沒どきよりは針の如き冷氣がチク／＼肉體を刺す東京から携へたる毛布の二枚と、毛皮の外套ではやり切れない夢さへ結ぶことは出來ないのである。

何にせよ、此行は貨車旅行であつたから。冷えた揚句にはお腹が痛み出す。

――もう酒もつきた。睡られない。――ウト／＼して起きて見れば一枚の外套が着せられてある。ハテナ、この寒夜に自分の衣を剝いで、僕に情を遣るの人は誰だらう。

福島縣信夫郡杉妻字鎌野目金込町十四　鈴木久太郎君

なる工兵二等卒である。この記憶すべき勇士は、晝間も僕の爲めに、飯盒で溫かい飯を焚いてくれた人であつた。

ポチカレオの妖星

ポチカレオは黑龍鐵道の中央で、且つ武府への分岐點になつておる。日本の汽車なら、乘替に十分間か一時間か待てば澤山だのに、御念の入りすぎた、西伯利の汽車は、少くとも四時間多くば一日も二日も待たねばならぬときがある。それだからといつて、旅館の設備も不充分で、全く日本人などは泣かされる。

先づ、薪どももやして、汽車の中で待つか、寒い停車場の廊下でまつか、何れにしても、恰好のよくない、立ちン坊に甘んぜねばならぬ。立ちン坊なら兎にもあれ、指の先が氷へ落ち、耳朶は霜ぶくれしていたい。

この停車場に名物の妖美人がいる。これが停車場の賣女（ブリャーヂ）とかいふものだそうな。それが馬鹿に綺麗で、細腰、面長の東洋式だから、日本人には評判で、たれ知らぬものがない。ところが其美人が失敬にも、日本人が嫌ひで、日本人には言葉も交はさぬそうだ。

僕も一見した。ナル程、美人であるが、その美人が素足になつたら、多分一升位の塵垢がついてるだらう、靴が汚くて、お負けに猶太人らしい。

日本人を嫌ふ女はすべてが不潔で、そして猶太人に違ひはない。面倒臭いから、向ふが嫌ふなら、こちらの方では、それ以上に嫌つてやれば、こちらが嫌ひの勝越しだ。

飯ごうのめし

九月二十七日、ザウイタヤに到着した。停車場司令は村上貞二少尉である。四十七聯隊十中隊と記憶しておる。

氣の利いた少壯士官で、我等のために、はんごうで飯を炊いてくれた。その上梅干と、福神漬とが供給されて、それで一杯傾けたときの味は、全く忘れられぬ。金米糖の御馳走にもなつた。

此邊は、過激派の巣窟で、ブレヤー河の橋も、ザヴイタヤの橋も敵のために壞されたそうだ。

北風凛然たる、野つ原に銃劍かついで、突つ立ておる兵士は勇ましくも、同情すべきである。

若干の見舞品をおいて一路アレキセーフ驛にと向ふた。彼等は眠るに臥床なく、枕もなく、いつも三等待合のベンチに、背嚢枕で、毛布と外套をかぶつて眠るのだ。

一兵士は敷島一本くれよとねだる。露西亞卷の上等を二三十本與へておいた。

ア市の一瞥

九月二十八日の拂曉、アレキセーフスク市に到着した。

大井將軍は、杉山參謀長、林大佐以下の參謀、副官を從へてアレキセーフ停車場に一泊しておる。勿論宿舍は、汽車の中だ、斷つておくが、大谷大將以下の將官も數ケ月汽車の一室をかり受けて、自分の家としておつたのだ。

九月の末だか、高燥なこの一帶はもう一面、白霜皚々たりで馬車が歩けば道路が片つ端から壞はれて行く、それに霜解けで、泥濘脛を沒するばかりである。

アレキセーフスクの市街は別莊の寄りあつまりの如く、宏壯で、優美で、庭園を包圍せる樹木は丈餘にのび、郊外は野放しの牧牛が戯々としておるあたり、原始時代の氣分が漂ふてゐる。

信州の輕井澤とでも、いいたい位の高臺である。日本軍が駐屯しとると云ふので、支那人さへ店舗を開いておる。

コーヒ店へ行つて、砂糖を賣つてくれと、賴んでも皆無と謝絕してゐる。一萬の市民中、砂糖の味を知らざること玆に一年餘である。狡猾な支那人は百匁の角砂糖を五圓に賣つたと傳へられて居た。

ムーヒン包圍

十一月十二日、武府の對岸なる、黑河のさる旗亭で藤川君と一杯傾けておると、山田將軍の麾下である三人の大尉が遣つて來て、今夜は、道臺の邸に潛んでおると噂さるゝ、黑龍過激派の首領ムーヒンが、更迭された支那道臺と共に何れへか逼走する說が高い。一つ捕へてやろうぢやないかとのことであつた。それも面白かろふと、泥坊の張番見たやうに鵜の目、鷹の目で冷かし半分に、警戒の士官等について野次見物に出かけて見たが、結局徒勞に歸した、毛皮でブル／＼ふるへておる、人殺し好きの戰友も、何等の獲ものなきに不平ダラ／＼武府へと引上げた。何だかその夜は淋しく雪が降つて、指大の霰さへ降つこつてきた。ムーヒンは過激派中の錚々者で、小倉師團と旭川師團とが、競爭的に、懸賞的につかまへてやろふと、いきり立つていたが、彼は風の子の如く、變幻自在、今に行衞がわからぬその晩のお月樣は、隱れては出で、光つては雲に姿をかき消して、ムーヒン君に幸を與へて居た。

ストーヴの火

眞暗の市街、烏玉の營所、ハチ／＼、ヅドン………全くいい氣持ちのものぢやなかろふ。武府の市街は大體廣島位の規模だが、それが眞暗で、往來は氷雪で輝き、時たまに過激派の鐵砲彈がハチ／＼するのだもの、小倉師團の營所も、市街を半里も離れたさびしい所にある。それが電燈もなく、瓦斯もなくランプもないのだから夜の靜けさは禪寺以上である。蠟燭一つで四十錢もするのだから、戰時手當を併算して日給九錢の兵隊さんは五日間、煙草ものまず、酒ものまずで燭光一つしか求められない。それでも五人か六人で金を出し合つて買ふのだ。そ

れで、大抵の兵士はストーヴの鈍い光をたよりにして懐しい通信文を認めたり、戀しい愛婦のレターを讀んだりするのである眞の闇室で、戰功談をかたつたり、晝間の作業を評し合つたりしての寢ものがたりは勇ましくもあれば、可愛想にもなつてくる。

金儲けの淡い夢

雪ふり、氷霜がその上にこごえ、武府の街路は一歩もあるけぬ。十一月十三日の夜であつた。珍しや、黑龍州金鑛業者副會頭が書記長を從へ、平塚領事と群司書記生と同伴で、余を訪れてうまい金掘りの話をする。

ゼイヤの鑛山は、黑龍、烏蘇里線中に介在せる、最大の富源で、一年の採掘高でも三千萬圓を超過するといふ。

武府から、ボチカレーオに出で、ドクツイ驛から、ゼイヤ河を遡航しつゝ三十里ばかり北へ行つた所に第一の金坑があり、その周圍百二十里ばかりは、何處も彼處も、金の山である。

西伯利過激派の金櫃はこのゼイヤである。ゼイヤの爭奪戰に打勝つものが、東部西伯利の主人公になれるわけである。

ゼイヤの富、黑龍の富の粹まる處が武府である。

ゼイヤから百里も北極に行けば、ヤークツク州である。これが全露第一の富源で、炭山の饒富、岩鹽の數量は算に上することも出來ぬほどである。第一岩鹽が百里の長程連續しておると聞いては大抵のものは吃驚して氣が違つて仕舞ふ。

撫順炭坑や大冶の鐵山で驚いた連中よ、氣絶せないで聞きたまへ。

そんな話で更くる夜も知らず、手あたりしだい呑んだキユラソペパーミン、ウオーツカの死骸は累々として、卓子に横はつて二時の知らせで、電燈が消えることになつた。

待ちたまへ、金塊は手につかまずして、既に暗室に早變りして異郷の空に夢みることになつた。これが金儲けの夢見とでもいうものだらう。

激すれば眼に涙あり

九月二十九日、拂曉。武府に到着した。武府は黑龍州の首府で、黑龍江を隔てゝ、支那の黑河、愛琿に相對している。

或る使命を帶びて、松山參謀長、林參謀大佐及び余は黑龍州の首相アレキセーフスキーと會見した。

五十ばかりであらう、溫顔禿頭の彼は、余と固き握手を交は

した。

その翌日、再び余は眞鍋通譯を從へて彼を州政府に訪問した人を遠けて、縷々數時間、州政治、州經濟、さては大露西亞、西比利亞の將來を熱心に論じた。激すれば眼に涙あり。胸に祖國を思ふの火熱が燃えていた。

一生一代の榮華

十月二日、武府を後に哈府へ。

急命なれば、一列車を都合してもらつて哈府へと急ぐ。過激派の參謀本部であつたと云ふ列車に眞鍋君と二人は悠然と構へておる。

廚夫室あり、ボーイ室あり、事務を見るの室あり、贅澤な車に二人で大威張り、跡で口の悪い奴が、お前はあの時が一生一代の榮華だつたヨ。ナール程。榮譽、榮華とは、ソンナもんかい。

イワノフ君

米原驛で多數の有志家や小學生が、手に〳〵小旗を打振り、西伯利から凱旋する、兵士を犒つて、戰ひ勝ちぬの歌を高唱し萬歳〳〵を連呼するのを、不思議に打眺め、合點の參らぬと云ふ風情で、怪しき眸を放つておるのはスラヴの血を享けたイワノフ君である。

君は通譯から、事のなりゆきをきいて、熱涙をハラ〳〵と流した。そして、余に左の如く語つた。

解體前の露國は、皇帝の通過のときは、こうした歡迎を受けたこともあつたらうが、今では誰人もかゝる歡呼を受けぬのである。ナル程、日本兵が勇ましく死ぬるのはかくの如き熱烈なる友人、國民を有するからだ。

彼には溫かき祖國があつた。

其後、彼は余が家にも度々遊びに來た。余をまたなき、友人として親んだ。

茫々たる平原に緑の一寶、エカテリンブルグの夏老けて、バラボーエ湖畔に悠々自適しつゝある、彼の近狀やそも奈何。

オムスクへは余も行きたいと考へておる。行つたら西伯利第一の風膀バラボーエ湖畔(オムスクより十里)にも一晩位は宿して見たい、そして親友の、赤十字委員長イワノフ君と久かたぶりに語つて見たい。

――品川から武府まで往復二回――

――浦鹽から武府まで前後六回――

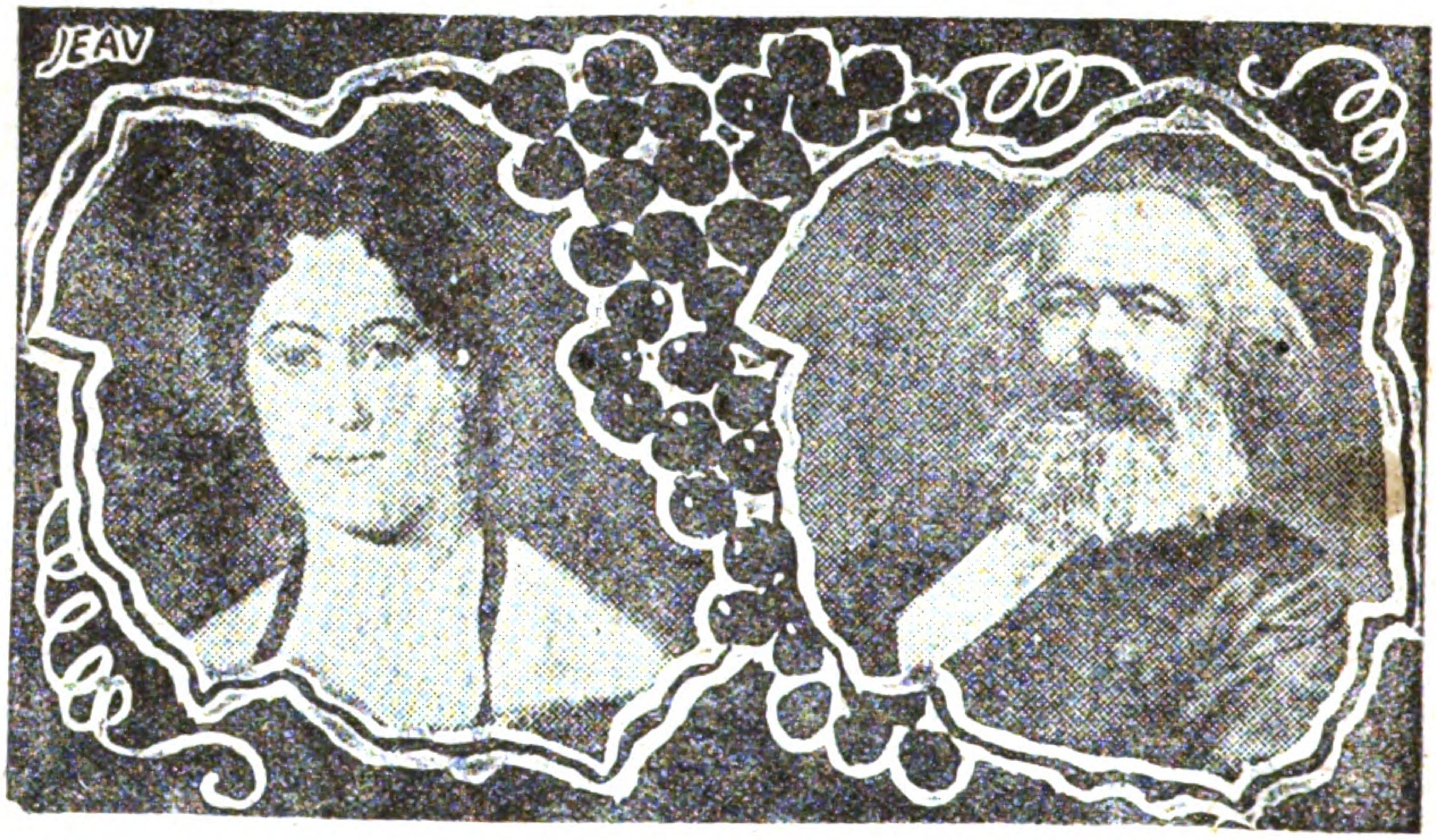
――ポチカレオからアレキセーフスクまで往復――

――それから浦鹽近傍の旅行――

――ザツトこの哩數が一萬二千哩――

文藝漫語

▲西洋の裝釘物語には隨分奇拔なものがあつて、ヤレ刺青のある人間の皮を剝いて表裝した本だとか、ヤレ價幾十萬圓とかする寶玉を表紙に鏤めた書物だとか、そんな話は數々私共の耳にする處である、最近頓に勃興しかけて來た日本の詩壇にも、略ぼ之に類した裝釘物語が聞き出される▲先づ第一に紹介さる可きは、先年北原白秋氏の公にした詩集「勿忘草」の特製である、之は大にも小にも三部きりしか作らなかつたが表紙には總て羊の皮を用ゐ、それに新ダイヤを一箇鏤めたものである、價は一部八十圓、一時はこんな贅澤な物を買入れる好事家があるであらうかと怪まれたが、白秋氏には隱れた保護者の多い事とて、其等の人々が相爭ふやうにして、倏ちの間に捌きをつけた、其の中の一人には、深川の木場に隱れた、白秋氏贔負の一美人もあつたとの事である▲其の後詩壇には裝釘の贅澤に眼を瞠らすやうな珍本は餘りなかつたが、最近に至つて玄文社發行の歌集、「几帳のかげ」（伊藤白蓮夫人作）と「日本象徵詩集」（三木露風氏編）との二册が、揃ひも揃つて優雅な染革の表裝で出たのは珍らしかつた、此の流行が因をなして西條八十氏も最近公にした其の成金詩集「砂金」をば、矢張り此の擧に倣つて華裝にした、何は兎もあれ今の處、書物の裝釘に一番骨を折るのは、詩人たちを措いて他に餘り類を見出さぬやうである▲最後に最も振つてゐるのは、近く公にさるゝ筈の青年詩人矢部季氏の詩集「炎香華」の一卷である、之は三百部の限定版で、表紙は紫の錦天鵞絨で仕立て、用紙には特に香水を滲込む考へだと云ふ、矢部氏は白秋氏の門下で雜誌「詩篇」の發行者である、イヤそれよりも氏は東京美術學校日本畫科の出身で、銀座の化粧品商資生堂のショオ、ウキンドウの圖案家である事を忘れてはならない、それで詩集「炎香華」に滲込む香水も恐らく只だらう、は失敬な▲京阪漫遊中、愛弟二郎氏に自殺勸告を受けた、コカイン中毒の安成貞雄氏は、歸京の後も何一つ定職に就くでもなく悠然と太公望を極込で、相變らずビイルの泡を飛ばして景氣の好い事夥しい、仄聞する所に據れば、氏は最近論壇の花形福田徳三博士に大いに其の才幹を認められ、他人の筆記では決して無事に通過さした事のない福田博士も、貞雄氏の筆記だけは一讀した儘どしどし通過させると云ふのだから、奈何に其の信望の篤いか押して知る可きである▲過ぎつる事なれば今は明にしても構なからん、此の春の事であつた、小說集「非凡人」以下「猫八」「征服被征服」等、陸續と其の力作を發表して、文壇に返り咲の華を咲かす可く準備中であつた岩野泡鳴氏の許へ文學好きの若い一女性が、同氏の文名を慕つて或田舍から態々頼つて來た、そして泡鳴氏の近所に居を構へて、愈々同氏に師事する事とはなつた▲遠くて近きは男女の仲とやら泡鳴氏と件の女性とは、何時の間にか岩野夫人蒲原英枝女史を出拔いて、二人で手に手を取つて飯能あたりへランデヴーの旅行を試みる間柄とはなつた斯くと知つて瞋恚の柳眉を逆立てたのは英枝夫人である、折角自分が骨折つて遠藤清子女史から奪つた存の君泡鳴氏を、むざむざ見も知らぬ女に寢取られて堪るものかと、息咳切つて女の許に膝詰談判に出懸けた▲すると女の答へが振つてゐる、「お恥かしい話ですが、私は男なしには生きて居られない女なのです、私の戀しかつたのは泡鳴氏の魂ではなくて泡鳴氏の肉體だつたのです、だから御事情がさうとあれば私は泡鳴氏とお訣れするのに何の未練もございません、どうぞ何時でも御容赦なくお引取が願ひたう存じます」、此の聽へには有繫の男勝りの泡鳴氏夫人も開いた口が塞がらなかつたさうだ。



勞働者の觀たるマルクス

遠藤無水譯

本書は "Karl Marx : His Life and Work" の著者たるジョン・スパルゴの著にして、一九〇九年の出版に係り、原名を "The Marx He Knew" と云ひ、内容はマルクスと親しかりし勞働者、老ハンズと一青年との會話に仕組まれて居る。

一　少年詩人カルルと戀の勝利

どんよりした日の弱い黄色な光線が、或る小さな煙草工場の曇つた窓硝子を通して其處に Der Freiheit のメロデーを口ずさみながら働いて居た老ハンズ、フライツツヒの榻(ベンチ)を抱擁した。

隅の方の三脚椅子に陣取つて居た一人の若い同志(カムレド)は、老ハンズの鼻唄も耳には入らぬらしく、彼の眼は、葉卷煙草を卷いて居る老ハンズの頭上なる、ガツシリした櫚枠に嵌めて掛けられた、或る人物の大きな寫眞をヂツと視詰めて居た。その寫眞は古ぼけて艶氣を失ひそして下の方に記された文字は殆んど讀めなかつた。それを凝視した若き同志の眼はいかにも瞑想的で、そして崇敬の念に耀ゆいて居た。

「ハンズさん、私にあの人の話しをしてお呉れ」

青年は聽てそう云つた。

老ハンズは鼻唄を止めて青年の方を見た。やをら其の肖像を打眺めた彼の眼は、矢張り美くしい崇敬の念に充ちて居た。

數秒時間、只の一言も無くして、壁に拭けられた時計の單調なチク、タクのみが其の氣重い靜寂を破つた。

『君！彼は實に驚くべき人物であつたよ』

と老ハンズは漸くにして口を開いた。

然うだとも、然うだとも、彼は全く驚くべき人物――驚くべき人物中の驚くべき人物であつたんだ。』そう答へた青年の聲は宗教的熱情に震えて居た。

二人は再び少時沈默に落ちて、やがて青年は語り出した。

『全く然うだ、マルクスは驚くべき人物であつた、ねえハンズさん。そしてあんたはマルクスを能く知つて居るんだ。彼の笑顏も見れば、彼の咳拂ひも聞き、彼と喋べり、彼の手を振り。彼は同志と呼び、友よと云つた人なんだ。』

『えゝ〳〵、もう數限りなく』と、老ハンズは頷づき乍ら。『私と彼とが、一緒に煙草を吹かし。酒を呑んだのは、何百回だか知れやしないよ。』

『あゝ、實に光榮だつたねえ、ハンズさん』

と、青年は熱心を現はして。『彼の言葉を聞き、彼の手を――貧い勞働階級の爲に絶大な眞理を書き著はした彼の手を握つたんだからねえ。若しも私だつたら嬉しい餘りに屹度氣絶しちやつたよ ハンズさん。私は今あんたの手を握つてさへ、それが始終マルクスの手を握つた手だと思ふと、一種非常な強い感動を受けるんだよ。』

『えツ、なアに、私のこのヂヽムサイ乾からびた手なんざ駄目だ』と、老ハンズは自分をクサすやうな微笑を泛べて。『こんな手であんな人物の手を握つた處で、何の事があるものぢやない。つまり天才は疱瘡のやうにやたら傳染するものぢや無いからな。』

『だが、ハンズさん、話してお呉れよ。マルクスはどんな人だつたか、どんな事を云つたか、ね。色んな事を聞かしてお呉れよ。』

『よし〳〵、それはね。えゝと、君も聞いただらうが、私等二人は子供の時分よく一緒に遊んだものだ、古い田舍のトレフエスで、それから二人はよく喧嘩もした。一度なんぞはマルクスが私の眼をブン毆つて、私は眼が闇んで見えなかつた。その替り私もマルクスの鼻柱を撲りつけて、鼻血をウント出さしたの

で丸で豚宜しくだつた。』

『何あんたが彼に鼻血を出さした？』

『あア、澤山ぢや無かつたがね、子供の時分はみんな然うさ。』

『へゝえ』

『君も知つての通り、私の親爺と云ふのは靴工だつたが、私の家はカルルの家とたんと離れちや居なかつた。で、親爺はいつも修繕した靴を持たしてカルルの家へ遣つたもので、それで私はカルルと會つた。彼は年はまだそう行かなかつたが、身長は丁度私位で、綺麗な子であつた。彼はチャレ毛の頭で、樽みたいに太つて居た。

『靴を持つて行くと大抵、私は暫く彼と遊んだ。カルルの姉妹とも遊んだ。カールは毎も彼等——姉のソヒエや小さなチェーンと遊んで居た。私は餘りその娘達と遊ぶ事が、好きでは無かつた。彼等は私たち男の子よりばズツと年が多くて、勝手に自分だけの好きな事がしたいのであつた。そうして兎角男の子を凌ぐのが私には厭だつた。それで私は一度カルルに揶揄つた事がある。お前は女の子と遊ぶから赤ン坊だと云つて遣つた。するとそれが二人の喧嘩の原因で、彼は私の眼を眞暗にして了ひ私はその報酬に彼の鼻を血みどれにしてやつた。

『時々カールの親爺は私の家へ來て、私の親爺と長いこと喋べつて行つた。カールの父は法律家でなか／＼の金持、私の親爺は靴職人で貧乏も大貧乏。それでもへーア、マルクスには分け隔てが無かつた。知つての通り彼は猶太人であつたが、併しそれはカルルの生れる前に基督教に改宗して居た。私の親爺も私の生れる前に矢張り同じ道を踏んで居た。親爺が何故そうしたのであつたかは、私に教へて呉れなかつたが、併し私はそれを兩方の親爺同志が話して居たのを聞いてゝ、ちやんと其の理由を辨へて居た。「ウイルヘルム君、勿論僕は基督教の教理に信仰を持たない。僕は耶蘇が神であつたと云ふ事も信じないし、神から送られた救主だと云ふ事を信じない。唯だ一つ信ずるのは、獨一の神、一あつて二なき神だけは信ずる。僕は自分で改宗する事、そして自分の子供に洗禮を受けさす事を。それほど不名譽としない。僕は自らの裁判官たる地位を保護する爲に敢てした。」彼は猶ほ私の父に次の如く語つた。「希伯來の友人の或者も然う云つて居るが、併しそれは決して眞實ぢや無い。ウイルヘルム君、僕の見る處に依れば。實際猶太教は偏俠過ぎ保守的過ぎる。基督教は寛容と教化と自由とを助成する。猶太教を固持して居ては、全く懸け離れた人民として取扱はれ、チューとし

て嫌惡せられ、同じ土地に居て路傍の他人扱ひをされる。凡て市民仲間の一人となり、此の懸隔の障壁を取除くには、吾々が進んで改宗するに限る。ウイルヘルム君、それが僕の猶太教を振り棄てた理由だ。」そう云はれて頷づき乍ら微笑した、それに對して何にも言ひはしなかつたが、私は彼が同じ類ひのクリスチャンであつた事を讀んで了つた。』

『併しハンズさん、それは彼の父親の事だが、一體その息子たる彼の話しはそれから何うなんです。』

『ま、待ち玉へ。金は無いが時は裕かだ。』ハンズは少し性急にそう云つてやがて又語り續けた。

「二人は勿論一つ學校へ通つて居た。カルルは私より年下であつたが、クラスは私と同じであつた。彼は快活な利發な少年であつた、いつも誰よりも先に學課の成績を擧げ、常にクラスの首席を占めて居た。そして彼は能くいろんな噺をしたが、私は少年からあゝ云ふ噺を聞いた事は曾て無かつた。授業時間前の遊歩場で、吾々はお定まりに彼を圍んで寄り集いゝ、いつも頭が一杯になるまで彼に噺を續けさせたものだつた。』

『それで、彼の氣性は柔しい善良な、そして皆に能く好かれたのか。』

『好かれたか？君、彼は全校の寵兒で、教師にも生徒にも好かれたよ。彼は決して怒つたり或は卑しげなる事をした事が無い。誰一人としてカルルから何か不都合らしい行爲を見出した者は無かつた。併し惡戯(いたづら)とそして氣の輕い諧謔とに充ちて居た。彼は他の子供に串戯を仕掛けるのが得意であつた。そして時々はそれを教師にも仕掛けたものだ。』

『彼は君なんぞが能く聞いて居る人々の事を面白く詩に作る事が上手で、そしてそれを學校の男生や女生が時々町を通る時に唄つて歩いたものだ。若し誰かゞカルルに對して何か仕向けると、彼は其奴が如何にも馬鹿に見えるやうな詩を作つたもので俺達は其の唄はれた奴が丸で氣違ひになる共等の詩をみんな暗誦した。そんな風で吾々は當時愉快に暮した。然しねえ君、唯だ一つ俺達は。カルルの pin-pricking の詩では恐ろしかつた。

『俺達はよく覺えて居る、曾て俺達の教師に運の惡い一人の老教師が居つた。彼は年寄つて居ながら意地が惡くつて、生徒はみんな彼を憎んで居た。彼はいつも手から鞭を放さず、それでピシ／＼と生徒を窘め付けた。或日カルルは稽古が濟んで家へ歸る途中で、私に斯う云つた。「腰曲りの碌で無し奴！今に見ろ何か作つて乾度辟易さして遣るから。」二人はお腹が痛い程笑ひ

合つた。』

『それで、彼は詩を書いたかね。』

『書いたにもなにも、大書きさ、俺達はそれを街で唄いもしたし、壁には書く。あらん限りの事をしたものだ。それで老教師はとう／＼辭職して町を逃げて了つた。

＊　＊　＊　＊

『私はカルルよりもずつと前に學校を下つて了つた。知つての通り私の親爺は貧乏だつたし、おまけに着せたり喰はせたりしなければならぬ九人の子供が在つたから、私だつて稼がなければならなかつた。學校を引いて勞働をするやうになつたが、私は始終カルルの益々上達する事を噂に聞いて居た。私の店へ來る世間の人は能く彼の事を、あの子は偉い、あの子はやがて成人したら屹度大臣になるだらうと云つた。

『其後、私共はカルルがボーンに行つて大學に入つたと云ふ事を聞き、そして世間では何人も彼が間もなく偉人になるだらうと思つて居た。處が或日カルルの父が私の家へ來ての話しに、カルルはボーンに居て遊んでばかり居る。些とも勉強して居ない賭け事やなんぞにお金を費つて居ると云ふ事だつた。それで私の親爺も吃驚して、悄げ返つて居るハインリッヒを慰めやうとしたが、一向に利き目は無かつた。『私のこれまで望みをかけて居た伜……トレフェスでは立派な少年だつた私のカルル……駄目です、失敗です。』彼は歎息の裡に幾度もそう云つた。

『其後カルルは町へ歸つて來て、私は毎日のやうに彼に會つた彼は大抵エニーと一緒だつた、そして町の人は二人が町を通るとやア好一對の夫婦だなど〻囃し立てた。エニーは町内での別嬪で、若い者で彼女に岡惚れして居ない者は無いくらゐ。みんなが彼女に付け文をして、彼女を女神と呼んで居た。けれどもエニーは、カルルを除いては孰れも目を呉れなかつた。そしてカルルはいつも彼女の眼の裡に笑つて居るやうな、そうした美しい人であつた。實際カルルはスラリと丈が高くて、たんと見る事の出來ない、力のある親しい眼を持つて居た。笑ふ時にその眼は丁度舞踊するやうであつたが、たゞ、何かいら／＼する時だけは、それが嚴めしく光るやうに見えた。併し私は、エニーが最も好いたのは、恐らくあの漆黑のモサ／＼したチヾレ毛だつたらうと思ふ。

『彼女はカルルには夢中であつた、彼も亦たエニーにはゾッコンまいつて居た。私はそれを、二人の姉に聞いて知つて居た。姉達や姉達の友達が如何にカルルを思つて、ともすれば噂に持ち

出すのを私は聞いて居た、處がカルルにしては、エニーの外はどの娘にも眼を呉れなかつたものだ。

『カルルとエニーは結婚するだらうと、誰でもがそう云つた。私の大きい姉のラヒエルなども、或晩御飯の席でそう云つたが併し人の好い母はそれを笑つて打消した。「そんな事があるものか、エニーはお前專ら其氣だらうがさ、老男爵が承知しやしないよ。カルルの家は吾々の家に較べたら大變な金持だらうけれどエニーの家に較べたらお話しにならないぢや無いか。カルルは美人エニーの相手ぢやないよ。」

「處が親爺が言い出した。「お母ア、お前はフオン、エーストフアーレン老男爵が、ハインリツヒ、マルクスと仲の好い間柄だと云ふ事を忘れて居る。老男爵はエニーが可愛いやうにカルルが好きなんだ、娘が好きだと云へば素寒貧にだつて遣る人なんだもの、カルルに是れ程よい事があるものか。

* * *

『カルルは間もなく鄕里を去つて、今度は伯林の大學に行つた或日カルルの父が私の家へ來て又も親爺と話して居るのを聞く・とカルルは今度は前のやうな放蕩をせず、眞面目に勉强して居ると云ふ事であつた。カルルとエニーとが結婚したと云ふ事を知つたのは丁度其時であつた。

* * *

『カルルは其年の復活祭に歸省したが、大變に痩せて色が靑かつた。私は彼が私に會ひに來て呉れた時、その非常に沈み勝で陰氣なのを見て驚かされた。私は彼と共に古い羅馬の廢墟を彷ひ歩いた。そうして彼は私に自分の考へて居る事に就いて話した。カルルはもう大詩人となると云ふ希望をスツカリ捨てゝ了つて、博士號を取り、大學教授になりたいと云ふ考へを持つて居た。私は古い注意を呼起して、カルルが學校朋輩の子供達の事を詩に作つた事や、あの頑固な老教師フオン、ホルストに就いて唄つた事など語つて、二人は丸ツきし無頓着な少年のやうになつて笑ひ興じた。カルルは小高い丘の上へ登つて、さうした往時の詩が丸で前週あたり作られたもの丶やうに、殘らず繰返して唄つたが、其晩の彼は、美くしい月の光を浴びて、何とも言へぬ立派な相貌(すがた)であつた。

『其後カルルは父の死に出會した。そして私は其の葬ひの通る時限りでもう彼を見なかつた。彼は伯林へ歸つて大學で勉强に沒頭する人となり、私は間もなく漫遊時代に移つて我家を離れ

る事になり。其後永い間私はカルルに就いて何にも聞かなかつた。

二　喝采のない偉大な雄辯家

『其後二三年經つて、私はコローンで働いて居た。コローンは私の愛人を得た處だが、或日 *Rheinische Zeitung* 紙上で、其處に或る民主的集會の開かれると云ふ記事を讀んだ。私は此の新聞で見るやうなそう云ふ民主的思想が好きだつた。つまりそれが私のやうな貧しい勞働者の爲になるからだつた。それで私はすつかりそれに惹き付けられて、集會に行かうと云ふ氣になつた

『私は早速其晩その集會へ出掛けて行つて、諸辯士の演說を聽いた。すると其處へカルルが來たのであつた。私は彼を初め見付なかつたが、背後の方で呼きが聞えて、私の側に居た一人が「マルクス博士が來てる」と云つたのを耳にした。私は振返つたすると丁度正面を向いて居るカルルが眼に映つて、私の二つの眼は彼にヒツ付いた。其の瞬間に私には彼はもつと〳〵愛すべき男であつたのだと思へた。』

『聽てカルルは演壇に立つた。彼は大して能辯では無かつたが併し要點を判然とそして正確に、單純な言葉で話した。彼の前に出た非常に雄辯でそして熱烈だつた辯士は、非常に聽衆を動かして殆んど狂せしめた。然しカルルの演說に對しては、少しも喝采が聞えなかつた。彼の演說は全然靜肅の裡に傾聽されたのであつた。

『それで私は、カルルの演說は大失敗に終つたものと思つたが明くる日私は、自分の記憶に在る大事な言葉が、悉く前夜カルルの口から出た言葉であつたと云ふ事を發見した。しかも又それが、唯だ自分だけでは無くて、私の働いて居る工場の皆に取つても同じ事であつた。彼等は翌日、前夜の集會に就いて話し合つたが、彼等が記憶に留めて論じて居るのは皆カルルの演說であつた。カルルは全くそうした人物であつたのだ、彼は何となく吾々をして忘れる事の出來ない事を語り得る或物を持つて居た。

『私は其の集會が終つた時、彼に何にも言はずに誘ひ出したのであつた。思ふに私は、立派なマルクス博士たる大人物に對して、自分の身が引けもすれば。幾分怖れもしたのであつた。けれども向ふでは私の出て行くのを見付けて、私の名を呼んだ「ハンズ、フライツツヒ君、一寸……」と呼んで、彼は私の方へ走つて來た。やがて彼は強ひて私を多くの領袖連に引合はした。

「之は僕の親友フライッツヒ君で、一緒に小學校に通つた間柄です」と一同に言つた。

「私が暫く其等の領袖に打ち混つて居たと云ふ事と、そして彼れ自身が少しばかり酒を呑んだと云ふ事を除いて、彼を滿足させた何物も無かつたらう。私はそう云ふ仲間の間で自分が愚かに見られるのが怖れたが、併し思い切つて同席したのであつた君は此等の領袖連に對してカルルが言つた事に就いて、聞いて居るだらうが、私は同席して其等の凡ての言葉に傾聽した。名士の一人は、今や死物狂いの活動を要する時だと云ふ事を熱論した。「血の革命以外何物も無い、それのみ唯だ勞働階級を救ひ得るのだ。そうだよマルクス君」と彼は云つた。然しカルルは落付いて輕く笑つて居た。そうして彼が「革命？然う、併しまだ〳〵それは君まだゝよ。そして恐らくは絕對に血の革命では無いね」と云つた時、私は彼の口元に昔の嘲笑的な嘲が見えたやうに思つた。あゝ何と云ふ靜かな力が彼の言葉に籠つて居たらう。

『此の小さな會合が終つてから、カルルは私を自分の事務所へ案内した。そうして私は彼が側の Rheinische Zeitung の編輯主任だつた事それから私が襲に讀んだ記事の彼の筆に成つたものである事を知つた。それで私は彼がそんなに偉大にそして立派になつたのだと云ふ事が驚かれるにつけても、殆んど彼を怖ろしいやうに感じた。然しカルルは忽ち私の畏縮を一掃して、お互ひが故郷を出て來た少年でも、共に昔の記憶を樂しむと云ふ事の外には、私をして何事も思はせないやうにして吳れた。

『之が切ッ掛けで、私は其後屢々カルルに會つた、と云ふのは私が其のデモクラチック、クラブに加入したからである。やがて政府はライン新聞を禁止する、そこでカルルは巴里へ行つた。彼が巴里に行く前に別れの挨拶かた〳〵私を訪ねて來た彼は私に、巴里に行く前にエニー・フォン・エストファレンと結婚すると云ふ事を告げ、私は彼に自分も結婚すると云ふ事を話した。

『其時は少しも思ひ寄らなんだが、不思議にも私達は新婚旅行の途上で一緒になつた。私が結婚式が濟んでから新妻のバルバラと共に Bingen に行つて居ると、誰か私の名を呼ぶ者があるので、振返つて見ると聲の主はカルルで、彼はエニーと共に笑い乍ら私とバルバラを眺めて居る。そしてお互ひに揃つて阿呆らしく顏を紅らめたものだ。斯くして吾々は古い Bingen で樂しい日を送つた。それから私は妻の親爺の工場で働く爲に

コローンに歸り、カルルは巴里へ行つて。それが一八四三年の事であつた。吾々は彼から屢々聞いても居り、其後讀んでも居たが Vorwärts（『前進』を意味す）はカルルと外の偉い人々に發行されて居る雜誌であつた。何でもそれにはバクーニンも書きハイネやヘルヱツクなども書いて居た事を記憶する。

『併しそれも又ぞろ禁止された。そしてそれを禁止したキゾーは、カルルを始め其他の記者に對して、佛蘭西を立去る事を命じたと云ふ事を聞いた。キゾーを說き伏せたのはアレキサンデル・フオン・ハンボルツだと云ふ事であつた。私はカルルから手紙を貰つた、彼は妻と共にブラツセルに落付いて、其處で、女の子が出來て、それが既に八箇月になつたと云ふ事であつた。

『それから少し經つて、カルルの居所を尋ねる處の書面が倶樂部へ再々來た。それは私のそれまで聞いた事の無い、エンゲルスからの書面であつた、從つて私はエンゲルスが眞にカルルの友人で、そして同志だと云ふ事を確かにする迄は、カルルの居所を知らして遣らなかつた。知つての通り、吾々は敵がカルルを害する事を怖れて居たからね。併し、私がエンゲルスに返辭を出したと云ふ事は、大變よい結果を齎らしたのであつた。と云ふのは、エンゲルスはカルルを非常な苦境から救ふ爲に。若干の金を送つて吳れた事を私が認めたからである。若しも吾々が、カルルがそれほど苦しんで居ると知つたなら、コローンに居る吾々カルルの友人は、どんな事をしても送金してカルルを助けるのであつたが、思ふに彼は其の難澁を吾々に知らせる事の出來ない我慢強い男であつたのだ。

三　共產黨宣言朗讀の前後

倫敦で彼に再會したのは、一八四七年の冬であつた。數ケ月の間、凡ての勞働者の團體は、萬國同盟組織の問題で昂奮して居たが、カルルは其の綱領を草案する爲に招がれて居たのだ。やがてカルルの綱領を評議する爲の大會が開かれて、私はコローンの同志から代表者として派遣される事になつた。倶樂部員は殘らず私が入費を自辨しやうとするのを遮ぎり、私は再びカルルに會ふ事が出來るので嬉かつた。

『いよ〳〵私がグレエー・ウインドミル街の會場に出席した時カルルは其の用意した主義綱領の宣言を朗讀した。それが君も御存じの『共產黨宣言』なのだ。

『ヤア！貴老（あんた）があの吾々階級の自由を獲る不朽の宣言が朗讀された時、本統にその席に列なつたんですか。ハンズさん？

『列なりましたとも、私は會の在る間十日と云ふもの毎日出席しましたよ。カルルがあの宣言を朗讀した光景、私は決して忘れる事が出來ない。彼は感激に醉ふと云ふ人のやうであつた。私はベルンスタインやニエマンや其他の堂々たる戰士が有名な古典の內容を宣告するのを聞いたが、而し決してカルルがしたやうなそう云ふ偉大な宣言は聞かなかつた。彼が朗讀して居る間吾々一同は啞符に封じ付けたやうで、死の如く靜肅であつた歡喜の淚が私の頰を傳つて流れた。それは私ばかりで無かつた彼が讀み了つた時、猛烈な歡呼が湧き返つた。私は自分で自分を制する事が出來ずに、カルルを摑まへて兩方の頰ぺたを何遍となく接吻した。併し彼はそん事をされるを好まなかつた、それは彼が常にそんな馬鹿げた事をされるのを恥かしがる性であつたからだ。しかもカルル——彼はいつも私に子供の時分と同じやうに、自分をカルルと呼べと云つて聞かなかつた——其日吾々に眞實の自己を提供して、心の奧底を有りの儘に示したと云つて差支ない。萬國の勞働者は團結しなければならぬ——團結！實にこれだ、其夜、會の長い日程が終つて、彼がエンゲルスや其他數名——其中にカルル・フアンデルが居たと記臆するが——之れ等と共に、私を別の處に伴つて、もう少し外の事に就いて言つた。「勞働者は是非とも團結しなければならぬそれと同時に、何人も團結の替りに更に一人々々にして、一個のTrator として贊成しなければならぬ。」と云つた。

『中には彼の言ふ通り我慢する事の出來ない者が在つた。彼に從つて神の如くに忍耐をした者は極めて少なかつた。多くの人々は一も二も無く行動を要求して、その或者はカルルを平凡な臆病者、行動を避ける憶病者だと云ふ風に見た。其處に一人の華奢な佛蘭西人が居て、彼は「憶病なマルクス」に反對の投票をするやうに、吾々が互ひに若者の時分からカルルを知つて居る此の私を、そして臆病などゝ云ふ事の無い、勇猛心を有する男としてカルルを知つて居る此の私を誘つた。私はいきなり彼奴を摘み出して、丁度獵犬が土鼠を啀へて振回すやうな目に會はして遣つたので、彼奴は悲鳴を擧げた。私はこの會で再びマルクスを憶病と呼ぶ彼の聲を聞かなかつた、

『カルルが何事につけても充分强者であつた事は言ふがものは無い。然し彼は、何者かの結構な事柄が、數千の無敎育な勞働者から生まれて來るものだと云ふ事を想像するのに餘りに聰明であり過ぎた。彼等勞働者は。自分等に取つて最も危險な、有ゆる種類の手道具を以て武裝し、素養の充分な資本家の軍隊に向つ

て挑戰して居るのだ、聰明なカルルは、此の挑戰に依つて目的を遂行し得るものと考へ得なかつた。併し然う云ふのが知つての通り古い「革命」の理想であつた。それだからして、忍耐の長い旅程に左袒すると云ふ事は、お人好しの反逆に加擔する事よりも、ずつと勇氣を要する事なのだ。そこでカルルにしては、それを其の平靜な容貌とそして謂ゆる「行動」に向つての叫びに對する嘲笑態度とで示したのだ。彼がウイルヘルム・ワイテリンク——惡人では無かつたが、考への惡かつた人——の騷がしい一味を靜めた手際は、全く驚くべきものであつた。オゝ、我がカルル、彼は性來の民衆の指導者であつた。

『大會が全く終つてから。私は其大都市を見物すべく數日倫敦に滯在しやうと考へた。妻の姉がデーン街に住んで居たけれども、それが私を引留める何の値打も無かつた。唯だカルルが私に、ブラッセルを廻つて歸れと頻りに言つたのであつた。彼とエンゲルスは早速歸り仕度に掛つて、私を一緒に連れて行きたいのであつた。私は直ぐ倫敦を立ちたく無かつたが、カルルがブラッセルに或る使命が在る事を話したので、私はそれをコローンに齎らす爲に、勿論同行する事にした。

『あゝ、ブラッセルまでの旅！それが吾々の何と云ふ光榮な時間であつたらう。時々カルルとエンゲルスとは、大きな問題に就いて愼重に語り合つた。私はそれを熱心に、口は固く結んで居るけれど。耳は大きく開いて傾聽した。さうかと思ふと二人は、先刻の愼重と云ふやうな態度から全然遠ざかつて、恰かも暢氣な勞働者のやうになり、そして世間話をしたり歌を唄つたりした。勿論そう云ふ時に私も仲間入して居た。世間の人は云ふ——マルクスを知らない處の人々は斯う云ふ。「彼は陰氣なムッツリ屋で、笑ふ事の無い人だ」と私はそれは彼等が、唯だ偉大なる指道者にして教師たる、無數の重要な問題で頭の燃えて居るマルクスと云ふこと以外、私の知り拔いてそして愛して居たカルルの笑ひを見た事が無いから言ふのだと思ふ。私の知つて居る眞のマルクス、私の友人なるカルルは。人間、子供、眞の人間であつた。彼は歌も唄つた、面白い話しもした、巫山戯もした、而もそれで自腹を切るさへ厭はなかつた。

若き同志の顏に微笑が溢れた。『ハンスさん、僕は非常に喜ばしい』と言つた。『私は今までマルクスは人間味の無い、陰氣な人だつたと敎へられて居た。彼は決して自分の重心點から曲る事を知らない人だつたと聞かされて居た。然し貴者に聞けば決して然うで無い、彼は笑ひもすれば串談も云ひ歌も唱ふ、私が

前に考へて居た通りなんだ。』

老ハンズは青年が話して居る間ヂツと靜かにして居たが、併し其等の言葉を一々聞いて居たやうにも見えない。淡い微笑が其の口の廻りに漂つて、そして其の眼の奥底の表情は、其の微笑が往時の思ひ出に囚はれゐる事を語つて居た。もう其の小工場の內は暗くなつて、小さな爐の中で燃える敢果ない灯の明滅する光が、若き同志をして纔かにその老友の顏を認めさせた。

青年は靜寂を破つて『ハンズさん、もつと話してお吳れな、僕はマルクスの事が知りたくつて仕樣が無いんだから』と云つた。

老人は頷づいて爐の方を振向き、少しばかり木片をくべて、聽て語り續けた。

『吾々がコローンで初版の共產黨宣言を手にしたのは、一八四八年の二月下旬であつた。丁度巴里に於ける革命勃發の新聞を見た一日か二日か前であつた。私はカルルが巴里から送つて吳れた其の宣言のコツピーを今猶ほ持つて居る。

『御存じの通り彼は政府の命令でブラツセルを亡命した。普魯西はそれを要求した、それでカルルは私に書面を送り、逮捕されて即刻白耳義を放逐された。彼は直ぐ巴里へ行つた。ギゾーが彼を逐つたその市に再び歸るべく、州政府が彼に公招を發したのは、僅かに一週間前であつた。彼が巴里へ行つた事は一種の勝利と考へて差支ない。

『君、その數日間に吾々が何う感じたかと云ふ事は、君には解るまいね。事件は別に大した事で無い。吾々は此の勝利の日が、實は勝利で無いと皆がそう思つた。カルルは吾々をして、佛蘭西に於いて起つた事件は、歐羅巴全體のプロレタリアを覺醒せしめると云ふ事を信ぜしめた。「ガリキヤン鷄が勝鬨を擧げる時、チヤアマン勞働者は起つであらう。」彼は何時もそう云つて居た。然るに今その鬨の聲が聞えた　革命は佛蘭西に於いて成功的であつた――吾々はそう思つた――そうして民衆は廣場に沿ふて自由の木を植えつゝあつた。

『英吉利でも又、革命の精神が、四方に鋒火を擧げて居た。改進黨は合同した、吾々は毎日、王朝が仆れて共和制が布かれたと云ふ報道に接する事を待ち構へた。勿論、改進黨のイズムは、其根柢に於いて「パンとバタの問題だ」と云ふ事、そして改進黨の目的は又吾々の目的であつたと云ふ事を、吾々は知つて居た。

『そこで、開の聲を聞いた吾々は、獨逸にも亦た事件の起らん事を要求した、吾々は此毎晩コローンの倶樂部に會合して、盛んに形勢を論じた。或者は直ちに戰鬪開始を要求した。何しろ革命は吾々獨逸人の血の中に、恰かも强烈の酒の如くで、吾々は其の醇酒は呑んで居たのだからね。

『で、カルルが吾々に、待たなければならぬ、忍ばなければならぬと言つて來た時、一同の間に大失望が在つた。それまで一同は直ちに開戰すべしと考へて居た、從つてカルルには怖氣があると云つた者もあつた。然し私は彼等が誤つて居ると思ふので、私は彼等に思ふ處を告げた。それで一晩、私がカルルから受取つた――カルルがそれを會員に讀み聞かせよと言つて寄越した――手紙に就いて、烈しい議論が戰はされた。

『手紙に依れば、ヂョルヂ・ヘルエックは巴里に居つた、そして獨人勞働者の一群がフアーザーランドに行進して、方に戰端を開かんとして振ひ立たすべく試みて居た。カルルの云ふ處に據れば、之は恐るべく誤まりであつた。裁縫職や煙草工や職工などの一群が、普魯西軍隊に手向ひすると云ふ事は、全く無用の業で無くて何であらう。彼等群衆が全滅させられると云ふ事は、見え透いた事實であつた。のみならずそれは、之が爲に有用な無數の革命家を巴里から取去つて、眞の革命を妨げる事であつた。カルルは記して言つた『同志に告げよ、幷は懦病或は恐怖の問題には非ず、唯だ聰明の問題なり。永き苦鬪に生くる事は、出馬して射殺さるゝよりも大なる勇氣を要す』と。彼は故郷の同志がヂッと忍んで時を待ち、そして巴里に居る友人がヘルエックの勸めに從はるやうに努力する事を望んだ。巴里に於ける獨人の多くはカルルの勸めに從つたが、少數の者はエックの言に從て。ベーデンに侵入し、規律ある軍隊の力で恰かも大風に吹き捲られるやうに追ひ散らされた。

『巴里に在る獨逸の同志は、カルルが書いた處の特別の宣言を吾々へ送つた。吾々は申越し通りそれを勞働階級の間に配布した。それは勞働者を敎ゆる好い道であつたが、併しそうした試錬時代に於いて一向つまらぬものに見え、もつと急進的な革命的行動を望んで居る同志を滿足させ得べくも無かつた。實際この私でさへ、或る瞬間はカルルの勸告を忘れる位であつた。

『三月十三日――君は十萬以上の改進黨の人々がケンニントン共有地に群聚した此日を記憶するだらう――に於いて、ウインナに革命が勃發した。やがてコローンにも亦た起らんとした。

其の報告がウインナから着するや否や、砲術士官であつたオーガスト・フオン・ウイリツチは、コローン議院へモツブ案を齎らした。吾々は官憲が國王に請願して、市の名で自由とそして立憲政治とを求むる事を要求した。

『それから十八日、伯林市民が堡塞の背後で戰つた同日には、吾々コローンの人々の大集團は、教授ゴツトフライド・キンケル氏に導かれ Marseillaiseを唄い、禁じられて居る黑と赤と金の三色で染めた革命の旗を押し立とゝ市中を練り歩いた。

『其時マルクスは何處に居たんです』青年は問を發した。

『エンゲルスと共に巴里に居た。吾々は此の大爭鬪からカルルの遠く離れて居ると云ふ事が、不思議に考へられて、私でさへも彼に對する信念が消えかゝつて居た。彼はガリキヤンの鳴くのは革命の起る前兆だと云つて居ながら、其聲を聞きつゝ平然として居た。私がカルル自身の口から、此の革命の壓服される事は彼が其の出發點から見拔いて居たと云ふ事、勞働者の機會は再び容易に來ないと云ふ事を聞いたのは、其後大してあとでは無かつた。（後半は次號）

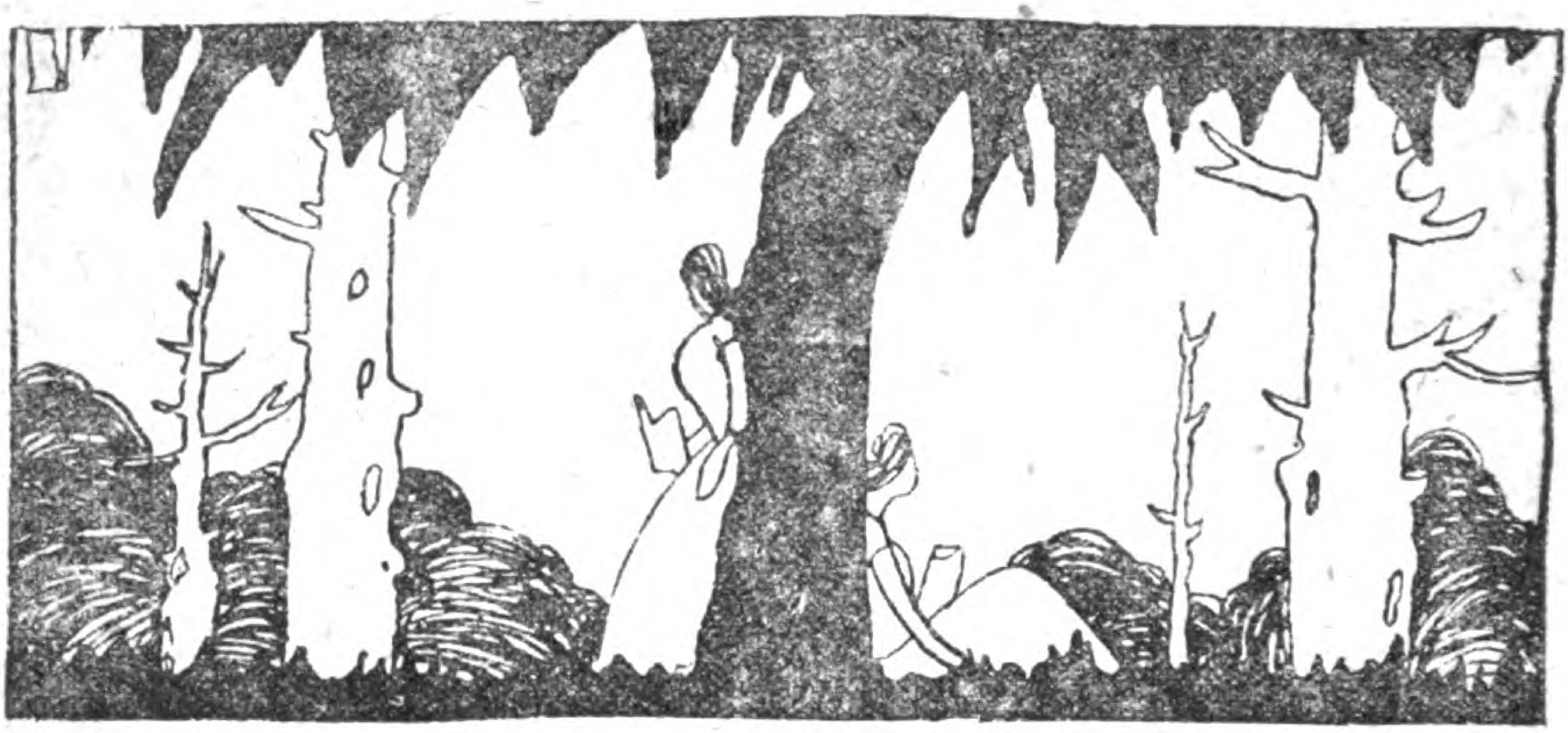
新刊紹介

生活不安　村島歸之著

關西の勞動界を支配するは賀川豐彦氏であり賀川氏と事を共にして中堅となつて居るのは著者である曩に『ドン底生活』を著して忽ち數版を重ねた本書は其姉妹篇である著者は自ら勞働者と伍して堅パンを噛り水を呑んで得た實地の調査を材料とし何人も得易からざる獨特の統計表に依つて勞働問題の解決と實際とを研究した本書は即ち其結晶である賀川氏が跋に「わかりの早い良心の鋭い同情の深い人生の暗黑を報告し乍ら先づ彼自身が泣いて居る」と云はれた眞面目な著者の目に映じた生活不安の實情は詩的な潤ひの多い文章で叙述せられ一種の創作を讀むの感がして一行一句捨て難い氣がされる社會問題に志ある士に特に推薦したい（定價一圓四十錢神田表神保町十文雅堂發行）

マルクス傳　村上正雄譯

マルクスは我が思想界を席卷して今や何物をも其所有たらしめんとして居る然しマルクスに關する學說の著述は可なりに紹介せられて居るが其人物や經歷に就ては纏つた傳記としてあまり整つたものがなかつた最近其道の人々に依つてマルクス傳の大著が出るとの事であるが本書は其魁をして現はれたものであるマルクスの父母から其幼年時代青年時代を叙し戀物語を極めて輕妙伸達せる筆致を以て譯出してある幼年時代に萌せるマリクスの詩人的性格が遂に戀を繞ぐる頃より社會主義的思想に傾き男爵の女婿としての青年が自分が自ら階級打破を叫んで村人を驚かせた頃の事が彷彿として眼前に浮み出る思ひがされる苟くもマルクスを知らんとする者は必ず一讀すべきものである（定價七十錢芝區三田一丁目三田書房）



修善寺哀話

片眼のお勝ちやん

澤田撫松

一

三島で電車に乘換へて、大仁へ着いたのは午前十一時四十五分であつた。停車場の前には乘合馬車と俥と自働車とが客を待つて居た。折角都會を離れて、これから溫泉宿へ行かうと言ふ身が、自働車に乘る氣にはなれなかつた。泉鏡花君の小說の中にある樣な、乘合馬車の馭者が、變な音のする喇叭を吹いて居るのが如何にも溫泉街道らしかつたので、私は乘合馬車に乘りたかつたけれど、午前六時二十五分東京驛發の汽車に乘る爲めに、四時すぎに起きたのと、五時間も汽車に乘つて居たのとで、軀が疲れて居たから、乘合馬車に乘ることを思ひ止つて、護謨輪ではあるが可なり古い俥に乘つた。險しくはないけれど、所々に坂のある溫泉路を車夫は緩々と引いて行つた。五月秋のすんだ後であつたから、麥を刈り取つた後へ水を引いて、稻の植えてある水田が道の左側にあつた。飛白の單衣に、赤い襷をかけて、菅笠を冠つた若い女が、脛もあらはに水田に屈むで、田植をして居る所もあつた。それが廣重の繪の樣に見えた。修善寺へ行く路と下田へ出る路と別れる所に、道しるべの石が立つてあつて、其所に蛙がピヨコ〳〵飛で居た。坂道を幾曲りも曲ると、水の音がして、谿流が左手に見え

た。もう其所は修善寺で、渡月橋や虎溪橋の邊は、兩側に溫泉宿が並で居た。俥は石の門を入つて玄關に梶棒を下した。

『お客さま』

番頭が聲をかけると、女中が出て來て帽子や洋杖を取つてくれた。

『巽の一番』

帳面を繰りながら番頭が言ふと、女中は先に立つて、所謂巽の一番へ案內してくれた。長い廊下を通つて、梯子段を幾つも登つて行くと、日本家の三階で、谿流に面した眺望のよい八疊の間が、私の其の晚眠むる場所であつた。床の間にかゝつてある瀑布の軸物も涼しさうで、丸窓の下にある紫檀の机も氣に入つた。朱塗の衣桁へ脫だ洋服をかけて、女中の持つて來た浴衣に着替へ、階段を五つばかり下りると、其所に浴室が三つ並で居た。右の端には貸切り湯と書いた札がさげてある、向島にあつた太陽閣式らしい。中央は『男子方御遠慮願ひ上げ候』と書いた札が下げてあるから、言はずと知れた女湯である。左の端には何の揭示もないから無論男湯だと思つて、浴衣を脫いで浴室へ入らうとすると湯の中から銀杏返と束髮の頭が見えた。此所も女湯であつたのかと躊躇して居ると

『お入りになつてもいゝんですよ、私達が此所へ御邪魔にあがつて居るんですから』

銀杏返の方が聲をかけてくれたので、漸と湯の中へ入ることが出來た。

『隣に女湯があるんですけれど、湯槽が小さいもんですから、つい此所へ入りたくなりますので……』

なる程此浴槽は岩と岩との間を混凝土で繫ぎ合はして、自然に出來た池の樣になつて居て、中へ入ると淺い所と深い所とがあつて、如何にも溫泉らしい氣分がするので、女の闖入があるのであらう。額から汗が出ると、皮膚の色に赤味を帶びて來て、いゝ氣持になつたから、浴衣を着て座敷へ歸ると、刺身と吸物と鮎の鹽燒と酢物とが食卓の上に並べてあつて、十七八の色の白い女中が、冷したビールを載せた盆を右手に控へて、私の湯からあがるのを待つて居た。柔かい絹の座布團の上に胡坐をかいて、冷えたビールを二三杯引かけると、湯あがりの渇いた咽喉に、液體が氣持よく流れた。

『何か面白い話はないかい』

どのお客も言ひさうな、月並なことを言ふと、若い女中は、盆を膝の上で廻しながら、

『私、此所へ來て間がないんですから未だ何にも知らないのです』

飯が濟むと女中は湯呑に茶を注ぎながら、

『この溫泉場のことなら、何でもよく知つて居る人がありますよ德さんと言ふ按摩なんで、そら何でもよく知つて居ますわ』

按摩を推薦するのを聞くと、俄に肩の凝るのを覺えた。

『オイ、その按摩を呼んでくれんか、按摩の話が出たら、何だか肩の凝るやうな氣がする』

私が按摩を注文すると、

『マア、隨分氣の早いお方だわね、ですけれど、按摩さんは却々繁昌しますから、今頼むで置いても、晩でないと來ませんがようござんすか』

女中はそこらのものを片附けながら、按摩の繁昌を說いて居た。

私は浴衣のまゝ散歩に出やうとすると、

『御散歩にいらつしやるなら、表を右へ廻つて橋を渡つて、其所を右へ廻つて、又橋を渡つて、又右へ廻ると此家の表へ出ます』

女中は歩く道筋を親切に敎へてくれた。私は女中に敎へられた通り、宿屋の表を右へ廻ると、虎溪橋と言ふ東京では一寸見られない古風な橋があつた。橋の上に立つて溪流を眺めると、橋の上手、流の中央に岩があつて、岩の中から湯が沸いて出る、其が弘法大師の獨鈷湯と言ふ、修善寺で一番名高い溫泉であつた。橋の下手を見ると、石と石との間を綺麗な水が流れて、その水が岩に當つて落ちるところを白糸の瀧と名づけてある。瀧が午後の陽に照らされて、五色の色を噴出して居るのが美事であつた。虎溪橋の少し川下に渡月橋と言ふ橋がある、川の名が桂川だから、京都の嵐山に擬してさうした橋の名をつけたのであらう。虎溪橋と渡月橋の間に郵便局があつて、その上が修善寺の本堂で、鐘樓に若僧が鐘を撞いて居るのが見えた。渡月橋を渡つて少し行くと、小さな川があつて、石の橋が渡してあつた。それを渡ると、櫻の樹の澤山ある所へ出た。其所は桂川、渡月橋に因むで嵐山と言つて居る。嵐山の南に源賴家の墓があつて、それを右へとつて行つて、溪流にかゝつた細い橋を渡ると、小高い岡がある、岡の頂に源範賴の墓があつた。岡を下りて一丁程歩くと、私の泊つて居る宿屋の前へ出た。入口に居た番頭や女中に『お歸り』と聲をかけられて、自分の座敷へ歸へると、手拭を取つて湯室へ下りた。疲れた軀を浴槽の中へ横たえて居ると、

『旦那、飲み湯の所に笊が入れてありますから、お上りになる時持つていらつしやい』

私の部屋を受持つて居る女中が、浴室の外から聲をかけた。浴槽の岩の中から、湯が沸いて出て居る所を覗くと、成程笊が漬つて居た。笊を引き上げると、中に鷄卵が五個入つてあつた。其を持つて座敷へ歸ると、机の上に硝子の皿と食鹽を入れた小さい皿とが載つて居た。長火鉢へ炭をついで、鐵瓶をかけて居た女中は、私の持つて來た鷄卵を受取つて白い指先で皮を剝いた。硝子皿の中へ並べられた茹玉子は柔かい半熟になつて居た。氣のせいか普通の湯で茹た半熟よりもうまい樣な氣がした。茹玉子を食べながら友達の家へ出す繪はがきに短い通信文を書いて居た。

『お仙さん、按摩さんが來ましたよ』

外の女中が按摩を伴れて來ると、玉子の皮を剝いて居たお仙は、襖を開けて、按摩を其處へ坐らした。

『ヘイ、今日は、大分お暑くなりまして』

按摩は羽織を脫いで袖だゝみをして居た。

『德さん、お前さんに何か面白い話が聞き度いと仰しやるんだから、旦那のお氣に入る樣なお話をなさいよ』

女中のお仙が、傍から蓮葉な調子でこう言つた。

『さうさな、面白い話て別にないが、お勝ちやんの話でもしやうかな』

『又お勝ちやんの話かい、德さんのおはこだ』

『だが御存知のないお客さんには、やつぱりお勝ちやんの話が一番面白からうよ』

女中と德さんが、こうした會話をして居る中に、力の籠つた十本の指が、私の兩方の肩の上に活動を始めた。

二

──紙を疊んで、眉毛を隱し、ちよいと齒を染め、うしろ帶、よう似合ふたか見やしやんせ、もしえと言ふて名を呼ばぬ、樂しい仲の氣樂酒──

賴家の墓の傍に在る指月殿の前の石段を下りて、細い路を通へ出やうとする右側に、蔦屋と言ふ御神燈が掛つてあつた。簾を通して見える六疊の間で、若い藝者が端唄の稽古をして居た。電話の鈴が鳴ると、三味線を其所へ置いて電話室へ入つた。一寸受話器に附いたと思ふと、

『お勝ちやん、電話、梅本さんから』

若い藝者は、電話室から顔を出して、二階の方を向きながら聲をかけた。

『どうも、憚りさま』

化粧をしかけて居たお勝は、白う塗つた頸筋に紫陽花色の襟のか〻つた緋縮緬の長襦袢の艶めかしう、二階から降りて來ると、直ぐ電話室へ入つた。

『ハー、私、待つて居たのよ、行きます、直ぐに、左樣なら』

お勝が電話室から出た。

『濱田さんでしやう、……御馳走さま、……枇杷で我慢して置くわ』

若い藝者は三味線を膝の上へ載せてニコ〱笑つて居た。

『安いのね、歸りに澤山買つて來てあげるよ』

そのま〻お勝は二階へ上つて行つたが、暫らくすると綺麗に着飾つて降りて來た。

『染ちやん、私、梅本さんへ行つてくるから、姉さんにさう言つて〻頂戴』

お勝が御神燈の下を潜ると、

『枇杷を忘れないでね』

染ちやんはまだ枇杷のことを言つて居た。お勝は虎溪橋を渡つて、日枝神社の横の梅本へ入つた。帳場に挨拶して三階の六番へ行くと、緣側に安樂椅子を持ち出して、濱田は新聞を讀むで居た。

『よく來られたわね』

背後から、濱田の肩に兩手をかけて、首を斜に、お勝は男の顔を覗き込むと、新聞を其所へ投げ出して、肩の上のお勝の手を、濱田は握り締めた。

――主に逢ふ夜の樂しみは、辛い勤めも何のその、親方さんの目を忍び、人は謗ろが何う言はうが、惚れたが無理か戀知らず、喧しい、あれ〱見さんせ、花に胡蝶の二人連れ――

向側の太田屋で、鄙ては居るが聲のよい唄が聞える。

『民さん、顔の色が惡いじやありませんか、どうかなすつたの』

お勝は欄干に靠れて、民雄の顔をじつと眺めた。

『ナーニ、別に、どうもしない……昨夜よく眠られなかつたから、それでだらう』

何氣なくよそふて居るけれど、毎と變つた民雄の素振を、怜悧なお勝が氣のつかずに居る筈がない。

『何か心配になることがあるんでしやう、さうに違ひないわ、

言つて頂戴、聞かないと私も心配だから』

綺麗に拭き込むだ緣側に坐つて、お勝は民雄の膝へ手を置いた。

『實はお前に種々相談があつて來たんだけれど、一寸言ひにくいことだつたから、今の樣に言つたんだ、氣を惡くしないで居ておくれ』

こう言つて民雄は吐息をついた。

『言ひにくいことて何に、言つて頂戴な、早く言つて頂戴な、私、心配になつて仕方がないから、よう、どうしたの』

お勝は膝にかけた手で、男の軀を搖つた。

『そのことを言はうと思つて、無理して來たんだもの、言はずには措かれないが、然し急ぐことはない。お湯へ入つて、飯を食つて、夕暮れから散歩に出やう。そして何方か靜かな場所で話をしやう。それまでは何事も忘れて、寛りした氣持になつて居やう、さうして居られる間が人間の命だ』

二人がしんみりとした話をして居るところへ、宿の女中が浴衣を二枚持つて來た。民雄とお勝は浴衣に着替へて、浴室へ降りて行つたが、間もなく上つて來ると、二人はぼつと上氣して居た。お勝は鏡臺の前へ坐つて、梳や白粉壜を敏捷に動かして居ると、民雄は欄干に肱をついて、溫泉町の夕景色を眺めて居た修善寺の鐘樓で撞く鐘の音が響き亘ると、何とも言はれん淋しさを感じた。

『勝ちやん、呼鈴を押しておくれ、そして女中が來たら、酒を持つて來る樣に言つておくれ』

平生酒を飲まない民雄が酒を注文するので、お勝は心配さうに民雄の顏を見たが、何にも言はずに呼鈴を押して、女中が來ると、酒を持つて來る樣に言ひつけた。肴や酒が食卓の上に運ばれた時は、お勝の化粧も出來上つて、浴衣の上に黑繻子と縮緬の晝夜帶を締めて居た。

『民さん、今日はどうしてお酒を飲むの、あなたはお酒が嫌じやありませんか』

お勝の顏は曇つたが、民雄は默つて盃を出した。そして二三杯續けて飲むだ。

『一つ陽氣に騷がうじやないか、お勝何かひいてくれ』

眼のふちを赤くした民雄は、横になつて肱枕をした。お勝は民雄の言ふまゝに三味線を取つた。

――袖は淚の乾く間も、鳴いてあかせし山時鳥、ひと聲空に冴え渡る、月の鏡は照りもせで、曇り勝ちなる胸の闇――

お勝の唄を聞いて恍惚となつた民雄の眼には涙があつた。
『散歩してこよう』
民雄は立ちあがると、浴衣を脱いで着物を着た。
『散歩するなら浴衣の方がいゝわ』
お勝は浴衣のまゝ行かうとすると。
『浴衣ではいけない、着物をお着かへ、誰に逢ふか知れないから』
二人は着物を着替へて外へ出た。

三

渡月橋を渡つて、右へ廻つたお勝と民雄は、水晶を溶した樣な綺麗な水が流れて居る桂川の河畔を、流について川上の方へ歩いて行つた。白い雲が夜の空を走つて、月を出したり隱したりして居た。廣瀬橋まで來ると、温泉町の火影が遠くに見えて、水の音が高かつた。町を離れて人通りのない、夏草の繁みに、お勝と民雄は立ち止まつた。
『話てナーニ』
お勝は無邪氣な嬌態を作つた。
『それは……』
民雄は一寸言葉を切つて空を仰いだ。魔の樣な形をした雲が走り去つたあとに、陰暦八日の月が澄むで居た。
『一緒に死で貰ひたい』
お勝の手を取つた民雄は、堅く〳〵握り締めた。
『死ぬの？　なぜ？』
さきからの民雄の樣子で、さうしたことを言ひさうに思つて居たお勝は、別に驚きもしなかつた。
『あなたが死ねと言へば、私、何時でも死ぬわ、だけど、如何して死なゝければならないの、譯を言つて頂戴、どうしたの、ね、如何したの』
月の明で男の顏を眺めたお勝は、握られた手を振り動かしながら、熱心になつた。
『お互に若い身だ、誰が死たいことがあるもんか、それを死のうと言ふのは能々のことゝ思つてくれ』
民雄の眼には涙があつた。死ともない若い身が、死なねばならぬ今となつた自分を眺めると、涙の出るのが止められなかつた、
民雄が高等商業を出て今の會社へ入つてから四年になる。一年半は會計助手と言ふので唯計算をするだけであつたが、會計主任が肺病で死でから、主任心得と言ふ名目で、會計主任の實權

が民雄の手に移つた。年は若いが、正直と勤勉とが通りものになつて居たので、社長も重役も民雄に大金を扱はして安心して居た。それが昨年の暑中休暇に修善寺へ湯治に來てから、正直と勤勉が動搖した。暑中休暇は郷里の播州龍野へ歸省するつもりで居たのだが、貰らつた賞與が多かつたのと、胃腸が少し悪かつたのとで、修善寺へ湯治に來た。梅本の奥二階へ通された民雄は、晝間は湯へ入いつたり、雜誌を讀むだりして居たが、電氣がつく時分になると話し相手もなんにもない溫泉宿の一人客は淋しかつた。夕飯をすましてから外へ散歩に出た民雄は、賴家の墓の邊を歩いて、石段を降りて來る時、蔦家の門口に立つて居た銀杏返しの美しい女を見た。宿に歸つて女中に話をすると、それは蔦家のお勝と言ふ藝者で、修善寺一の流行妓だと言ふことを聞いて、旅の徒然に其の晩呼んで見ると、姿ばかりでなく、心まで優しいお勝の態度が、世間知らずの民雄の心を喚つて、翌朝、お勝の歸へつた後の寂寞が堪えられなかつた。日の暮れるのを待ち兼ねてお勝を呼んだが、其の晩は他の座敷へ行つて居ると言ふので來られなかつた。こうなるとよけいに逢ひたくなつて、電話を度々かけたが、遂に其の晩は來なかつた。民雄は其の晩眠られないで夜を明かした。翌朝の十時頃にお勝が綺麗に化粧してやつて來た。飛びついて抱き締めたい様な氣分になつたが、直ぐ何とはなしに厭な不安な感情が胸の底からこみあげて來たので、お勝から話を仕向けられても碌々返事もしなかつた。お勝も手もち不沙汰であつたから晝頃に歸へつて行つた。お勝に歸へられて見ると、俄に淋しくなつて、湯へ入る氣にもなれなかつたので、電話で又呼んだ。お勝は朝來た時よりも派手な着物を着て、白粉も少し濃ひ目に塗つて來た。濃艶な姿が民雄の傍に運ばれると、朝の時の様な嫌悪の念はなかつた。その日からお勝を他の座敷へやらぬ様に蔦家へ交渉して、晝夜自分の傍へ引きつけて置いた。七日の休暇期限が切れて、東京へ歸らねばならぬことになつた時は、三分の一だけ消費ふ豫定であつた賞與が殆どなくなつて、宿屋と蔦家との拂をして了うと、あとは汽車賃がかす〳〵であつた。これが焦げつきとなつて、東京へ歸へつてからも、じつと落ちついて居られなかつた。お勝に逢ひたいと言ふ心持だけは未だ自制が出來たが。お勝が他の座敷へ出ることを想像すると、もう矢も楯もなかつた。土曜から日曜へかけて修善寺へ行くことが續いて民雄は彼方此方に不義理な借金が出來た。融通の利かなくなつてからも、修善寺行きはやめなかつたから、自分の保管して居る會社の金を一

時流用することさへもあつた。勿論あとで工面をして、その穴は埋めるつもりで居たのであるが、少しでも融通がつくと修善寺へ通つて居たのだから、遣込みの穴を埋めるどころでなく、其の穴が段々深くなるばかりで、一年ばかりの間に八百圓からの遣込みが出來た。その尻がばれかゝつて來たので、何とか穴埋めをせねばならぬと、氣を揉むで居たのであつたが、何を言ふても、あらん限りの不義理をしたあとのことでもあるし、それに郷里の方でも自分を卒業さす爲に出來るだけの借金をして居たのだから、今となつては百圓の金も出來る見込が立たゝなかつた。こうした切羽詰つた場合に立つて、民雄はこの難關を切り開くだけの力量がなかつた。彼は消極的にばかり進むで行つた。金策の道はなく、今更帳面を誤魔化したところで發覺の防げるものでなし、それに重役が冷酷だから、悪事が露見したら裁判沙汰になるに定つて居る。さうなつた結果はどうだ。自分の名譽も自由も地位も悉く蹂躙されるのだ。それは未だ忍ぶとして、命も入らぬと思ひ込むだ可憐いお勝と別れねばならぬ。そしてお勝は自分から離れてにつて他人のものになるのだ。ア、他人のものになるのだ。結論が茲に倒達すると、民雄は此際お勝を自分の手から離さない様にするには、二人の肉體を同時に亡すより外に手段のないものと思ひつめた。この決心の下に民雄は廣瀬橋までお勝を伴れ出したのであつた。民雄の話を聞いて居たお勝は、夏草の上に膝を落して、

『そんなにまで私を思つて居てくださつたの、私、命なんかいらないわ』

民雄の帶に手をかけて、お勝はさめ〴〵と泣いた。

四

蛙が鳴いて居た。夜露を帶びた草の葉に、螢の光が明滅して居た。

『父さん……… 父さん………』

藁葺の八疊一間の一軒家の障子に、ぼんやり人の影がさして居た。外には若い女が立つて居た。

『お勝かい』

影法師が動くと、障子が開いた。

『どうしたんだ、急な用でも出來たのか』

ランプの光を受けて、白い顎鬚の瘠せた老人が此方を向いた。

『別に、急用と言ふ譯じやないんですけれど、私、これから東京まで行かなければならないので、お客さんと一緒に、こと

に依ると暫らく歸れんかも知れないから一寸逢つて置きたいと思つて』

お勝は傍へ寄つて、父の顔をしげ／＼眺めた。老人はお勝の素振りを默つて見て居た。

『私はお客さんに伴れられて行くのだから、お金なんか要らないわ、僅しか入つてないけれど、落してもつまらないから置いて行くわ、父さん預かつてゝ頂戴』

お勝は帶の間から蝦蟇口を出して其所へ置いた。

『なるだけ早く歸つてくるけれど、留守の間に煩はない様にしてくださいな、一寸でも氣分が惡かつたら、木村さんへ行つて診てお貰ひなさいね。そして暑い晩でも蒲團なしで寢ちやいけませんよ。幾等壯健でも年齢が年齢ですから、氣をつけてくださいね』

お勝はこう言つてほろりとした。暫らくもぢ／＼して居たが、立ちあがると、

『私、もう行くわ、……軀を大切にして、無理をしない様にね……』

お勝は後を振り向き／＼階を降りた。範頼の墓守の重兵衛は、娘の後姿を、月の光で見て居たが、姿が見えなくなると、ランプを吹き消して、娘の跡をつけた。お勝は夢路を辿る樣な足どりで廣瀬橋まで來ると、

『早かつたね』

橋の袂に待つて居た民雄が聲をかけた。

『自分の言ひたいだけのことを言つて、父さんが口を利かない中にさつさと逃げて來たの、顔を見たゞけでも胸が痛くなるんですもの、あれで何か言はれたら、私、涙ちまうわ』

お勝は絹のハンケチを眼に當てた。二人は手を取り合つて橋の中程まで行くと、橋詰に青い陰火がぱつと散つた。

『アレー』

お勝は民雄に縋りつく、

『何でもない、螢だ』

こともなげに言つてのけたが、民雄の軀も顫へて居た。

『言ふだけのことも言つたし、書いて置きたいことは書いたし、これでもう、未練はない』

縋りついたお勝の肩へ兩手をかけて、民雄はお勝の顔を眺めた。

『私は父さんが心殘りだけど、あなたには換へられぬ』

お勝は啜泣きに泣いた。

『許してくれ』

民雄が心臓から絞り出した樣な聲を出すと、右の手にきらりと光つた物が動いた。その時、橋詰から駈けて來た黑い物體が民雄に飛びついた。

『マア待つてくれ、待つてくれ待つてくれ。若い身そらで死でどうする添ひたければ添はしてやる。金で濟むことなら金も作らう。親一人子一人の娘を死なしてどうなるもんか、待つてくれ待つてくれ待つてくれやい』

短刀を持つた民雄の手に縋つた重兵衛は、泣きながら叫ぶのであつた。

五

沼津を發車した電車の隅へ腰を下した重兵衞は、腕を組むで溜息をして居た。沼津の長者星野傳造の所へ金を借りに行つて拒絕られたことが悔しいので、老の眼に涙を溜めて居た。墓守にまで零落たのは、身から出た銹で、誰を恨みようもないが、傳造の奴めがあんな誘惑をしなかつたならば、今頃は恩給で樂々と暮して居られるものをと思ふと、御用商人なんかに籠絡された自分が情けなくなつてくると共に、私慾の爲めに人を陥れて何とも思はぬ傳造が憎くて仕方がなかつた。先輩が引き立てゝくれたので、實力以上の出世をして、課長として部下の者から尊敬られる身分となつたが、學問の不足なかつた爲めに恥をかいたことが度々あつたので、切めて息だけなりとも充分學問をさしてやりたいと思つて居た弱點につけ込むで、長男の洋行費を引受けやうと言ふ傳造の申込を斥けられなかつたのが身の破滅となつて、段々深みへ引き込まれた擧句が收賄罪で入獄の身となつた。相手の傳造は僅の刑期で出獄すると、自分を利用して儲けた金で金貸を始め、今では沼津で一二を爭ふ資產家になつて居るが、自分は社會から葬られたばかりでなく、そんなにしてまで學問をさそうとした長男に先だゝれ、續いて女房に死なれると、女の兒一人を抱へて路頭に迷つたが誰れ一人救つてくれる者はなかつた。彼方此方彷徨ふた末、名も重兵衞と改めて範頼の墓守となつた。こうした悲境に落ちても、今まで傳造の所へ金を借りに行つたことがなかつた。けれども、今度と言ふ今度は、天にも地にも掛替のない娘の命にかゝはることだから、傳造に頭を下げて頼むだのであつたが、昔のことは忘れた樣な顏をして、

『私が今日の富を得たのは、自分の人格、名譽、感情なぞ言ふ

ものを投げ出し、さうした犠牲を拂つて儲けたのだから、人様の力を借りて儲けたのでない。成程あなたには御世話になつたことはあるが、それに對しては當時相當の御禮がしてある。今更あなたから無心を言はれる覺えはない。』

けんもほろゝの挨拶をされたので二の句がつげなかつた。成程その當時謝禮の意味で金を貰つたことはあるが、その代り地位も名譽もめちや／＼にして居る。傳造の今の身代から言へば五百や八百の金を只くれたところで身代の歪む譯でもないのに、自分が地位を賭してあゝ言ふことをしてやつたればこそ今日の富を得たことを思はないで、その言ひ草は何事だと一喧嘩しやうかとも思つたが、どの道借してくれないものを、こんな所で時間をつぶすだけ損だと諦めて、何にも言はずに引揚げては來たが、考へれば考へる程悔しくて仕方がなかつた。それにしても、このまゝ徒手で歸つては娘を見殺しにせねばならぬかと思ふと、全身の血液が沸きかへる様であつた。胸の中にこう言ふことを繰返へして居る中に電車は三島町へ着いて、大仁行の輕便鐡道に乘り替へた。動搖の烈しい小形の客車の中で重兵衛は揺られ／＼考へて居た。まさか空手で歸るとは思はなかつた沼津行が、全然失敗に終つて見ると、これから修善寺へ歸つて富田屋に頼み込むより外に道がないと思つた。自分と同じ役所に勤めて居て、あの時も自分よりもよけいに收賄したのであつたが、自分が眞先に檢擧されたものだから、他の連中は證據となるものを隠くしてしまつたのと何も彼も自分一人で引受けて同僚の名を出さなかつたもんだから、自分だけが犠牲になつて、ほかの者は皆助かつた。富田屋の主人も、自分が犠牲になつたばつかりに安穩に生活がして行かれるのだと思ふと、八百圓の金は貸してくれなくとも、二百圓や三百圓位の金は借してくれない筈がないと、自分一人できめてしまつた。漸つと落ちついた氣分になつて、汽車の中でうと／＼居眠りして居る中に大仁へ著いた。大仁橋を渡つて夜泣松の下へ來た時分にはあたりが暗くなつて居て、修善寺へ歸つた時はもう電燈がついて居た。渡月橋の傍の富田屋へ入ると、帳場に主人の源吾が算盤を彈いて居た。重兵衛が入つて來るのを見ると、厭な顔して奥へ立つて行つた。暫らく其所に待つて居たが源吾は顔を見せなかつた。番頭に聞くと、氣分が惡くなつたので寢て居ると言つて逢つてくれさうに思はれなかつた。源吾もやつぱり傳造流だと重兵衛はがつかりした。

『新二階のお客さんのお預り物』

背の低い太つた女中が折鞄を持つて來て帳場へ置いた。勘定書を書いて居た番頭は默つて頷づいた。

『お金が入つて居るんですよ、番頭さん』

女中は番頭に警告を與へてさつさと二階へ上つて行つた。勘定に夢中になつて居た番頭には警告の効力が薄かつたと見えて、勘定書が書き上ると、其を持つて二階へ上つた。帳場には誰も居なかつた。折鞄を見詰めて居た重兵衛は、中に金が入つて居ると言ふが幾等位入つて居るのだらうかと、そんなことを頭の中に描いて居た。見るともなしに邊を見ると誰も居ない、源吾に逢つたところで金を貸してくれさうにない今となつては、鞄の中の金が欲しくなつて來た。恐々鞄に手を掛けて開けて見ると、五圓札の束になつたのが五個あつた。其を懐中に入れた重兵衛は顫ふ足先に草履を引かけて通りへ出た。

六

靜岡地方裁判所の刑事法廷で、親子が互に自分が眞犯人だと爭つて居た。修善寺の温泉宿富田屋の帳場で二百五十圓を盗むだことが發覺して、重兵衛は公判に廻された。すると蔦屋の藝者お勝が、その金を盗むだのは自分だと自首して出たので、眞の犯人は重兵衛かお勝か判斷がつきにくゝなつた。お客から預つた二百五十圓の金が入つた鞄を、女中が帳場へ持つて來た時、重兵衛が其所に居たことゝ、其の晩重兵衛が菊守堂に居なかつたことが有力な證據となつて、犯人は重兵衛と目星がついて居たのであつたが、當人が飽まで知らぬと言ひ張つて居たので審理が進行しなかつた。そこへ重兵衛の娘で蔦屋の抱藝者なるお勝が自首したので、本件は愈々複雜になつた。取調べて見ると、金の紛失した晩はお勝も客に呼ばれて富田屋へ行つて居たので帳場へ電話をかけに行くと、其所に誰も居なかつたから、つい出來心で盗むだのだと言ふ自白も、まんざら嘘とも思はれなかつた。こうなると重兵衛が眞犯人か、お勝が眞犯人か分らなくなつた。けれどもお勝の自白には辻褄の合はぬ點が多いのと、其時まで知らぬ存ぜぬと言ひ張つて居た重兵衛が、お勝が自首したと聞いて俄に自分が盗むだのに相違ないと自白をしたのとで裁判の結果眞犯人は重兵衛ときまつて、瀆職罪の前科があると言ふので、懲役八年と言ふ重い刑に處せられた。然し盗むだ金の使道は何と言ても事實を吐かなかつたので、その金はどうなつたか遂に分らずにしまつた。こうして父親が入監すると、自首を認められないで放免になつたお勝も修善寺では藝者がして居

られなくなつた。萬屋にもかなり借金があつたが、それは萬屋の親戚で平塚に藝者屋をして居る藤の家が引受けてくれて、お勝は平塚の藝者になつた。大磯や茅ケ崎に近いので、藝者同志の交際やら競爭やらがあつて、修善寺に居た時の樣に呑氣にはして居られなかつた、それに牢獄に居る父の身を思つたり、民雄のことを考へたりすると、夜の目もおちおち眠られぬことが多いので、平塚へ來てからお勝はげつそり痩せた。

『お勝ちやん、ほんとうに痩せたわね』

姉藝者の小染が後から聲をかけると、化粧をして居たお勝は、鏡に寫る顏の瘠をしみじみ眺めた。

『瘠せたばかりでないわ、顏色だつてよくないじやないの、お醫者に診て貰つたらどう』

小染が心配するのも無理はない。肉づきのよいので朋輩藝者にも羨まれて居たお勝が、まるで病人の樣に痩せたばかりでなく、客の座敷へ出ても鬱いてばかり居ることが多かつた。

七

民雄はお勝の父親が犧牲になつてこしらへた金で一時を彌縫したが、帳尻がどうしても合はぬ爲め、とうとう監査役に發見されて、表沙汰にならうとしたのを、社長が金を出して穩便に濟ましてくれたので、地位も動かずに其の問題は解決したが、容易ならぬ第二の問題が持ちあがつた、民雄が如何に社長のお氣に入りであつたにしても、今度のことは問題が問題だから、社長が自分の金を出して民雄を保護すると言ふことが合點が行かぬ。民雄もどうした譯かと不思議に思つて居たが、間もなく裏面の消息が分つた。社長の一人娘の絹子は民雄に戀をして居た。

民雄の遣込一件が發覺した時、社長が客室で監査役と民雄處分問題を議して居たのを立聽きした絹子は、自分が民雄に戀をして居ると言ふことを告白して、兩親の前で思ふさま泣いた。子に甘い社長は一人娘の涙に動かされずに居られなかつた。民雄は元々社長の氣に入りでもあつたし、學歷にも申分がなかつたから、何事も社長の胸に收めて、總てを秘密のうちに解決して、社長は民雄の樣子を見て居た。こうした義理が出來て見ると、社長の目を忍むでお勝の所へ通うことも出來ないので。家をあけずに神妙にして居るのを見定めて、社長はとうとう緣談を持ち出した。民雄は容易に決心がつかなかつた。社長には義理があるが、お勝の父親のことを思ふと、今更お勝を捨てる譯にも行かないので、民雄は何と返辭をしてよいか思ひ惱むで居た。

者の方へ引づられて行かねばならなかつた。お勝から來る手紙には一々返辭も出さないで居て、社長の言ふまゝに縁談の進行に肯定的の返辭をして居たので、まるで夢を見る樣な心持ちで日比谷大神宮の前へ社長の娘と並び立つ樣になつた。

八

お勝が平塚へ來てからもう一年になるが、民雄は一度も平塚へ來たことがなかつた。お勝も平塚へ來た當座は毎日の樣に手紙を出して居たが、幾等手紙を送つても、向からは唯の一度の返辭もないのに氣を落して、近頃は繁々手紙を送らなくなつた。それでも時々手紙を出して見るが、矢張り返辭は來なかつた。こうした態度に出る男の心持は大抵分つては居るけれど、逢つて話をして見ない限りは、諦めやうにも諦めがつかぬので、何とかして民雄に逢ひたいものと、お客さへ見ると東京行きをねだつて居た。時々東京へ伴れて行つてくれるお客がないではなかつたが、一人で民雄を訪ねる自由が與へられないので、折角の東京行きも何の甲斐もないのに落膽して、お客に東京行をせがまなくなつた。けれども民雄に一度逢ひたいと言ふ念慮は止まなかつたので、自分一人で東京へ行く計畫をして居たが、勸める

身の悲しさでさうした自由を得る機會がなかつた。それがやつとの思ひで、一人で新橋驛へ降りた時は、何だか急に世間が明るくなつた樣な氣持がした。久し振りに元氣づいたお勝は自働電話へ入つて會社へ電話をかけて見た。すると民雄は二三日前から會社の方を休むで居ると言ふ返辭であつた。居て居ないと言ふのか、それは分らないけれど、電話の樣子では嘘でもないらしかつた。かうなると宅の方へ行くより外に道がない。使に手紙でも持たしてやらうかとも考へたが、今までの民雄の態度を見ると、さうした手緩いことでは駄目だと思つたから厭ではあつたけれど、三番町の民雄の家を訪づれた。門構の堂々たるのと玄關の衝立の立派なのとに一驚を喫したお勝は、取次に出て來た女中に、何と言つてよいか、自分の言ふべき適當な言葉を見出せないでもぢ〳〵して居た。

『どちら樣から』

女中に先を越されて、今は默つて居る譯にも行かない。

『あのう、民雄さん……こちらの御主人にお目にかゝり度くて參つた平塚の者でございます』

一氣にこれだけのことを言つてのけて、お勝はほつと一息ついた。

『旦那樣は奧樣と御一緒に修善寺へ湯治にいらつしやりましてお留守でございますが……』

女中は何の氣なしに言つたのであらうが、奧樣と言ふ言葉に特に力を籠めて言つた樣にお勝の耳に響いた。心變りのした民雄が獨で居やうとは思はなかつたけれど、當てつけがましく奧樣と御一緒にと言はれて見ると、頭の上を蹂躙られた樣な氣がして、嚇つと上氣した。

『はあさうですか、私はね、こゝの御主人の民雄さんとは……』

情死までしかけた深い仲だと、あんまり忌々しいから言つてのけやうかと思つたが、何にも知らぬ女中をつかまへて啖呵を切つたところで仕方がないと諦めて悄々新橋驛まで引返へして來た。二等の待合室へ入つて暫らく休むで居ると、驛夫が神戸行の汽車の出ることを知らし廻つて居たから、切符を買つて改札口へ行くと、一列に並むだ乘客が一人々々切符を切つて居た。お勝はその中へ混ざつたが、前に居るのが丸髷の若い女で、其の前に居る若い男の袂を後から掴つて居るのが目に止まると、むら〳〵と嫉妬が起つて、後から突き飛ばしてやりたい樣な氣が起つたのを、じつと堪へて居た。プラットフォームへ出て二

等室へ入る時も、夫婦者の居ないところを擇つて腰を下した。

汽車が動き出すと、お勝は女中の言つた言葉を頭の中で繰返へして見た。奥様と湯治に行つたと言ふ以上は民雄は結婚したのに相違ない。手紙をあれだけ出したのに、唯の一度も返辭をしないところを見ると、ほかに女が出來て心が變つたに違ひないとは思つて居たが、女房を持つたとは思つて居なかつた。自分と民雄との仲は、好いた惚れたの戀ばかりではない。民雄の身を思つたばつかりに、親一人子一人の父親を罪人にして、年とつた親を牢屋へ入れたではないか、こうした義理を考へたら、自分に默つて女房を持つなぞと言ふことの出來るものでない。それを一言の挨拶もなしに結婚して、場所もあらうに、修善寺へ湯治に行くとは何事だ。このことを父さんが聞いたら何と言ふであらう、監獄で面會した時、俺は年をとつて要らない軀だから牢屋で死でも何とも思はない、唯お前方二人が仲よく一生添ひ遂げてくれさへすればそれで俺は成佛すると言つて、ほろほろ涙を溢した顔が眼の先にちらつく。今の私の身の上を父さんが知つたなら、死でも死きれないと言ふに違ひない。あゝ父さんにすまないと、お勝は胸の底から涙の沸いて來るのを止めることが出來なかつた。汽車の中で泣顔を見せる譯にも行かぬから、ハンケチを顔に當てゝ窓に額をつけて、何所を汽車が走つて居るかも知らずに居たが、驛夫が平塚々々と叫ぶ聲に驚いて客車から降りた。涙の顔を見られるのも厭であつたから、待合室で化粧をし直して藤の家へ歸へると、

『まあ、どうしたの、あんまり早いわね、東京へ行かなかつたんじやないの』

妹藝者の桃子が、上り口まで駈けて來て、愛嬌のある眼を丸くした。

『東京へは行つたんだけど、逢へなかつたから歸へつて來たの』

お勝は力のない聲でこう言ひながら、自分の鏡臺の前へ坐はると顳顬のあたりを指で押へて居た。

『勝ちやん歸へつたの、丁度よかつた。いんま先、柏屋さんから呼びに來たんだけど、勝ちやんが居ないもんだから困つて居たところだつた。勞れて居るだらうが、外の家じやないから行つておくれないか』

女將のお時が、次の間から聲をかけた。

『姉さんは頭が痛いんですて』

朋輩思ひの桃子が、心配さうにお勝の顔を眺めながら言ふのを

押へて、
『たいしたことは無いから、行つてくるわ』
くるりと鏡臺の方へ軀を向けて、顔を直すとすぐに着物を着替へた、明石の着物に黒地に銀のたつ波を織出した丸帯を締めたあでやかな姿が、御神燈の下に立つと、桃子が後へ廻つて切火を打つたが火が出ないので續けさまにカチ〳〵いわして居た。
『いゝことよ』
お勝は出やうとした。
『だつて、火が出ないと縁起が惡いわ』
桃子は呼び止めて、カチ〳〵を繰返へしたが遂に火は出なかつた。

九

『箱根をよして、修善寺にしてくださいね、私、修善寺へ行きたいわ』
柏屋の二階でお客が箱根へ行かうと言ふのを、お勝は修善寺にしてくれとねだつて居た。小富美、妻奴の二人の藝者も、傍から相槌を打つたので、箱根行きが修善寺行きに變つて、相場師らしい客に、三人の藝者と柏屋の女中とがついて、平塚から神戸行きの汽車に乘つた。三島で乘り替へた柏屋の客は、大仁に着くと、五臺の俥をつらねて修善寺へ向つたが、俥の上でお勝は、民雄と二人で此道を通つた昨年の夢を繰返へして居た。一行の俥は渡月橋の手前の白糸館へ下されて、五人の客は奥二階の十疊の室へ通された。一風呂浴びて浴衣姿で上つて來ると、お勝、小富美、妻奴の三人の姿が歌麿の書いた浮世繪の樣であつた。鯛の洗ひや鮎の鹽燒や水貝なぞが食卓の上に並ぶと、柏屋の客は三人の藝者を相手に酒を飲むで居た。そこらが薄暗くなつて電燈がつくと、柏屋の客は外を歩いてこようと言ひ出した。小富美、妻奴の二人は一緒に立つたが、お勝は頭が痛むと言つて欄干に凭れて居た。
『ほんとに顔色が惡いわね、暫らく動かない方がいゝわ』
小富美がお勝の顔を覗き込むだ。
『俺達が歸へつて來るまで寢て居たがいゝよ』
お客もお勝の顔色のよくないのを見て、心配さうに言つた。
『ナーニ、大丈夫ですよ、だけど、頭痛が少ししますから、留守番をさして貰ひます』
これだけ言ふのも、お勝に取つて辛らさうであつた。お客は二人の藝者と女中を伴れて下へ降りて行つた。座敷が急に淋しく

なると、水の音が耳につくので、下を見下すと、白糸の瀧が瀧壺へ落ちて渦を卷いて居るのが凄かつた。欄干に肱をかけて、じつと瀧壺を見詰めて居たお勝は、こんな苦しい思ひをして生きて居るよりも、一思ひに瀧壺へ飛び込むだならば、戀も惱みも一時に無くなるであらうと思ふと、獨りでに軀が欄干の外へ出さうになつた。丁度その時、對岸の溫泉宿の二階に、若い男と女が此方を向いて居るのが眼についた。

『あら……』

電氣の傳はつた樣に、お勝の軀が顫へると、靑ざめた顏に見る〳〵血の氣が登つた。對岸の男女は民雄と新夫人絹子であつた

お勝は戸袋の陰に身を潛めて、向の樣子を窺ふて居ると、二人は睦まじさうに語り合つて居たが、散歩にでも出るのか、女が團扇男が細いステツキを持つて下へ降りた。これを見たお勝は立ちあがつて帶びを締め直した。そして暫らく考へて居たが、備へつけの鏡臺に眼をつけると、手當り次第に抽斗を拔いた。すると中央の抽斗の中に紙に包むだ細い物があつた。矢場に取りあげて紙を取ると、きらりと光つて剃刀が出た。絹のハンケチにそれを卷き直して帶の間へ挾むと、お勝は梯子段を駈け下りた。

『お出ましてございますか、お履物を』

番頭が帳場から聲をかける、女中が出て來て履物を出さうとした。

『私、足が少し痛むで居るんですから、草履があるなら貸して頂戴』

お勝は女中から赤い鼻緒の麻裏草履を出さして、それを足に引掛けると急いで表へ出た。渡月橋を渡つて、右へ折れて、虎溪橋まで來ると、七八間前面に民雄夫婦の步いて居るのが見えた。

二人は虎溪橋を渡らずに、橋本屋の前を眞直に、桂川に沿ふて廣瀨橋の方へ出た。お勝は夢中になつて二人の跡をつけたが、民雄と絹子が肩を並べて橋を渡りかゝるのを見ると、昨年のことを思ひ出して、頭がグラ〳〵する。雲が月を出したり隱したりするところから、夏草の繁みに螢の飛んで居るところまで、民雄と二人で死のうとした時と少しも變らない廣瀨橋の上に、戀しい男がほかの女と睦じげに語り合つて居るのを見せつけられて、お勝は卒倒しさうになつたのを、傍にあつた柳の枝に手を掛けて辛じて支へた。氣配にこちらを振り向いた絹子は、柳の下に女が立つて、自分を睨むで居るのを見たので、思はず民雄に縋りついた。疾風の如くに駈け出したお勝は、剃刀を逆手

に絹子に飛びかゝると、肩のあたりに血汐が流れた。民雄は不意に現れた魔の様な女の顔を見る暇もなく、剃刀持つ手を執つて逆に捩ぢた。お勝の軀が斜になつて、橋の欄干に頭を押しつけられたと思ふと、顔から鮮血が流れて、白地の浴衣が紅に染つた。欄干に打つてあつた釘で、右の眼を突き破つたのであつた。

十

『それからあなた、お勝ちやんは殺人未遂と言ふ罪で裁判になりました。絹子の傷は一寸した擦傷で一週間もすると癒つてしまつた位ですし、民雄がお勝ちやんと知らずに捩ぢ伏せて眼を潰したことを悔むで居たもんですから、願ひ下げをしたり哀願書を差出したりしたんださうですけれど、一たん裁判へ廻つた以上はどうすることも出來ぬと言ふので、可愛相に六年の懲役になりました。それにも一ツ可愛相なのは、父親の重兵衛が監獄へ送られてから、娘に逢ひたい、娘に逢ひたいと毎日狂ひ廻つて居たさうですが、お勝々々と娘の名を呼びながら狂ひ死に牢死したのです。お勝ちやんが四年目に假出獄で出て來た時。このことを聞いて、不具者になつた一ツの眼からほろ／＼涙を零したと言ひます。幾等美しいお勝ちやんでも、片眼で前科者と言ふ名がついては、藝者にもなれず、嫁にも行かれませんから、仕方なしに馴染のあるこの土地へまひ戻つてあゝして竹細工でやつと其日を暮らして居るのです』

徳さんは肩を揉むのをおるすにして、お勝ちやんの話に身を入れて居た。徳さんの歸へつたあとで、床の中へ入つたが、眼が冴えて眠られなかつた。私も法廷で隨分悲惨な事件を見て居るが、お勝の身の上程慘酷なものを見たことがない。床の中でノートと萬年筆とを出して、徳さんから聞いた今の話を心覺えに書き出した。それが丁度終つた時分に夜が明けたから、一風呂浴びて浴衣のまゝ表へ出ると、湯上りの肌に當る夏の朝風が氣持よかつた。昨夜お仙に教へられた通り、新井別館の前を西へ範頼の墓の方へ行くと、右手に辨天の祠が見える。其所を一寸右へ廻つた所に馬車屋がある、その隣に竹細工の看板が出てあつた。それがお勝ちやんの店と言ふことは分つたが、未だ表が開いて居なかつたので、辨天堂から範頼の墓の方を歩いて、再びお勝ちやんの店へ來ると、竹細工を並べて居る女が居た。頭を櫛卷に結むで色氣のない形して居たが、色の白い口元の可愛い綺麗な女であつた。私が表へ立つたので此方を向いた顔を見ると右の眼がつぶれて居た、いたましい姿を私は見るに忍びなかつたが、記念の爲めに竹細工を五品ばかり買つた。私は東京へ歸る汽車の中で、この竹細工を膝の上にのせて、片眼のお勝ちやんの身の上を瞑想した。（終り）



人と國

近松秋江

去年高野山にいつてゐた時分がやがて又まはつてくる。いつも慌しく何物かに追驅けられてゐるやうな私の心持ちであるが、高野山にゐた間も、やつぱりさうであつたけれど、今になつて振顧つてみると、その高野山の夏八十日の時分が去年一年間では最も心の落着いた時間であつた。その前後には——それから後今日までの事を考へてみても高野山の八旬の間に折角纒つて來た心持ちや氣分を、いろんな事で打ち壞してしまつたやうな氣がしてゐる。

高い杉の林、碧い空、白い雲、古りたる堂塔寺院、香花の匂、淸い夏の風、廣い座敷。さういふものが懷かしく思ひ浮んで來る。今年の夏は何處にゆくであらう。今年は再び高野山にはゆかないだらうけれど、何となく懷しいのは、あの山の上である。京阪に來てゐて高野山はその京阪に近いところであるが、京阪の都會氣分に反し、高野山にゐる間はまるで便利な村にでもゐるやうな氣持ちがしてゐた。七月の初頃はまだ十分土地に居馴まぬので寂寞を感じてゐたが、段々夏が盛んになつて來るにつれて杉の林や空の色、雲の色が希望の色に輝いて見えてきた。實際夏八月高い山の上にゐて、碧空を抑ぎ白雲を眺めるといふことは私の如き心貧しき者に希望を復活せしめてくれるのである。私は、暑い日の照つてゐる夏の空に何處となく

次第に秋氣の漂うてくるのを、毎日寺の座敷の緣側にゐて仰ぎ眺めてゐたその間に疲れてゐた私の體も追々健康を回復して來た。この秋になつたら山を下りていつて何處にゆかうかなどゝいろ〳〵の樂しい空想を描いてゐた。

私はその高野山にゐた頃數人の東京の學者に會つた。いづれも名は夙に聞えてゐて、初めて見る人ばかりであつた。高楠順次郎博士にもその時はじめてお目にかゝつた。高楠博士に對する私の記憶は、博士が英國のオックスフォードに學んだ、マックスミュラーの門弟で、梵文學の日本のオーソリチーであるといふことゝ、ずつと以前某省の大臣秘書官であつたといふことであつた。秘書官といふ、私の古い概念が、一圖に才子といふことのやうになつて存在してゐたので、高楠博士は、どんな才子かと思つてゐた。否、名のみ聞いてゐる博士は、そんな才子とのみ思つてゐた。すると高野山ではじめてお眼にかゝつた博士は、隨分私の豫想とは反した人であつた。對者にどんな神經の刺激を感じさするやうな人かと思つてゐたら、すこしもそんな刺激などを感じさせない漠としたところのある人であつた。私は博士の宿泊してゐた宿坊の主人長谷部隆諦師――早稻田大學哲學科出身――に後で語つて、博士は牛津に學んだ人ほどあつて牛のやうな感じのする人だといつたら、えゝさうです。と贊成してゐた。實際高楠さんは牛のやうな感じのする廣島縣人である。

廣島縣といへば、私には一つの矛盾な感じを與へる。私の鄕里は岡山縣で、廣島縣の隣りであるが、子供の時分から私の幼い印象に殘つてゐる廣島縣人は、私のところに來る屋根屋と桶屋といへば必ず廣島縣人であつた。屋根屋といつても瓦ではない草葺きである。暑い六七月の候炎天の下に煤だらけの顏を印度の黒ン坊のやうにして子供心にも暑さにだらけたやうな物憂い歌を、濁聲を揚げて歌ひながら屋根を葺いてゐる。私の家は前に酒造をしてゐたので、酒桶を造る桶屋が始終入つてゐた。屋根屋は兵助とかいつて「藝州者々々」といはれてゐたが、彼が葺いた屋根は雨漏りがせず。長年持つといはれてゐた。草葺き屋根の名人であつた。又桶屋は名を忘れたが背の低い、痩せたこれも日に燒けた色の黒い、猿か烏のやうな男であつた。ところが此の男がまた桶屋は名人であつた。とにかく彼等は名人ではあつたかも知れぬが、「藝州者」といはれて、私の子供心には一種の醜い、鈍い、印象を殘してゐた。廣島縣人といへば、大抵そんな感じのするものと思つてゐたのに、稍々長じて日本外

史を愛讀するやうになつて、賴山陽が廣島の人であることを知り、あの「藝州者」下級な異人種の如くに思つてゐた藝州者の中からこんな偉い人物が出たのであらうかと思つて、案外に感じたのであつた。實際、賴山陽の才藻と意氣は、どうあつてもあの眞黒氣な桶屋や屋根屋を産出する國の人士とは思はれない。廣島縣は岡山縣に隣りしてゐても、人の氣風や樣子がガラッと違つてゐる。岡山縣人は一見すぐ悧巧で敏捷である。廣島縣人は物の言ひ振りから體の持ち扱ひが遲鈍で野呂間である。同じ岡山縣でも此感じは備前と備中でも既に區別が見えてゐる。備中人はやや備後に接近してゐる私達が中學校の友達に備中の人間がゐて、その男が殊に備中人の中でも何となく遲鈍な感じを與へるので吾々は「備中牛」々々々と呼んでゐた、大きな圖體の男であつた。廣島は淺野侯五十萬石の城下で大藩である。岡山は池田候三十萬石で廣島から見ると、ずつと小い。何となく、その大小の相違から來た氣分がいつまでも殘つてゐるのではあるまいかと思ふ。今日でも岡山は人口僅に八九萬、廣島は十七八萬人ある。備前の人間は小賢しい、安藝備後の人間は備前人に比べると大國風なところがある。賴山陽は曠世の才人であるが人物が一代を掩ふてゐる。所謂海内文章落布衣である。

その賴山陽の故鄕と高楠博士の故鄕とが極めて近いことを博士から承つて、私は少年時代から崇慕してゐる山陽の生家の事などを、色々聞かしてもらつた。山陽と桶屋、屋根屋、牛と高楠博士といふやうな一緒になつた矛盾した印象がある。とにかく廣島縣人は茫として何處か大きい。

代議士でも、私には岡山縣の代議士よりも廣島縣の代議士に好きな人間が多いやうに思はれる。

この頃長く京都に滯在してゐるが、京都は東京と異り塵埃が立たないで、東山の靑葉陰南禪寺あたりの人通り少い道のそゞろ歩きは好ましいが、京都大阪の人間の顏は倍々厭になつてきて堪らない。大阪はいふまでもないが、京都でも町人によつて市民の大半を成してゐるのは當然であるが、その町人を私は好まない。東京は新開地のやうな感じのする土地であるが市民には町人も多いが、町人以外の人間も多い。町人とて京阪の町人と東京の町人とはちがう上に、京都大阪には町人以外の人士は極めて少いが、東京には町人以外の人士の方が市民の多分を占めてゐるのである。京都の町では一日、十五日が人出で賑ふそれは町人の休日として嚴重に行はれてゐるからである。その一日と十五日は、私は電車に乘るのも町を歩くのも厭である。東京では見られぬ此の市特種の衣服その他の好みをした町人がぞろ〳〵歩いてゐる。商家の息子や子倅が流行の麥藁帽子を生意氣にすこし前のめりに冠り、薄い色のセルの單衣羽織に、茶色

繻子の紐の付いた紺色の前掛などを一様にかけて、洋食屋などに入つてゐる。彼等は、吾々よりは蓋し金持ちなのであらうからそんなところに入るのは吾々以上の權力を有つてゐる筈であるが私にはそれが、何となく唯不調和の感じを起さしめるのである。併し此の市の人間には習慣上それが普通の事とせられてゐるに相違ない。私はまた京阪人の顏の感じ、皮膚の色を好まない。彼等は多く脂肪の多い、滑らかな白い色艶をしてゐる、男子には殊に脂肪肥りのしたのを湯屋などで多く見る。眉目の邊りに表はれてゐる感じが、よくいへば千年の古都、傳習的に洗練された都雅な氣分の表現といへないこともないが、さういふなのは必ず、臭味（くさみ）のある顏であるし、同じ色の白い、滑かな顏でも、ずつと下品な表現をしてゐるのがその他の凡てゞある、東京の洗湯では白い裸體を見ること稀れであるが、京都大阪の洗湯では流しの中は白い裸體といふ全體的の印象を與へる。東京の湯屋の流しの中は赤く黑い印象である。けれどもどこか引締つてゐて、京都の湯屋の中の裸體の如く、ぶよ〳〵してゐない。さういふ人間の口から洩れてくる京都訛り大阪なまりの言葉は、どうしても我慢することが出來ない。

私の知つてゐる、東京のある商家の大阪支店の人間は先日、こんなことを語つてゐた。――それは大抵知れてゐることであるが、歐州戰爭によつて阪神にはなるほど成金が出來たといふのは事實でもあるが、併し世間に仰山に傳へらるゝ如く、確實に金を握つた者は案外に少い。私の知つてゐるその店は、世間の景氣不景氣を最も手取り早く知ることの出來る種類の商家であるが、大阪では、いくら景氣が好いといつても、それはホンの一部分のことであつて上等な品を需用する者の多いのは何といつても矢張り東京である。この傾向は歐州戰爭による成金時代の前と後と少しも變りはない、依然として東京の方が高貴である。それは、東京には町人以外の華族や官吏が多く住んでゐる理由もあるが、一體に東京の方が高貴なのである。商人の信用からいつても、大阪では隨分思ひ切つた不信用なことを敢てして意に介しないといつて、その事實を擧げて語つてゐた。

私はさもあるべきことゝ思ふ。京阪人の京阪氣質を脫しないつまり因循な開化しない京阪の人は、遠國者に對してはどんな不人情な事薄情なこと不義理なことを仕向けても何でもない、むしろそんなことをせぬのが不思議なくらゐに思つてゐる者が多い。關東人に比べて京阪人の薄情で輕佻なのは西鶴の書いた物の中にも既にいつてゐるし、齋藤實盛が富士川の戰に臨んで東國と京畿との武士の比較論にも明かである。私ももうそろ〳〵京畿の自然と、人間と、食べ物とに飽いて來た今年の夏は何處か關東か或は信濃あたりの寥宕なる山の中に入つていつて久し振りに雄壯な氣分を滿喫したいと思つてゐる。六月十六日

逍遙遊（絶筆）

法學博士　和田垣謙三



朝晴雪英詩和譯

Snow On a Bright Morning

The smiling sun, like as the bridegroom proud, Came forth from Behind the Curtain sf cloud, And the virgin snow blushed

右は本年新年御歌會御題朝晴雪を詠じたる拙者の英詩試作であるが、ある學校に於て試業の際餘興として右英詩和譯を課せしに、次の如きものを得たり。

朝日子が花の如くに笑めるとき
　雪の少女の頰はらむ

初春の朝日出にけり雪間より
　戀の心は雪にうつれり

天の戸を引き明け方の雲間より
　笑む陽に紅む今朝の白雪

雲間より輝きわたる日の男子(をのこ)
　雪の乙女の頰染めにけり

朝日花聟白雪嫁子
　ちよつと顔見りや紅くなる

殿は朝日よわしや白雪よ
　殿が笑へばわしやほてる

情こもつた朝日の笑顔
　戀の白雪紅に染む

朝日出た〱若殿ぶりに
　紅く染つた雪心

日は笑めり花聟の喜びに似て
日は輝けり雲の帷を開きて
あゝ薔薇ほゝゑみは潔き雪を染めぬ
恰も處女のはぢらうが如く

追)——　遜　——(遷

孰れも努力の跡は見えざるにあらねども、遺憾ながら原作者を充分に滿足せしむるものはない。思ふに blush の一字が The stumbling block ならんか。原作者自身の意譯は次の如し。

見よや朝日子現はれぬ
嬉々滿々の郎のごと
雪の幔幕を押し開き
雪の處女ははにかみて
サツと一しほ顏染めぬ

これも七十五點程の出來映なり

The results of public spirit

Witness the magnificent spectacle of Japan to-day: the State above the individual; common good above personal good

sacrifice of self and devotion to the community; these great qualities, on which every nation has risen to glory, were never displayed more brightly in the history of the world than now before our eyes. It is a nation which is saturated and infused with public spirit, the spirit of the race, enthusiasm for the Community and for the welfare of humanity. This is the spirit which elevates cities; it is this which makes a nationality; it is this which some day will renovate mankind.

A splendid article in the *Times* [now well known] calls it "the soul of a nation," a translation of the Japanese term Bushido. It is a sort of chivalry, but the term "chivalry" does not convey it; our nearest approach to it is "public spirit," public spirit in a glorified form, the spirit which animated the early christian church, so that prison, suffering, death itself, were gladly endured so that the gospel might be preached and humanity might be saved — a spirit which must be near akin to the divine idea of sacrifice for the salvation of the world. To lose your life as the highest mode of saving it; to lose the world but retain the honour and dignity of your own soul; that spirit which animated the apostles, prophets, martyrs, is alive in Japan to-day, Is it alive in us as a nation? (p. 172—3 Modern Problems by Sir Oliver Lodge)

右は英國 Birmingham 大學總長英國皇立學士會院會員 Sir

Oliver Lodge 氏其の近著 Moderm Problems（近代問題）中の一節なり。曰く日本に於ける公共心の偉觀、曰く公よく私を徇ず、曰く一國勃興の本源、曰く初期基督教徒、豫言者、殉教者の獻身的、犠牲的精神、讃辭千言至れり乎盡せり乎である。若し其の一字一句が盡く眞面目とすれば謙讓の美德に富める我々日本人は穴にも入りたき哉と叫ばざるを得ない。併し若し是が重厚なれども遲鈍なる英國人を激勵せんが爲めに故らに高唱したるものにして恰も慈母が我が子を激勵せんが爲めに事仰山に隣家の子を褒めたゝへるが如きものとすれば眉毛に唾して可なり。

戰後荒廢

「予は最近荒廢せる貴國の一部地方を訪問した。而して慘落たる廢墟の前に立つた時これ電擊の至れるものなりと叫んだ。」

右は佛國議會に於ける大統領 Willson 氏演說中の一節にして、戰後荒廢の狀況は嘸かしと思ふが、右に就いて思出さるゝは

水自潺湲日自斜　盡無鷄犬有鳴鴉　千村萬落如寒食

不見人煙空見花（韓　偓）、の句である。

嗚呼和田垣博士

好謔家として、愛嬌家として有名であつた。兎糞博士も病には勝てなかつた、この春赤坂三河家にて本社主催の文士招宴にて、杯をあげつゝ一平畫伯の漫畫に呵々哄笑された、その笑ひ顏、その杯のもち工合、清輝畫伯と文藝上の氣焰を擧げらるゝ、その片頰は忘られぬ。酒が好き、葉卷が好き、その好きなものさへ、節しておられた博士と予とは、數年來屢々往復していた。予が『我觀南國』を著はしたときも、自ら筆を採つて英譯して卷頭にかゝげてもらつた。

このお正月も、磯邊彌一郞氏や、博士の令息や、六人して帝劇見物に出かけたこともあつた。いつも愉快に、嬉しそうに、滿足そうであつた。人に對しても、物に對しても、一流の趣味を以て批評もし、判斷もされた博士は、熱心と、周到と、懇切と快活を萬事に傾くる事を忘れなかつた。粗雜で、豪放で、洒落で有名であつた博士は、逍遙博士の如く、謹嚴、自重の一面があつた。煙草の喫み方も、煙のだしかたも、烟管(パイプ)の撰擇にも煙管のもちかたにも、獨特の趣味、獨特の行き道があつた。

一杯きかけて、江戸川筋を歩かるゝにしても、その歩き振り、洋傘のもちかた、そのものすべてが、禪味を帶び、俳味を伴ふていた。

輕く口を突いて出る、一流の駄洒落にしても、北雷の品より、福々しい響が含まれていた。北雷ののは陰性で、骨に應へるやうな地口もあるが博士ののは、對者の兩頰に一面の笑を漲らしめ、拍手せしむる陽性のものであつた。その容貌からして、北雷は枯淡寒山のやうで、兎糞に至りては、七福神一座になければならぬ、水々しく福々しさが、充ちく\ていた。

山川健二郞さん、金井延さん、古在由直さん、桑田熊藏さん等と大學病室に博士を見舞つたとき、幽かに眼を見開いて、アゝ有り難う、どうか遠慮なしに職務について下さいと苦しき息の中から、挨拶を交はされたが。

それから三日にして、卒去されてしまつた。

予は名古屋で、訃報に接して、何だか、世の中に、一つのにぎやかなふさく\した大きな花が落ちたやうに淋しい氣持になつた。（山本生）

文壇涼み話

青蛙の子

■ゲーテは八十歳にして十六の少女を溺愛したとか。武林無想庵君は、齡四十にして、芳紀正に二十歳の娘さんを、新夫人として迎へやうとしてゐる。早く彼が新婚生活振りを目撃羨望したいものでござる。

■大阪なる「船場のぼんち」の會は、さぞかし著者石丸梅外否梧平君に對して、鄕土的共鳴に生きる人々が、大提灯を持たんがための會合であつたことゝばかり推斷してゐたところ、さる大茶目の報告に依れば、曰く閑技史郎、曰く新居格、曰く何某の輩が喋し合せての揚句、著者の下阪を電報で差とめた上に、「船場のぼんち」罵倒大會を開いたものだとは、アッとばかりに江戸ッ子のはらわたを横轉させてしまつた。

■背の君は、慶應大學文科に教鞭を執りたまひ、又かの「著作家組合」の重鎭にもましますとか聞き及んだが、そのまた老夫人、中々の才女と見え、先頃、美髪學校を卒業し給ひ今は牛込本村町に看板かけての女髪結、いやはやるわはやるわとの噂さ。馬場孤蝶君も先づは愈々文字通りの文壇女髪結黨の御一人として艷名を後世に遺すの光榮を擔つた次第。

■「征服被征服」の會で、宣言して曰く「僕は從來女に對して正直すぎたから、色んな誤解を蒙つたり時々世間から迫害までも受けたやうな次第だ今後は、必ずしも一人の女を守るといふことはやめやうと思ふ。で若し、妻があり乍ら、他に仲よしが（現在あるとは言はぬ）出來たやうな場合、どうぞ僕を責めないで吳れたまへ」と、これが泡鳴岩野君の御挨拶である。誰か一掬の涙なからん哉である。

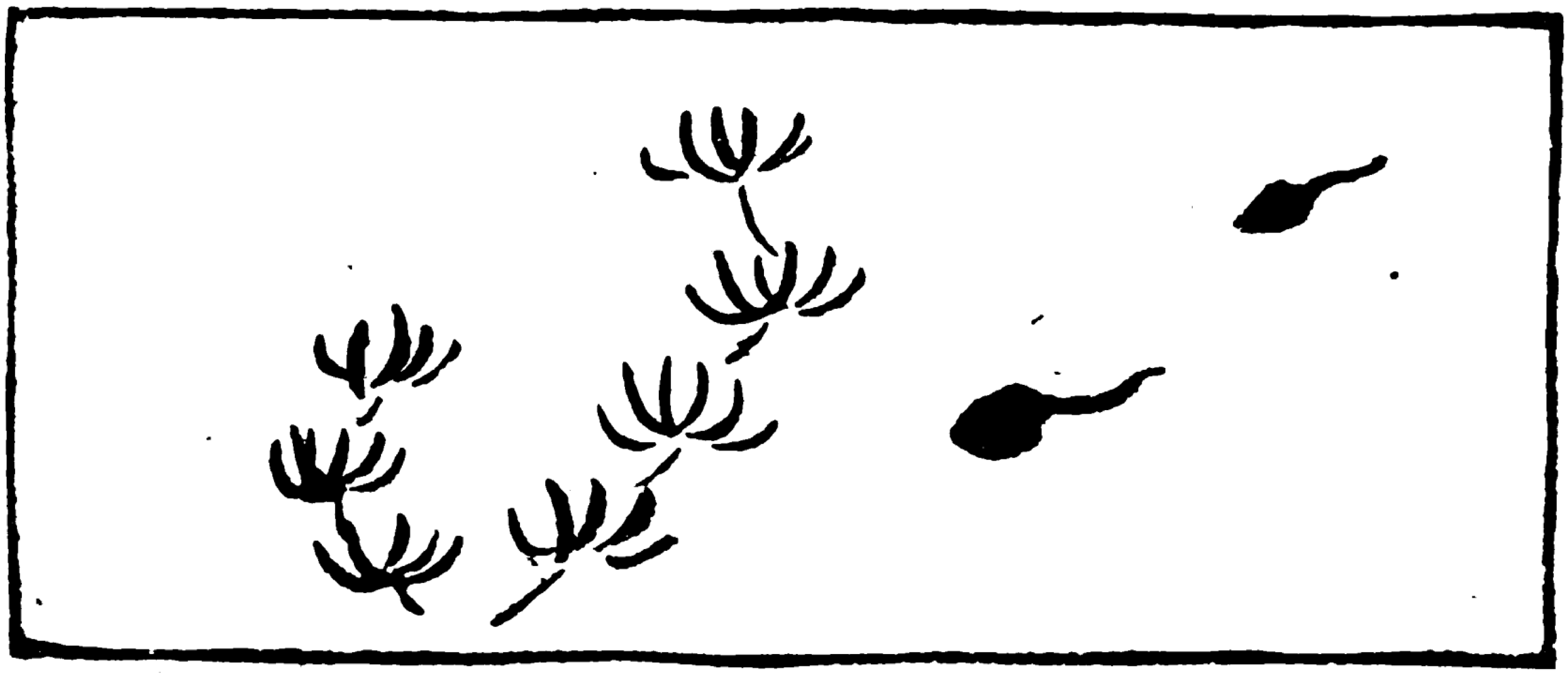
■厨川白村君が、渡米前に、日比谷圖書館で講演をした時、動物は高等になればなるほど、足の數が尠くなる等と言つた末に、大隈侯を引合ひにまで出して、なりたてのほや／＼の隻脚を誇つたことがあつたと記憶する。そして今、隻脚の新文學博士となつて氣焔例に依つて萬丈とはまことにまことに目出度い。

■吐雲和田垣謙三博士の死が、板垣老伯の死と同時に傳へられた。曾て五來素川氏が、博士に會つてその雅號の由來を訊ねたところ、「何も吐くサ」とすましかへつてゐたといふ珍話を想ひ出す。

■芳賀矢一博士は、妙な癖があるといふ。それは、葉卷を吸ひかけてゐる時には、どんなに空いた電車がきても、道連れを置いてきぼりにして人力車上の人となり、葉卷の經濟政策を敢行するとは面白い。

■新劇協會の「叔父ワーニャ」は頗る好評であつた。中に出てきた、奥村博史君が、夫人平塚明子さんも見物席に控へてゐるのに、あの紅蓮洞そつくりといふ面貌に扮へ上げて、ヨチ／＼と舞臺を歩き廻つてゐたのは上出來であつた。グレさん苦い顏をして、それを見てゐたとは、更に滑又稽ではないか。

■一と度は文藝學者瓊璃子を以て聞えた谷崎潤一郎氏夫人令妹、勢子ちやんが、芥川龍之介、菊池寛、佐藤春夫、久米正雄、江口渙、成瀨正一の諸君の間にあつて、紅一點を添えてゐるとの風評が高い。又、道路傳ふるところに依れば、谷崎君ひそかに「芥川もお勢なんぞを引張り廻して一體どうする氣なんだらう」と嘆じてゐるとかゐないとか。もし眞なりとすればまことに奇々怪々の嘆聲として記錄するの價値が充分にあらう。その人が谷崎潤一郎君なるが故に……。



美しい町

畫家E氏が私に語つた話

佐藤春夫

私の親しい友達○君が或る日私に畫家E氏の噂をした。——E氏は或る新らしい機會で○君が持つことを得たいい友達で、彼は○君を通じて私のことを聞き（多分、○君は私のことを面白く話してくれ過ぎたらうと思ふ）それから○君の書架から、私が○君に呈した私の著書を抽き出して持つて歸つてそれを一讀してくれたさうである。それから私の著書を○君のもとへ返しに來たE氏は、

「指紋の作者に是非とも聞かせたい話があるのだが……」

と言つたさうである。正直に言へば、私は今までにこれは多分君の小說になるであらうと人々が私に聞かせてくれた話であまり滿足した例に乏しい。けれども私は、畫家E氏の場合に限つて、それはきつと私にも面白からうと豫測された。といふのは、私はE氏その人は未だ知らないけれども、彼の制作は時折に展覽會などで見ることがあつて、その度ご

とに私は或る藝術上の同感をもつて彼の制作の前に暫く佇むのが常であつた。そのE氏が私の著作を見て面白いと言つてくれたといふ事は必ずしも彼のお世辭ばかりではないやうに思ふ――私の自惚れをもつてすれば。互に互の作品を通じて同意し合ふことの出來る或るものを持つてゐるところの人、E氏が私に聞かせたい話があるといふ。私が或る夜、○君に連れられて行つて、E氏の畫室で同氏を促して次の話を聞くことになつたのは以上のやうな順序である。最初にこれを記してEと○との兩氏に負ふところの多いのを感謝する。

畫家E氏が私に語つた話

考へて見るとその話は事の最初から變つてゐた。それは今から八九年ほど以前のことである。私が二十一二の時だから。或る日私は一つの手紙を受け取つた。それは私を訝かしく思はせた手紙で、差出人は外國人の名前であつた。しかも學校時代に語學をなまけたおかげで外國人に口を利かれさうになると逃げる程の私には、手紙を貰つたりするやうな懇意な外國人などは、もとより一人もない。ところでその手紙には、最も馴々しい口調で、それは寧ろ巧みな簡短な日本文で、けれども拙い日本字で、築地のSホテルのレター、ペーパアに書かれてあつたが、――いろ〳〵書くよりも一目見れば萬事は直ぐわかる。今日の夕方の六時ごろにこのホテルへ來て欲しい。面白い話があり、又多分君をも愉快にさせるやうな相談をも聞いて欲しい……と、手紙には只そんな事が書いてあつた。考へてもごらんなさい。知らない人からそんな手紙を貰つた私は何だか底氣味が惡くつて、ちやうどその手紙を受取つたのは、朝、

枕もとでゞあつたが、その手紙がその日一日私の氣を揉ませた。私は或は私たちの仲間の誰かのつまらない氣の利かないいたづらではないかとも思つた。畫描きの書生などといふものは、デカメロンにあるブッファルマッコ以來、人を困らせることを副業のやうにして居るものなのだから。さう氣がついた私は人に賴んで電話でSホテルへ問ひ合して貰つた――テオドル、ブレンタノなどとそんな名を名告る人が本當に居るかどうか？　若し本當に居るとしたならばその人が私に來いといふのは人違ひではないか？どうかを。さうしてへんな事には、どうしても私だといふ返事を私は得た。

五時になるともう暗くなつて、街は灯のある夜の街になつた。何でも十月ごろであつたから。ボヘミアンを氣取つた穢ならしい身なりの私はおづ／＼しながら立派なホテルの玄關に立つと、不思議がられて斷られるどころか、豫め注意でもされて居たかのやうに、金モオルや金ボタンのあるユニフォムを着た少年が、明るい電燈の下を私を丁寧に或る一室の方へ案內をした。さうして暫くお待ち下さいと言ひ置いて私をひとり殘して行つたきり、私を招いた誰だかわからない人といふのはどういふわけだか直ぐには、私の前に現はれないのであつた。私は前には大きな書冊が澤山投げ出されてゐる卓の前に座つて居た。さうして私は部屋のなかをきよろ／＼と一とほり見まわすうちに、壁のある部分に見てひどく愕いた。愕きと疑ひとで、私はその灰綠色の壁の上に掛けられてゐる二十五號大ぐらゐの油畫、或る風景畫をぢつと見つめた。私の疑ひはたう／＼私を倚子から立ち上らせてその畫のそばへ行つて見させた。それは正しく私自身の繪であつた！「都會の風景」であつた。それはその年より二年程以前に、私が畫描きになつてから最初の機會に或る展覽會へ發表した繪なのであつた。よく考へると、これはそれほど愕き疑ふべきことではない。といふのは、その繪といふのは私の年少者らしい驕慢とどうせ賣れる筈は

ないといふ自暴自棄とで少々高い價格をつけて置いたにも拘はらず賣れた――誰かゞ買つた筈の繪なのだから。けれどもその時には、その私自身の繪を私がこのホテルの壁の上に見出した時には、私は實際ひどく愕いた。あんまり思ひがけなかつたから。さうして私はより一層今夜私をこゝに招き寄せた人がわからなくなつた。私は私の『都會の風景』を買つた人がどんな物數奇だつたか、その二年前には一向注意をして聞かなかつたから。私は奇妙なことのあるこの一日のことを思ひながら、再び自分の椅子に歸つて、早く不思議な私の招待者、物數奇な私の繪の買い手の正體を見たいものだとあせつた。さうしてそつと自分の時計を出して見た。それは六時にはまだ少し早かつた、私は氣が揉めたので早くそこへ行き過ぎたものと見える。私はこのやうにして不意に私の目の前に突き出された私自身の繪を反省し批評することにも倦きて、今度は自分の倚子の前の卓上から、そこに澤山積み上げられてある大きな書册の一册を手にとつて披いて見た。それはいづれも何か建築のことに關する書物で、それにはそれ〲、暫くそれを見てゐるうちに私をその方へ引き込んで行つた程に豐富な挿畫があつた。……と、その時私の後の方にどつしりとした足音がして、ドアが開かれた。私は大きな本を慌てゝ伏せると椅子から立ち上つて振り返つた。さうして、テオドル、ブレンタノ氏(?)を見た、若い立派な小肥りの少年の紳士が、今までは食堂にでも居たのであらうがスモオキングを著て這入つて來たのである。彼は私と同じ年ぐらゐの若さであつた。私は丁寧にお辭儀をしやうと用意をした時、彼は事もなげに「やあ」と私を呼びかけて笑ひ顏になつた。

テオドル、ブレンタノ?!

全く彼は彼の手紙で嘘は言はなかつた。私は彼の笑ひ顏を見た時、一日で何もかも解つた、テオドル、

ブレンタノ？　私は私の舊い友達を忘れてゐたのである。けれどもそれの責任は決して私の心無しばかりに歸せらるべきではない。テオドル、ブレンタノは何故に私にくれる手紙へ昔のとほり川崎愼藏と署名しなかつたのであらう。川崎愼藏ならば一分間も疑ふことなしに、私が私の記憶のなかで呼び起すことの出來る私の幼少時代からの友であつたのに。が、よく聞いて見ると、川崎は私はびつくりさせて見ようといふ下心も少しは無いでもなかつたが、決してそのために出鱈目を名告つたのではなかつたのである。川崎はどつちの名前をも名告つていゝ混血兒で、「それに今日ではテオドル、ブレンタノと呼ぶ方が本式だよ」と彼は笑ひながら言つた。母が無くなつてから父に引き取られた彼は父の國へ、アメリカへ歸化したのださうだから。川崎の父といふのは東洋に多くの取引きをもつた、さうして旅行癖のあるアメリカの富豪で、彼の母といふのはその人の妾になつて東京に居た。さうして川崎が十六になつた時にその婦人は死んだ。川崎は父に連れられて横濱から船に乘つた。私が彼を停車場まで見送つてやつたその朝、中學校の制服を脱ぎすてゝ仕立下しの背廣服に紫と紅と綠との入れ雜つたネクタイをつけて、大きな父と一緒に一等車の窓から我々の方へ首を出した川崎……、父から土産に貰つた金の時計に金メタルをさげてそれを中學校の制服のポケットのなかに持つてゐた川崎……。私は彼の語り出す身の上話を聞きながら、彼に就てのさま〴〵な記憶を思ひ出した。さうしてそんなに變つた身の上とても彼の名前そのものが變つたほどには變つてゐない。名前以外のすべてのものは、大きな體つきも、快活さうな話ぶりも魅力のある口もとも、ものに驚いてゐる人のやうな目つきも、それからまた彼の持つてゐるといふ富も、それらはたゞ數年間といふ歲月の間に成育したものだ。それは驚くべき加速度に於てゞはあるが、私はそんな風に子供の頃からの彼を考へる時に私自身も子供になつてゐた……

彼は二年前にも東京へ來たことがあると言ひながら、彼自身の背後を指ざして、『君、あれは仲々いゝところがある』と私の畫のことを言つた。さうして彼は彼自身でも少しは畫を學んだことがあると言つたが、彼が私の畫に就いて述べたところから推して見て、なる程それは全然のアマチユアが知つたかぶりをするのではなさそうに思へた。彼は、私の異論があつたにもめげずに自信をもつて、ホスラアを激賞した。その時もその後にも私は彼といろ〳〵の美術上の話をしたが、實際、現今美術批評家だと自稱してゐる人たちよりは彼の方がもつと解つたやうな氣がする……。さういふ風に我々が藝術上の話をしてゐるうちに、彼は不意に語氣を改めて、彼が將に實現しようとしてゐるといふ『或る不思議な、さうして最も愉快な企てに對て』（と彼自身が言つた）を語り初めた。話が進むに從つて彼自身が先づ昂奮して、それからその昂奮が私にまで乘りうつつて、我々二人はいつの間にか有頂天になつた。さうして私は私の友達のなかに哀まれて居るその途方もないことを熱愛しさうしてそれを實現しようとする亞米利加靈（？）を本當に嘆賞しないでは居られなくなつた。日本にも幾多のミリオネアは居るであらうが、そのうちの何人が、彼の企てたやうなそんな計畫を考へ出すであらうか。そんな計畫を立てるためには確に多少の天才（？）を要するやうに思ふ。私は今思ひ出したが、彼が彼の企てを語つてゐる最中にふと隣室から本を一冊とり出して、それの頁を氣忙しげに繰つてやがてそれの一節を朗讀して私に聞かせた。私にはよくは解らなかつたが、それはフアウスト第二部の一節であつた（E氏はさう言つてそれに歌はれてゐた意味だけを筆者に告げたが、それは多分次の部分ではなからうか。筆者は勝手にさうきめて、鷗外博士の譯から抄出して置く。）

わたしですか。わたしは物を散ずる力だ。詩だ。

自分の一番大事な占有物を蒔き散らして、そして自分の器をなす詩人だ。
わたしも無限の富を有してゐる。
自分の値踏みをして、ブルッス様に負けぬ積りだ。
富の神の饗應や舞踏を飾つて賑やかにして、
神の持つて居られぬ物をわたしは蒔き散らします。

……一口に言ふと、彼は彼の持つてゐる財産の全部を投じて一つの美しい街を、どこかに建てやうといふのであつた。彼は言つた——彼の父、四年前に死んだ彼の父が彼に殘して行つた遺産は、南アメリカの或る部分に在つたところの一つの廣大な金鑛とその外のものとを合せて、約六百萬圓の以上に上つた。それらの財産は悉く正金に代へられたので、さうして日本ではそれらの金は巨大な仕事をするを値するけれども、亞米利加ではすべての金は日本の六百分の一位にしか使ふことが出來ない。彼自身の財産は亞米利加では恐らく僅かに一軒の屋敷を營むにしか足りないかも知れない。けれども若し日本でそれを一擲する積ならば、恐らくはそれの百近くを持つことが出來さうである。『ところで』と彼は言つた「私の持ちたいと思ふのはそれほど宏大な屋敷であることを決して要しない。ただ家であればいゝ、大きさから言つて一軒に就て多分二三十坪ぐらゐの二階家でいゝ。さうして私はそれを百欲しいのである。それらの百の家は一切の無用を去つて、然も善美を盡してゐなければいけない。眞のいゝ裝飾といふものは、恒にそれが一面では拔き差しのならない必要を兼ねた部分でなければならない。不必要な贅澤のなかに美があると思ふのは、現代のより大きな誤謬に原づいたより小さな——併しやはりなかなか大きな誤謬である。豐富なものを愛しようとする精神は人間のなかにある。けれども現代にある贅澤は

殆んど悉くそこからは出立しては居ない。……一切の無用を去つても善美を盡すことは出來るものである。私はそんな家を百ぐらゐ欲しいのである——私は百ぐらゐならば建てることが出來さうだから。さうして今も言うとほり、それはただ家であればいい。そこで今、本當にこれは家だと思へるやうな家は幾つあるだらう。ほんとうに少なからう、ちやうどこれは人だと思へるやうな人が實に珍らしいように……それからその百の家のなかに私は百の人、或は百の家族に住んで貰ひ度いのだ。私はその家をそれらの人々に貸すのではない。たゞ住んで貰ふのである。」彼はそんな風に述べて來て、彼がその人に住んで貰い度い人といふのはどんな人かと私が尋ねた時に、彼は困つたやうに口籠りながら言つた。「どうもそれには未だ私の考へ方が充分ではない。それに私は人の試驗官になることは出來ない。けれども私がそれらの百の家から成りたつ小さな町を拵へた人であるといふ小さな理由から、若し私の好む通りの人を擇んでも僭越でなかつたならば、」と前置きをして、彼は大體次のやうな箇條を數へたやうに思ふ——私はそれに就てはその當時あまり充分な注意を拂はなかつたから、從つてあまり充分な記憶はないけれども、彼は言つた——　(1)私の拵へた家に最も滿足してくれる人。(2)互に自分達で擇び合つて夫婦になつた人々、さうして彼等は相方とも最初の結婚をつづけて居て、子供のある人たちでありたい。(3)彼自身の最も好きな職業を自分の職業として擇んだ人。さうしてその故にその職業に最も熱達して居てそれで身を立てゝゐる人。(4)商人でなく、役人でなく、軍人でないこと。(5)その町のなかでは決して金錢の取引きをしないといふ約束を守つて、それのためには多少の不便を豫め忍んでくれる人。その爲めに私はその私が考へる町の近く——さうしてその町の外に、別にその町の人たちの爲めに金錢の受け渡しをする場所をも設ける筈である。(6)そこの人たちは必ず犬か猫かを愛育してくれること。」

「私は」と川崎は言ひつづけた『私はそれが何も人である條件であるか、それに近いかなどと潜越にも定めはしない。が、私はただ私の考へで何かそんな風なものを私の建てる家に住んでくれようといふ人たちの條件として假りに決めて見ようと思ふ。さうしてそんなことを敢てする代りには、私は世間の人たちが私に與へるであらうところの馬鹿で氣紛れで變人だといふ評語を甘受するつもりである。或はそれ以上の何事をも甘受しなければならないかも知れない。何か人と變つたことをするだけの事にでも、われわれの世界では隨分さまざまな犧牲が入るのだから……。それはそれとして、私の拵へる家は重ね重ねも立派な住み心地のいゝものでなければならないが、それでも私のやうなそんな氣紛れな馬鹿が建てた家のなかへ、そんな氣紛れな條件で住んで見るといふやうな人が不幸にも一人も見つからなかつた場合には、私はただ私の建てた家々を人に賴んで奇麗に掃除をして置いて貰はうと思ふ。それから夜になつたなら、誰も住む人の居ないその家々のなかへ私はかがやかな灯をともして置かうと思ふ、それらの窓からその灯が美しく見えるやうに。私はもともとその家に住んでくれる人の有る無しに拘らずに、その小さな町を支へ得るだけの金は豫算のなかへ加へて居るのだから。それは百年ぐらい——永久にと言ひたいがさうはいくまい——百年ぐらいその家は地上に確かり立つてゐて欲しい。それから私は未だ言ひ忘れたが、その美しい町といふのはどこか東京の市中になくてはいけないのだ。それは市のなかにくつきりとして一廓をつくつて居て、思ひがけないところに在つて、併し多くの人々がそれをつくづくと見る機會を持つた場所でなければならない。さうして人々はその私の建てた家々をながめて、あんなところに住めたならばさぞよからうと思ひ、さうしてそれは住みたい人には誰でも住めると聞いて人々はびつくりして、併しその家に住むことの出來る條件といふものを聞いて訝しく思ひ、さうしてその變人

は巨額の尊い金を徒費して何のためにそんな町を建てたのだらう？　私は人人の心にさういふ疑問を起させたい。さうして私は不思議な男として人人に覺えられよう。わけても私は少年や少女たち、形は小さいけれども何等の成心もなしにものごとをよく考へ、よく感ずることの出來る尊い人間たちが、その町を見たならばそれの美しさのために、たつた一目見ただけで恰も傑作のメルヘンのようにそれが彼等の柔かな心のなかへ深く沁み入つて終生忘れることの出來ない印象を與へ得るやうな町でありたい。」

「そこで君の愉快な考へは、僕にもいくらかづつ了解出來てくるやうに思ふが、それに就て私が君に助力することの出來るのは一たいどんな事であらう。」この驚嘆すべき計畫家、若い立派なミリオネア、敬愛すべき古い友達の熱してゐる顔を見上げながら私がさう言つた時に、彼が私に言つたところでは、第一にはそれの大體の場所を選定することに就て、またそれらの家の一つ一つの壁だの屋根だの、又それらのいい色をもつた壁やよく調和された屋根を持つた一つ一つの家から成り立つた町の外觀などに就て、畫家であるところの私にその企てが熟するに從つてさまざまな用事が出來て來ると言ふのであつた。それから彼は靑い羊皮のある大きな手帳を出して、その計畫をもう一ぺん數字によつて私に示した。數字といふものに何の親しみをも持たない生活をしてゐる私には、そこにはただ零が幾つもある數字が段々になつて、層をなして重つてゐるのを見た。さうしてそれの一つ一つに就いて彼は私には明快なものに思はれる口調で次ぎから次ぎへと說明しつづけて、彼はその大きなノートの二三十ページの間を捲り返し捲り返しした。之を要するに私は、先づ第一に彼が廣さから言つて五千坪、價から言つて五十萬圓位の土地を求めなければならないことを知つた。さうしてそれ以上のことは私の大ざつぱな頭のなかでどうやら少しこんがらがつて行つた。それは私には少々迷惑であつたが、彼の熱心が私をして彼のして

ゐることは無用だと言はせることを遮つた。私はただぼんやりとなつて、その代りには彼が今數字でさうしてゐるよりももつと面白く今のさつき描いて見せたその美しい町の姿が、私のくゆらせてゐる香のいい葉卷、それは彼が私にすすめた葉卷のその紫色に渦を卷く重い香のある煙のなかにちらちらと私に見えて來るやうに思へた。その頃の私は文學者や美術家などにも何等かの方法でその道の修道院があつたらばよからうに、などと眞面目で考へ込むことの出來るやうな若さをもつて居たのだから。

我々の長い話の間にいつの間にか夜はふけて行つたと見えて、さつきまでは聞えてゐた電車の音がもうひびかなくなつて居た。其の夜、彼はその頃ではまだ東京では珍らしかつた自動車といふものへ私を乘らせた。彼自身も散歩のつもりでと言ひながら同乘して、私を大久保の私の家まで送りとどけてくれた。――私が自動車といふものへ乘つたのはその夜が最初であつた。自動車のなかでは、彼は夜眠れない習慣のあることや、それ故この頃では晝間寢て夕方に起きること、それから當時ひどく貧乏をしてゐた私を、當分彼がパトロナイズしてもいいといふようなこと、そんなことを少しばかり話したきり、喋りくたびれたのでもあらう、今のさつきまでとは打つて變つた態度になつて、彼は殆んど始終深く沈默してゐた、さうしてそれは彼ばかりではなく長い夜の町も、夜そのものも……。外には並樹があつて、ふと私はどこだか知らないところを通つてゐるやうな氣がした、自動車といふものは時々そんな氣持ちを起させるものではあるが。

"Silence is awful, in its possbeliy."

突然、川崎はひとりごとのやうにさう呟いた。確さうだつたと思ふが、誰かそんな句を書いた人でも居るのであらうか。

若し自由自在に自分の望む夢を見ることが出來るといふ能力が人間に與へられて居たならば、恐らくその夜以後の私はどんな風に出來るかわからないその美しい町を毎晩つづけさまに夢に見たであらうと思ふ。實際に私は一度か二度はそんな風な夢を見たこともあつた。川崎の不思議な計畫が何時の間にか私を捕へた。私はドイリミイな氣持ちになつて、がたがたいふ畫の具箱を肩から掛けて、殆んど毎日東京市中を歩き廻つた、畫書生である私は以前からさうではあつたが。さうして畫になるやうな場所を思ひがけないところで時々見つけることはあつたが、私はもう今までのやうにそれを直ぐさま畫に描かうといふ氣にはなれなかつた。（尤もこの時この事が無かつたならば私の「都市風景」といふエッチングの連作は胚胎しなかつたかも知れない）兎に角、その時には私にはそれ等のいい樹のある風景や屋根ばかりある風景や、渠(みぞ)に沿うた風景や、石垣のある風景や、入り日で窓の光る風景やそれ等の前に三脚を据ゑようといふ氣にはなれなかつた。唯それは一たいどこにあるのだか、併しどこかに在るに相違ないその知られざる場所、やがては生きな畫であるところの美しい町になる資格を持つたさういふ祝福された（！）五千坪を今日こそ見出さうといふ考へで一杯であつた。さうしてその五千坪は今日見出さなければもう消えてしまふやうな氣持ちさへした。今日捕へなければもう無いかも知れないのは反つてさまざまの描かるべき風景の方であるのに……。私は殆んど二ケ月近くもそんなことをして、薄ら寒くなつて來る東京の市中をほつき歩いてゐた。さうして私は毎日失望して歸つて、時折その失望をSホテルの彼のところへ運んで行つては彼をも失望させた。彼はしまひには何となく私に對して不平なやうな顏を見

せたりした。

もう十日もそんな日がつづいたとしたらば、物に熱し易い代りには又さめ易い私はもうそんなことに飽きて居たかも知れなかつた。ところが或る lucky idea (彼はその時さう叫んだ) が偶然にも私に起つて來た。といふのは、御存知だらうと思ふが司馬江漢の銅版畫の一枚である。ちやうどその日も無駄を歩くつもりで街へ出た私は、日本橋の〇町のKといふ美術倶樂部でその前の日あたりからちよつと見て置いてよささうな或る展覽會が催されて居ることを新聞で見たのが思ひ出された。もうだんだん歳末に近づいて俗人たちが忙しがる時期であるのを面白いことにしてわざわざそれらの日を期日に擇ぶといふ種類の好事家達が、それらの人人の口吻で言へば南蠻紅毛渡來である所謂古渡りの「和蘭陀」「以西班亞」などの諸種の美術工藝品を清玩する目的で蒐集した展覽會だといふのであつた。好奇心から私はそこへ行つて見たのであつたが、猩々緋といふ色の羅沙や、黑に紫と靑磁とで唐草模樣のある天鵞絨だとか、和蘭陀の皿だの花瓶だのこわれて居る大きな磁石だのその他、何でもそんな風なものが雜然と置かれた間に雜つて、參考としてそれらのものの影響から日本で造られた、それらの全く無邪氣な寫し——イミテエションである樣々なもの、重に燒物などがあつたが、私はそれらのものは後廻しにしたのでたうとう一覽しただけで滿足には見なかつた。といふのはそれらの物が必ずしも私に面白くなかつたのではない。但、それよりもその部屋の壁に掛けられてゐたさまざまの古い版畫が私に先づより多くの感興を與へさうに思へたのだ。何でも珍らしい亞歐堂——その名を私はそこで知つた——もあつた。で、私に彼の所謂 Lucky idea を齎した司馬江漢のものも其處にあつた。それを私はその時に一度見たきりであるから、同じ人の他のものと混同してゐないとも限らないが、今覺えてゐるところでは、それは何でも銅

版の上へ緑とオークルジャンとを基調にしてあつさりと淡彩したもので、ところどころにあつたジャンシトロンはあまり淡いので消え入りさうになつて居た。地平線を畫面の三分の一よりもつと低く構圖して、そこには家並みがあり、あまり大きくない立樹があり、それに微細な草の生えて居る道の上には犬と幾人かの小さな人間とが歩いてゐた。確かその極く小さな人間の衣物にはくつきりしたピンク色かぽつちりくつ附いてゐてエフエクテイブであつた。廣い空には秋の靜かな雲が斜に流れて居た。その畫そのものも多少はそれに與かつて力があつたらうがそれよりも私にその idea を與へたものは、寧ろその畫面の廣々とした中空の上の方に、一種愛すべき稚氣を持つたマンネリヅムで風に飜つてゐる卷物のやうな形のながへ製作者自身が書きつけた畫題であつた。活版を眞似た字體の羅馬字の六つであつた——

"NAKASU"

中洲！中洲!!中洲!!! 私は口のなかでさう叫びながら氣違ひだと思はれない範圍で一散にその會場から飛び出した。私は中洲の方へ先づ行かうか、築地の川崎のホテルへ先づ行かうかと思ひ迷ひながらも、私の早足は築地の方へ向いてゐた。午後の三時ごろであつたが彼は未だ眠つてゐると言つて、例の金ボタンや金モオルのユニフオムをつけた少年は私を取次ぐことを躊躇したが、私は無理に彼を起させて、それから我々は二人で中洲へ行つて見ることになつた、彼は「Lucky idea だ！」「Lucky idea だ！」を繰り返しながら。併し、私のなかには「若しそこも駄目だつたら」と妙な不安があつて、何だかそこへは行きたくないやうな氣がした。その後私にはあの邊はあまり用のないところになつてゐるので、そこが今どんな風に變つてゐるかは知らないが、その時我々がそこへ行つて見た時にはたゞごみ〱したとりとめもないうすら寒い氣持ちの場所で、私は直ぐにがつかりして、彼の意見を聞いたり私

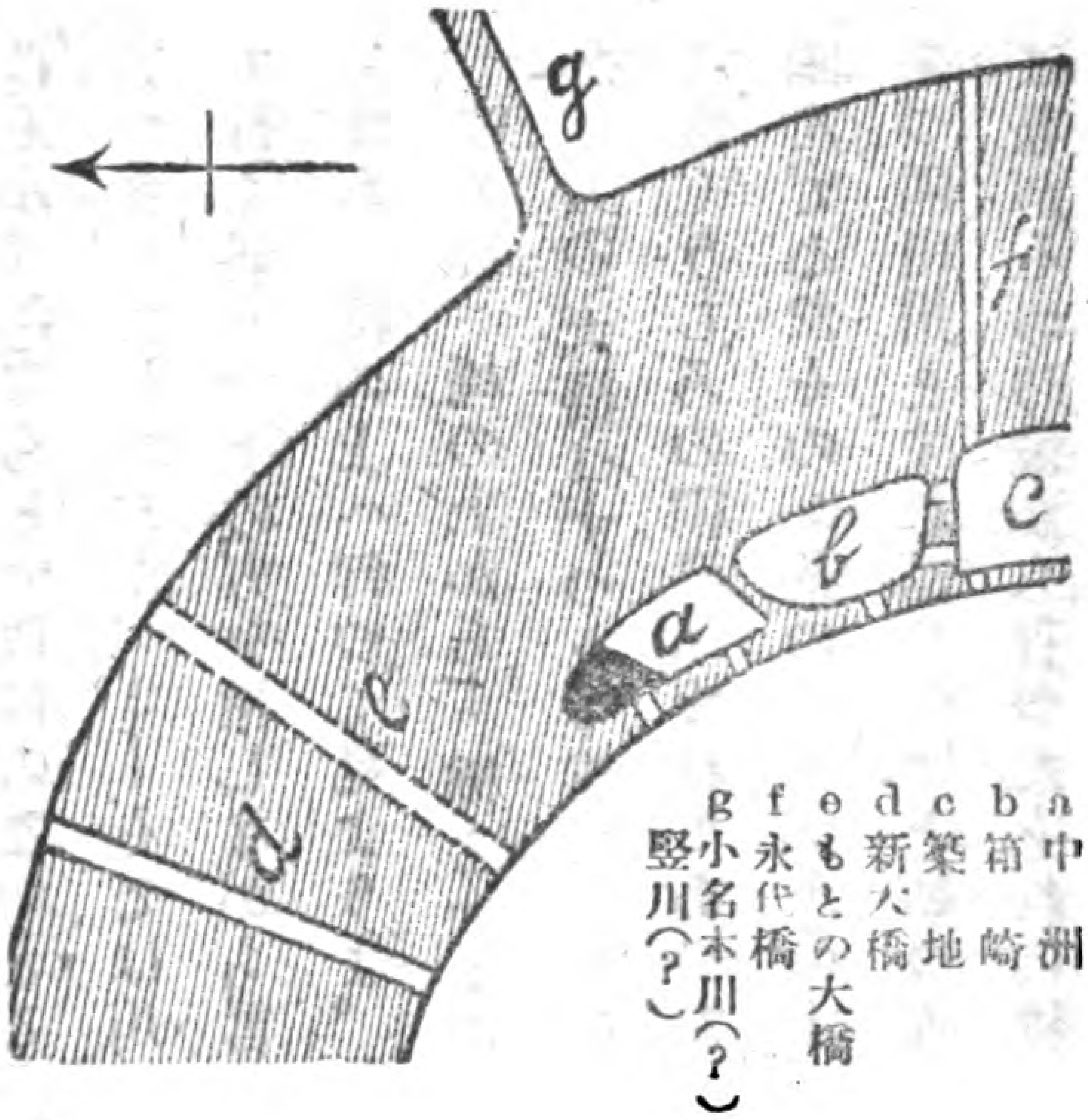
自らが述べたりするやうな勇氣はなかつた。又「嗟、駄目だなあ！」と言ふより外には私の意見はなかつた、私の氣の毒なたゞ默つて居る同行者も恐らく同じ考へだと思ひながら。我々は夕日の下の雜然たる物音を聞きながら、あの男橋といふか女橋といふ方かどちらだつたか忘れたが、兎に角川上にある方の橋を渡つてしまつた時、

「どうも、とんだ Lucky idea だつたなあ。」私は自分自身を嗤ふつもりで、又私の友達を慰めるつもりでさう言つた。

「どうして？」、するど私の言葉を聞くや否や、彼は一種昂然とした態度で私に聞き返した。さうして彼はそんな汚ならしい取得のないところで充分滿足してゐるのであつた。我々二人は行德河岸とは反對の方へ歩いて行つたが、——そこは川端に家があるので道からは中洲は見られないが——彼は我々の歩いて行く前方の上の方を指しながら言つた。

「まあ、橋の上へ行つて見ようよ。司馬江漢もきつとそこから寫したのだらう。」

なる程、橋の上から！橋といふのは大橋のことなので、それはまだ新大橋にならない以前であつたが、元の大橋はずつと下手に、中洲に近いところにあつた。それは……（E氏はさう言ひながら、立つて直ぐうしろの棚に積まれてあつたスケッチブックの一冊をとり出すと、彼自身と○君と私との三人が圍んでゐたそのお茶のテーブルの上でその白い一頁を披げると、「勿論精確とは言へませんが……これを先づ隅田川とすれば……」と斷りながら、畫家らしい手早さでもつて次のやうな圖——こゝに掲げるのは私がその時彼から貰つたそれの模寫であるが——を描いてそれで私に說明した。）



結局、彼はそこがひどく、本當にひどく氣に入つたといふので——實際、大橋の上から消えて行かうとする冬の入日のなかに、未だ何の形もないところの併しそれはどんな形ででもあり得るところの新らしい町を、今目の下にある汚らしい灰黒色の屋根のかたまりと置き代へて考へた時には、私でさへもどうやらそこが氣に入つたやうに思ひ直せた程であつたから——さうして、彼はそこのこの部分（さう言ひながらE氏が我々の目の前で黒く塗りつぶした圖面の部分）、橋の上から最もよく見下すことの出來る部分に決めることにして、それ〴〵の方面から計畫を實現することに努力しようと揚言した。彼はまた司馬江漢の例の畫を、それは我々の企ての一つの暗示と決定とを與へた記念物として、また我々の町、美しい町がより古い時代にどんな場所であつたかといふことが人々に知られるためにも、それが手に入るものであるならば手に入れたいと言つた——けれども「何しろ持主は春波樓先生の蒐集家で」（とその美術商人は言つたが）あつたゝめに、さうしてその口實でもつと法外な多額を彼に支拂はせようとした美術商人の言葉に對して「さういふ偏愛家は尊重しなければなるまい」と彼はさう言ひ放つたので、遂にそれは彼のものにはならなかつたやうだが。

で、その晩は、我々が中洲を我々の意中の土地に決めた晩は、我々の心は浮き立つた。それでちよいとお祭の餘興のやうなことがあつた程である。といふのは、私は彼の化粧臺の前で、三四ヶ月ぶりにも

ぢや／＼してゐる私のうす髭を剃つた。それから私は自分の汚らしいコールテンの仕事服を脱ぎ捨てゝ、川崎から彼の立派な黒い洋服などを借り着した。それはそんな服裝でなければ出入出來ないといふホテルの不自由極る食堂へ彼と一緒に行く爲めにである。をかしな事を思ひ出したが、その晩話に實が入りすぎて、物事にうつかりしてゐる私は借り着のことは忘れてゐたと見えて、そのまゝの服裝で家へ歸つてゐた……。で、食堂では我々は酒をも大分飮んだ。彼は微醉して彼自身の部屋に歸るとピアノを彈いて聞かせた。それは何の曲であつたか、その曲が彼によつてうまく彈かれたか、また出鱈目であつたかを私は一向知らない——私には音樂のことは一切解らないから。その晩も我々は例によつて「美しい町」の話をかたりつゞけた。彼は、今日見たあの土地が手に入るかどうかを彼自身で明日にも調べようと言つた。一つ新聞に廣告をしてそれらの家の一つ一つを設計するところの建築技師を雇ひ入れようとも言つた。彼は彼自身のことをその「美しい町」の作曲者であると言ひ、私のことをそれの指揮者であると言ひ、今雇ひ入れなければならない技師といふのはその美しい町、美しい家々から成り立つオケストラに於て、それの一つ一つの彈奏者であるとも言つて。私は彼に賴まれたがまゝに新聞への廣告文を文案した。彼はその技師に一ヶ月三百圓を支拂はうと言つた——それがそれ等の仕事に對して充分に、或は比較的に多額であつたかどうかを私は知らないが。併し、それが新聞へ出た時に澤山の應募者があつたといふから、それは思ふに充分な手あてゞあつたのであらう。その澤山の、二十人近くの應募者が每晚彼に不滿足を與へるために來て歸つたさうだ。

かうしてその奇妙な町の創立事務所になりかゝつて居るホテルの一室が、澤山のそれつきりもう來ない人を迎へてから後に、或る日、そこへ一人の瘦せた小柄な髮はすつかり白くなつた老人が這入つて來

た。老人の外見は面白いものゝ一つであつた。それは四十年前にはきつと最新の流行であつたらうと思へるそれで居てきちんとしたモォニングを着て、併しそれが妙に氣品をもつて似着かわしく、その上彼は内氣な上品な人の持つ愧羞を帶びて川崎の前に出て來たさうである。數日の後には私にもさうであつたが、その時川崎は一瞥してその老人を既に充分に好きになつたと言つた。話をして見て、彼は老人をもう一層好きになつた。彼の問ひに對して老建築技師はぽつり／＼と答へて行つたが、その人は明治の鹿島館時代、あの氣まぐれな季節外れの花のやうな時代に、彼の愛好してゐる建築のことを學ぶつもりで彼自身の資產で巴里へ行つたが數年の後彼が歸つた時には、あの不自然な歐化時代が去つて居て、より不自然な退化時代を見た。さうして彼が折角中年に近づいて學んで來た學問は日本の土地では、豫想外にもう無用であつた。その代りに一人の新歸朝の建築技師はその後だん／＼貧乏になり年をとつて行く自分自身を見た。さうしてその間に、幾つかの兵營と活動寫眞小屋の設計の下請負ひを幾つかしたきりであつた。一度彼は人づてに懇願して、或る華族の別莊を設計したことがあつたけれども、彼の苦心した會心の設計は用ひられなかつた。一つはあまりに素朴だと言はれたし、一つはあまりに手が込みすぎて居ると言はれた。併しこの設計者の考へではその中間のものといふのは實際俗で見られるべきものでないと信じられた。そこで建築技師は――彼はもうそろ／＼老建築技師になりかゝつてゐたが、たうとうそれの爲めにもう一度設計して見ることを辭退した。さうして孝行な息子があつて、醫者になつて彼を養つてくれる間に、彼はどうかして一生に一度自分の氣に入つたやうな家を一つは建てゝ見たいと、そればかりを夢想しつゞけながら、賴む人もなく、建てる土地もないのに、彼はさま／＼な賴み手とさま／＼なそれが建てらるべき土地とを彼の心のなかに見出しては、それをいつもこつ／＼と一軒一

軒設計しては樂しんだ。それらの紙上建築がもう五十軒近くもある程である。さうして彼はそれらのいつの間にやらもののその通り髮の白い老建築技師になつて居た。家人たちはこの老人にこの奇妙な熱心を捨てさせようと試みたけれども無駄であつた。さうして、どうにかして彼の一生のうちに彼の考へた家の一つをでもこの地上の上に建てゝ見たい、さう言ふのが彼のもう僅かしか無いであらう一生の願望である、と彼自身で言つた。

「この珍重すべき人こそ本當に我々の仕事を相談すべき人だと私は思つた。今の時代に彼は彼自身の仕事を心から愛してゐる稀有の人だ。で私は、ともかくも彼の何の目的もなしに成された設計といふのを一度見たいものだと賴んで置いた。その人は多分明日の晩六時半には來る筈である。私は我々の忠實な協力者がもう得られたも同然だと思ふが、君もその人を氣に入らなければならないのだから、明日の晩、來てその人に逢つて見ないか。」その老建築技師が訪ねて來たといふその翌日の晩、川崎は私にそんなことを言つた。さうしてその次の日のその時刻に私がホテルへ行かうと近づいた時に、私よりも一足さきにホテルの玄關の石の階段の上に、一杯ふくらがつた大きな畫嚢を脇の下から腕一ぱいにかゝへ惱んでそこを登つてゐる老人の後姿を見た——川崎が噂をしたと同じ服裝をして。この老建築技師に就て私の友達がその前日私に言つたことはその晩私にもすつかり同感出來た。

かうして我々が、その老建築技師とともに三人になつて、三人の我々が一緒にその計畫の遂行を急ぐようになつたのはそれから二週間ほど後のことであつた。仕事の時間は川崎の註文によつて夜で、その

七時から十一時過ぎまでと定められてあつた——我々は時々我々自身の感興でこの定めの時間を越えたことも多かつたが。ホテルの廣い一室に我々三人はそれ〴〵三方に別れて、それ〴〵に一つゞつの灯を据へたテエブルに向つた。さうして時々必要に應じて中央にある川崎の大きな圓卓のぐるりに集まつた。最初の晩、川崎はわれ〴〵をそこに招待して我々に葡萄酒をすゝめながら、その街全體の設計に就てより具體的な說明をした。彼はその水に圍まれてゐる土地の一端、その後彼の取調べたところでは多分手に入るに相違ないところの場所の六千坪以上は、同じ中洲の他の部分と區別するためにその中間に約幅三間の稍深い渠溝を設けようと言つた。それからそれらの充分に區劃立つた獨立した區域は、一旦その周圍を堅固な石垣で積み固められなければいけない。街の道筋はその區域の水のある周圍に沿うてその土地全體の輪廓を環になつて一周しよう。それはやはり幅三間で、その水に接する側には、人間の胸の高さで彫刻のある石の欄杆——胸壁を設ける。かうして片側町になる家々は、胸壁と道とに沿うてそれらよりももう一まわり小さく再び互に環のやうに連るのである。かうしてさま〴〵な各〻異つた形の併し互に最も調和し合つた家々、それは多分百軒よりは少くない家々が、言はゞ一つの城廓のやうな形をする。又、それらの家々のなか側の空地には、各ゝの家々のうち側の窓が一樣に又一目で見て愛することが出來るやうな庭園を持たう……。これが彼の考案の大體であつた。さうして一つの家は、二階家で三十坪よりあまり以上の土地を費したくない。それ以上の屋敷を要する人はこゝの町の人でないやうに、とも彼は言つた。

さうして當分は、私の仕事が最も多忙であつた。といふのは、あの老建築技師があてもなく設計した五十軒近くの設計のうちで十軒以上のものが、我々がそれを建てようとする土地に充分適當してゐると

して川崎が認めたからである。その家といふのは礎や地盤には石材を豊富に使つたものであつたが、家そのものは木造で倉造りになつてゐて、それの外形では殆んど一種純然たる西洋館であつたけれども、家の内部はそれ自身が充分に一つの特有な様式を成すほどな工夫から出來た日本風であつた。しかもそれがそれの外形と決して何の不調和をも生じないと川崎は歎賞してゐた。私はその設計圖の側面圖やら立體圖やらによつてその家の一つ一つを先づ手輕な水彩畫にして見た。或は鉛筆畫の上に着彩して見た。實用的に最もよく造られて居るといふそれらの家には、それが畫になつた時にも能く繪畫的であつた。その家に美觀をそへるであらうやうなさまざまの形の樹木を、私はその家の脇に、或は後ろの方に空想で描いて見た。私は多く落葉する樹を考へ、時には常盤木を考へた。それから家の壁にまつわるさまざまな蔓草を想像した。私はそれを毎日つづけてゐるうちに、私の目に觸れる機會のある限りのすべての家に、地上に既に出來て居る家々や、或は邸宅の塀のなかなどにその梢だけを見せてゐるあらゆる樹木などが、悉く皆私の仕事の參考品になるためにそこに在るやうな氣持がした。私は空や雲や或は公園の花や女の着物などを見るごとにそれが我々の家々の壁とか、柱とか、露臺の欄干とか、窓かけとか、その外いろいろの家具のどこかの色として用ひられはしないかどうかと、物の色を見る毎に最先きにそんな事を思へて見た。それほど私はそれらの仕事に一心になることが出來た。併し、私は私の畫を描いては改め描いては改めして、私が漠然と考へてゐたことは實際に面接して見ると餘程困難なものであることを考へ惱む時に、川崎はいろいろと卓越した意見やら注意深い批評などを私に述べた。彼は彼で人に測量させて製圖させた土地の大きな額の前に座つて、時々ドリイミイな目を上げてその地圖の上を眺め入つてゐることがあつた。それに又時々に彼は本を讀んで居た。それはウヰリアム・モリスの「何處に

もない處からの便り」といふ本で、それを彼は餘程好きであつたと見える、何時でも讀んで居たから。又その頃になつて彼は正午過ぎになつて起床するやうになり、土地の買入れのことに就て人人と面會しない日には、ひとりで方方の町々を散歩しては、氣に入つたやうな形をした家があつたと言つては、それを我々の爲めに話した。全く無口な老建築技師は一晩のうちに殆んど數へるほどしか口を利かなかつた。全く何も言はなかつたやうな日もあつた。さうして、併しそれが彼の不機嫌から來たものではない證據に彼はいつもひとりでにこにこしてゐた。何か必要があつて彼のそばへ行くやうなことのある場合――既に私の方へ廻されてゐる彼の設計圖に就て何か質問をしたり相談をしたりするやうな場合には、私は彼の脇に立つて二度でも三度でも繰り返して彼の名を呼ばなければならなかつた。それでも私の方へはとうとうふり向かない事があつて、私は仕方なしにそれを斷念したこともあつた。老人は聾ではないのである、ただそれほど熱中して、鉛筆を削つてゐたり、考へ込んで居り、烏口を動かしてゐたりした。

我々の部屋には必要上白晝と同じような光を發する最も明るい電燈がともされ、又我々が用談が出來て他の人々の方へ歩いて行く時には他の人々の考へ込むのを邪魔しないために、その厚ぼつたい絨氈の上に足音を忍ばせて歩くのが習慣になつた。時々あの金モオルと金ボタンとの制服を着けたホテルの少年が、やはりこつそりと扉をあけて這入つて來てストオブのなかに石炭を入れる時の外には、そのまぶしいばかりに白く明るいさうしてひつそりと靜まり返つた部屋が、またその部屋のなかで我々が影のごとく音もなく動くのを見ることが、私にふいと妙な氣持を起させて、それが何だか夢のなかの光景が、大きな鏡に映つてゐるのか、でなければ活動寫眞の一畫面のやうに思へたりしたものであつた。――我々はそんな風にして仕事をつづけた。……

困つたことに、話がのびてしまつて、それに一兩日前から暑さにあてられて、こんな話半ばで期日になつた。作品の性質として一度に發表したいのだけれども、不本意ながら次號にわたることになる。讀者と編者とに謝す。――（作者）――



不能者

葛西善藏

一

參吉はいよ〳〵今日こそ、豫ての計畫を實行しようと思ひ立つた。で晝飯の時に特にビールを一本飲んで元氣をつけて、自分で電話口に立つて金彌を呼び出した。

「これから光樂寺に行うと思ふんだが、行かない？　行うよ。ね、ゆふべそんな約束だつたぢやないの……」

「さう、では行きますわ」

「ぢやあね、これからすぐ出てね、あの邊で待つてゝ呉れないか。僕もすぐ出かけるからね」

かう云つて電話を切つた。それから鏡に向つて頭髮を撫でつけ、羽織を引かけて、わざと帽子はかぶらずに、梅雨霽れの蒸暑い外へ出た。

――いよ〳〵以て今日こそは、罪障深きかの女等に因果應報のおそろし

さ、色即是空の悟りを――殊に戀敵の成瀬をも竝べて置いて說き聽かしてやるのだと思ふと、臆病者の參吉の胸も、躍り立たずにゐなかつた。彼のひよわさうな青白い顏にも、屹とした色が浮んでゐた。

光樂寺の坂道の途中で、金彌と桃子とが、派手な色の洋傘に日を避けて、こちらを見おろしてゐた。參吉はせか〳〵と登つて行つたが、かの女等を見つけると、すぐまた胸に動悸をおぼえて、意氣地無く顏をあからめた。こんなことを企らんだ自分の方が、一層罪深きものであると氣が咎められるやうな氣もした。

「だいぶ待ちましたか？」と、參吉はいつものやうに顏をあからめて、やさしい調子で云つた。

「いゝえ、私たちも今來たばかしよ」

三人は竝んで靜かに步るいて行つた。

「あなたゆふべは隨分醉拂つたわね。そして成瀬さんに隨分怒つてよ。私たちが折角送つて行つてあげたのに、あなたは成瀬さんに歸れ〳〵つてね、それは怒つたのよ」金彌は傷々しげに參吉を顧みて、云つた。

「さう、……僕はちつとも知らなかつた。……それはあなたへは失敬しましたね」と參吉は詫びるやうな調子で云つた。

が、ゆふべは、泉屋を出てからのことは參吉にはまるでわからなくなつてゐるが、泉屋で飮んでゐた間のことは、參吉にもよくわかつてゐた。そしてまた成瀬に對する勃然とした憤りを、あたらしく喚びおこされた。金彌は彼に取つては、酒の相手としての美しい偶像なのである。それを、たつた二度目で

會つた成瀬が、金と云ふもので、他に相手も無いではないのに、單に奪略の興味から、金彌の肉體を得ようと、參吉の前で最も露骨な態度を見せたのである。藝術家ではないか！　何と云ふ淺ましい奴だ！　美と禮讓に對する感情の痲痺した奴は厭だ！　萬事は金で片附くものと思つてゐるやうな藝術家ほど厭なものはない――と臆病な彼も、醉つてゐたので、怒つたのである。そしてまた、直覺的に、結局この金彌もまた、この猛者の爲めに蹂躙せらるゝに違ひないと云ふ氣がされて、彼はひどく悲しくなつたのである。彼は顔へ兩手をあてゝ「ほれて通へばなにこわからう、戀の闇路にたゞひとり……」と金彌に彈かして、悲しい聲してうたつた。この女ともこれきりだ――かう思ふと、彼は胸のうちに泣かずにゐられなかつた。

成瀬は都會で他の細君へ戀して、離婚騒ぎまでひきおこして、その傷手を負ふて、このS州へ遁れ來つたのであつた。そしてこの土地へ來る前ある溫泉場では土地の藝者を片つぱしから咽喉首を搔き切つてやつたことを、誇りとしてゐた。

「戀愛ですなあ。戀愛のほかには、この人生の單調を破る何ものも無いですよ。でなければ冒險――僕はこの夏は日本アルプスを踏破しようと思つてゐます」と、金に困らない彼は、眉をあげて、度々かう云つた。

參吉に取つてもまた、この人生が退屈であり、單調であるには違ひなかつた。しかし、この頃の彼には、金でかうした種類の女を漁り歩るくと云ふことが、ひどく耻かしいものに感じられてゐた。身が汚れると云ふ感じを、酒の勢ひで以てしても、斥けることが出來なかつた。それに彼はひどく貧乏でもあ

つた。彼は出來ることならば自分が、「貧しき人々」のマカールであり、金彌がワルワーラであるやうなことを願つた。そして毎日々々、親愛なる私の何々さん——貴女の卑き召使ひの參吉より——と云つたやうな手紙を書くことすら、彼は空想した。

「これは驚いた。君はほんとにそんな風に考へてるのですか。こんな人たちにそんなこと云つたつて、てんで分りやせんですよ。すべてが金のことですよ。こんな種類の女たちばかしではなく、すべて女は金にはまゐりますよ」と成瀨はゆふべも、女たちを前にして、憫笑した眼付を見せて參吉に云つた。

結局この男は、ほんとうに他の愛を所有したことも、所有された經驗も無い人間に違ひないと、參吉はしまひに斷定的にさう思つた。神經性な焦燥、肉體への突擊、略奪的傾向——すべてがそれを證據立てゝゐるやうに思はれた。

「兎に角自分だけは離れて了はう。こんなことで氣分をこわされてゐてはいけない」と、參吉は思つた。

今日の光樂寺行きで以て、彼はすつかり遠退いて了はうと思つた。事實、彼はこの二三日、東京の雜誌社から電報で原稿を責め立てられてゐた。

二

女たちを石段の下に待たして置いて、參吉ひとりが成瀨の借りてゐる書院へはいつて行つた。文晁の

八方睨みの虎の大幅のかゝつた床の間には、成瀬の繪具箱や描きかけのカンバスなど亂雜に置かれてある。成瀬は蒲團をかぶつて晝寢してゐた。

「僕あの女たち二人をつれて來ましたよ。石段の下に待たしてます。それで、あなたから和尚さんに、あの地獄巡りの繪の話をして呉れるやうに賴んで見て呉れませんか。僕もこの前和尚さんにさう云つて賴んではあるんですが……」

參吉はおづ／＼しながらも、眞面目な改つた調子で云つた。

「そりや君、如何になんでも、ひどいですなあ……」と、成瀬は苦笑した。

「いや、決してその、そんな皮肉な意味ではないですがね、あなたの來る前から僕はあの女たちに約束してあつたんですよ。僕たちやあの女たちのやうな罪深い人間には、多少思ひ當ることもあるだらうと思ひましてね」

「しかし、如何になんでも……」

「いや、それはね、和尚さんもこの前話してやると云つてゐたんですよ。女たちもひどく聽きたがつてますしね。それで和尚さんが話して呉れるやうだと女たちもやつて來ると云ふんですが、でないとあなたも一緒に散歩しようと云ふんで、待つてるんですよ。兎に角折角來たんだから、あなたから和尚さんにさう云つて見て呉れませんか」

成瀬は仕方無しにたつて行つたが、「和尚さんやるさうだから」と云つて歸つて來た。で參吉は走つて行つて、石段の上から女たちを手まねぎした。そして急に躊躇し出した金彌を引張りあげるやうにし

て、本堂の佛壇の前にかけられた「孝子の地獄極樂巡り」の繪の大懸軸の前に、參吉がさきになつてかしこまつて坐つた。女たちも成瀬も並んで坐らない譯に行かなかつた。

七十近い、耳の遠い和尚さんは、高い聲で、しかし慣れた調子で一つ〳〵説明して行つた。飲酒戒のところでは、鬼どもが寄つてたかつて、口から水をつぎ込み、それが尻から脱け出てゐる圖であつた。邪淫戒では、首から上だけが人間で、からだは獸になつてゐた。修羅道――そこでは裸形の人間どもが互ひに棒切れを持つて、唯滅茶苦茶に毆り合つてゐた。何の理由があつてと云ふでもなく、唯滅茶苦茶に毆り合つてゐるのである。劍葉林――そこでは上の方に美しい女がゐて、それに近づかうとして裸形の男どもが、泳ぐやうな恰好をして、われ先きにと劍の林の中を馳け迴つてゐる圖である。

「あゝこれだ！」と參吉は思はず聲をあげた。「ご覽よ金彌さん……實際にも男はよくこんな恰好をするぢやないか。あなたなんかこの女の方だ、……よくご覽、實によく出來てるぢやないか。だからあなたなんか罪が深いと云ふんだよ」と參吉はしつこく繰返した。

「いやこれはみんな娑婆のことを寫したもんで、ほんとうによう出來てます」と、和向さんは得意げにうなづいた。

「では今日はこれ位ゐにして置いていたゞきませうか。私たちには地獄巡りの方だけで澤山です、みんな極樂の方には緣遠い人間ばかしが揃つてるんですから」

成瀬はもう我慢が出來ないと云つた顏して、和尙さんの耳に口を寄せて云つた。

「さよか？」と、和尙さんは拍子拔けの顏して、默つた。

成瀨の室で紅茶を飲みながら、晩に浪花節芝居をみんなで見に行うかと云ふ話が出た。

「實は僕非常に芝居嫌ひなんでね、それに僕今夜あたり書き出さうと思つてゐるもんだから、……なんだつたら遲くなつてから一寸行きませう」

もぢ〱落付かずに默つてそんな話を聞いてゐた參吉は、斯う云つてぷいと起つた。

「まあいゝぢやありませんか。わたしたちも一緒に歸ることよ」金彌は椽先きまで出て來た。

「いやいゝんだよ。君たちは殘んなさいな。僕一寸用事もあるんだから……』

『まあいゝぢやありませんの。ね？　ね？　田口さんね、いゝでせう？」

わかつて？——ひたと參吉の顏に向けられた、悧巧さうな大きな金彌の眼は、かう云つてるやうに見えた。しかし參吉にはそれをどう信じていゝか、わからなかつた。彼はたゞ泣き出したいやうな發作を感じた。で彼はくるりとうしろ向くと、そのまゝ默つてすた〱歩るき出した。

鹽田平のほとんど全面を見おろした寺の石段の上から、彼は珍らしく淺間山の噴煙が、他の雲とは際立つて白く流れてゐるのを望むことが出來た。彼はそれを眺めながら、自分の心持を鎭めやうとするかのやうに、高い石段を一段々々とゆつくりおりて來た。

夕方、彼が淋しい晩酌の盃を甞めてゐると、宿の息子の亘がはいつて來て、

「今金彌に會つて來ましたがね、芝居の方はほかの客に玉を附けさせたから、待つてるから是非早く來て呉れつて云つてましたよ」と云つた。

「ほかの客に？　ぢやあ何ですか、ほかの客と一緒に行つてるのを、僕等は離れて見てると云ふ譯で

すか?」

「いやそんなぢやないでせう。多分藝者たちのおごりになるんでせう。だから折角のなんだから一寸でも行つてやつたらいゝでせう。……切符代なら僕持つてますよ」と云つて、亘は一圓机の上に載せた。

ずつと年下の亘の眼にも、この頃の參吉の樣子はいくらかおかしげにも、またほんとに同情せずにゐられないやうなところがあつた。「かうした職業の人に似合はない何と云ふ初心な、單純な、……まるで田舍藝者なんてどんなものとも、理解が無いらしい。てんで遊びと云ふことを知らん人らしい。しかしほんとうに正直な、氣の毒な人だ」亘はかう思つてゐた。で宿料の方もかなり滯つてゐるのだが、親父との間にはいつて、嚴しい催促がましいことは云はさないやうにしてゐた。

四時に役場を退けて來る亘は、門の外からまづ第一に、參吉の二階の室を見あげずにゐられなかつた。額にかぶさるほど髮を長く延ばした、青白い神經質な顏して、兩膝を抱きかゝへて、ぢつと濁つた空を眺めてゐる參吉を見ることは、亘にも傷ましい氣がした。參吉はちよい〳〵持病の喘息をおこした。さうした晩には、遲くまで枕元に坐つて濡手拭で額を冷してやつた。

「ね亘さん、今度はひとつ僕に應援して下さい。僕はいゝ作さへ書ければ、何にもいらないのですからね、金のことは乾度僕拂ひますからね、僕がどうか書けるまで僕を助けて下さい。僕も人から受けた厚意を忘れるやうな人間でもありませんからね。金錢のことにしても、ほんとうは僕そんなぢやないですよ、僕最初からあの女をどうしようなんて考へたこともないですからね。唯僕は、成瀨君の趣味の下

等なのに腹が立つのですよ。金彌は僕のことを、いゝ人間だけれど嫉妬深いと云つたさうですが、そんなぢやありません、僕も最初から成瀬君のことを田夫野人だと思つてゐたのなら、決して腹なんか立てなかつたらうと思ふですがね、併し彼だつて藝術家ぢやありませんか！　何と云ふ惡趣味です！　あなたにもわかるでせうが、多分金彌は蹂躪されるに違ひないと思ひますがね、それかつて僕は金彌を厭惡する氣はありません、……かの女は商賣人だから。しかし僕は藝術家のあゝ云つた趣味はほんとうに好まない。しかし兎に角僕はあの人たちから離れて了ふつもりですから、亘さんも僕のことは心配しないで下さい。僕にもほかに屈托しなければならない問題がどつさりあるんですからね……」

「えゝわかつてます。僕にもわかつてますよ。だから金のことなぞ心配しないで、ほんとにひとついゝものを書いて下さい」

亘は素直に同情して云つた。そして、

「では僕ひと足さきに行つてますからね、あなたもご飯をめしあがつたら一寸でもいらつしやいな」

と云つて、出て行つた。

三

參吉の芝居へ行つたのは、十時過ぎであつた。泉屋の藝者が全部四人、——それから子供等まで。成瀬は棧敷のうしろの方に、メリンスの大座蒲團に坐つて、金彌と身體をすり着けてゐた。亘はほかの女たちの間に挾つて、舞臺に眼を遣つてゐた。

「随分ね、……待ちましたわ」

金彌は斯う云つて、怨じるやうな眼付を見せて、棧敷の前の方に彼の席をつくつた。

「どうも濟みませんでした。僕どうも酒を飲まんとご飯をたべれないもんだから、これでも大急ぎで濟まして來たのです」

參吉は拗ねてゞもゐるやうに思はれさうな疚しさを云ひわけしながら、金彌の身體には觸れないやうに用心して、窮屈に坐つた。子供等はビールをどん〳〵運んで來た。みんなかの女等のおごりである。旦那然と納つてゐた成瀬は、明かに參吉の來たのを悦ばないやうな色を見せた。二人はお互ひに一寸口を利き合ふやうな氣分にはなれなかつた。

「ほんとにお待ちしてゐたことよ。……いらつしやらないんですもの」

金彌は斯う繰返して、しきりに參吉にビールをついだ。參吉にも、金彌のかう云ふ言葉の裏に僞りがあらうとは思はれなかつた。これまでお互ひに厭な思ひをせずに、つき合つて來た間柄である。昨今の成瀬をおごつて、彼を彈くと云ふ筈がないのだ。若しさうだとせば、成瀬を唯金持だからと見込んだ爲めに違ひない。しかし參吉は、金彌を全然そんな性質の女とは考へてゐなかつた。

舞臺の上では何か知ら譯のわからぬことをやつてゐた。舞臺のわきの高い臺の上から、時々締めつけられるやうな聲して浪花節がうなり出されると、今までしやべつたり動いたりしてゐた役者どもが、ひたと鳴をしづめて、立ちあがつてゐたものは立ちあがつたなり、控えてゐたものは控えたなりに、その一節が語り終るまで、下手な人形になつて了ふのである。奥山の花屋敷の人形ならば參吉にも美しいと

思はれるが、これはまたいづれも、餘りに不細工な人形であつた。それに元來眼性のよくない參吉は、舞臺の上に見惚れる氣もなく、案外綺麗な建物の中など褒めたりして、ビールを飲んでゐた。成瀨はひどく浮かない顏しながらも、つき合ひのつもりか神妙に舞臺の方を見てゐて、時々通人らしい口調でうまいとかまずいとか云つてゐた。が參吉には、彼がはいつて來てから特にさうとしか思はれない成瀨の浮かない、焦燥をおし隱した顏を見てるのが、ひどくつらく思はれた。參吉は時々コップを差しながらも、なるべく成瀨の顏は見ないやうにつとめてゐた。

がふと氣がつくと、成瀨の胡座の膝が、押つけがましく金彌のしんなりした膝の上に載つてゐた。金彌の華奢な白い右の手が、洋畫家らしく日に燒けた勞働者のやうな兩手の中に、しつかりと握りしめられてゐた。そしていかさま嚏でも堪へてゐるやうな、おかしげなほど昂奮した表情をしてゐた。參吉はつひ昨日のこと、成瀨が、自分は性慾を感じると嚏が出ると云つたことを思ひ出して、おかしくなつたが、しかしその不作法には耐へられない氣がした。『そんなことをしなければ女と遊ぶことが出來ないとは、何と云ふ惡い趣味だ！』と、またしても彼は思はずにゐられなかつた。

「よさして吳れよ……」と、參吉は哀願的な眼を金彌に向けた。

『よし給へよ。僕は君とは最初から張り合ふ氣がないのだから、女は君の自由だが、しかしそんなにヤキモキして不作法なことをして吳れるな」と、參吉はまた成瀨にかうした非難の眼を向けずにゐられなかつた。

「ほんとうだわよ……」と、金彌の眼がこたへた。

參吉はまた、氣が鬱いで來た。所詮美しい終りを見ると云ふことは、最早望みないことである。成瀨は所詮往く處まで往かずには已まないのだ。參吉はたゞ金彌を美しい友達と思つて、つきあつて行きたかつたのである。が斯うなつては何もかも駄目だと彼は思つた。また金彌に對してこれ以上の理解を望むことは無論出來ないことだし、またかの女の境遇としては餘義ないことでもある。しかし兎に角に彼は離れて了はなければならないと思つた。

「哀れなる藝術家よ！　大いに成金の向ふを張るがいゝ。そして、鼬のやうに、ほんとうから愛しもしない女の咽喉首を掻切ることの本能を滿足せしめよ！」

ぼんやりと舞臺に遣つてゐた彼の眼は、斯うした悲憤めいた、また哀憐の氣持から、ぼうつと曇つて來るやうに感じられた。

かすかな、遠慮勝な觸感が、彼の股のあたりにそうつと忍び寄つて來た。彼はそうつと避けた。また寄つて來た。また逃げた。——ビールを飲むふりをして、桃子に煙草に火をつけさせるふりをして、彼は逃げた。五六回繰返された。——女郎蜘蛛との戀愛が直ちに男性の死の悲劇に終るといふ、その微妙な、用心した觸鬚の挑み合ひかのやうに、短い時間のあひだに、彼等は追かけたり逃げたりした。しかし恐らくかの女の方は、餘りに深入りし過ぎたであらう、參吉はかなり棧敷の欄に窮屈に押つけられたやうだから。

「許して呉れよ。プライドを傷つけられたと思ふか知らんが、決してそんな譯ではない、そんな譯ではない……」と、彼は眞實から心のうちに詫びた。

がかの女はすつと起つた。成瀬と參吉との間を離れて、別の桝に席をうつした。彼はかの女の眼をまともに見ることが出來なかつた。

云ひやうのないやうな悲哀と孤獨を感じながら、彼はひとりで出て、暗い觀音の境内を拔けながら宿に歸つて來た。床の中にはいると、絶えて久しぶりな、胸の中から湧いて來るやうな涙が湧いて來た。金廻のこと、彼自身のこと、また斯うしたことで日を送つてゐる申譯無さから——

四

暗いうちに眼が醒めた。十七八年前に亡くなつた母のことを、久しぶりで夢に見た。それがほとんど凌辱にもひとしいやうな行爲を母に働きかけてゐた彼だつたので、參吉は眼がさめて、ぐつしより冷汗を掻いてゐたが、空恐ろしさから、戰慄した。ふだんから、母が夢に現はれた時には、警戒しなければならんと信じてゐる彼は、床の中で心から母に許しを乞ふた。母は、ラヴとか戀愛とか云つてうつゝを拔かしてゐる此頃の自分を、警めたのに違ひないと、彼は信ぜずにゐられなかつた。

がまた、かう暗いうちに眼がさめるやうな時は、乾度彼の持病の喘息の發作の催しかけてゐる時であつた。彼は用意のモルヒネの頓服を一服飮んだ。一時間ばかし經つてまた一服飮んだ。

朝も晝も、ご飯を喰べずに寢てゐた。空は今日もまた鬱陶しく灰色に濁つてゐた。枕元の洗面器で、宿の若い娘が手拭を絞つて呉れた。彼のどんよりと濁つた眼には、見慣れた對うの松山の翠りも、雀や燕の飛び交ふのも、やはり下らなく退屈な思ひを誘つた。軒向うの宿屋では、今日もまたいちんち、下

手なオルガンがブウ〳〵鳴つてゐた。『何枚でも出來たゞけ送れ』と云ふ東京の雜誌社から嚴しい原稿催促の電報が來た。今日は十八日である。彼はかうした齒がゆい自分の胸を、ほんとに掻きむしつて了ひたいと思はずにゐられなかつた。

參吉が東京を出たのは、まだ三月の上旬であつた。彼は遙々と備後の尾道まで、友達を訪ねて行つた。彼等は四五年ぶりで會ふのであつた。彼はそこに二ケ月ほども厄介になつてゐた。この二年ほどの間に父、母、兄、妹、と悉くに死別れた友達は、まだ來て三四ケ月にしかならない十五六も年齡の違ふ若い細君と、大きな家に二人きりで住んでゐた。嫂の實家と遺產問題で裁判沙汰になつてゐて、なか〳〵事が捗取らないので、友達は氣を腐らしてゐた。

「あゝ面到臭い。俺はもう田も屋敷もいらないから、叔父の保管してる株劵の二千圓だけでもよこせば、それでもう綺麗に片附けて了ふ。こんなことでは、ほんとにおれはたまらない……」と、友達は每日のやうに暗い顏して嘆息した。

おゝ、あの忠實な、コマ鼠のやうによく廻る、活潑な、無邪氣な若い細君よ！

參吉は床の中から、濁つた空を眺めて、頓服でおさえた後の割れるやうに痛む頭を兩手でおさえて、かう呼びかけるやうに、友達夫婦のことを想ひ出さずにゐられなかつた。――彼等は既に鄕里を出發したと云ふ途中から出した葉書の通知が、きのふ參吉のところへ著いた。やつぱしあのまだ苦勞を知らない、無邪氣な若い細君をつれて、あの修羅の巷へ、やつぱし出て來たのか！　と參吉は傷ましい氣持でかんがへない譯に行かなかつた。

友達夫婦と參吉とは、毎日のやうに揃つて山へ登つたり、船で島巡りしたりして、日を暮した。食ふに困らず、また問題の片附き次第一切の始末をつけて上京する決心の彼等は、やはり所在無い日を送つてゐるのだつた。參吉もやはりそこでも電報催促の責苦に會つてゐたのだが、氣持に緊りが無く、やはり毎日のやうに彼等のお供をしては、うらゝかな瀨戸海の春に醉うてゐた。

「どうかなあ、やつぱしそんな氣持になれないのかなあ、……銀行か會社へでも出て安穩に暮す――魚がうまいし、酒がうまいし、それで今に子供でも出來たら、文句がないと思ふがなあ。これからまたあの文壇の修羅道へはいつて行く――それも君ひとりだつたらなんだが、若い細君が可哀相だぜ」

「いや、僕もね、これまで幾度かそんな氣になつて見て、銀行や市役所なんかへも勤めて見たんだがね、やつぱし駄目だよ。勤まるもんぢやないよ。それに、僕も兎に角葬るものはそれ／＼葬つて了つたし、これを機會に生活を根本から改めて見たいと思つてゐる。……ほんとうに故鄕と云ふところほど厭なところはない」

二人は毎晩の長い／＼晩酌をやりながら、こんなやうな話をし合つた。

ある朝、十時頃二人は近所の湯屋へ行つた。四五人しかはいつてゐなかつた。近所の料理屋待合の主人と云つたやうな人達が多かつた。が彼等があがつて見ると、棚に入れてあつた參吉の着物から帶からすつかり無くなつてゐた。――これから市場へ廻つて、晩のチリの肴でも仕入れて來ようと思つて持つて來た六五圓はいつた蟇口も。近所の交番から若い氣の好さゝうな巡査も來たが、無論幾日しても品物は出て來なかつた。

「おれの着物を盗るなんて、よつぽどの茶人だね」と、參吉等は笑つた。

參吉は友達の引ずるやうな長い、しかしずつと上等な着物を着込んで、ステツキを持つて、二人はやはり毎日そちこち散歩した。例の若い巡査が交番に出てゐると、退屈な彼等は、

「どうでせう、まだ手がゝりがありませんかね?」と、笑ひながら訊き〱した。

「さあ……」と巡査も笑ひながら、當惑した顏した。

「僕さきに歸つてよう……」と、ある晩だいぶ酒の浸みた時分、突然のやうに參吉は云ひ出した。

「東京でお目にかゝります。いろ〱お世話になりました。……ちつとも怖がることなんかありません。東京の方は却つて暮しいゝですよ。……さよなら」

十一時の夜汽車で、參吉は友達夫婦に送られて、かう云つて若い細君の手を握つて振つた。涙のにじみ出さうな氣持で——

が都會で彼等を待ち受ける筈だつた參吉は、やつぱし都會に堪へられないで、間もなくこの信州の山の中の溫泉場へ逃げ込んで來た。

「やつぱし出て來たか。……どうか善良なる彼等の爲めに幸ひあらしめ給へ」

參吉はぢつと惱ましげな眼つきを灰色の空に向けて、祈るやうに心の中に呟いた。

五

夕方氣持の直つたところで、參吉は机に向つた。今夜は酒をやめて、徹夜でもしなければならないと

思つた。——「彼等はアルプスへ」と、原稿紙へ小說の題を書いた。

「僕あの女を日本アルプスへ引張つて行きたいと思ひます。そして人間未踏の地で奔放な戀を語りたいと思ひます」と、いつか成瀨が云つたことを思ひ出したのだ。

「僕あなたの短篇集を讀んで見ましたがね、非常に奔放な點が缺けてると思ひますね。生活と云ふことは非常に人間の感情を萎縮させますからね、あなたの創作に奔放性が無いと云ふことは、ひとつはあなたが生活に非常に苦勞したと云ふからかも知れませんね。奔放性の無い藝術は、氣の拔けたビール見たいなものですからね。それに一體にあなたの態度は非常に消極的だと思ひますよ。あなたの小說の中で、あなたが友人から五十錢一圓と米代を貰つて來るやうな生活をしてゐたことが書いてありますが、僕だつたらあんな生活は迚も我慢がなりませんね。僕があんな場合になつたらどん〳〵進んで俥でも何でも曳きますね」と、やはり成瀨は彼の創作や態度を批評して云つたことがある。

參吉はさう云はれて、今更のやうにその時分の悲慘だつた生活が思ひ出されて、悲しくなつて口を噤んだが、

「しかし僕も、それは、働く氣ではあつたのですよ。僕これで、ちよつと政治經濟の訪問原稿が得意だつたんですよ。創作の方には自信がありませんが、その方には自信があつたのです。僕一ヶ月二十圓か二十五圓の月給で、毎月六十頁位ゐ書かされたものです。それでも僕は神妙に勤めたものです。それでも一枚二十五錢かそこいらの創作を書くよりは割がいゝですからなあ。創作を始めると氣が立つて來ますからね、酒なぞも澤山飮むです、迚も一枚二十五錢や五十錢に賣れたんでは、晩酌代にもなりませ

ん、書けば書くほど損と云ふことになりますからね、ほんとうは創作は僕には禁物だつたのです。僕元來は遲筆家の方ですがね、しかし書けば書くほど損と云ふんでね、一層遲筆家になつて了つて、しまひには一日に二行三行と云ふことになりました。そしてなるべく自分を昂奮させない方が、それだけ酒代の方で得と云ふことになりますからね。訪問原稿の方だつたら、單なる勞働ですからね、一ヶ月二十圓か二十五圓で六十頁も書かされても、そんなに頭に來ませんからね、そんなに酒代に影響しません。それで僕は大いに勤勉な方だつたんですが、困つたことには僕病氣を持つてゐるんです、それがまた意地わるく、丁度あと三四日で締切り、もう一人か二人訪問すれば濟むと云ふ場合になつて、發作が出て寢込むものですからね、あいつずるいと云ふことになつて、結局どこへ出ても、とう／＼參拾圓級の記者になれずにしまひました。それで創作の方はそんな譯で、書けば書くほど損と云ふんでね、どうも仕方が無い、五十錢一圓と友人からでも貰ひ集めるほか仕樣がなかつたのです。しかし僕のものも、この頃はどうやら賣れるやうになりましたからね、書けば晩酌位ゐは飮めさうですからね、これからは大いに奮發して書くつもりです。それもなるべく長めに／＼と、――つまり馬面のやうな小說を書かうと思つてゐます。馬面だつて、別に不具と云ふ譯ではありませんからね、目鼻だつて揃つてるですからな、唯あまり見よいものでないと云ふだけで、世間だつてそれで通るですからな、僕も大いに差支えないだらうと思つてゐます。それでないと迚も僕等貧乏人はやれきれないですよ。そこへ行くとあなたなんか實に幸福ですよ」と、參吉は一歩々々墮落して行く自分の姿を虛空に描くやうな氣持で、その時から云つた。

彼等は觀音堂の高い境内から、暮れ行く淺間の山脈を眺めてゐたのであつた。おまゐりに來た金彌と桃子は、遠くから參吉に目禮した。成瀨はその時まだ金彌たちを知らなかつた。

「ちよつと樣子のいゝ女ですね。田舍の藝者としては珍らしい方ですよ。顏がいゝから若く見えるやうだが、もう二十六七か知ら？……」と、成瀨は注意深く見て云つた。

「そんなものでせうね。なか〳〵悧巧な女です、僕あの女を一番好いてゐます。手紙なんかも實にうまいものです。僕この間も一寸した文句で泣かされましたよ。僕なんかの生活も心細いものだが、あゝ云つた女の生活なんかも實に氣の毒なものでせうからね。兎に角こゝでは一番の姐さん株でなか〳〵威張つてますがね、借金なんか千圓も背負つてるらしいですよ。それもこゝへ來る前にゐた土地で、ちよつとした義理合ひから深くなつた若い男が、禁治產者見たいなことになつたんで、その男へやつた金らしいですね。なか〳〵いゝ女です」と、參吉は女をほめた。

「さうですか。あなたはなか〳〵懇意なんですね、それでは。あなたはちよつと苦勞人らしいところがあるから、女には好かれる質でせう」

「いやそんなことはありません。僕等はたゞ友達と云ふことになつてゐます。それに僕の氣持としては、あゝ云ふ女と關係すると云ふことが、相手を汚すやうな氣がしましてね、また自分も汚されるやうな氣がしますから、他の男が汚すのをどうすることも出來ませんが、僕は關係したくありません。それに僕は泉屋へだいぶ借金も出來てますから、さう會はないです。あの女は時々手紙を吳れます。昨日もどつさり櫻んぼを屆けて吳れたんで、氣の毒に思つてます。僕等の程度はこれ位ゐのものなんです」

「ほうさうですか。そりやお安くありませんね。あなたもなか／＼隅に置けませんね。ほうさうですか」と、成瀬は感心したやうに大袈裟に繰返した。

「ご案内しませうか？」と、參吉は云つた。

「えどうぞ……」と、成瀬は昂奮した調子で云つた。

二人はすつかり暗くなつた境内から高い石段をおりて、そこの泉屋へはいつて行つた。

その晩は金彌は明かに、成瀬へ桃子を差向けようとつとめてゐた。が成瀬の奪略傾向と破壞性とが、直ちに焦燥に働きかけた。そして一方には「これで君どうかし給へ」と云つた調子で、金彌の前に蟇口を投げ出して、參吉に對して旦那の態度を執つた。參吉の臆病な胸の中はたゞブル／＼慄えてゐた。いつの間にか、成瀬は床柱の前からにじり寄つて來て、長い毛脛の足を金彌の膝に載せたり、頰髯の多い顏をすりつけたりしてゐた。參吉は餘りの不作法さに顏を顰めながらも、まだ明かな非難の態度は見せなかつた。「なあんだ、こんなやり方か……」これまで幾度か他人の細君や處女や商賣女に戀愛をしかけて來たと云ふからには、殊に美術家でもあるとして見れば、多少他人へも美感を與へるやうなやり方ですることかと思つてゐた參吉には、全然の期待はづれに、いくらか呆氣に取られた氣持で、キヨト／＼と落付かない氣持の眼を見張つてゐた。成瀬は酒に醉つたのか、兎に角ひどくそわ／＼し出して、隣りの室へ行つて寢轉んで見たり、金彌のうしろから抱きついたりして、ぢつと坐つてゐることが出來ない樣子であつた。

時間過ぎになつて、成瀬は泊つて行くと云ひ出した。

「あなたも泊つてゐらつしやいな」と、金彌は參吉に云つた。

表二階の暗い座敷へ、座蒲團が二枚づゝ敷き並べられた。二人は並んで横になつたが、金彌は掛蒲團を持つて來ようと云つて出て行つた時、參吉は突然「僕歸らう」と云つてたちあがつた。自分の氣持のうちにやはりある卑しい影がさした氣がしたので、かなり醉つてはゐたが、彼は歸らうと云ふ氣になれたのだ。すると、「ぢや僕も歸らう」と成瀨も云ひ出して、むつくとおきあがつたが、いきなり表通りの障子を開けて、

「僕はこゝからおりる」と、云ひ出した。

「あぶない、あぶない……」と云つて、參吉は引止めにかゝつたが、成瀨は欄を跨いだと思ふと、するりと身輕に、觀音さきの通りの石だゝみの上におりて立つてゐた。

「僕のぼつて見せるよ」と、下から叫んだと思ふと、今度も猿のやうにするりとのぼつた。二三度もその藝當が繰返された。

參吉はその晩のことをかんがへると、ほんとに成瀨と云ふ人間は怖い人間だと思はずにゐられなかつた。

泉屋を出たすぐ前に、鐵板で出來た太鼓橋がある。極度の昂奮狀態におちゐつた成瀨がその響きを立てる橋の上にかゝると、オー〳〵と二三度大きな聲で叫んで跳躍したと思ふと、

「田口君も踊れ！」と云つて參吉の手を引張つて、この間光樂寺に長野から講中の團體が來て盆踊りをおどつた時おぼえた囃しの何チョー、何チョーを連呼しながら、深夜に恐ろしい鐵板の響きを立て

ゝ、踊り狂つたのだ。それから片つぱしから料理屋をたゝきおこし始めた。往來へ出て四つ角の軒下に馬車が置いてあると、

「おれはこれを往來へぶつ倒してやる！　見てろ！」と、かぢ棒に手をかけて、ひき出し始めた。

「君止し給へ！　止し給へつて！　それぱかしは止し給へ！　分署も近いし、それに馬車屋なんてどんな人間が出て來るかも知れないから」

參吉は斯う叫んで、死力を出しておさえにかゝつた。脊丈の高い力の强さうな成瀨の身體と、瘠せこけた參吉の身體とがしばらく往來でもつれ合つた。成瀨の腕にしがみ附いて參吉は往來に倒れて膝頭をひどく擦りむいた。

「よし〳〵、それでは馬車は許してやる。馬車屋の奴！　貴樣の馬車は許してやるぞ！」

今度は成瀨は、參吉の長い髮の毛を引張つて、ぐん〳〵觀音堂の方へ引返して來た。そして境內の黑板傳道と云ふ、立派な欅で出來た揭示板の柱に向つて、わつしよ！　と掛聲して兩手でむかつて行つた。參吉はこゝでもおさえなければならなかつた。五百圓からの寄附金で出來たものだとも云つた。

「なんだ、五百圓ばかしのはした金が何だ！　一體こゝの堂守が生意氣だよ！　黑板傳道？　洒落臭い！　今日出て居つた蛙鳴？　何の意味かい！　あんなことでこの活きた人間に傳道が出來ると思つてゐるとは、奴よつぽどの潜越な奴ぢやよ。よし！　おれがみんな消してやる！　生意氣だ！」

成瀨はかう云つて、背丈の高い身體の手をのばして、片つぱしから白墨で書いた蛙鳴──の文句を消

して了つた。

むかし愚かな蛙どもが清水寺におまいりに行つて、佛さまに、どうか自分等も立つて歩るけるやうにして呉れと無理な願がけをしたが、佛さまはよし〳〵と云つて聽きとゞけて呉れた。ところが、歸る場合になつて、大得意で歩るき出したが、眼玉がうしろになつてしまつたので、どうしても自分等の池へ歸ることが出來ない。だから無理なことを禱つたりするものぢやないと、蛙の繪などかなり雅致のある筆で書いた蛙禱の文句を、成瀨は片つぱしから消しはじめた。

『かうなつて來ると、何か知ら一つ破壞性を滿足させないと、納まりがつかないだらう。しかし何と云ふ變つた男だらう。或は多少色情狂的傾向を帶びてるのかも知れない……』と、今度は參吉も默つて、塞ぎ込んだ氣持で成瀨のすることを見てゐた。

六

——彼等はアルプスへ、と題を書いて、濁つた空を眺めて、成瀨たちが人跡未踏の深山で所謂奔放熱烈な戀をさゝやく光景を空想してゐると、またせか〳〵と中庭をはいつて來る成瀨の足音が聞えたので、參吉はほつとして、空想の絲を斷たれた。成瀨は這入つて來るなり、例のいら〳〵した調子で、

『借金を持つて來ました。僕誰からでもおごられたりすることが實に嫌ひな性分でしてね、殊にあんな女たちからおごられたりすることは厭ですから、今夜はこつちで返してやらうと思ひますから、あなたもつき合つて下さい』と閾際に坐つて云つた。

「さあ　　」と、參吉は氣乘りのしない返辭をした。

「あなたはあの女にふられたんで、すつかり離れてしまひましたね。一體あなたがわるいんです。この前女たちとこゝへ送つて來た晩、あなたが僕をおこつて歸れ〳〵つて呶鳴つたでせう。あの晩からあの女がぐつと僕の方へ來てしまつたんですよ。つまりあなたがふられたんですね。ハヽヽ。一體あの女が僕のどこに惚れたんだか、僕にもまだよくわからないですよ。僕は自分の浮氣だつてことは自分からも云つてあるんだしね」

成瀨は眼鏡越しの眼尻ににや〳〵皺を寄せて、かう云つて參吉の顏色を探るやうに見るので、參吉は眼のやり場に困つた。

「さうです。僕はほんとにあの女からふられましたね。僕は實際悲しんでますよ。併しまた、ふられて歸る果報者つてことも云ひますから、僕はさう思つて諦めるほかありません」と、參吉はほんとに悲しさうな顏して云つた。

參吉は成瀨に歸れ〳〵と云つておこつたと云ふのは、あの光樂寺に地獄めぐりの話をきゝに行つた前の晩のことである。しかしその晩參吉が成瀨をおこつたので、それでその晩から女の心が參吉を離れて、ぐつと成瀨に傾いて行つたとは、參吉にはかんがへられなかつた。參吉はその晩から不作法な相手に女を引渡して、――何しろ相手がわるいや、かう思つて自分は離れてしまはうと思つたのは事實であるが、しかし女の心持が彼を離れたのは、ゆふべ芝居でかの女の挑みを斥けた時からであらねばならないと、參吉は思つてゐた。戀愛主義者なんて云つてゐても、案外神經が粗雜なものだと、その點では參

吉は寧ろ成瀬を憫笑したかつた。が金彌のことを考へると、參吉の心は痛んだ。かの女は乾度、ゆふべのことに腹を立てゝ、一足飛びに成瀬の手の中に飛び込んで行くに違ひない。さうした性質の勝つた女ではある。しかし何と云ふ、簡單な、あゝ云つた種類の女たちの常套的な心理か！　もつと美しくて、複雑な、不離不即な戀愛の彩と云つたやうなものを見せることが出來ないものだらうか？　金彌はいくらかそんな道に長けた女と思つてゐたが、やつぱし駄目か！「何しろ相手がわるいわ」と、參吉は、まだ肉を得ない焦燥さを露骨に現してゐる成瀬の顔に、臆病な視線を投げた。

「兎に角行きませうよ。あなたにさう悄げられると、僕も少し困つたことになりますがね、しかしあの女にあゝ熱烈に出て來られて見ると、行がゝり上僕もどうも仕様がありませんからね。その代り今夜は僕大いにおごりますよ」

「いや、それは、僕も行つてもいゝですがね、しかしあなた方からばかりおごられても濟みませんからね、金がはいると、僕も今夜の分前は出しますよ。それでは行きませう……」

亘もはいつて來た。「僕今往來で呼びかけられて、弱つて了ひましたよ」と云つて、色白の優顔に嬉しげな笑ひを浮べた。亘は月が代ると一本で出る十七の若い妓と惚れ合つてゐて、その日の來るのを指折り數へて待つてゐるのであつた。

「あゝほんとに別所には色男が多いなあ。僕ばかしがつまらないなあ。金彌にはふられるし……」

と、參吉は二人の顔を見くらべて、嘆聲をもらした。

「ほんとに田口君には失敬しましたね。ハヽヽ」と、成瀬は膝を抱いて大きく笑つた。

「ほんとにさうですよ。成瀬さんは人がわるいですよ……」と、亘は參吉に同情した眼付を見せて云つた。

「ほんとに田口さんは氣の毒なんですよ。うちの母や妹なんかも、大いに田口さんには同情してますね。あんなに金彌々々つて云つてたんですからね、あの櫻んぼを貰つた時なんかの悦び方つてありませんでしたよ。そしてちよい／＼手紙の往復でせう、そのお使ひ番はいつも私なんで、ちよつとテレましたね。その癖きまりがわるがつて、私がいくら藝者部屋へつれて行うと云つても、いつも駄目なんですよ。それで、金彌がゆふべ癪でもおこしたなんて聞うものなら、さあ大變です、仕事なんかもうそつち退けです、手紙を書くとか菓子を屆けるとか、いやはや騷ぎなんでしてね、まつたく驚いてしまひましたよ。しかしほんとうのところ、私たちには田口さんの心持がよくわかりませんね。そんなにしてゐて、それで金彌をどうかして了はうなんて心持が、更に無いらしいですからな。その癖金彌も云つてるやうに、田口さんもやはり嫉妬心は持つてるやうですね……」

「隨分持つてますね」と參吉も云つた。

「しかし、嫉妬と云つても、僕のは少し違ふ氣がするんですがね、しかし金彌がさう云ふ風にとつたのなら、それも仕方が無いです。僕はたゞ、あゝ云つた賴りの無い女たちを、僅かばかしの金で以て蹂躙しようと云ふやうな、男の心がけに、反感を持つのです。かの女等にたましいなんか無いときめてゐるやうな失敬な人間を、僕は好まないのです。――成金たちでもやるがいゝ！ あゝ云つた賴りない存在に溫かい同情を持つてことが出來ないやうな藝術家だつたら、それは藝術家でも何でも無い、娑婆の惡黨

です！　僕はそんな人間の藝術を決して信じない」參吉はいつになく青い痩せこけた頬をヒリヽさせて、挑戦的な眼付を成瀨に向けて云つた。

「そんなことがあるもんですか。あんな女たちにたましいも靈魂もありやせんですよ。僕はこれまで隨分あんな女たちには接して來てますが、みんな簡單に金で始末がついてますよ。女はすべて、くろうともしろうとも、打算のほかには何もありませんよ。金にはどんな女だつて、動きますからね。僕は自分の妻の場合だつて、さう云ふ風に見てますがねえ。あなたはこれまでの境遇上あまり遊びをせんやうだから、實際の女ちうものを知らないからそんな風にかんがへるのでせうが、今度の場合だつて、あの女が急に途中から僕の方へ傾いて來たと云ふのも、やはり金の問題、打算の問題に過ぎないと、僕はかんがへてますよ。あなたにはやつぱしあの「女をんな」と云つたやうな夢幻的な女と云ふものしかわからいやうだが、小說家としては大いに修業する必要があると思ひますね。しかし今度のことはあなたにはいゝ經驗だつたでせう？……」と、成瀨は勝誇つた態度で云つた。

「まあさうでしたなあ」と、參吉は悲しさうな顔して云つて、口を噤んだ。

二人は泉屋へ行つて、よそへ出てゐる金彌をビールを飮みながら默り込んで待つてゐたが、

「今晩は、……まあ嬉しいわ」

斯う云つてはいつて來た金彌の憎惡と自棄に燃え立つたやうな眼が、ピリヽと參吉の眼に映つた。

「お前もいつしよだつたの？　お前なんかにはもう用が無いんだよ」金彌の美しい怒りの眼が、かう云つてるやうに見えた。參吉は「決してそんな譯だつたんぢやないんだよ……」と心のうちに辯解しなが

らも、餘りに豫期通りだつたには、今更のやうに悲しい空虚を覺えない譯に行かなかつた。

芝居へ行つてからも、參吉だけが別の桝にひとり淋しく坐つてゐた。前の晩と同じやうに、彼は舞臺の上を眺める興味どころではなく、醉つた我儘な耳には、浪花節のうなり聲や惡ふざけした科白やが、堪へられないものに響いた。彼はそれを紛らす爲めに、不遠慮な聲して、隣りの桝で熱心に舞臺に見恍れてゐる桃子にうるさく話しかけた。

『うるさいぢやありませんの。ちつとも云つてることか聞えやしない』と、成瀨とぴつたり喰附いて坐つてゐた金彌は、かう云つた。――ほざき居るな、と參吉もむつと思つた。

「やつぱし田舍藝者だつたなあ……」

參吉もかう浴せて、すた／＼と出て來た。成瀨は參吉のたつのに氣がつかないかのやうな顏して、やはり舞臺の上に眼をやつてゐた。

七

參吉は無理にも心を仕事の方に向けなければならなかつた。彼はこの頃の梅雨時の氣候にたゝられてゐるのか、或はまた彼の弱過ぎる呼吸器にはこの邊の高原地の荒い空氣が適しないのか、こゝへ來てからは斷えず喘息の兆候に惱まされてゐた。彼は毎朝一度は、嗅煙草をかゞなければならなかつた。その爲めふだんから良くない頭が、一層不快に濁つた。鬱陶しく濁つた灰色の空を眺めてゐると、彼の胸はひとりでに喘ぎ出した。「いつ晴れるだらう？」と、彼は嘆息した、また空でもからりと霽れ渡つた

ら、この頃の厭な氣分も一掃されて、仕事の方に心が集注されさうな氣がした。――彼等はアルプスへ、參吉はその彼等の奔放壯快な戀愛でも空想することに依つて、いくらかでも心の結ぼれを散じたいと思つたが、しかしやつぱし一行も書き出せなかつた。

「彼等はアルプスへ、……やりましたね、今度は僕大いに惡者に書かれる譯でせうが、あなたは案外辛辣な錐を持つてゐるやうだから、ひどく槍玉にあげられることでせうが、しかし構ひませんよ、今度は僕がわるいんだから、あなたの大事な金彌さんを僕が横領したと云ふ譯ですからな、ハヽヽ」

朝夕にせか〳〵とやつて來ては、成瀨はひどくいら〳〵した表情しながらも、參吉の机の上をのぞき込んで、かう豪傑笑ひを響かせた。參吉は成瀨がはいつて來た時の表情をひと目見ると、まだ金彌の肉を得ないことが、直覺された。成瀨が最早金彌をすつかり占領して了つたやうなことをほのめかせばほのめかすほど、云ふことが空虛に聞えて、參吉の心持は彼等から離れて行つた。

「いやそんな譯でもないですがね、僕のこれまでのものは餘りに色彩がないから、さうした奔放な戀愛でも書いたらちつとは張合もあらうかと、たゞ空想に耽つてるだけなんですよ。ほんとに僕は何を書いても張合が無くて、退屈で仕方が無いですよ。それで僕も實は大いに金彌に戀しようと思つたんでしたが、やつぱし僕は駄目ですね。僕はすつかり諦めて了ひましたよ。さうかつて借金があるので自由に飛び出すと云ふ譯には行かず、この先きどうしてこの山の中で退屈な日を送らうかと思ふと、ほんとに厭になりますよ。そこへ行くとあなたなんかアルプスへでもどこへでも金彌をつれても行けるし、ほんとに自由で幸福ですよ」

參吉は題を書いた原稿紙を屑籠にほうり込みながら、暗い顏して云つた。

「さう悄げなさんなよ。あなたにさう悄げられてしまつたんでは、僕もほんとに氣の毒になりますよ。金のことなんか、さうくよ〳〵思はんがいゝですよ。僕月末金か來れば、いくらか提供しますよ。僕それ位ゐのこと負擔する義務はあると思つてますからね。ハヽヽ。金のことだつたら、僕すけますよ」

と、成瀨はまた憫むやうな顏して云つた。

參吉は欝ぎ込んでしまつた。金々々――どうしてこの男はさう云ふか？　金と云ふもので直ちに相手にスタンプを押してしまふと云ふことが、習慣性になつてゐて、謙讓な神經が痲痺して了つてるのだらうと、參吉はまたも考へさゝれたのだ。成瀨はその藝術家らしからぬ優越權を、いかなる場合にも、露骨に使用した。いつしよに飲みに行つた場合にも。またさうでない會話の場合にも。――彼はいつの場合でもいきなり床の間を脊負つて、參吉をお供あしらひにして、女たちにその優越を見せびらかした。金があつて、利かん氣の後家の手に育つたと云ふ成瀨の境遇を想察させるやうな性癖を、成瀨は餘りに多く持過ぎてゐると、參吉は苦々しく思はない譯に行かなかつた。

「いや金のことで僕は悄げてるんぢやありませんよ。僕はもつと〳〵ひどい貧乏ばかしして來てますから、この頃なんかまあいゝ方ですよ。それに僕は、金で心の自由が縛られるなんてことを、餘り恐れない方ですからね。たゞ僕には、かうして一日々々と、すこしも美しい感情の動くやうなことがなく日が經つて行くと云ふことが、淋しいのですよ」

「さう云ふ感情の動くやうなものを求めたらいゝでせう？」

「何に求めますか？」

「やつぱし戀愛ですよ。それもあんな商賣女では駄目ですね。どうしても相手はよその奥さんで無ければなりません。處女は駄目ですよ。それも年齡なら二十五六と云ふところですね。それ位ゐの女になるとひと通りの話は私たちとも出來ますしね、それに性慾にも饑ゑてゐませんからね、ほんとに純な戀愛が出來る譯ですよ」

成瀨はまた都會へ殘して來た經驗談を、昂奮した口調で語つてきかした。

「そんなに離婚騷ぎまでしてかすやうなことをして、それであなたは良心が咎めませんか？」

「いや僕は戀愛は自由だと思つてますから、……夫だとか妻だとか云ふ古い道樂感情に縛られて、自由な戀愛に活きれないと云ふことは、人間の卑屈だと思ひますから、墮落だと思ひますから」

「それは無論愛の無い夫婦生活は破壞すべきでせうが、しかし普通の夫婦生活の間へあなたのやうな熱烈な自由主義者が飛び込んで行つて、兎に角自分よりは教養に於ても年齡に於ても低い女性に向つて、誘惑を試みると云ふその心持――さう云つた男性の心持と云ふものこそ僕には却つて醜くゝて、情けない、ほこりの低い、どうもこの間の地獄めぐりの劍葉林が想ひ出されるやうな氣がされますがね。それにあなたは、よしそれが不完全なものであつたとしても兎に角に他の所有に歸してるものを、わきから出て行つて奪はうと云ふ興味心がだいぶお強いやうに思はれますが、それはどうしたものでせう？」

「いや、そんなことは無いですよ。戀愛は一方のものでありません、相對的なものです。たとへば、

今度の金彌の場合にしたつて、あの女は僕以上の熱度で以て、あなたから離れて僕へ飛び込んで來たんぢやありません。あなたから奪ひ取つたなぞと思はれては、僕いさゝか迷惑しますよ。あなたにはあんな商賣女の心持なんかわからんやうですが、あんな女に眞面目な戀を求めようなんかと思つたのが、そもそもの間違ひだつたんで、あの女はあなたの所謂「雪をんな」ぢやありません、現實の、金の賣買の出來る醜業婦ですよ。……」

「しかし相手が醜業婦だからつて、こちらから眞面目な戀をしかけられないと云ふ理由は無いと思ひますがね。こちらが肉の觀念を離れてかゝれば、相手がどんな種類の女であつても、美しい戀が出來さうな氣がしますがね。かの女等こそ虐げられた、犧牲にされた、哀れな女たちぢやありませんか。それをもてあそぶ氣持を離れて、つき合つて行けないと云ふことは、却つてこちらの恥辱のやうな氣がされてなりません。またあなたが既に金で以てあの女を犯してしまつたとしても、あなたの習慣性の動機は兎に角として、その結果をどこまで純化出來る出來ないかと云ふことこそ、あなたの責任だと思ふから、僕は注意してゐます。僕はその他のあなたは純情で正直な人だと信じてますから、お友達になれさうな氣がしますが、しかし金さへ出せばどんなことしてもいゝと云ふやうな考へ方には同感出來ないですよ。その點で、折角おつきあひしたが、ほんとうのお友達になれさうもないので、僕は悲しく思ひます」

「僕も悲しく思ひます。しかし僕は僕の流儀でこれまで通して來たのですから、金彌の場合にしても、仕方が無かつたのですよ」

「そんならば、なぜあなたは、ほかの女を買つて呉れませんでした？　あの女の心持は兎に角として、僕があの女をほんとから好いてゐると云ふことを、あなたも承知なんぢやありませんか……」

「いや實際のところを白狀すると、僕はすこしあなた方に挑發されたんですよ。どうか許して下さい、あなたへ對しては濟まなかつた。ハヽヽ」

成瀬はかう云つて、長い膝をゆすぶつて、話を打切るやうに哄笑した。しかし參吉にも、成瀬がやはり彼に對して多少良心を動かしてゐることは、感じられた。身體を求めてゐる焦燥と、離れようとする心との爭ひは、感じられた。參吉はむしろ、成瀬が早く身體を得て了つて、その焦燥から放たれて呉れゝばいゝと思つた。

「僕この頃がん〳〵耳が鳴つて仕樣が無いですよ。夜なんかちつとも睡れないですよ。かう生活がだらけて了つては、僕何にも出來ません。僕この半月ほどはまるで繪筆を持ちません。こんなんでは迚もやれ切れないから、どこかもつと山の中で、酒も女も無いやうなところへ逃げ込うか知ら。僕酒と女に近づくと、いつでもこれです、ぢき生活が崩れてしまひます」

成瀬はかう云つて嘆息をもらすこともあつた。

「さうです、はやくスタンプを押すなら押してしまつて、引あげた方がいゝかも知れない……」

成瀬の暗いいら〳〵した顔を見て、參吉もさう思つたが、口へは出さなかつた。

八

『やつぱし、彼等はアルプスへ——ですか。だいぶその題に執着するぢやありませんか』

やつぱし成瀬は同じやうな様子してやつて來ては、机の上をのぞき込んでから云つた。それで參吉も弱つて、原稿を白くしてしまつた。非常な猛者だと自稱してゐるにかゝはらず、この頃の成瀬の焦燥ぶりには、參吉にも心から同情された。で一日も早く成瀬がその妄執を晴らして呉れて、お互ひにかうした雰圍氣から遁れ出ようではないか——參吉はかう願はずにゐられなかつた。成瀬は毎晩のやうに金彌に會つて居るらしいのだが、金彌がまだ許してないと云ふことは、成瀬の様子で察しられた。

『僕もあの女をやつぱし最初は二十六七と見ましたがね、案外その方が荒んでゐないやうだから、あいつの云ふやうに、酉年の二十三と云ふのがほんとうかも知れませんね』

成瀬はこの頃憔悴の目立つた顔ににや／＼得意げな笑ひを見せて、その荒んでないと云ふ言葉に特別な意味を匂はせて、云つたりした。いつかあの芝居で喧嘩して歸つた翌晩、金彌から參吉にお詫びの電話がかゝつて來た。亘が出て、『田口さんはちつともおこつてやしないが、僕はおこつてる』かう金彌に云つた。その晩も成瀬は丁度來合せてゐたが、そんなことを聞くとぢつと坐つて話してることが出來ず、すぐせか／＼と泉屋へ走つた。

『成瀬君あれではほんとに氣の毒です。たまらないでせう。僕あんな人ぢやないと思つた。……でね、亘さん、あなた金彌に會つたらさう云つて呉れませんか。僕のことはちつとも氣の毒でもないし、またおこつてもゐない、それよりも仕事が大事だ。だから成瀬君とどんなことがあつたかつて、僕やはり金ちやんを好いてるんだから、ちつとも構はないつて……』

參吉は亘に傳へさせた。

「金彌のやつどうしたんかひどくブッ／＼しておこつてましたよ。……田口さんは人がわるいからもう厭だつて。そして、みんなが寄つてたかつてさうあたしを馬鹿にするんだつたら、覺悟があるからいゝつて云ひましたよ。ほんとにあなたは氣が弱いから、たしかに成瀨さんに取られたやうですね。そしてあいつ、僕のことを、あなたも獨探だから厭だつて云ひましたよ」と、亘は歸つて來て苦笑して云つた。

「そんなことと云ひましたか」と參吉も苦笑して云つた。

三人はまた參吉の室に落合つた。參吉は手入れを怠つた蓬々と延びた髮をして、頤髯などきたならしく生へて、一層貧相になつて見えた。成瀨もさうである。亘だけはこの頃特にポマードだとか顏の脂を拭き取る紙だとか云つたものを買ひ集めて念入りに磨いてゐる、テカ／＼した顏してゐた。

「あなた一つどうです？」と、參吉は晩酌の盃を成瀨にさした。

「いや、今夜は僕よします。僕ちよつとでも飮むと、すぐ女のところに走りたくなるから、身體がたまらない……」成瀨はかう云つて盃をしりぞけた。

參吉は傷ましい眼付に成瀨を見やつて、獨酌の盃をなめながら、陰氣な顏して二人の女話に耳を傾けてゐた。

遠鳴りにゴロ／＼やつてゐた雷鳴りが、ピカッ／＼と光つて、近寄つて來た。

「やあ、とう／＼來た、來た！　これで入梅があける。嬉しいなあ！」

これで何もかも一掃される！　參吉はかう思つて、ざあ〳〵降つてゐる暗い外を眺めて、雷鳴りを迎へるやうに眼を輝かしながら、盃の手を休めて云つた。長い〳〵間欝積して來た不快な氣雰を劈くやうに閃いて來るいなびかり、樹木の乏しい四方の高い岩山への壯快な反響――三人は多少意味が違つてても、それ〳〵に快よい昂奮を感じて、聽き入つた。

顔を寄せてゐた成瀨と亘の眼鏡の面に、ピカリと鋭い閃光が傳はつた。二人はハッとして呼吸を呑んだ。グワラグワラッと、たしかに近くの山に落ちたと思はれるやうな、激しい音がした。

「雷獸！」

參吉はかう思はず心の中に叫んで、成瀨の顔を見直した。

雨がやんだ。成瀨も珍らしく眞地目な昂奮を現はした顔して、歸つて行つた。

「今夜も泉屋へ寄るでせうか？」

「いや、今夜は寄りますまい……？」

「さうでせうね、……今夜は寄りますまい」と、亘も成瀨の表情からさう解した。

が翌晩になると、成瀨はまたせか〳〵した樣子してやつて來た。二人は最早金彌のことについて口をきゝ合ふやうな氣分でなくなつてゐた。

「やあ、これは驚いた。今度はまた雷獸――ですかね。一層猛烈に出ましたなあ」と、成瀨は目早く見つけて、苦笑した。

「いや、さう云ふ譯ではないですがね、僕どうしても今度は書けないで、弱つてしまつたです。この

通り毎日の電報なんですがね、どうしても書けないので、しかし兎に角今度はどんな十枚のものでも書いて責めをふさがなければならぬことになつて居るので、どうか許して下さい』と、參吉は云つて心から詫びた。

『やつぱしこんな生活をしてゐたんでは仕事なんか駄目ですね。僕も、もうあの女から逃げ出したくなりましたよ』

成瀨は異地目な調子でかう云つたが、參吉の膳の上の瓶詰の海丹や鰹の鹽辛や青竹の籠にはいつた鯵の干物など眼に入ると、

『…それ、東京から送つて來たんですか？』と、異樣に眼をかゝやかして云つた。

『さうです……』と、參吉はきまりわるげに顏を赤らめて云つた。

『いつ？』

『今朝……』と、參吉は同じ調子でこたへた。

實は今朝、着く早々、まだ金彌の寢てるところへ、同じこれだけのものを、屆けてやつた。櫻んぼを貰つた時に約束したのである。參吉は貧乏な弟のところへ手紙をやつて、うそを云つて、世話になつた人へ贈るのだからと云つて、送らしたのである。――先夜は失禮。ご機嫌いかゞ。僕は仕事が出來なくて閉口してゐます。お約束でしたから、つまらないんですが、お屆けします。いづれまた。金彌さま。田口。――斯う云つた手紙を附けて屆けてやつたのである。するとすぐまた金彌からも使ひが來て、

『これを姐さんから』と云つて、貝の干物を屆けてよこした。

成瀬は參吉の耻かしげな、申譯の無さゝうな表情から、不確かながらも、事實を感知した。成瀬の顏にはある決心の色が、はつきりと浮んだ。そしてひどく昂奮した樣子して出て行つた。參吉にも今夜の結果が、はつきりと感知された。參吉等の贈答の事實が確かめられた時の、成瀬の態度も想像するにむづかしいことではなかつた。しかし參吉は最早成瀬の蹂躪主義を非難するやうな氣分ではなかつた。成瀬が氣の毒だつた。成瀬の焦燥が滿されることを、參吉は心から願つた。

參吉はまた、まだ最初のうちのことだつたが、成瀬と二人でかの女等をよんだある晚の時のことを思ひ出した。桃子と二人でやつて來たが、金彌は枝のまゝの茱萸を持つて來た。

「ひとつあなた召しあがれ」斯う云つて金彌は成瀬へ突きつけるやうにした。

「姐さんおよしなさいよ。澁くてたべられやしないぢやないの」と桃子は袖をひいたが、

「いゝわよ。たべられますわよ。……それご覽なさい」

「あッ澁い！　こいつあ澁い！」

成瀬は一つ口に入れたが、かう叫んで顏中を顰めた。金彌の媚を含んだ美しい眼が、意味ありげに二人の男の顏の上に投げかけられた。成瀬はテレた、傷つけられたやうな顏して、ぐつと盃を飲みほした。

「この酒は實際あまいね」と、テレ隱しのやうに云つた。

「さうぢやないのよ。お酒があまいんぢやないわよ。お口が澁いのよ」金彌は斯う云つて、例の金屬性なよく響く笑ひ聲を立てた。

參吉はその時、なるほど、かうした種類の女が、男の心を捉へて行く術と云ふもの丶片鱗を目のあたり見た氣がして、感心した。

その時分からである、成瀬の金彌に對する心持がグッと强められて行つた。成瀬は明かに櫻んぼを攫つた參吉を壓倒しようと云ふ氣込みを示しはじめたのだ。

「お丶、罪深き櫻んぼよ、そして鹽辛よ！」

じかし考へて見れば、櫻んぼにも鹽辛にも罪があり得よう筈がない。しかしまた考へて見れば、すべて戀愛と言ふものは櫻んぼに始つて鹽辛に終ると云つたやうなものかも知れないな——と、戀愛に經驗の乏しい參吉は、暗い空を眺めて、獨酌の盃をなめて、斯う悟り顏して呟いたが、また成瀬の澁い茱萸に始つた戀が、あべこべに甘い蜂蜜のやうな幸福をもたらすやうにと、悲しく諦めた氣持で、祈るやうに思はずにゐられなかつた。

九

參吉は翌晩、村の髪結の娘で、自前で出てゐる二十二になる鞠子と云ふ女を宿によんで、酒を飮んでゐるところへ、また成瀬がやつて來た。參吉の豫期通りに、思ひを遂げた、焦燥の除かれた顏してやつて來た。參吉にはその場所が、果して光樂寺の書院であつたか、それとも例の泉屋の坐蒲團の寢床であつたかゞ、多少の興味をそゝられたに過ぎなかつた。成瀬の得意げな顏に、參吉はたゞ、單なる性交の汚ならしさを聯想させられた。

「いかゞでしたか？」と、參吉は興味の無い調子で訊いた。
「いや別に、……やつぱしあの女、二十三位ゐかも知れませんね。……案外荒んでゐませんものね」
と、にや〳〵した顏して云つて、
「今度は君鞠子ですかね？」と、異樣に眼をかゞやかして云つた。
參吉は不快な色を浮べた。
「え、僕どうも酒を飲むと淋しくていかんもんだから、これからは晝は大いに勉强して、夜は女でもよんで酒を飲むつもりです。夜は退屈で仕方が無いのですもの。今度は鞠子が僕のお酌になるつもりです。この人案外無邪氣でいゝですよ』
「さうですか。しかしあなた大いに用心せんといけませんよ。僕どうも一人の女に長く關係して居れん性質ですから。……ねえ鞠子、厭か？　君は大いに浮氣者だちう評判だが……」成瀨はかう云つて、例の調子で鞠子の手を握つた。
「結構ですわ。しかしあたし、誰かさんのやうには浮氣ぢやないことよ、かう見えても。守るところはちやあんと守つてますからね、ハヽヽだ」鞠子は無邪氣な笑ひ聲を立てた。
「誰かさんとは一體誰のこと？　金彌のことかい？」
「知りませんわよ」
「……君大いに田口さんに惚れてるな。田口さんは案外色男だからなあ」
「そんなぢやありませんわねえ？　こちらはそんなこと嫌ひだつて云つてますわ」

「わかるもんですか。今度は田口さん大いに金彌にふられたんで、そんな悟つたやうなこと云つてるんだが、わかるもんですか」
「隨分ね。あたしこちらへ同情しますわ」
「そら見ろ。大いに惚れてるぢやないか。」
「いゝわよう！ 惚れてたつていゝことよ。ねえ……」
「よし〳〵、今におれがまたどうかしてやるから……」
成瀨は滿更の冗談でもないやうな調子で云つて、出て行つた。參吉は苦々しげに默り込んでゐた。
彼等はアルプスへ——も、雷獸——も撤回してしまつて、參吉は大急ぎで別の短いものを書いて、雜誌社へ送つた。そして金に迫られ、日限に追はれてすぐまた書き出さねばならぬ仕事のことを考へながら、いくらか緊張し出した氣持で彼は二三日ひとりで野山を散步し廻つた。晝は遮二無二仕事にかゝり、夜は酒にでも沒頭して、倦怠やつまらなさを感じるすきの無いやうな生活をするほか、心の持方が無い氣がした。成瀨もその報告に來た晩以來、ピタリと遠ざかつてしまつた。
ある日も參吉は、長い髮して、延びた髯して、膝の短いステッキを振りながら、宿の貸浴衣を着て、夕方の散步から歸つて來た。向うから金彌が、ホテルからの歸りらしく、村の軒並に流れてゐる川に沿ふて、軒下を傳ふやうにして步るいて來た。五六軒離れたところで、二人の久しぶりの顏が見合つた。
「まあ！……」金彌は思はずかうした笑顏をして笑ひかけようとしたが、すぐと顏をうつむけて、スタスタと空氣草履の足を小刻みに急いだ。——丁度すれちがふ時に、そこの川緣に生へた桐の葉陰に顏を避けようと距離を計つて急いだかのやうに。參吉は云ひやうのない憐憫を感じて、顏をそむけた。そして成瀨に對して新らしく憤怒をたゝられずにゐられなかつた。醜業婦とは何だ！ 參吉は心の中に涙を持つて、かう云つて成瀨を罵つた。

參吉が金彌にふられたと云ふ噂さが、狹い村の女たちの間に傳はつた。

「金彌さんもひどいわねえ。一體あなたの方が先きだつたのに、あとから來た、しかもあなたのお友達になんするなんて、隨分だと思ふわ。……金彌さんはもうあなたのお坐敷へは出ないとか云つてるさうですよ」鞠子はかう云つて參吉に同情した。

「仕方がないやね、この道ばかりはまた別物だらうなあ。僕は今だつて金彌さんを好いてるさ。ちつとも腹なんか立てゝゐやしない。唯僕は、苟も成瀬さんともあらうものが、そんな失敬な態度で、なんしてることに、腹を立てゝるだけなんだよ」參吉は淋しさうな顏して云つた。

參吉は仕事に精を出した。そして、夜はもう十二時過ぎまでも飮んだ。毎晩のやうに鞠子がよばれて、醉倒れた參吉を寢床の中に寢かして歸つた。ある晩は、參吉が寢つくまで床の中にはいつて行つたりした。參吉は無邪氣な可愛い女だと思つた。

「ゆふべは鞠子も寢て行つたやうですね」と、亘はにこ〳〵した、しかし探るやうな眼付して訊いた。

「え、寢て行きました。しかし、……露は尾花と寢たと云ふ、尾花は露と寢ぬと云ふ、さう云つた程度なんですよ。……あの子、僕ある點で不能なんで、僕のことを厭だつて云つてますよ。鞠子に會つたら訊いてご覽なさい……」

「さうですか。不能なんですか。僕どうも少し腑に落ちないところがあると思つたら、あなたは不能なんでしたか、これは驚きました……」

參吉の不能者だと云ふことが、女たちの間におかしく取沙汰された。參吉は苦笑しながらも、それを是認しなければならなかつた。

「とう〳〵ゆふべ成功しました。熱烈なものですなあ。僕あまり向うが眞劍なんで、良心が咎めるですよ。處女の戀は、あゝ云つた種類の女の場合にしても、やはり違ひますね。どんなことはあつても、

他に浮氣はしないと、女は泣いて誓ひましたよ。それだけに僕も大いに責任を感じてゐます。僕はどこまでも眞實を以て愛して行うと思つてます。僕はこれで成瀬さん主義ではありませんからね』

ある日亘は、その優しげな眼を一層細めて、かれ等の相思の情が遂げられたことを、參吉に報告して聞かした。

「それは結構でした。あなた方のやうな戀だと、はたで見てゐても、美しい感じを與へますね。はたで見てゐて、醜くゝ見えたり、反感をおこさせたりするやうな戀だと、僕はほんとの戀で無いやうな氣がしますね。あなた方の場合はたいへん上出來でした。そこへ行くと、成瀬君も、資格は眞打なんでせうけど、藝は前座藝見たいな氣がしますね。あなたの方は藝がよつぽどうわ手のやうだ」參吉はかう云つて賞めそやした。

四五日して、亘は彼の戀人の小蝶を參吉に紹介しようと云ふので、三嶋屋へつれて行つた。下ぶくれの、うるんだ眼した、東京の山の手でお屋敷奉公をしたことがあると云ふので、「さう遊ばせ」なんて云つた調子をまじへる、小柄な可愛い子である。鞠子が來られなかつた。座敷がさびしいと云ふので、金彌がよばれた。あとから鞠子も來た。

「久しぶりでしたね。これでは成瀬君を呼びにやりませう」と、參吉は云つた。

「いゝことよ。あたしたち丈けで騒ぎませうよ」

金彌はかう云つたが、結局使ひがやられた。寺ではみんな寢しづまつてゐて駄目だと云つて歸つて來た

「ぢやあ、あたしたちで行つて來ますわ。鞠ちやんもどうぞね……」

金彌はかう云つて、鞠子をつれて出て行つて、もう睡つてゐた成瀬をおこしてつれて來た。成瀬が來ると、金彌の態度がガラリと變つてしまつた。そして例に依つて床柱に寄かゝつた成瀬が寒いと云ひ出すと、金彌は自分の絽縮緬の羽織を脱いで、着せてやつた。そして色男然とおさまつた顏して、赤い顏

してまぶしさうにまたゝいてゐる參吉を、ひどく見くだしたやうな眼付で視た。參吉は屈辱と厭惡に胸をドキつかせて、黙ぎ込んでしまつた。そして成瀬は二三杯もビールを飮むと、羽織を着たなりで、金彌の手をひいて、『あしたの晩でもゆつくり飮み直しませう』と云つて、出て行つた。

十

僕はこれまで、數知れない女と關係して來た。さうして、僕は、さう云ふ商賣の女と關係することが、自分の靈魂をけがす事ではあつても、相手の女の靈魂を蹂躙する事だとは氣附いてゐなかつた。氣附いてはゐても、その罪惡を痛感しては居なかつた。

ところが、今度の金彌の場合は、少し勝手がちがふやうです。僕は、最初あの女を、たゞ金で操を賣る普通の藝者だ、と思つてゐた。僕は、そのつもりで、あの女と關係した。

すると、何うでせう。僕は、昨夜、あの女から、頭をどかんと擲られたやうな心地がしたのです。同時に、自分が飛んだ罪惡を犯しつゝある事に氣附いたのです。

僕はもうあの女を弄べなくなつた。

兄が僕を責めたのも、やはりこの事だらう、と思ふ。僕は、今、心から兄に感謝します。無論、僕の心はさう單純でない。僕を現在の僕にするまでには種々の事情があつた。その徑路については、いづれゆつくりとお話して、聽いて頂きたいと思つてゐます。

僕は兄から立派な人間に見られよう、と思つて、この手紙を書いたのぢやない。しかし、何だか、云はずには居られないやうな心地がしたので書いたのです。

僕の前には、たゞ一つの道がある。それは、放縱な藝術生活をやめて、民衆の爲めに働くことです。

酒と女とに接近すると、僕はすぐ、これまでの放縦な習慣に負けてしまふ。僕は、だから、何か、際の無い一生懸命の仕事に自分の全力を捧げたい。

これからも、お氣附きの事があつたら、御忠告を願ひます。どうぞ、正面から云つて下さい。

七月十一日　　成瀬道夫

田口參吉兄

かう云つた手紙を光榮寺の小僧が持つて來た。參吉は西日の射す暑い室で、肌脱ぎになつて、ほんとに顏に脂汗を流して、机に向つて、進みの遲いペンを動かしてゐた時であつた。參吉もこの手紙を讀んで、頭をどかんと擲られたやうな氣がした。美しい感謝の念から、彼は心の中に涙を感じた。また成瀬の心をそこまでに到らしめた金彌を、讃美せずにゐられなかつた。

——

御手紙を感謝します。さうあなたから云はれると、ほんとに僕は恐縮せずにゐられません。しかし正直を云ふと、やはり僕はさう信じてゐます。さうならねばならないと、僕は人間として、また藝術家として、どこまでも信じて行きたいのです。さう云ふ意味から、僕を痴愚だと云はれても、僕は恥辱だと思ひたくありません。

僕に取つては、あの女たちは、すべて、美しい夢の中の女たちです。やはり「雪をんな」なのです。しかしたとへ「雪をんな」にしてもが、僕はその基調を、やはりほんとの人間、ほんとの靈魂の上に置きたいと、かんがへて居るのです。まして、僕に取つては、妻、母、姉妹、娘、それらはどうして直接の生命そのもので無い筈がありませう！　僕はいつの時だつて、かの女等を涙無しには想ひ浮べることが出來ません！　かの女等に幸福あれよ！　娑婆の惡黨を避けよ！　神の愛を信ぜよ！　私はどうしてさう祈らずに居られるでせうか？　だもんだから、今までのあなたのやうな戀愛態度は、絶對の罪惡

だと信じて居るのです。呪はれてあれよ！　私はかう、あなたの人間そのものではなく、あなたのその態度を、ほんとに幾度心の中に繰返したことでせうか。私はあなたを、純情な、正直な人だと、信じてゐます。だから、私はその態度さへあなたが改めて呉れゝば、私はほんとうに心からお友達として握手出來ると思つてゐます。どうかこれまでの私の生意氣な態度を許して下さい。そして友達になつて下さい。男でも、女でも、またあゝ云つた種類の女に對しても、心の友達として求めようとして、求め得られない時の淋しさと云ふものを、敏感なあなたが、これまでの生涯に經驗なさらなかつたとは、私には信じられないことです。どうか哀れな金彌を慰めてやつて下さい。かの女等こそ、ほんとに泣いてるぢやありませんか！　それがあなたにお解りにならない筈が無いと思ひます。それがもしわからないやうな藝術家だつたら、私はそんな人間の藝術を、決して信じようとは思ひません。私は繰返して云ひます、そんなものは藝術家でも何でもない、娑婆の惡黨です！　成金どもの尻でもしやぶるがいゝ！

どうか金彌へもよろしく云つて下さい。僕は今、厭な仕事でまゐつてゐるところです。夕方お訪ねしたいと思ひます。

田口參吉

成瀬道夫様

十一

その夕方、參吉は成瀬につれられて、金彌たちの部屋を訪ねた。金彌は昨晩癪をおこしたと云つて、青い顏して額を冷やさせながら寢てゐた。

「それはいけませんね。實は今夜は久しぶりで成瀬さんと、大いに氣持よく飲うと思つてやつて來たんだが、それでは座敷へは出られないでせう」と、參吉は氣の毒さうに金彌のやつれた顏を見て云つた。

「いゝえ、なんでもないのよ。いつものことなんですもの、ねえ喜いちやん……」

金彌はかう云つて、小さな子に菓子やらお茶やら運ばせて、二人をもてなした。

「僕しかしね、田口さんを頼んでやつて來たんぢやないよ……」

成瀨は妙にテレたやうな顏して、寢そべりながら、云ひわけがましく、かう繰返した。金彌はそれにはこたへなかつたが、參吉は二人の間に昨晚何事かゞあつたのに違ひないと思つて、二人の顏を見較べた。そして先刻の成瀨の手紙に、違つた意味の興味をおこさない譯に行かなかつた。

座敷へは鞠子もよばれた。

「金ちやん、僕この頃はね、鞠子をお酌に頼んでるんだがね、お座敷でなぞいぢめちやいけませんよ。そんなことでもあると、僕成瀨さんに云ひつけて、あなたを叱らせますからね」と、參吉は笑ひながら云つた。

「なんでいぢめたりなんかするもんですかね、あたしが。それにどうしまして〳〵、鞠ちやんと來てはそれこそケレンスキーの方なんですからね、あたしなんか迚も敵ひやしないんですよ。……あたしみんな聞きましたわ、隨分お安くないんでしてね、結構ですわ。ほんとに鞠ちやんののろけ方と來ては、ほんとに明けつぱなしなんで、恐れ入つちまひますわ」

「厭よう！　姐さんひやかしちや。……ほんとにこちらは人がおわるいんだから、ご自分から出來ないとか不能だとか云ひふらして了ふんですからね、ほんとに世話無しだわ。……へ、ゝ、ンだ、姐さんの方こそ……」鞠子はかう云つて、金彌の膝をづねる眞似をした。

成瀨は最初のうちは悄げてゐたが、酒が廻つて來ると、例の調子が出て來て、昨晚のいきさつのことが、だん〳〵參吉にも分つて來た。

「田口さん、金彌は大いにあなたに惚れてますよ。僕なんかへはちつとも惚れちやゐませんよ。ゆふ

べは先生すつかりおこつちまやがつて、どうせあたしなんか醜業婦だから、惚れてるあなたへ乘替へて見せるつて云ひましたよ。男ぶりだつて僕とは段違ひだなんて云やがつたですよ。アハヽヽ」成瀨はかう云つて、坐つてる參吉の尻をピシヤ〳〵叩いた。

「いや、それはあなたが、醜業婦だなんて云つたからでせう。僕に惚れるなんて、そんなこと嘘ですよ。……金ちやんもいけませんねえ、そんなこと云つて成瀨さんをいぢめては？」と參吉は、金彌にちよつと非難の眼を向けた。

ゆふべは、泉屋へ、金彌と前から關係のある若い男が來てゐた。その男は近在の百姓の息子で、金彌の色男などにはなれさうにもないやうな男なんだが、金彌が金に困つた時に、五拾とか百とか云ふ纏つた金を無條件で呉れたと云ふので、その氣前に動かされて關係が出來たのだと云ふやうな話を、參吉は亘に聞いてゐた。その男と成瀨がカチ合つたのだ。そんな譯で、成瀨がおこつて、金彌がとめるのを振り切つて、十一時頃に歸つたと云ふのである。

「しかし兎に角、今夜は僕大いに嬉しいですよ。あなたのお手紙には僕ほんとに感謝してます。僕はあなたがそれさへなんだと、僕はほんとに友達になりたいです。……握手しませう！」

「しませう！」

二人はかう云つて、堅く手を握り合つた。

更に若いのが二人よばれて、踊らしたり彈かしたりして、大騷ぎをやつた。成瀨も參吉に遠慮して、餘りひどいふざけ方はしなかつた。

その晩一時過ぎ頃に、心配して迎ひに出た亘が、暗い往來の中で、成瀨が非常な權幕で、「俺はもうお前見たいな女は厭だ！　もう厭だつたら！　田口さんとこへ行け！　田口さんとこへ行け！」斯う叫んで、金彌を叩きつけるやうにして、參吉へ押つけてゐる三人に出會つた。參吉はどうしていゝかわか

らないと云つた悲しさうな顔して、しよんぼり突立つてゐた。

成瀨はかう叫び續けて、往來の上へ仰向けにぶつ倒れて、足をばた〳〵させた。……

「厭だ！　厭だ！　俺はもう厭だ！」

一週間ほど過ぎた。その晩から、參吉の心持はぐつと成瀨の方に加はつて行つた。同性としての同情と云つた氣持である。參吉はいつか、金彌に向つて「成瀨さんをいつまでも引止めて置きたいと思ふなら、ちつとは僕にも色目ぐらゐは見せた方がいゝですぜ。でもないと、あの人は自分でも鼬主義（いたちしゆぎ）だと云つてるくらゐだから、すぐ離れて行つちまふよ。僕にそんな素振りでも見せると、あんなやうな人だから、決してよう離れはしない、あべこべに飛び込んで行くよ」斯う冗談に云つたことがある。そんな態度を金彌はほのめかし始めてゐるやうである。參吉は成瀨の手紙を別な意味からも考へて見ねばならなかつた。

『さうだ、彼が金彌を弄べなくなつたと云つた。それは無論眞實の感情からに違ひないだらう。がそればかしからだらうか？　或はまた、その喧嘩のあつた晩、ほんとに金彌がおこつて、絶交を申込んだのではないだらうか。それをあんな負惜みの強い性格の人だから、手紙であんな風に云つて來たのではないだらうか？　今まで彼の接して來た女と較べて、金彌の方はちつとばかし骨が硬い――と云つた程度に解釋するのが正しんではあるまいか？」

斯う云つた氣持である。しかし兎に角、かの女等の所謂商賣氣七分、眞實三分と云つたやうな手練手管の網に捲き込まれて行く同性の、劍葉林中の同性を、參吉はいたましい氣持で考へない譯に行かなかつた。

ある晩の參吉は鞠子をよんで酒を飲んでゐると、懇意にしてる軍醫あがりの若い醫者が遊びに來て、そんな話に花が咲いた。

「一體あなたはいつ頃から禁慾生活をしてるんですか？」と醫者は參吉に訊いた。

「一年ばかしになります」

「よくあなたのやうなお酒飲みが、間違ひをおこさずに濟みますね、かうした別嬪さんをしよつちう引つけて置いてゞすね。細君への貞操ですか、それとも何か心願でもあつてゞすか？」醫者は眞面目な調子で訊いた。

「いや、そんな譯でも無いですが……」と、參吉は顏を赤らめて口ごもつた。

「いゝえ、先生、こちらは駄目なんですのよ。不能なんですとさ。だもんだから、今に先生に注射して貰つてから〳〵と云つてるんですのよ。そりや憎らしいんですのよ」鞠子はかう例のはき〳〵した調子で云つた。

「ハヽヽさうですか。それならばほんとに治療も出來ますよ」

親切な醫者は、どこにこれだけの酒量を持つてゐるかと云つたやうな參吉の青白い瘠せこけた顏をのぞいて、治療をすゝめた。

「いや、今のところその必要も感じませんがね、しかし實際に不能であるかないかは、僕にもわからないのですよ。實は、僕、變な話ですが、一年ほど前に、ある漁師町で、大酒を飲んで、六十近い非常な婆さんと一寸間違ひをしたことがあるです。僕は今でもそのことを想ひ出すと、性慾と云ふことの淺ましさ、汚ならしさに、ほんとに冷汗が出ます。それ以來僕は一切女に關係しません。そのことが想ひ

出されて、關係することが出來ないのです。そんな氣がすぐ消えてしまひます。そんなことから、或はほんとうに不能になつて居るかも知れないと思ひます」と參吉は眞面目な調子で云つた。

「ほう、そんなことですか？」と、醫者は半信半疑の顏で、首をかしげた。

「あゝ厭だ〳〵、あたしももう厭だわ、田口さんが。あんな眞面目な顏して、……あゝいや〳〵、あたしもうこれからは田口さんを寢かしつけてなんか行かないわ」鞠子は悄げた顏して云つた。

「ハヽヽ、田口さんすつかり別嬪さんに嫌はれちまひましたね。あんたがいけないんですよ、餘り色氣の無い話をしちや、若い別嬪さんなんか嫌がるですよ。ハヽヽ」と、醫者は太つた身體をゆすつて笑つた。

「あゝあたしもいや〳〵、金ちやんにはふられるし、まあちやんにはふられるし、もう〳〵あたしもいや〳〵……」

參吉もかう云つて笑つた。がやはり鞠子をよび續けた。

亘の美しい戀にも、罅がはいつた。亘はすつかり悄げてしまつた。まだ二十日と經たないのに、小蝶がほかにも男をこしらへたと云ふ噂さが立つて、どうやら事實らしいのである。東京では活動の手引きでもやつてゐたらしく、處女どころではないと云つたやうな事實までも分つて來て、これまで村の藝者なんかには關係しないと云つた、社交界の花形を以て許されてゐた誇りを、滅茶苦茶に傷つけられたのを、亘は口惜しがつた。

「あゝ厭だ〳〵。色戀はもう厭だ。僕ももうほんとにあの女から遠ざかります」

亘は役場から歸つて來ると、かう嘆息しながらも、そわ〳〵と出て行つては、そちこちの料理屋で小

蝶の朋輩などよんで、飲めない口にビールをあほつて、鬱憤を晴らしてゐた。

「それにしても、いかになんでも、餘りに早過ぎますね。そんな性質の女なんでせうよ。しかしまあまあ、さう悲觀しなさんなよ。兎に角にあなたは先鞭をつけた譯なんだから、僕なんかのことを考へてご覧なさい……」

參吉は亘に同情した。

十二

參吉は兎に角、日々が幸福だと思つた。空はカラリと霽れあがつてしまつた。病氣の發作も出て來ない。青山と白雲とに對して居れば、心おのづから別所に在り——と云つた趣きを感じたりして、晝間は仕事に、夜は鞠子をよんで酒を飲んだ。夕方亘といつしよにする散歩も、樂みであつた。

二晩鞠子が來なかつた。鞠子の異味な旦那で、製絲工場の持主が、やはり二ケ月目位ゐに出て來て、村の藝者の買占めをやつて、豪遊をきめ込んでゐるのである。參吉がひとりで散歩の歸りに、ホテルの廊下の籐椅子に腰かけた五十格恰の、デップリと太つた、口髭を生やしたその旦那のそばに、浴衣姿の鞠子が立つてこちらを眺めてゐるのに會つた。參吉は正面を向いて、さつさと足を早めて來たが、だいぶ離れたところで、ブンと音して飛んで來る羽蟲を見つけて、それを叩き落さうと一度高くステッキを振つた。「お樂み……」かう云ふ鞠子への挨拶の合圖のつもりで——

その晩はどこにも藝者がなく、參吉は淋しく獨酌の盃をなめてゐると、幾日ぶりかで成瀬が來た。亘もはいつて來た。成瀬も、金彌の色男がまだゐておち／＼會へないらしいので、また以前のやうな焦燥

と暗欝な顔してゐた。

『どうです、そんなんなら、早くアルプスへなり民衆の方へなり、いづれかへ向つて、早くこゝを引揚げては?』參吉はかう云つた眼を成瀬に向けたが、しかし口へは出せなかつた。

『淋しいですなあ。どつかへ行うぢやありませんか』參吉は二人を誘つた。

澤田屋へ行つて見ると、三味線抜きで大勢の藝者を集めて飲んでゐる鞠子の組の隣りへ、三人は案內された。

『おい、市ちやん〳〵、お願ひだから鞠子を一時間ばかり借りて來て吳れ。そんなに豪儀な旦那なら、どうかあなたの鞠子さんを一時間ばかし貸して吳れ、……大の男の三人かうして賴むんぢやないか、……乾度貸すよ、借りて來て吳れ」參吉はかう云つて若い息子に賴んだが、

『迚も駄目です。迚も今夜は鞠子だつてどれだつて駄目です、』市ちやんはかう云つて、テンテコ舞ひして、料理方に忙しがつた。

三人は久しぶりで、女なしで遲くまで飲み合つた。三人ともそれ〳〵に淋しく、哀れであつた。參吉も眞實に成瀬に語ることが出來た。こゝを早く引揚げてはと、成瀬に賴まずにゐられなかつた。

『あなたの御忠告を感謝します。決して誤解などしやしません。僕はお寺の和尙さんからも忠告されました。僕等はやはりまだ小乘敎の方だから、酒色には近寄らん方がいゝつて、云はれました。僕は二三日中に金の來次第、女へも默つて兎に角こゝを引揚げるつもりです』成瀬もかう云つた。

二人はまた異味な氣持で、堅く手を握り合つた。久しぶりで、參吉の顏へ手をあてゝ、長い髮の毛をふるはしながら唄ふ蚊細い聲の『ほれて通へば……』が出た。亘が踊つた。

翌日參吉は短いものを書きあげて、郵便に出した。――昨晩漸く着いた。都合上妻と一緒に來た。明日から家さがしをやるつもりだが、仲々ありさうも無いやうだ。――尾道の友達が、とう〳〵出て來て、ひとまづ友達の下宿に落付いたと云ふ葉書が來た。

『とう〳〵出て來ずにゐられなかつたか、あの修羅の巷へ！　若い細君の上に幸福あれ……』參吉はから祈るやうに思つて、返事を書いた。――尾道にゐた時とは違ふよ。僕の色男ぶりを見せたいと思ふよ。だが、これは冗談だが、しかし僕も今は、ほんとに本氣でやり出すつもりで居る。君も是非々々この度は大奮發をして呉れ給へな――かう云つたやうなことを書いた。――都合上妻と一緒、……おかしいぢやないか、あの無邪氣で忠實で苦勞を恐れないやうな細君と一緒だからこそいゝんぢやないか。君ひとりだつたら、やつぱしぐうたらをやるよ。都合上妻と一緒はよかつたなあ――かう微笑したいやうな氣持で。

彼はひとりで、田圃の方へ出て行つた。麥は刈られ、田は植付が濟んでゐた。淺間の噴煙が晴れた空にくつきりと白く騰つてゐた。出て來た友達夫婦のこと、成瀨、亘、女たち、自分のことを思ひながら、悲しく微笑したいやうな氣持で、田圃道を口笛を吹きながら歩るいて行つた。人間いづこに修羅の巷を避け、劍葉の林を遁るべきか――やはり出來ないことだと、彼は思つた。修羅劍葉――それが娑婆の姿なのだ、唯心の持方一つでそれを避けることが出來るのだと云つた光樂寺の和尚さんの言葉を思ひ出して、あの成瀨が極樂めぐりの話をやめさせた時の、「さよか」と云つてにこ〳〵した時の和尚さんの顏を懷かしく思ひ出しながら、彼はやはり悲しく微笑したい氣持で、夕暮の迫つて來た田圃道を歩るいて行つた。

――八　年　七　月――

編輯局より

■本誌七月號（勞働問題社會主義批判號）は、雜誌界稀に見る好評裡に、發刊後一週日にして**全部賣切**となりました。

■**九月號**は更に深く社會問題研究に力める爲め

勞働組合と同盟罷工研究號

とします。各方面より精細に眞面目に研究した諸大家の意見と實際問題に對する公平なる批判を試みたいと思ひます。

■資本家階級と無產階級の爭鬪に就ては、我社は極めて公平なる立場から、眞摯に研究批判し、眞劍に進みたいと思ひます。

本社移轉

本社は發展と共に左記に移轉しました。然し編輯に關する用件は編輯所に御問合を願います。

芝區櫻田久保町七
改造社
電話新橋一五〇五
振替東京八四〇二

每月一日發行一回

改造定價

册數	定價	郵稅
壹册	三十五錢	一錢五厘
半ヶ年	二圓十錢	不要
壹ヶ年	四圓十錢	不要

外國行郵稅は一部八錢半年四十八錢一年九十六錢增大號は別に定價を定む

註文の注意

▼御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す
▼增大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す
▼見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし
但し郵券代用一割增の事
▼御拂込は振替によらるゝを最も便利とす

▼新刊書寄贈其他編輯上の事は編輯所へ申出られ度し

本誌大賣捌所

東京堂　東海堂　北陸館　良明堂　上田屋　至誠堂

大正八年七月二十六日印刷納本
大正八年八月一日發行

本號限四十八錢

編輯兼發行者 東京府品川町南品川二四六 横關利藤太
印刷者 東京市京橋區西紺屋町廿七番
印刷所 秀英舍

東京府品川東浅間臺二四六
改造社編輯所
電話高輪一一九〇

東京芝區櫻田久保町七
發行所 改造社
電話新橋一五〇五
振替東京八四〇二

和田垣博士の遺せる六大名著

兎糞錄

四六判特製美裝
紙數三百七十餘頁
定價金壹圓六拾錢
郵送料金拾貳錢

收むる所の百三十餘篇皆悉く金玉の響あり、博士獨得の輕妙洒脫飄逸奇警奇想落天外の構想は一讀三讀尙且つ飽くを知らざらしむ、人生の眞理又此中にあり。

吐雲錄

四六判特製美裝
紙數四百餘頁
定價金壹圓六拾錢
郵送料金拾貳錢

兎糞錄の姉妹篇にして諷刺警語例によつて秋霜よりも銳く、氣焰の五彩滿紙に燎爛、實に痛快淋漓、一度之を手にすれば三斗の溜飮一時に下るの思ひあり。

西遊スケッチ

四六判特製美裝
紙數四百餘頁
定價金壹圓六拾錢
郵送料金拾貳錢

本書は博士が歐洲諸國を漫遊せる感想錄にして雄偉の人格、該博の學識、縱橫の才氣、犀利の觀察、編々皆光輝あり、博士自ら紙上に躍動あるの觀を呈す。

世界商業史要

菊判特製全壹册
定價金壹圓貳拾錢
郵送料金拾貳錢

太古以來三ケ年に亘る世界商業の盛衰を敍し英米船の諸邦覇を太平洋上に爭ふ壯觀に及ぶ。一面又文明史政治史といふべく、公私商業學校生の好參考書たり

處世訓話 餅

袖珍特製美裝全
定價金參拾五錢
郵送料金六錢

先づモチの種類より人生最大の要訣たる氣持心持を論じ、靈妙不可思議なる心の作用を說く、滑稽諧謔の裡に含蓄する眞理教訓は萬卷の修養書に勝る。

青年諸君

四六判特製美裝
紙數四百餘頁
定價金壹圓五拾錢
郵送料金八錢

博士が常に青年の味方にして青年を誘導し啓發せるは著名の事蹟なり、滑脫の才、該博の識、豐富の想、活氣橫溢、本書一卷厭世思想を掃盪するに足る。

發兌 東京市日本橋本石町三丁目 至誠堂 電話本局三六六六番 振替東京一七四四番

京都帝國大學文學部法學部講師 米田庄太郎先生著

新刊

現代人心理と現代文明

四六判八〇〇頁

正價參圓五拾錢

郵送料金拾貳錢

發行所 京都丸太町寺町東入 振替大阪一七〇五番 弘文堂

（改造第一巻第五號）（大正八年七月二十六日印刷納本、大正八年八月一日發行）